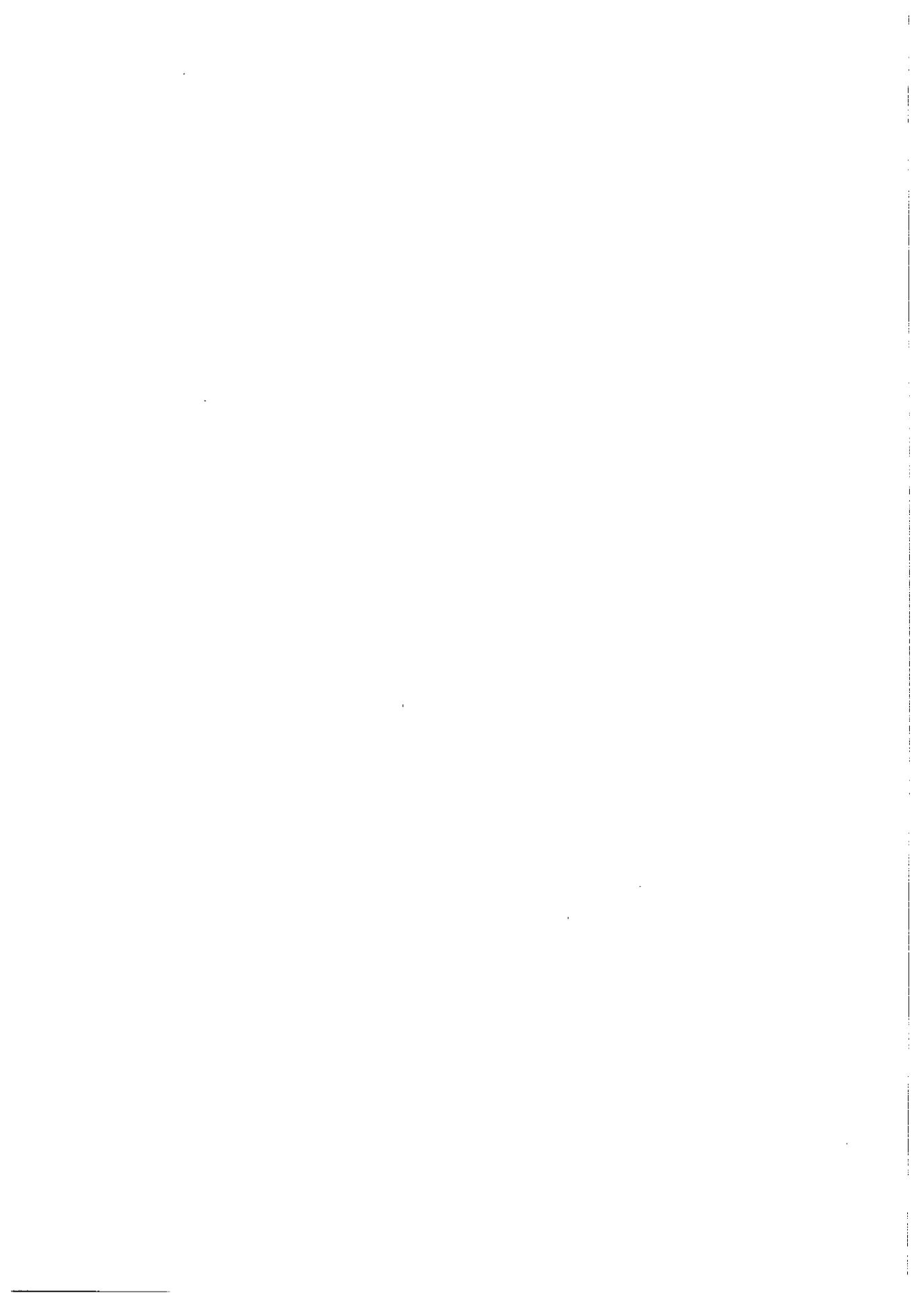


読谷村民話資料集 11

# 楚 辺 の 民 話

沖縄県 読谷村教育委員会  
歴史民俗資料館編



## ごあいさつ

読谷村長 山内徳信

このたび、読谷村民話資料集十一集『楚辺の民話』が発刊されるにあたり一言、ごあいさつを申し上げます。

遠い昔から語り継がれてきた民話は、民衆の郷愁であると同時に文化遺産でもあります。私たちはこの民話集を見ると、先祖の素朴で純真な心や教訓、知恵などその生きざまに触れ、その心に接することができます。

子どもが生涯を通じて、ふるさとのことを学ぶこと、知ることは大変重要なことであります。この民話集が家庭教育・学校教育ひいては生涯教育の中で活用され、子供たちや青少年の心を育む糧となり支えにもなり、更に新しい文化創造への礎になりますように期待するものであります。

楚辺といえは、アカヌク、そして三味線につながる伝統芸能の盛んな地域であります。起源を四五〇年前とする「入り囃子」、また次々に復活上演されました組踊り平敷屋朝敏の「手水の縁」「東辺名夜討」「忠臣身替りの巻(八重瀬)」「護佐丸敵討」等は「読谷まつり」でも上演され大きな感動を呼びました。

このように伝統文化を多く残す字楚辺は、またたくさんの民話をも後世に残しております。本刊では「十二支由来」をはじめとする本格昔話を含む一四二話を収録しておりますが、特にその地域に素材をみますところの「楚辺の地名由来」「親見原由来」「赤犬子」に興味をそそられます。

楚辺の先輩方に語っていただいた昔話がこのように一冊の本になりました。久しく「地方の時代」また「文化の時代」と言われております。次々に発刊される民話集は本刊で十一冊目を数えるまでになりました。読谷村の進める「読谷ルネッサンス」の一環として、また沖繩口を継承するという意義も含めて、読谷村の「人間性豊かな環境・文化村」づくりに大きく寄与するものと信じます。

終わりになりますが、このようにすばらしい民話集が次々に発刊できますのも、語り部であります先輩の皆さんをはじめ関係各位の深い情熱とそれにつらなります努力の賜であります。ご協力を賜りました皆様に衷心より敬意と感謝の意を表し、ごあいさついたします。

この度、読谷村民話資料集・第十一集『楚辺の民話』がめでたく発刊の運びとなりまして、皆様方と共に誠によるこびに耐えません。

この発刊にあたりましては、楚辺区民の皆さん方の郷土を愛する温かい情熱と誠意に燃えた協心協力精いっぱい御努力の賜であり、心から深く敬意を表する次第であります。

さて、本村におきましては、読谷村立歴史民俗資料館の業務の一環として逸早く、このようなすばらしい企画がなされ、名嘉真館長を中心に発刊の努力が続けられました。

人々の心の絆を深め、民衆の大事な文化遺産として昭和五十四年三月に創刊号『伊良皆の民話』が発刊されまして、今日に至る長い間続けられ、遂に第十一集の発刊を見ることが出来ました。この情熱、この誠意、この努力に村民として大きな喜びと、誇りと感謝の念を深くするものであります。

御承知のように、音声、話はいつかは消え失せてしまいますが、文字はいつまでも消えることなく後世に伝わります。私達は古く先祖から伝わって来た純真素朴な説話や教訓等にふれ、学ぶ時、ほのぼのと郷愁の情が湧き、明日に生きる心と力が生まれて来ます。そして新しい文化創造への道が拓けると思っています。

このような見地からこの民話集の持つ意義は極めて大であります。楚辺には豊かな歴史の広場が多く、今も私達の心の中に温かく語り伝わるものがあります。赤犬子、クラガー、大綱引き、アブシバレー、ウシナー等何れも皆、子供の頃を思い出す情味深いものです。

心の豊かさが求められる昨今の社会において、この民話集が多く村民に愛読され、学校においては教育の素材として活かされ、社会教育に活用されて、伝説や民話の心がふれ合う人々にとってうるわしい夢となり、魂を培ってくれるものと確信致しています。

最後に、語り部の皆さんをはじめこの業務に携わってこられた皆さん方に深甚なる謝意を表すると共に、今後ますますの御精進を祈念申し上げあいさつと致します。

## 楚辺部落の概況―序にかえて―

館長 名嘉真 宜勝

楚辺部落は、読谷村の南西・東シナ海に臨むなだらかな海岸段丘面に位置する。楚辺部落は読谷村における古層の村で、文献に登場して来るのは一六二三年に編集された『おもろそうし』で、それは「ねは」の名で見えている。昔楚辺村と禰覇村が合併して現楚辺村が出来たという発祥伝承がある。

『琉球国高究帳』（一六七三年以前編集）には「そべ村」と見え、『琉球国由来記』（一七一三年）には、現在使用している「楚辺村」の漢字が当てられるようになった。行政上の読み方は「そべ」であるが、方言では「すび」である。

楚辺部落の発祥については、前述のように楚辺村と禰覇村が何時の頃から合併して出来あがったと伝えられている。その合併の時期などは、『琉球国由来記』中に、「禰覇ノ嶽」、「楚辺巫火神」、「楚辺殿」等が見え、それらの拝所は現存していて、これらを仔細に調査し比較研究することによって、ある程度の姿が浮び上がってくるものと考えている。

禰覇の嶽や、イリの嶽、楚辺殿などを腰当てとして栄えてきた古琉球時代からの楚辺部落は今次大戦後トリイ米軍基地として接收されたため、やむえず旧地の西方荒野に血のじむような努力で、百坪均一の整然としたすばらしい基盤目集落が、一九五二年五月二十八

日に完成した。その前年の一九五一年には東南にあつた大木屋取集落が独立した。

オモロ歌人アカノコ（赤犬子）にまつわる遺跡としての暗川くらがひや、赤犬子宮などは現在でも村人の信仰のよりどころとなっている。そして、戦前沖縄全域に普及した読谷山種キビは楚辺の比嘉牛氏による優良改良種であり、楚辺部落の人々は勿論、読谷村の誇りでもある。

人口の推移は、明治十三年に一、二六一人、戸数二六二戸、同二十九年には人口一、四五〇人、戸数二八七戸、同三十六年には人口一、五一七人、戸数三〇三戸と漸次発展して来た。平成四年三月現在の人口は二、五六五人、戸数六七二戸である。村内では波平に次ぎもつとも大きな字となっている。

楚辺部落の主なムンチュウ（門中またはイチムン↓一門とも称する。）は次のとおりである。イーカニマチ（上兼松）門中、イーグチ（伊口）門中、イージョー（上門）門中、イージョーグワー（上門小）門中、カーヌイー（川之上）門中、グヤ（具屋）門中、サーク（比屋久）門中、シーシ（末吉）門中、チバナ（知花）門中、ナカイシ（仲吉）門中、ナカジョー（仲門）門中、ヤカ（屋嘉）門中、イーザトゥ（上里）門中、ナーカ（名嘉）門中、イーバル（上原）門中、ウフヤ（大屋）門中、マチダ（松田）門中、トーバル（桃原）

門中、ヤマチ（山内）門中等がある。

村の旧家は、ウフグシクとマグラで、ウフグシクは村のニイドウクル（根所）で宮城カナ氏が管理し、マグラは屋号ヤマチに神屋があり、そこに先祖が祀られている。

姓についてみると、現在では他村や他字からの居住者が増えて若干姓が増えたが、戦前は四〇三件中、①比嘉姓一一六件（二八・八％）、②池原姓七九件（一九・六％）、③上地姓三九件（九・七％）、④松田姓三五件（八・七％）、⑤桃原姓、二七件（六・七％）となっていて、比嘉姓、池原姓が多かった。

戦前は、農業を主体とする専業農家が多数を占めていたが、戦後は急速に農家戸数が減少し始めた。昭和四六年の統計資料で一七八戸だったものが、昭和六〇年に一一二戸（専業農家は十二戸）と減少した。限られた耕地と、収入の乏しい農業に見切りをつけて、軍作業や他の職業に切りかえたためである。

戦前の農業の主体をなすものは、換金作物としての甘蔗作と、主食としての甘藷作があった。キビの品種は前述した当部落出身の比嘉牛氏によって改良された読谷山種で、明治初期から昭和初期まで栽培されていたが、昭和四年に大茎種二七二五（P.O.J.）に変わり、戦後一九五五年頃からN.C.O.三一〇号が普及し現在に至っている。

明治から昭和初期まで栽培したキビは部落共同のサーターヤー（製糖工場）で黒糖にして出荷していた。サーターヤーは各組に二ヶ所あり、合計一〇ヶ所あった。大正時代には、製糖小組合の構成は、土地の所有面積を基準にし、四、〇〇〇坪以上の地主を地頭とし、二番地を三、〇〇〇坪以上、三番地を二、一〇〇坪以上、一、八〇〇坪以上を四番地とし、それ以下を夫役人という構成にした。また、労力の方は地頭から三番地までを人、キビ運搬用の馬車、圧搾機を曳く馬を提供し、四番地は馬車もなく、動力も三分の一で夫役人が

六、七名で、その中から製造人、かま炊き、圧搾作業に配置され、戸数にして一二、三戸の構成であった。毎年旧暦十一月になると各組長の家で製糖小組合の編成替えを行い、地頭を除きすべての者が抽選により決定された。

#### 衣・食・住

昭和初期までは、糸芭蕉から繊維をとってバサージン（芭蕉衣）を織ったり、木綿の白カシを購入して布を織った。バサージンは夏着で、冬はムミンジン（木綿衣）を用いた。普段着のことをヒージーキヤーと称し、筒袖で袖丈、着丈が短かった。外出着にはウワージンとかクゲーギンと称し、衞模様の入った着物であった。そのときの帯をクゲーウービと称した。夏の仕事着は糸芭蕉の上皮でとれた比較的荒い繊維で、七ヨミの手織にしたものに藍染めしたもので、動きやすいように丈、袖を短くし襟はつけなかった。その着物をクルギナー（黒衣）と称した。肌着は着けず素肌にクルギナーを着用し、男はチナウービ（縄帯）、女は細い紐やメンサーウービをしめた。冬の仕事着は、木綿衣の着こなしたもので、ウシマーと称するものであった。

また、寒い日にはハルブクターと称して、古着の破れたところをつくらった厚めの着物を着用した。被り物は、女性は日除けとして黒色のウチユクイ（風呂敷）を三角折りにして被った。雨降りのはきはクバ笠にヌヌ（粟製のミノ）を着けた。履物は普段は履かず、年中はだしであった。家に入るときは水で足を洗い、ボロ布のヒサスチャー（足拭き）で拭いてから入った。正月には正月用のゲタを買って履いた。正月が終わると大事にしまっておいた。阿旦の葉で作ったアダニガーサバ（草履）は、主に年寄りが履き若い人はゲタを履いた。ワラジ（藁草履）やアダニガーサバはおじいさんなどが

作った。

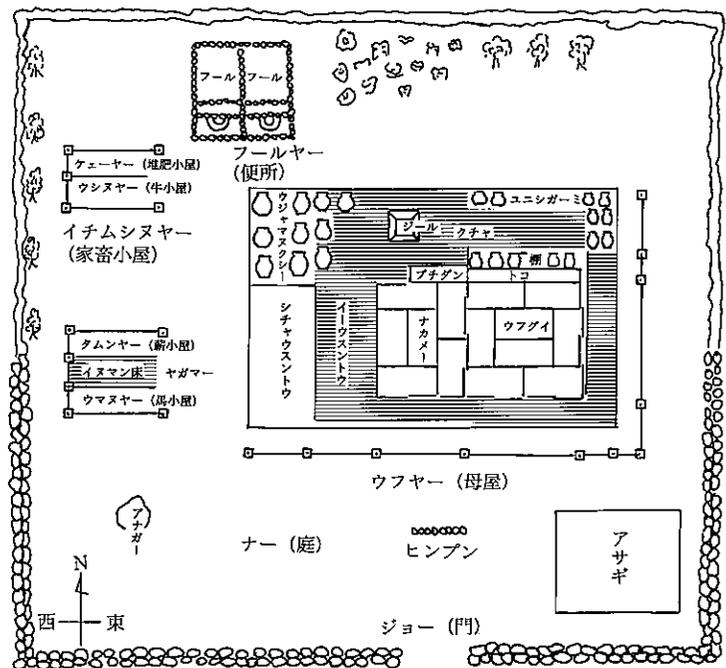
主食はシム(甘藷)と味噌汁であった。どの家でも所有する畑の半分以上に甘藷を植えていた。主な品種として、シルクラガー、アカクラガー、サクガー、ヒヤクゴーなどがあった。毎朝、大きなシムナービの山盛り炊いた。また、収穫が多い時は、隣村の嘉手納に売りに行き、帰りはそうめんやお茶、昆布などを買って来た。味噌汁は、季節の野菜を入れたものであった。

クミ(米)を食べるのは病気や、ウユミ(折目)のときであった。田んぼを所有しているところは少なく、裕福な家が所有していた。ない家は店から買っていた。行事の時でも粟やマージン(黍)が主で、白米を少し混ぜたりした。白米だけを食べるのは病人や産婦がウケーメー(おかゆ)にして食べる程度であった。

豆腐は、どの家でも大豆を作っていたので行事の時や、普段でも時々作って食べた。正月にはどの家でも豚をつぶして豚肉料理を作った。残りは塩漬けにして長く保存して、なにかの折りに少しずつ取り出して食べた。

調味料としては、味噌、しょうゆ、塩、さとう、酢、油、かつおぶし等があった。塩やかつおぶしの他は自家製品であった。油にはウワーヌアング(豚脂)と、マーマング(種油)があり、豚脂は正月用の豚肉の脂肪分を炊めて脂をとり、アングダーミ(油壺)に保存して、日常少しづつ使用した。種油は行事の時店から買って、とうふや天ぶらを揚げるのに用いた。かつおぶしは普段は用いず、病人や産婦に、カチューユー(かつお湯)と称して、かつおぶしをけずったものに、味噌を入れてそれに湯をかけてあげた。

住居は、戦前は三五一軒のうち二二五軒が茅葺で一二六軒が瓦葺、不明一軒となっている。屋敷内に井戸を所有していたのが二七軒となっている。図(1)は、戦前の蔵端(比嘉次郎氏)家の屋敷及び家屋



図(1) 戦前の蔵端家(比嘉次郎氏)の屋敷及び家屋間取り図  
(知花孝子氏作図)

間取り図である。屋敷の面積は二五〇坪位で、やや正方形であった。楚辺には三〇〇坪もある屋敷は数えるくらいであったので、蔵端家は広い方に入った。屋敷囲いは南側と東西の半分程までが石垣で残りは生垣であった。ジョー(門)は南向きで、やや東よりにあった。ウフヤー(母屋)とジョーのほぼ中間にヒンプン(前隠し)があった。ヒンプンは当初は琉球竹で編んだものであったが、後には板で作り替えた。庭は豆等の穀物を干したりする場所であったので、かなり広くとられている。

ウフヤーは、屋敷の中央やや東よりであり、南東隅にアサギ、西側にウマヌヤー（馬小屋）、ヤガマー（物置き）、タムンヤー（薪小屋）があり、北西側にイチムシヌヤー（家畜小屋↓ウシヌヤー（牛小屋）と、ケーヤー（堆肥小屋）、そしてフルルヤー（便所兼豚小屋）があった。庭の南西側にアナガー（穴井戸↓溜池）と称する溜池があり、芋などの洗い場に利用した。母屋の間取りは、ウフグイ（一番座）、ナカメー（二番座）、クチャ（裏座）、イーウセントウ（上台所）、シチャウセントウ（下台所）、ウジヤマヌクシー（黒糖樽、味噌壺保管場所）等からなっていた。ウフグイにはトコ（床間）があり、ナカメーにはプチダン（仏壇）があった。クチャは、ウフグイの後方はユニシガミ（穀物壺）を保管する場所で、ナカメーの後方にはジール（地炉）があり、その一帯は産室に使われた。就寝はウフグイとクチャが利用された。ウセントウ（台所↓シムともいう）はイーウセントウとシチャウセントウに分れていて、イーウセントウは床張りで汁を炊いたりする竈が二つあり、シチャウセントウは土間で、大きな竈が二つあり甘藷や豆腐を炊いたりするのに使った。ヒヌカン（火の神を祀るもの）は甘藷を炊く竈の前に置いてあった。台所の部分はヒーマーチ（火の用心）のため瓦葺きであったが母屋は茅葺きであった。

家を新築する時は、棟木にシピリンカン（紫微鑿駕）を吊るした。首里から寄留した伊是名という方に頼んで書かせていたが、後半からは各々で書くようになった。

### 産育

結婚して数年も子宝に恵まれない場合は、ミシクウガ（見せ卵）と称して親戚の子供をもらって育てると子供が授かるという信仰があった。実子が出来てもその子供は大きくなるまで養った。また、

ユタやムシリを訪ねてその判示にしたがって祈願をした。

安産を願うために、いろいろな禁忌が妊婦や夫に要求された。

○夫がタオルを首にかけると、胎児の首にへその緒がからみつく。

○妊婦が馬や牛のたずなをまたぐと、十二カ月の過熟児が産まれる。

○妊婦が火事を見ると、赤アザのある子が産まれる。

○妊婦がタコやイカのすみを食べると、黒アザのある子が産まれる。

○妊婦が敷居を踏むと、縁起が悪い。

○夫が龜を担ぐと、縁起が悪い。

○夫が墓の掃除をすると、縁起が悪い。

○夫は墓口を開けるのを、手伝つてもいけない。

○夫は身内でも納骨を手伝うとよくない。

○夫は身内でも入棺を手伝うとよくない。

○妊婦はチー汁（豚や山羊の血の汁）を食べると、赤アザのある子が産まれるのでよくない。

○妊婦がガンシナ（ガンシナは茅などをまるめたもので、頭に敷いて荷物を運ぶものに用いる）を二枚重ねると双子が産まれるのでよくない。

○同じ家に、妊婦が二人いると（一人は負けるので）よくない。

○夫が豚、山羊などを殺したりすると、シーベ（鬼唇）の子が生まれる。

その他に、妊娠中は常に美しい物を見るように心がけた。ラッキョウを食べると、美人の子が産まれるといわれ、双子を産むのは嫌がられた。

腹が目立ち始める妊娠五〜六カ月頃になると、戌の日を選んでハラウビ（腹帯）を締めた。戌の日を選ぶのは、犬は多産で安産であるので、それに肖るようにということである。七〜八カ月も過ぎると、夫は出産時にヒーマクマー（火に暖まる）として使用するクワ

ナシダムン（出産用薪）を山に取りに行った。その後、出産も間近かになると、親・兄弟、血親者の人達からフクター（古着）を集めて、カコー（おしめ）の準備をした。産着はサラシで作る人もいたが、ほとんどの人が古着で間に合わせた。妊娠したのが親戚の人達に知れわたると、妊婦にクンチ（栄養）をつけるようにと、卵、そうめん、豆腐などの食べ物をもってきた。また、いよいよ出産間近になると、鶏肉や豚肉を持って来た。その中でも一番多かったのがチマグ（豚の足で、ティビチともいう）であった。豚の足先はきちんと揃っているので、手足をきちんと揃えて安産で産まれてくるようにとの願いからである。

出産は里帰えりしてやった。陣痛が始まって、すぐに仕事を休むことはなかった。いよいよ陣痛が強くなると、実家に帰り出産の準備をした。産室はウフグイの裏座を利用した。難産に備えてチカラジナ（力綱）も用意された。出産の手助けをする手慣れた年配のカツティ（勝手）を呼んだ。一週間程通って赤子を浴びせたりした。手間賃としては、ほとんどが豆腐、そうめんなどの食べ物であった。出産が終わると、魔除けとして枕元や布団の下に、サンや刃物（小刀、ハサミ）を置いた。また、産室の周りをヒザイナー（左纏）を張りめぐらした。さらに、アミタマグ（網卵）と称して、投網に卵を入れてジール（地炉）の周りにぶら下げた。それに関する次のような歌がある。「シリテイクルバニヌミユヌチュラサ、タヌサカジチヌカミングワデービル」〔孵化したばかりの雛の羽が黒々として見事であることよ。この子は玉の盃を載いた果報な御子でありますよ。〕  
歌意は、卵から雛にかえる時の美しさと、網の目のような細かい穴からも大きく育ってほしいという願いがこめられている。

また、隣近所に赤子が産まれたことを報告する時に、男女の姓を逆さに報告する風習があった。男の子であれば、「ウフイナグガウマ

リトードー」（大きな女が産まりましたよ）、女の子が産まれると「ウフイキガウマリトードー」（大きな男が産まりましたよ）と報告した。これは古くから沖繩に伝わる伝説「北谷王子と黒金座主」の話からの由来である。

フス（臍）は竹やハサミで七〜八センチ位の長さに切り、芭蕉糸で結んだ。そのフスはなくすとウフソー（間抜け）になると言われ、紙切や布などに包んで大事に保管した。イヤヤー（胎衣）は、藁束やポロ布に包んで、夫が屋敷の後方で、雨垂れの落ちない所に埋めた。雨垂れの落ちる所に埋めると、目の悪い子になると言われている。埋める時は、近所の子供たちを集めて笑わせながら埋めた。これをイヤヤーワレーと称し、愛敬のあるほがらかな子に育つようにとの願いがこめられている。埋めた上に犬などがほじくり返さないようにと、大きな石を置きウケーマー（お粥）をかけた。そのウケーマーは、最初に戌年生まれの人に食べさせた。

ウブミジ（産水）は各々の井戸水を使用した。その際には必ず湯に冷水を注いで薄める。出産後三日目にカーウリー（川下り）をした。その日はお粥を炊いて、まず戌年生まれの人にあげる。そしてサンを持ってクラガー（暗川）にカーウリーをする。そこでは線香を供えて、今日はカーウリーであることを報告する。水を汲み、サンと一緒に家まで運ぶ。ヒヌカンに今日はカーウリーであることを報告する。その後汲んで来た水で産婦の体を清める。

赤子が無事に産まれて、母子とも健康であれば、その日にクワナシスージ（出産祝い）が行なわれた。七日マンサンや一カ月マンサンをする人もいた。七日目に引き潮に合わせてジールビキナイ（地炉退き）をした。ジールウチは病気のある人や傷のある人は、フジョーマキ（不浄負け）するとして訪問を慎んだ。ナージキー（名付け）は出産した日につけた。ワラビナー（童名）を付けると、赤子を抱

いて火の神に名付けを済ましたことを報告し、赤子の額にナービヌヒング(鍋墨)をつける。そして縁側で弓矢を射る仕事をし、バツタを飛ばして頑丈な子に育つことを祈願する。

庚の日に、ハチランパチと称して耳の上の髪を少し切った。三歳になると、旧二月の彼岸に、ミーチボージャーと称して一定の髪型に散髪した。子供が病弱であったり、夜泣きが激しいと、相をあててヤシナイウヤ(養い親)をもたせた。十三歳になると養い親との契りを解除した。満一歳になると、親戚、知人を呼んでタンカースージ(誕生祝い)を盛大にした。

## 婚姻

戦前は青年男女によるモアアシビー(毛遊び)が盛んであった。明治四五年と大正八年頃に二度にわたり法度になったが、隠れて遊び止むことはなかった。夜暮れと共に海辺のカニクモーに集まり、三味線や太鼓をたたき歌い踊って夜遅くまで遊んだ。離れのヤガマーで、同年生同志の男女数名が集って談話し、寝泊りする風習もあった。これらの機会に交際相手を見つけて結婚に至る場合もあったが、幼少の頃、親同志でお互いの子供の結婚を約束するイングミ(縁組)をすることがあった。部落内婚がほとんどであったが、時には部落外婚もあって、この場合ンマデイマという料料があつて、青年会へ五円から二〇円の金を納めた。

二人の仲が進み、周囲の人達も認めるような仲になると、本人が友だち二三人と女の両親の許しを得に行く。これをユミクイーと称した。そして良い返事をもらうと、早いうちに両親や伯父、叔母と一緒に御礼に行く。これをニフエーイーガイチュンと称している。

吉日を選んでサキムイ(酒盛り↓結納)の儀式を行なう。男方から豆腐や肉・持ち・山芋等の御馳走をミシバーチャ、チリデーに詰

め、酒を徳久利に入れ口を朱紙で封して女方に持って行く。男側から行く人数は奇数で、ナカイリ(仲人の夫婦)、クワツチームツチャー、ジングファンカミヤー、ウガマー、ウジャサー等で本人は参加しなかった。結納の品々を仏前に供えて、仲人が「今日は夫婦結びの結納ですので夫婦の健康を見守って下さい。来年の今頃は男の子を授からして下さい」とお願いした。サキムイ後は、お互いに行き来して仕事を手伝ったりした。ニービキ(結婚式)も吉日を選んでする。朝、ムクイリ(婿入り)と称してミームーク(新婿)がミーユミ(新嫁)の家に挨拶に行く。帰り際、嫁側の親戚によるミームークヌウマヌシー(新婿の馬乗せ)と称して、グーシウマ(棒切れの馬)に乗せられて引きずり回された。ユミゾーイ(嫁迎え)は夕方の満潮時を見計って、婿方から、提灯持ち、ウサリーウンプー、トウフヌスルー、ビンズドウグムツチャー、ジングファンムツチャー、ナカイリ、伯父、叔母など奇数で迎えに行く。花嫁の家に着くと、ウサリーウンプーと、トウフヌスルー以外の人達は家の中に入る。持参した品々を仏壇に供えて拜む。花嫁は仲人の手配によって、両親、兄弟と別れの盃を交わす。ウサリーウンプーは、ヒンプンの前に造られた仮小屋で酔いかげんになっており、頃合いを見て大声で、「サリー、サリー、サリー、ミーユミヌアヤーメーサイ、ウンチケーサビラ」(サリー、サリー、サリー、花嫁さんお供して行きましょう)と、三回唱えながらくるくる回る。すると、台所にいる嫁側の手伝い人が鍋墨を彼の顔に塗りたくる。その騒動のすきにトウフヌスルーは、豆腐を三切れ盗んで逃げる。

婿方では、ミサライハーメー(カリユシパーパー)と称する老婆が待っている。花嫁が家の中に入ろうとする時に、大きく手を振りながら「ミーユミヌアヤーメーサイ シチエークラミンナヨー ミーユミヌアヤーメーサイ イーリミセービリ」(花嫁さんよ、敷居は踏

まないようにして下さい。花嫁さん、どうぞ中にお入り下さい」と、三回言葉をかける。それからシルイシヨ（白衣裳）を被った夫婦は仏前で、「今日の日には嫁に來ましたので、家族同様によくお願いいたします。体も健康にして、來年の今頃は出産祝をしましょう」と、祈願する。同様に火の神にも祈願する。それからミサライハーメーによって夫婦の契りである盃が交わされ、ミジムイニービチ（水盛り結婚式）と称して、茶碗に入った水を指で花婿・花嫁の額、胸、手、足に三回ずつ撫でつける。ナナチレーヌウブン（七品のお盆）と称して、七品の御馳走をミサライハーメーが花嫁と花婿に交互に箸ではさんであげる。嫁側から持つて來た酒と水は婿側の酒と水にうすめる。水は水甕に入れ、その水でお茶を沸かし、ウジングワームイ（お膳盛り）と称する御馳走といっしょに客にふるまう。儀式が済むと花嫁と女友達は庭に出て祝杯を交す。

結婚式の翌日、ミユミヌ山入りと称して、親しい友人三〜四人と山に薪を取りに行つた。三日目には、ミツチャソージ（三日掃除）と称して、嫁は里帰りして結婚式に残つた御馳走を片付けに行つた。

### 葬制

村人には、人の死ぬ前に必ずなにかのムヌシラシ（物知らせ）があるものと信じられている。それは動物によるもの、夢によるもの、物音や火玉の上がる現象などがある。①犬のクチナチがあると厄。②ユーガラシ（夜鳥）が鳴くと厄。③小鳥が屋内に入ると厄。④シチャバチャー（土蜂）が墓に壺のような巣を作ると厄。⑤ミカビチャー（じゃこうねずみ）が首を出して、クイー、クイーと長鳴きすると厄。⑥ミカビチャーが二〜三匹ズークエー（尾を咬わえて）歩くと厄。⑦齒の抜ける夢は厄。⑧知らない人々が多く集まって騒ぐ夢は厄。⑨タマガイ（人魂）があがると死人が出る。⑩夜中に棺箱

を作る音がすると厄。

死の呼称として、シジャン、マーチャン、ウーランナタン、ミウティジャン、ユーシリタン（クヌユーシリタン）、クヌユーウシナタン、トータピカインジャン、スーカーワタイジャン、ヒンガチャン、グソーカインジャン等がある。

死の確認は、親戚の者で手貫れた人が手首の脈搏をとつてみる。死の直前に、シニバラキと称して少々の身ぶるいをしたり、ヒサアンググワームツチョーン（手足がむくれる）等の状況でも死期がまもないことを知つた。また、鼻の穴が大きくなると二〜三日しかもたないなどとも言われている。死が確認されると、ヒヌカンユリー（火の神の許し）をする。火の神に、線香十二本、花束、ウプガーの水を供えて拝み、死者の額にその水をつける。カミンチュ（神人）が亡くなつた場合は、生前その人が拝んでいた神棚等を拜んでから葬式の準備をする。臨終には家族はじめ近親、近所の人、友人などが参加する。身内であつても、妊婦やその夫、新築中の家族、神人、死者と同じ干支の人等は参加しない。死の通知はジンス（隣組↓葬式組）の人々が、朝一回、午後の野辺送り直前に一回ブラ（ホラ貝）で合図した。

湯盥の水はクラガーから男の人二人でウーキ（桶）にナーカガタミで汲んで來た。そのみずをマーシミジ（死水）とか、ウプミジ（産水）と称する。担ぐ時に用いる縄はヒザイナー（左縄）を使用した。湯を沸かし、まず冷水を入れ、そして湯を次ぎ足す、逆水の方法をとる。最初は頭に三回水をかけ、顔を拭き浴びせる。グソースガイと称して死装束を五枚とか七枚の奇数を着けさせる。上からシルダナシと称する白衣装をかぶせる。着せる時も一度に袖を拭くカサビジンの方法をとる。ヒンダンブクルと称する三角袋に、針七本の対と糸を数センチ通したもの、煙草、茶等を入れて持たせる。その他

酒や手拭等も副葬品として持たせる。死者は仏壇のある一番座にイリマツクワ（西枕）にしてねかす。死者の枕元にはウサカティグファン（盛飯に箸を十字型にさしたものの）、香炉、白位牌等を飾る。仏壇にはおにぎりや豆腐を小皿に入れて供え、野辺送りに出発する前に三本ウコーを供えてウサンデー（下げる）する。

喪家をダビヤ（茶毘家）と称し、ジンス（リンポハン『隣保班』ともいう）の人々が葬式組として一切のめんどうを見る。男の仕事としては、芋掘り、家畜の草刈り、墓の掃除、葬具作り、女の仕事は炊事が主だった。また、手伝人に出すスゲーメ（粟と米を混ぜた粥）の材料になる粟一合ずつを各戸から集めた。現在では物品のかわりに五百円になっている。葬具としては、部落共有のガン（籠）、ティンゲー（天蓋）、旗（七本）等があったが、現在はない。その他、クワンチエバク（棺箱）、シルイフェー（白位牌）等があった。

野辺送りのことをダビと称する。野辺送りの序列は、先頭にティンゲー持ち、そして白位牌持ち、ガン担ぎ人（四人）、旗持ち（七本）、身内の女性、身内の男性、一般人と続く。身内の女性はバサージン（芭蕉衣）をかぶって号泣しながら墓まで行った。墓口を開ける人は、相の合ったカイクミの人が、ヒザイグエ（左歛）で三回たたいてからあける。野辺送りの途中のシマミシー（鳥見せ）の風習はない。

葬式の済んだ後、プーミチャーと称される魔物追いの儀式が大正十二年頃まで行なわれていた。葬式の翌日の朝早く、親戚の男数名でミジマチ（水祭り）と称して、墓詣りをする。水とお茶を供えて拜む。午後にはナーチャミー（翌日見）と称して、御馳走に、水、酒、生鼻を供えて拜む。その時に墓口に赤土を塗り立派に閉じる。三日目もミツカミーと称して、朝と午後の二回墓詣りをする。

死後三日目頃に家族や親戚の者三〜四人で、ユタやムヌシリのと

ころにミースのアカシを聞きに行く。そのおもな内容は、死者が何か思い残すことがなかったか否かを判じってもらうことにある。行く前には仏壇には手を合わせるだけで、線香は立てない。帰って来たら線香を立てて報告する。夜は親戚が集まるので、その判示の内容を報告する。

死後七日ごとにナンカスコー（七日焼香）がある。①ハチナンカ（アラナンカともいう）、②タナンカ、ミナンカ、ユナンカ、イチナンカ、ムナンカ、シンジュウクニチの七回である。アラナンカは親戚や隣近所、友人なども参加し、午後の三時頃墓で焼香が行なわれる。残りのナンカは家で焼香する。ミナンカ、イチナンカ、シンジュウクニチには、親戚や隣近所、友人などが参加するが、残りのナンカは親戚だけで済みます。シンジュウクニチの焼香の済んだ晩、イチミ（生者）とシミ（死霊）を分かすマブイワカシ（魂分かし）の儀式をする。参加するのは家族と臨終に立ち合った身内の人々がする。

ナンカ焼香が済んだ後は、ヒヤッカニチ（百日目）とニンチスコー（年忌焼香）がある。年忌焼香は、イヌイ（二年忌）、ンチユヌイヌイ（三年忌）、ツチニンチ（七年忌）、ジューサンニンチ（十三年忌）、ニジュウグニンチ（二十五年忌）、サンジューサンニンチ（三十三年忌）の六回行われる。

洗骨のことをシンクチ（洗骨）とか、チュラクナスン（美しくする）、カルクナスン（軽くする）、クチギレー（骨繕い）などと称している。洗骨の時期は、死者が出て白骨化している時にする。参加するのは親戚と隣近所の人たちで、野辺送りの来る前に行なう。洗骨に要する時間は約一時間半位である。最初はチブル（頭蓋骨）から洗い、身近な人が抱いておく。全ての骨を洗い終えたら、ジョシガミ（厨子甕）に足の骨から入れ、頭蓋骨が一番上に置く。厨子

甕は墓堂の段の上に安置する。頭蓋骨の向きは入口の方に向ける。墓には重箱を供えて、ハルジュコーをして無事洗骨が済んだことを報告する。墓口は白紙を吊るして、ダビが来るまで開けたままにする。

数え六歳までの幼児が亡くなると、龕には乗せず、父親などが抱いて野辺送りをした。直接ウフパカ(本墓)には葬らず、ミーグワー(岩穴)などを探して墓を造った。大人が亡くなった時に洗骨して本墓に移した。流産児などは屋敷内のウー(芭蕉)の中に葬った。

楚辺の拝所と祭日

(1) グシクについて

グシクは存在しない。

(2) 御嶽について

① アガリウガンジュ(ウガンヒラーとも称す)

② イリウタキ(クミンドーとも称す)

③ クシ(アカヌクとも称す)

④ シチャ(メーチャーシとも称す)

(3) 神アサギについて

① カミアサギと称するものがある。戦前はヌンドンチの前にあった。軒の低い茅葺きで、木の柱の建物があった。現在は、部落内に移動し、祠を作っている。中には村火の神、ヌール火の神を祀っている。

② アガリカミアサギ……旧部落の東原にある。ちよつとした広場で、祭日の時四隅に竹を立てて祈願した。

(4) その他の拝所

① 楚辺部落で拝んでいるティラとして、アガリディラとイリディラがある。アガリディラは大木部落にあり、別名トウクブサーとも呼ばれている。イリディラは都屋にある。これらの拝所は、

子供が夜泣きした時などに拝んでいた。現在では九月十五日のムヌメーの時に、イージョイチムン、トールイチムン等が拝んでいる。伊良皆部落からも拝まれている。

② ヌール火の神……楚辺ヌンドンチの所有で屋敷内に神屋を作って祀っていたが、戦争で破壊されたため、現在では部落内に祠を作って祀っている。管理者は大湾誠之助氏(那覇在)である。

③ 地頭火の神……字ヒヌカンとも称す。旧公民館敷地内にある。一月の初ウグワンの時に拝んでいる。

④ トンチャ……旧部落内にある。祠があり、火の神が祀られている。五月ウマチーに拝んでいる。

⑤ ビジュル、トゥテイクン、観音堂等は存在しない。

(5) 神井戸について

① クラガー ② ウツカー ③ カビギンガー(イーガーとも称す)

以上の井戸は一月の初ウグワンに拝まれている。

(6) 神人について

ヌールは戦前までいた。戦後はまだ生まれてない。

(7) 旧家

① ウフグシク……村のニイドウクル。宮城カナ氏管理。

② マグラ……屋号ヤマチに神屋があり、そこに祖先が祀られている。

(8) 神墓について

① ウフグシク……部落北方の上高土原にある。これは山内門中の祖先墓で、部落で一番古い墓であるという。最近、採石のため破壊され、下方にセメント製家形墓を作っている。

(9) 主な祭祀行事

① 初ウグワン(一月吉日)

カビギンガト、クラガト、ウガンヒラー、タシモト、ウツカー、  
タカヒツチチ、クミンドー、アカヌクー、字火の神、以上九ヶ  
所の拝所を拝む。戦前は各組のサーターヤー(五ヶ所)も拝んだ。

㊦ムシバレーウグワン(四月吉日)

初御願の時と同様九ヶ所の拝所を拝み、ワラという海岸で害  
虫を流す。その後、当役たちはそこで豚を殺して食べる。

㊧ウマチー

ウマチーは二月十五日、三月十五日、五月十五日、六月十五日  
の四回ある。ヌールや門中の神人が、カミアサギ、アガリカミ  
アサギ、トンチャーの三ヶ所を拝んだ。

㊨アカヌクー祭(九月二十日)

赤犬子が亡くなった日で、彼は作物の恩人であり、五穀をませ  
たごはんを供える。

〔参考文献〕

『記念誌』読谷村楚辺公民館 一九六二年

村山友江「読谷村楚辺部落の産育について」(『読谷村立歴史民俗資  
料館紀要』十二号 一九八八年三月)

村山友江「読谷村字楚辺部落の婚姻・その他」 右同書十三号 一  
九八九年三月

知花春美「読谷村楚辺部落の衣」 右同書十三号

知花春美「読谷村楚辺部落の食生活について」 右同書十四号 一  
九九〇年三月

知花孝子「庶民の生活史―クラハタの次郎さんのこと―」 右同書  
十五号 一九九一年三月

筆者「読谷村の聖地と信仰」 右同書三号 一九七八年三月  
筆者「葬制調査」 一九八七年

目次

あいさつ	読谷村長	山内徳信
あいさつ	読谷村教育長	岳原宜正
序	館長	名嘉真宜勝
『楚辺の民話』伝説地名地図		
『楚辺の民話』地名地図		
楚辺民俗地図		
第一編 翻字資料		
〈動物昔話〉		
1 十二支由来	比嘉清次郎	1
2 十二支由来	名城幸子	2
3 雀酒屋	松田芳子	4
4 雀酒屋	松田参次郎	6
5 雀孝行	比嘉ウト	7
6 うずらの話	池原マカト	8
7 カラスは親孝行	松田平信	8
8 こうもりの双心	上地源助	9
9 雀とうぐいす	比嘉清次郎	10
10 犬の足	上地豊	12
11 雨蛙不孝	比嘉次郎	13
〈本格昔話〉		
12 鬼餅由来	比嘉ミツ子	16
13 鬼餅由来	松田参次郎	18
14 クスケー由来	比嘉カマド	20
15 クスケー由来	伊波カマ	22
16 菖蒲由来	上地カマド	24
17 食わず女房	松田ウシ	26

18	キジムナー	比	嘉	カマド	27
19	キジムナー	照	屋	牛五郎	29
20	キジムナー	比	嘉	清次郎	32
21	キジムナー	比	嘉	次郎	34
22	キジムナー	長	嶺	ウシ	35
23	猫化けの話	比	嘉	清次郎	36
24	山羊マジムン	上	地	カマド	39
25	古ミシゲーと山羊マジムン	比	嘉	カマド	40
26	山羊マジムン	比	嘉	カマド	41
27	美女に化けた豚	伊	波	カマ	42
28	アカマタ聳入	比	嘉	カマド	44
29	アカマタ聳入	比	嘉	カマド	47
30	アカマタ聳入	比	嘉	次郎	48
31	鍋蓋アカマタ	比	嘉	カマド	49
32	猫化け女房	伊	波	カマ	50
33	犬と女	伊	波	カマ	52
34	千年蛇	上	地	源助	53
35	天人女房	比	嘉	次郎	54
36	子育て幽霊	比	嘉	朝明	56
37	テーラシカマガチ	比	嘉	カマド	59

38	塩吹白	松	田	平信	63
39	真玉橋の人柱	比	嘉	カマド	64
40	ヒーダマの話	比	嘉	カマド	68
41	火の玉の話	比	嘉	清次郎	69
42	産神問答	松	田	芳子	73
43	嫁えらび	比	嘉	次郎	81
44	茶腹飯腹	松	田	トシ	82
45	婿えらび	比	嘉	ウト	82
46	継子の麦搗き	長	嶺	ウシ	83
47	継子の雪払い	松	田	平信	84
48	継子の芋掘り	比	嘉	カマド	86
49	継子と杓子	池	原	カマ	88
50	継子の機織り	松	田	ウシ	89
51	継子と二十日月	山	内	マツ	90
52	継子話へお茶とご馳走	比	嘉	カマド	90
53	継親念仏	上	地	源助	91
54	継親念仏	松	田	ウシ	97
55	嫁と姑	比	嘉	次郎	98
56	嫁とナス	比	嘉	カマド	100
57	嫁と姑へうどんはミミズ	松	田	ウシ	101

58 嫁と姑〈芋〉……………比嘉ウト…102

59 兄弟の仲直り……………松田ウシ…103

60 子供の肝……………比嘉朝明…104

61 塩が一番おいしい……………照屋牛五郎…106

62 大年の客……………比嘉カマド…107

63 大みそかの棺……………伊波カマ…113

64 後生での借金問答……………比嘉清次郎…115

65 ショーヌタルガニー……………比嘉恒健…118

66 はしかの神様……………比嘉カマド…121

67 はしかの神様……………比嘉カマド…123

68 穀雨……………比嘉清次郎…125

〈笑い話〉

69 渡嘉敷ペークー〈低頭門〉……………比嘉恒健…127

70 渡嘉敷ペークー〈二十日月〉……………池原昌繁…128

71 勝連バーマ〈二十日月〉……………比嘉恒健…129

72 喜屋武ミীগわー……………山内昌永…129

73 喜屋武ミীগわー……………比嘉清次郎…131

74 佐久川三郎……………比嘉清次郎…132

75 床柱の逆立て……………比嘉清次郎…133

76 話千両……………松田平信…135

77 白銀堂由来……………池原昌徳…138

78 モーイ親方……………松田平信…140

79 モーイ親方〈殿様の難題〉……………比嘉清次郎…144

80 モーイ親方……………比嘉清次郎…148

81 モーイ親方〈かせかけ着物〉……………比嘉清次郎…151

82 モーイ親方〈嫁取り〉……………照屋牛五郎…153

83 モーイ親方……………比嘉ウト…154

84 侍と小僧……………松田芳子…155

85 忘れんぼう息子……………上地源助…156

86 親捨山……………松田平信…158

87 親捨山〈難題〉……………池原カマ…159

88 ドウヌヒャー……………松田芳子…161

89 意地試し……………比嘉清次郎…169

90 賭け事の話……………池原繁一…170

91 空き腹食いどき……………松田ウシ…171

92 臆病者の話……………山内昌永…172

93 盗人の話……………比嘉清次郎…173

94 鳩汁……………長嶺ウシ…177

95 どろぼうの話……………松田トシ…177

96 盗人の屁……………比嘉ウト…178

97 つんぼの話	比嘉	ウト	179
98 つんぼとめくらの話	比嘉	ウト	179
99 聞き違い「へヒル」	池原	昌繁	180
100 屁ひり嫁	比嘉	ウト	181
101 山原と団亀	比嘉	カマド	181
102 ジュリの話	名城	幸子	182
103 坊主の話	山内	昌永	183
104 肉売りの話	山内	昌永	184
〈伝説〉			
105 世の始まりの話	伊波	カマ	186
106 人間の始まり	長嶺	ウシ	188
107 阿麻和利	比嘉	カマド	189
108 屋良のアマンジャラー	照屋	牛五郎	192
109 チーグー王	比嘉	次郎	197
110 楚辺部落の繁栄	比嘉	清次郎	198
111 楚辺の地名由来	比嘉	恒健	201
112 親見原由来	比嘉	恒健	202
113 大木部落の由来	照屋	牛五郎	202
114 夫振岩	松田	ウシ	203
115 普天間権現の由来	上地	源助	205

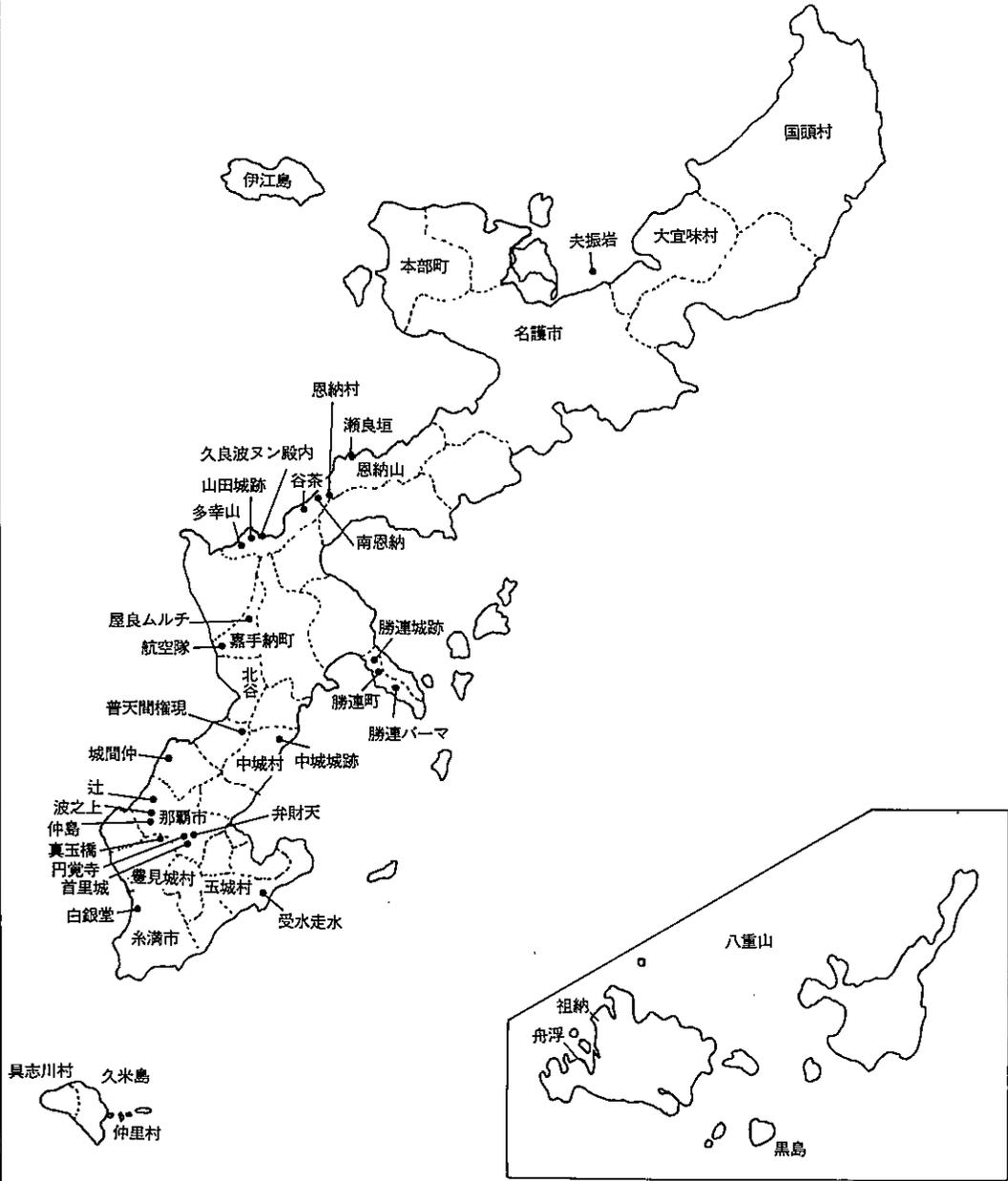
116 普天間権現の由来	松田	ウシ	207
117 屋良ムルチ	比嘉	カマド	208
118 赤犬子	松田	平信	211
119 赤犬子	比嘉	清次郎	221
120 赤犬子「冬青草夏立枯」	上地	松徳	234
121 稲作の始まり	比嘉	次郎	235
122 読谷山種の話	照屋	牛五郎	236
123 柴差し由来	比嘉	次郎	238
124 位牌由来	比嘉	朝明	240
125 位牌由来	松田	平信	243
126 綱引きの由来	比嘉	清次郎	245
127 ナーチャーミー由来	比嘉	カマド	249
128 ナーチャーミー由来	比嘉	光子	251
129 サン結び由来	比嘉	秀	252
130 お茶二杯	比嘉	カマド	252
131 ハジチ由来	比嘉	朝明	253
132 柴微鑿駕の話	比嘉	次郎	254
133 多幸山フェーレー	池原	昌徳	256
134 久良波ヌン殿内	池原	繁一	257
135 吉屋チルー	比嘉	清次郎	258

第二編 資料

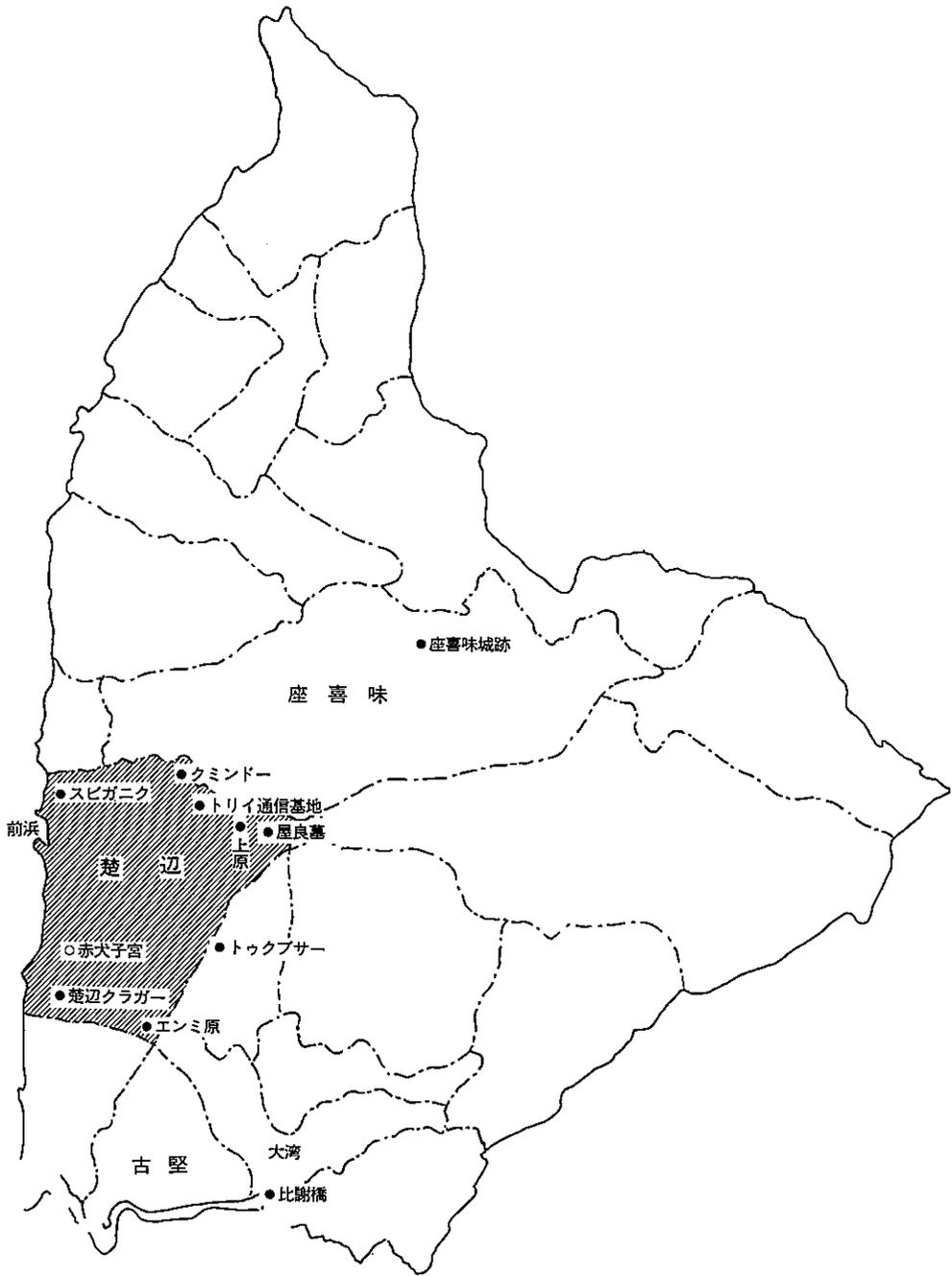
136 吉屋チルー……………	比嘉カマド……………	266	
137 吉屋チルーへ牛どろぼう……………	比嘉カマド……………	272	
138 吉屋チルー……………	比嘉カマド……………	274	
139 名護親方と具志頭親方……………	照屋牛五郎……………	275	
参考文献……………		286	
	140 名護親方……………	松田芳子……………	277
	141 チョーフグン親方……………	比嘉清次郎……………	279
	へその他……………		
	142 読谷の神の話……………	比嘉永純……………	283

話者別一覧表……………	287
調査者名簿……………	307
話型一覧表……………	308
翻字者一覧表……………	310
編集後記……………	313

〔楚辺の民話〕 伝説地名地図



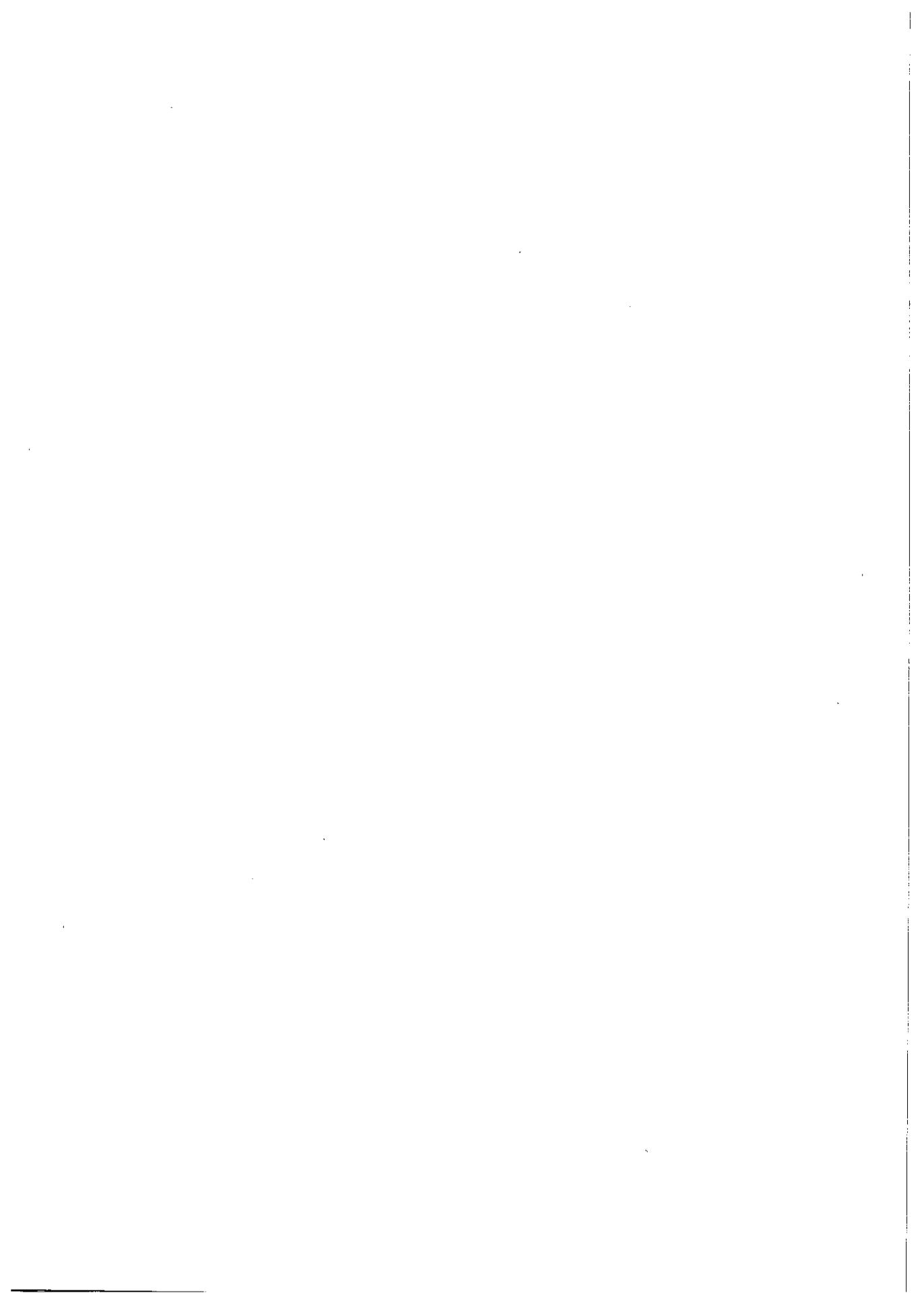
〔楚辺の民話〕地名地図（読谷村全図）



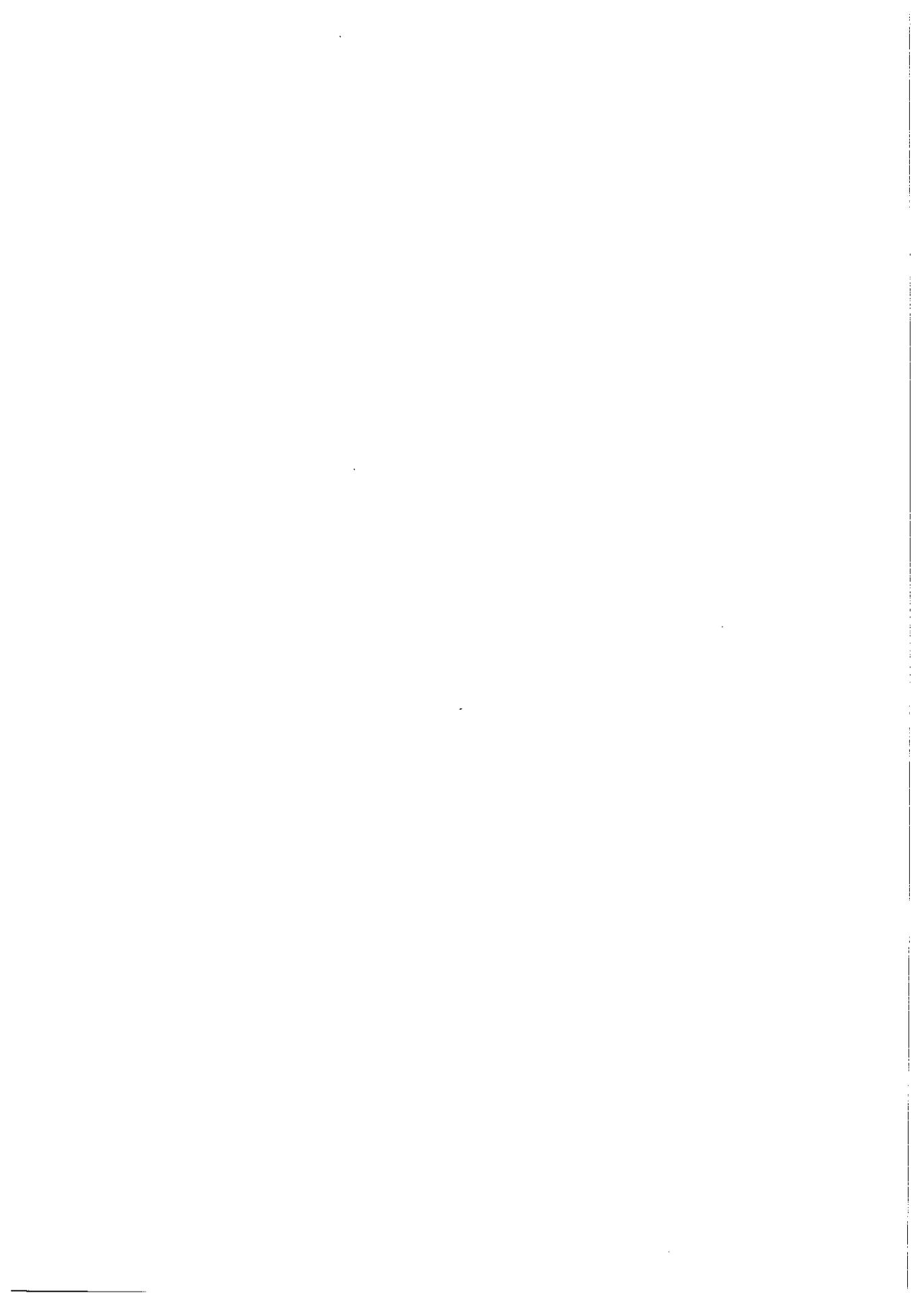


# 楚辺民俗地図





第一編 翻字資料



## 凡例

### 一、翻字対象話の選定基準

- ① 昔話（動物昔話、本格昔話、笑話）伝説を翻字対象とした。
  - ② 聴取できたすべての話型（話型として認定される可能性のあるものも含む）を網羅すべく、断片的な話でも翻字の対象とした。
  - ③ 類話がある場合は、最も良い語りと思われる話を選定した。
  - ④ 方言・共通語両方の語りを収録してある場合、原則として方言の語りを翻字対象とした。
- ### 二、翻字について

- ① 語りに忠実に翻字することを原則とした。
  - ② 語りの場面を反映している事柄や、話の伝承に関わる事柄については、すべて翻字した。
  - ③ 話者の語り口調に区切りがない場合、翻字者の判断により、適宜句読点を打った。また、話の展開に従って適宜段落を設けた。
  - ④ 語り手自身が、補足的に説明しているところはそのまま翻字し、△▽で示した。
- ### 三、方言表記について

- ① 表記は漢字仮名混じり文とし、漢字には全て読み仮名（平仮名）を付けた。また、漢字のあてられる箇所にはできるだけ漢字を用いたが、無理にこじつけた当て字は避けた。
- ② 民俗行事や特殊な民俗語彙などは、片仮名で表記した。
- ③ 引き音（のばす音）はーで表わした。但し、引き音に助詞（は、が、の、を、に等）が含まれている場合は、助詞の部分を小文字で表わした。

例 ねずみえさじぐわーやてーるばーてー。

### 四、対訳について

- ① 方言（共通語混じりも含む）翻字には、共通語の対訳をつけた。
- ② 対訳は方言翻字に忠実に行い、できるだけ意識をさせた。また、勝手な付加や削除はしなかった。
- ③ 共通語語りの場合でも分かりやすくするために、下段にその話を清書したものもある。
- ④ 難解な語句や抽象的な表現を避け、できるだけわかりやすい言葉で対訳した。
- ⑤ 対訳上、補足説明の必要な箇所には（ ）を付して補った。
- ⑥ 方言翻字文と対訳文の行数を調整し、段落を揃えた。

### 五、本文について

- ① 上段に方言翻字文、下段に対訳文の二段組みにした。題名の上に通し番号を付した。

②話の初めには、題名、話者名、話者の生年月日、翻字者名を明記し、話の終りに採集年月日、調査団名、探訪者名を明記した。

・題名は「日本昔話名彙」(柳田国男監修)、「日本昔話集成」(関敬吾著)によったものもあるが、多くは方言翻字に即した題名を付した。

③語りの中の会話部分(文脈上、会話と判断される部分も含む)や、思慮している部分には「」を用いた。「」は会話中の会話を示す。但し、会話部分は特に改行しなかった。

④歌の部分は、改行して全体に二字下げて書いた。一行には二句程度記入し、句間は一マスあけた。

#### 六、注記について

①人名、地名、年中行事などについては可能な限り注記して説明した。但し、地図で捕える分については省略した。

②地域独特な意味をもつ語句については、注記して意味を説明した。

③注記は、できるだけ読谷村楚辺の民俗を中心に行ったが、中には文献を参考にしたものもある。参考文献はまとめて示した。

1 十二支由来

話者 比嘉清次郎(明治四十三年三月二十日生)

翻字 知花春美

ねずみえさじぐわーやてーるばーてー。神のさじ。

「ちゅーや公儀んかいスリーぬあぐとうや、皆すりていきり」りち、十二支、子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥といつて十一カ所歩ちよ。えんちゆおさじやたんり。あれートントントントンまーんくい歩ちやーやぐとうよ。

あんさぐとう、猫やふりてーねーらんよ。猫はね。ふりてーねーらんない「かんえーぬ者、私ねーいつたー仲間からはんらち」りち、「えんちゆおたたき殺しわるやる」りち、必じえんちゆ取る癖え、敵なやーなかい、えんちゆお猫とはんりとーんばーてー。

あんし、くぬえんちゆお、先ないしえー「私ねー足あんどさぐとう」。牛えまたよーんなー、よーんなるやしえー。馬んでーまた「私がかぐんぬぶん」りちよ。くぬ牛え「自分やまた、足んぶーやぐとう、今から行きわる那覇んかいや、なー早く着くるむん、私ねー先な

ねずみは小使いだつたそうだ。神の小使いね。「きょうは公儀で集まりがあるので、皆参加して下さい」と、十二支、子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥の十一カ所をまわつた。ねずみはトントンと歩きまわるので小使いだつたわけだ。

しかし、猫には連絡してなかつた。猫にはね、連絡してなかつたので、「このやろう、私を仲間はずれにして、ねずみはたたき殺してやろう」と(猫は怒つた)ねずみを取る癖は、そういうことでねずみと猫は敵同士になつたそうだ。

そうして、このねずみは「私は足は遅いから」と先になるわけだ。牛はまたのつそりのつそりとね。馬はまた、「私が追い抜いてやろう」と。牛は「自分は足がのろいので、今から行かないと那覇に早く着くことはできないから、私は先になろうね」と言つた。

ら」りち。

えんちゆおまた、尾んかいさがいくりよ。上びんかい上とーて一分かいしえー。尾んかいさがとーしえー牛の一分からんしえー。うぬ糞ぶつたーぐわーぬぐとうしさがているうぐとう。」

あんさぐとう、着けーにーぶく、尾からポンみかちあまやか先なてい。ちよーどう三尺るやたんりよ、牛から早く着ちよーんばーてー。子、丑、寅ぬ話、猫とう敵やしえーあれーふりらんたんりん。

注 十二支のこと。時刻や方角、十干と組みあわせて年や日をあらわした。子(鼠)、丑(牛)、寅(虎)、卯(兔)、辰(龍)、巳(蛇)、午(馬)、申(猿)、酉(鶏)、戌(犬)、亥(猪)。

2 十二支由来

話者 名城 幸子 (大正五年二月二十日生)

翻字 大浜 洋子

競争さあね。そしたらこのねずみは、「私は体も小

競争だね。このねずみは「私は体も小さいし、どう

ねずみはまた(牛の)しつぽにさがってね。上に乗ったら分かるので、しつぽにさがれば、ちよーど糞がついているような感じなので、牛は気がつかなかつた。すると、着くなりしつぽからポンと牛よりは先にゴールインした。ちよーど三尺、牛よりは先に着いたようだ。子、牛、寅の話。猫と仲が悪いのは連絡しなかつたからである。

採集 S 63・12・20 読谷ゆうがおの会〈知花春美〉

さいから、どうやったら一番になれるかね……、ずるがしこいわけさあね。どうしたら一番に、先になれるかねーと。

また、牛は牛で、自分ひとりのろいから、「朝早く起きやーに行きわるない」りやーなかい、はーえーさーなかい。

天井にはねずみがいて、牛の頭の上に乗ってから、決勝戦に着いたらすぐねずみが先になったから一等なつたつて。

ねずみと猫は敵さーね、それでねずみの所に猫が聞きに行つたつて。「その勝負はいつだったねー」と言つたら、ねずみと猫に、日を一日ずらして言つたら。その時に、「きょうはもう行こうね」と言つたら「終わったん」り言ちやぐとう。それから敵になったというふうな話聞いたけどね。

したら一番になれるかね」と、ずるがしこいわけさあね。どうしたら一番に、先になれるかとね。

また、牛は牛で、自分ひとりのろいから、「朝早く起きて行かないといけない」と考えて急いで行つた。

天井にいたねずみは、牛の頭の上に飛び乗って、決勝に着く頃には、すぐねずみが先に(下りて)一等なつたつて。

ねずみと猫は仲が悪いのはね。ねずみの所に猫が、「その勝負はいつだったね」と聞きに行つたら、ねずみは猫に、一日ずらして教えた。その日になって、「きょうは行こうね」と言つたら「終わった」と言つた。それから敵になったというふうな話を聞いたがね。

翻字 玉城和美

木ぬ切り口ぬ、うまんかいあぶとうぐわーぬ、水た  
まいせーやー。うまんかいあぬ、ガジマルの苗ぐわー  
から何からうまんかい持つちつち、喰ていつち入りやー  
に、あんさーなかい、米ぐわーから何から米ぬ穂んぬー  
ん、えーりんうまんかいなー探めーていくーやーにし  
ち。

「あんしうりがなーあとうムルンなてーるばー。酒た  
りーるムルン、あんしムルンなとーし飲まーにー、ぶー  
らいさつさいし下んかい降りていくーやーに。下とー  
ていすぐぶーらいさつさいし、「あぬクラーぐわーや、  
ひるましむん。ぬが、あんしぶらぶらしちよーるやー  
ひるましむん。くれーぶらぶらしちよーせー何がやー」  
また飛り行かーに、またあまからうぬ水ぐわー飲まー  
に降りてー行ち、じこーいそーさしちよーんりや。

あぬ木ぬ上んかい登てい行かーに見ち、ひちやくぐとう  
うぬ、あぶとうぐわーぬ、木ぬ切つちえーる、腐りとー

木の切り口のくぼみに水がたまるでしょう。そこに  
ガジマルの苗などいろんな物を持つてきて、喰わえて  
きて、米や米の穂などを探して入れたんでしよう。

それがもろみになった。酒を作るムルン。それを飲  
んでフラフラして下に降りてきた。下でもフラフラし  
ていたので、「あの雀はふしぎだね。どうしてあんなに  
ふらついているのだろう。何だろう」と。またも飛ん  
で行つて、あちらでまたこの水を飲んで降ってきて、  
とても喜んでいたそう。

(ある人が)あの木の上に登つて行つて見ると、木  
を切つたあとのくぼみに、腐れてはいるが皮になつて

るうまんかい、皮やな―ひつぽと―ぐとう。うまんか  
い水溜や―に、うまぬ汁ぐわ―飲れ―うい、くれ―う  
ぬ汁る飲ろ―んて―。なみたぐとう、いほ―な味やつ  
さ―や―くれ―、いほ―な風味ぐわ―、いつペ―いい  
風味ぐわ―やさりや―に、あんさ―に何ん何ん入―つちよ―  
がち。あと―米ぐわ―から芋ぐわ―から何からさ―か  
らむるうまんかい、喰ていく―や―にうまんかい貯み  
や―に、水ぐわ―溜たぐとう、うりが腐りや―に麴ぐわ―  
んで―るく―と―てはに、雨が降らんま―ろ―。あん  
さ―にうりが、雨降や―にうまんかいきちやぐとう、  
うぬ麴し―じや―うりが酒ふ―じなや―に、いい臭い  
やるむんりや―にあんしうりから始みたんりる話やさ。  
麴く―らちから、うりわじややさや―りや―にあん  
さ―に、うりひち、自分ぬまじ芋んぬ―んぬ―ん、な―  
麴く―と―しな―水ぐわ―ん入りや―にうりしちゃん  
りる話やさ。

米ぐわ―から何からむる御飯ぐわ―ん何ん残と―せ―  
麴ぐわ―んぬ―んみ―らさ―にかい、まじな事、あり  
が、真似しちんだりや―に、真似さ―に、あんさ―に  
水ぐわ―やくま―なかに、たりたぐとう、いつペ―い

いるので、そこに水が溜まって、その汁を飲んでいた  
ようだ。なめてみると「これは変な味だ。変わった風  
味、とてもいい風味だ」と言つて、そしてどんな物が  
入っているのかと見てみた。米や芋などいろんな物を  
くわえてきて貯えて、そこに水が溜まってそれが腐れ  
て、麴ができていたんでしよう。雨が降るまえまでは  
ね。そして、雨が降つてそこに溜まって、麴ができて  
酒のようになり、いい臭いだといつてそれから始めた  
という話だ。

麴を発酵させることだと、自分でまず、芋などいろ  
んな物を、麴をたてて水を入れたという話である。

米やらいろんな物、御飯などの残り物から、麴をた  
ててまず雀の真似をしてみようと、真似をしてそして  
水を入れてまぜたらとてもいい臭いがして、これを飲  
んだら、酔っぱらったという話である。

い臭いなやーによー、うり飲だぐとう酔やーからかー  
しちゃんりる話やたるばー。

採集S・52・2・20 読谷村民話調査団第五班〈宮里洋子〉

4 雀酒屋

話者 松田 参次郎 (明治四十一年七月二十日生)

翻字 棚原 めぐみ

あのね、焼酎の作り始めた話だけど、これは誰から教わったかというたらね。クラークわーね、あのー何という  
かあれ雀か、あれから教わって、一応話だけどね。

そのクラークわーがね、木の上に登って木の穴の水を飲んでね、とつてもうれしそうに喜んで遊んで跳ねたり、  
飛んだり跳ねたりして喜んでいるのを見てね。「おー珍しいね、こりや何だろうか」と言うて、人間がね、その木の  
上に登ってみたら、その木の上の枝が切り落とされた所に穴があったらしいよね。その穴の中に水が溜っておるも  
のを、そいでその水の下には米粒があったらしいのよね。それをまあ人間が飲んでみたら、なめてみたらね、とつ  
てもいい気持ちで、まあこりや何かいうてたくさん飲んでしまつたら、とてもいい気持ちになつて、「これいいも  
んだね」言うて、そして調べてみたらもう、米粒があつて、それはもうその米に水を入れてね、長いこと置いてあつ  
たらね、酒になつたわけね、焼酎に。で、これにああ焼酎はこんなして作るもんだねいうて、そのクラークわー  
から教わったという話。

採集S 52・2・20 読谷村民話調査団第五班〈宮里洋子〉

5 雀孝行

話者 比嘉ウト(明治三十七年十月十五日生)

翻字 村山友江

クラークわーや親孝行やんり。あぬアマガカラーよ、あれーよまた親不孝やんり、コツコロー、コツコローし鳴ちゆしよ。昔話やしえーやー、親達が言しる聞ちよーしえーやー。

アマガカラーよー嘘吐り言たん。あんすぐとうよ、親ぬ亡しーねーや、うりんかい反対に言ちよーかんねーならんむーりちよ。「私ねー川側んかい送りよー」すたり、親ぬ。あんすぐとう雨降いがたーないねー、「私達あ親あ流りらんがやー」し呼びーんり。

クラークわーやよー、また親ぬミーウテイー見ちやんりよ。すぐやな格好し行ちちやーに、親ぬミーウテイー見じやーによ、「いやーや親孝行やさ」りち。「倉ぬ上からちやー米喰てい歩きよー」りち言やったんり。うぬ話聞ちやん。

クラークわーは親孝行であつた。またコツコロー、コツコローと鳴くアマガカラーは親不孝であつたそうだ。親達が話した昔話を聞いたんだがね。

アマガカラーは嘘吐きであつた。だから親は自分が死ぬ時は、反対のことを言わなければいけないと思つていた。「私が(亡くなつたら)川側に葬ってくれ」と親は言つたそうだ。それで雨が降りそうになつたら、「私達の親は流されないかねー」と鳴くそうだよ。

クラークわーは、親の死に目に間に合つたそうだよ。汚い格好で駆けつけて、親の死に目に間に合つたので、「おまえは親孝行だよ」と。「いつも倉の上から米を食べて歩きなさい」と言われたそうだ。その話を聞いたよ。

6 うずらの話

話者 池原 マカト (明治三十六年三月二十一日生)

翻字 知花春美

子なしねー、女ぬ親のー「うまー火や焼きていちゅー  
るむんりか逃ぎらな」りしが、男ぬ「モーや焼きてい  
うていん逃ぎーやすな」りちよ。男ぬ親ぬうすとーた  
んりる話。

子を産んで、母親は、「そこまで火の手がきて焼ける  
から早く逃げよう」と言うが、父親は、「野原は焼けて  
も逃げるな」と(子どもを)守ったという話。

採集 S 52・2・20 読谷村民話調査団第十二班(山入端孝子)

7 カラスは親孝行

話者 松田平信 (明治二十六年十二月一日生)

翻字 知花春美

鳥はですな、子を思うと、親は毛が抜けて飛びきれんです。だから、その子どもはまた、親が毛を生えて、また  
飛ぶあいだは、子どもがエサをとってきて母に与える。それで親孝行して、また太くなつても、いつしよに飛んで  
木に止まると、どうしても親より下の枝に座つて、だからカラスは親の、子どもなんかは昔は言っていましたかな。

採集 S 52・2・20 読谷村民話調査団第十三班(伊波百合子)

8 こうもりの双心

話者 上地 源助(明治四十年一月三日生)

翻字 村山友江

なー昼お出じらん、なー時分あんぐとう出じてい、  
物搜めーてい喰いんりぬ話。やしが本当ぬはんぬちちよー  
る、鳥ぬ種るやしが、まー鳥とうんぐーならん。ま  
た動物とうんぐーならんやーに、たなかなやーにあ  
りやてーるばーてー。

まーとうん仲間相手さんなやーに、自分一人者なやー  
に、後お昼ん歩からんなやーに。また夜お鳥や歩かん  
しえーや、夜お自分ぬたましりち、夜、こうもりや飛  
でい物のー搜めーてい喰たんりぬ話。

もう昼は出ずに、時分になってから出て行き、食べ  
物を搜して喰うという話。本当は鳥の種類であるんだ  
が、鳥とも類せず動物とも類せずに、中間的な立場に  
あつたようだね。

どちらの仲間にも入ることなく、自分一人者になつ  
て、後は昼も歩くことが出来なくなつてしまった。ま  
た鳥は夜は出歩かないから、夜はもう自分のものだと、  
こうもりは夜出て飛び歩き、物を搜して喰つたとい  
う話だよ。

採集 S 52・7・3 読谷村民話調査団第二班(渡慶次助)

9 雀とうぐいす

話者 比嘉清次郎(昭治四十三年三月二十日生)

翻字 知花春美

雀とうぐいすぬ二つの関係上やししが、うぐいすお美ら着物着ち、いつもハイカラすがいししちやぐとう、また、クラークわーりーしえー、うれーまたなー地味ぬ育ち、ハイカラうぬ程度ぬ生活。あんしまた色もそういうふうに、いぎたー目し見ちん異とーうしが、うれー神からぬしらしどうやぐとう。

クラークわーとう うぐいすとうぬ異いかたやれー、うりん神ぬ仕業るやらー分からんしが心ぬ持ち方あ。

クラークわーてー、くまうていぬ楚辺ぬ言葉しえーユムドウヤーりちよーるばーてー。あんし、クラークわーぬぐとう心お持ていよーやーりぬ鳥んかいかきていぬ言い分やたしが。うぐいすとう同ぬぐとう心持ちるんしえー人間ぬんダメどーりち、親んちやー言たんどー。

うぐいすや 女ぬ親ぬ「水くりくわー」りちやぐとう、潮くりちよーたんり。反対に「潮くりくわー」りちやぐとう、またくんどー水くりつち、ちやー反対。

雀とうぐいすの関係だが、うぐいすはいつもきれいな着物を着て、ハイカラで、また雀はいつも地味に育ち、ハイカラといってもその程度のものだった。色にしても私たちの目で見ても、異なっているが、これは神から定められたことである。

雀とうぐいすの異なるところは、これも神の決めたことなので、心の持ち方である。

雀は、楚辺ではユムドウヤーといっている。そして雀のように心を持ちなさいと、鳥に例えてのいい分である。うぐいすと同じように心を持つと人間はダメだよと親たちは言われたよ。

うぐいすは、母親が「水を汲んできなさい」と言うのと、潮を汲んできたそうさ。反対に「潮汲んできなさい」と言ったら、また水を汲んできて、いつも反対の

あんしまたクラゝぐわーや「潮くりくわー」りれー、  
ちゃんとう「はい」潮くりつち、「水くりくわー」りれー、  
ちゃんとう「はい」水くりつち。あんさぐう、親ぬ孝行  
しちさぐとう。

親ぬ言い分ぬ、「とーユムドゥヤーよ。いやーや下ん  
かいうとーてい生活おしーよー。下うてい人間とう仲良  
くし、家んかい飛びちしむんどー。入つちんさしつか  
えねーんどー。下ぬ物いやーや食り生活おしーよー」  
りち、言いちきらつてい。

親ぬくり買てい着しらわん、ちゃー地味、ぬーんし  
むん、うぬ着物ぬん上等りち。親ぬ言いしえー、「くぬ  
ユムドゥヤーや、むる反対さんぐとうに 親ぬ買てい  
着しーる着物のー着ち、いやーぬぐとうやさ」りち、  
なりらつていや。「あまり高のぞみさんぐとうに下うてい  
暮らしよー」りち。

うぐいすや、くぬ衣装着しらわん、着かんりち、な  
取つてー投ぎ投ぎ、なー必じ美らはしる着るりち、美  
ら着物。くれーなーひんじ者やっさーりち。あんし美  
ら着物るましやるりち、美ら着物着してうるうんりし

ことばかりしていた。

そして、雀に「潮汲んできなさい」と言うた、「はい」  
とちゃんと潮を汲んできて、「水汲んできなさい」と言  
うと、「はい」とちゃんと水を汲んできた。親孝行であつ  
た。

親が言うには、「はい雀よ、おまえは下で生活しなさ  
い。下で人間と仲良くして、家に飛んできてもいいよ。  
入つてもさしつかえないよ。下にあるのを食べて生活  
しなさいね」と言われた。

親が買つてあげてもいつも地味にしている、何でも  
いい、何でも上等といった。親が言うには、「この雀は、  
何も反対しないで、親が買つてあげる着物を着て、お  
まえのようにだよ」とほめられた。「あまり欲張らない  
で下で暮らしなさい」と言った。

うぐいすは、この衣装を着けなさいといつても、投  
げたりして、必ずきれいな着物を着けると言った。こ  
れはひねくれ者だと、きれいな着物を着せても、美し  
い着物がいいと言うので、母親は困っていた。「もうお

が女や親あいかんしちやぐとう。「とーいやーやなー、親やかんるくあんし飛ばんりし、言ちんちかんぐとういやーや木ぬ端から歩けー。木ぬ端から歩ち行きよー。いやー下んかい降りんなよー」りち。

あんさぐとう、あれーなーとうーち木ぬ端から歩ちよ、ありが歌いしん「私ねーうぬ生まりるやぐとう、親なかい言らつとーぐとう、あー残念、あー残念」下んかい干さつとーる粟、マージンぬあしが、うり降りてい食むる資格んねーらん。あんさーにあれー木ぬ端からピンピンピン歩ちゆる話。

## 10 犬の足

四ちあてーしがてー、昔え、香炉。あれー四ちあてーしがてーやー。うぬ犬の足あ、片足あねーんたぐとう。うぬ香炉、あぬ、四ち足ああたしが、一ちえー取やー

まえは、親よりも上になろうとして、言っても聞かないので、お前は木の端から歩いて行きなさい。おまえは下に降りるなよ」と言った。

それで、うぐいすはいつも木の端から歩き、「私はこんな生まれだから、親にそう言われているので、ああ残念、ああ残念」と歌っている。下に干されている粟、マージンもあるが、降りてそれを食べる資格もない。ただ木々の間をピンピンピンと歩く話である。

採集S 52・7・3 読谷村民話調査団第八班（知花利江子）

話者 上地 豊（明治三十四年三月四日生）

翻字 知花春美

昔、香炉は（足が）四本あった。四本あった。犬の足は片足はなかった。香炉は四本あったので、一本を取って犬にあげたので、犬の足は四本になった。

に犬ぬんかいしぎたぐとうよ、うぬ犬のー四ち、足あ  
みーたんりぬ話。

あんさーなかいてーやー、犬ぬよー、かんし足ああ  
ぎてい小便すしえーよー、人ぬむん取ていちしぎらつ  
とーぐとう新はぐとう、小便かきらつてーならんむん  
りち、私ねー聞ちやさ。

11 雨蛙不孝

アマガカーぬ話りしん、自分ぬ聞ちよーる話るやし  
がよ。

うりん、いーるんしえーアマガカーりしえー、んちや  
ちようどう雨降いがたーなかい、泣ちゆしえーやカー  
クーガークーし。鳴ちゆくとう。

あんさーなかい自分ぬ子ぬ、いへーかじんちかんふー  
じぐわーぬ童ぬうたんり。あんしねー、ぬーでい言ち

それで、犬が片足をあげて小便するのは、人からも  
らったものなので、大切にして、小便をかけてはいけ  
ないということらしい。私は聞いたよ。

採集S52・2・20 読谷村民話調査団第十班（村山知義）

話者 比嘉次郎（明治三十七年十二月二十八日生）

翻字 名嘉真 宜勝

アマガカーの話で、自分の聞いた話だけどね。

アマガクーというのは、雨が降るとガークーガークー  
と泣くでしょう。泣くからね。

そうして自分の子に、気きわけのない子がいたって、  
何を言っても素直に聞いてくれず、もうどうしたらいい

ん、なゝむる聞かん。うれゝなゝちやゝあれゝしむがやゝりち、親ぬ心配しよ。また、ぬゝ用事いゝちきらわん、なゝいゝちきゝしえゝさんよゝい、反対むんしちえゝういし。

あんしあり取つていくわゝりねゝ、まじぬゝやたんでゝまん、「いやゝあまんじ、おばあ着物ぐわゝ取つていくゝんなゝ」りねゝ。着物ぐわゝ取つてゝくゝん、またいるんな物、他ぬ物取つていち。反対ぬ物取つていちえゝうい。仕事いゝちきらわん、草刈いがいきわりねゝ、芋掘ていちやい、また芋掘いがいきわりねゝ、また草刈ていちやい。いるいるなゝ、親ぬいゝしとうむる反対しゝすたんりゝ。うぬ自分ぬ子がてゝ。

あんさぐとう、「いやゝやひやゝ、親ぬ物言しえゝ聞かん。アマガクとゝ同むんどうやんなゝ」り。くりがあんさぐとう、アマガカーりしえゝ、またうりどゝりしえゝ。くぬまじアマガカー鳴くんりぬうりてゝ。

なゝくぬ童え、反対聞きるさぐとう。「私がくぬ世うしないねゝ、川端んかい送ていとうらしよゝ」り言ちやんりゝ。あんさぐとううにねゝ、ちよゝどう、「くりとゝていんちよゝいなゝ、親ぬ言しえゝ聞かんあねゝなら

いものかと、親は心配していた。もう何か用事をいいつけても、その通りにはせずに、すべて反対のことばかりやっていた。

まず、何にしても「あんたはあそこで、おばあの着物を取つてきてくれないか」といつても、着物を取つてこないで、いろいろ他の物を取つてきた。反対の物ばかり取つてきた。また仕事をいいつけても、草を刈りて来なさいと言つたら芋を掘つてきて、芋を掘つてきなさいと言つたら草を刈りてきたりしていた。もういろいろなこと、すべて親の言うことと反対のことばかりやっていた。自分の子供がね。

そうしたから、「あんたはもう、親が言うことも聞かない。アマガカーと同じか」と。アマガカーが泣くというのは、そういうことからだからね。

もうその子供は、反対のことばかりするんだからね。「私がこの世を去つたら、川端に葬むつてくれ」と言つたそうだ。「この時ばかりでも、親の言うことを聞かないといけない」と。真面目に親の言うことを聞いて川

ん」真面目になうにーねー、親ぬ言ぬ通い川端んじ、自分ぬ親あ葬りがたしちやんり。

あんさぐとうんちや、雨が降いねー川端んじ、アマガカーグークーグークーすしえーや。

そういうふうにあんさぐとう、後お自分ぬ実際真心くみていぬうりやし、不孝ふーじーなてーんてー。あんさーなかい、親ぬ言しえー聞かん、雨ぬ降いねーちやー心配しち、後おなー自分んかいありしちよーるばーてー。なー私ぬーむる反対しち、今度ばかーんちよーん、親ぬ孝行しわるやつさーりち、あんねーし。真面目にしちちやるむんなー、くれーあねーならんたん、反省さーなかい。

川端、アマガカーとー同むんうんぐとうーし。なー私たー親あ、なー大雨ぬ降いねーなー流りーやしみそーらんがやー、ちやーないがやー、かーねーがやー。こいう非常に悲しい気持ち思つてですなー。あんしグークーグークーし、いやーやアマガカーとー同むんやさり言ち。アマガクぬこいう伝え話はな、あんすぐとう親ぬくとうんかい反対しーさーなかい、しちやるうりが例がアマガカーとー言ち、うりさつとーんりぬ話や

端に葬つた。

だから、雨が降ると川端で、アマガカーはグークーグークーするでしよう。

そういうふうにして、後は自分の本心から親の言う通りにしたんだが、それが逆に不孝となつてしまった。だから、日頃から親の言うことを聞かなかつたものだから、雨が降るといつも心配ばかりしていた。もう私はいつも親が言うのと反対のことばかりしていたので、今度ばかりは親孝行をしよう、そういうふうにしたんだがね。真面目にしたことが裏目に出ってしまったので、そういうはずではなかつたがと、反省した。

川端で雨蛙が泣くのと同じだよ。私の親はもう、大雨が降ると流されはしないか、どうもないかとね。いつも心配ばかりしていた。だから（大雨が降ると心配して）グークーグークー泣いていた。雨蛙の話というのは、親の言うことに反対のことばかりしていたという、例から出た話だよ。

るばーてー。

12 鬼餅由來

イキーぬ鬼なやーなかい、自分ぬウナイぬ、イキーぬ鬼んかいなてい人喰いぐとう。あんさぐとう、ウナイぬ「くれー人喰いぬむん」り言やーなかい、餅作てい、「うりウミー、餅かめー」りち、餅取らちやぐとう。餅えんちがーちー、ホーはていひちやぐとう。ホーよー、ホーよーしちやぐとう、うぬイキーや、すぐ穴んかい落ていてい死じやんりーぬ話、昔話やさ。

餅作ていって食べさせたり、昔の話だよ、これは。ガマの方にしまつていたつて、その鬼が、自分のイキーが。そこでガマに住んでるから、みんな人を喰うでしよう、鬼だから。「くりとーてーなー、私が殺ちとうらすん」りち、イキーやしが。

採集 S 52・7・3 読谷村民話調査団第四班へ大本敬子・運天悦子

話者 比嘉 ミツ子 (明治四十五年五月十二日生)

翻字 村山友江

自分の兄さんが鬼になり、その兄さんは人を喰うという。そうして妹は、「もう(兄さんは)人を喰うというし……」と、餅を作つて行き「餅を食べなさい」と渡した。するとその餅を開けながら、(妹は)下半身をあらわにしたので、「ホーよー、ホーよー」と言いながら転げて穴に落ちて死んだという話である。昔話だよ。

これは昔の話だけど、自分の兄が鬼になってガマに住んでいたので、餅を作つていって食べさせたそうさ。ガマに住みついて人間を喰うようになったので、「もう今度こそは、私が退治してやる」と、自分の兄ではあるんだが(退治しに行ったようだ)。

あんさーに餅作てい持つち行かーに、「うり兄さん、餅かめー、とー」りち、餅え喰まち、んきーがーちー、「ウミー、ホーよーホーよー」しちよ、しちやぐとううぬ兄さんのー、しぐ鬼えなーちん返りてい、そのままだつたつて。それからホーハイムーチーになつたつて、ホーよーホーよーしちやーに。厄払い。

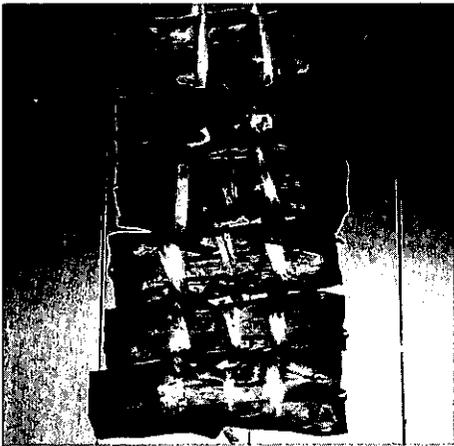
その餅作つた時のお水はね、炊くでしよう。お水で炊くでしよう。その水はヤナムンゲーシりやーなかい、お家の西んかい東んかい、かんし餅の汁。またかんしこうしてするでしよう、それもみんな軒に。

そうして餅を作つて行き、「はい兄さん、餅を食べて」と、(サンニンの葉を)開けながら言った。すると鬼になつた兄は、「ウミー、ホーよー、ホーよー」と言いながら、後にひっくり返りそのまま(亡くなつてしまつた)。それから厄払いということで、ホーハイムーチーというようになつたんだよ。

餅を炊く時の水があるでしよう。あれは悪返しということで、家の周囲(西・東)に煮汁を撒く。またこうして、軒には(サンニンの殻二枚をあせて十字型にしたのを)を下げるんだよ。

注 ムーチー 楚辺では旧曆十二月七日にムーチーと称する行事があり、現在でも行

なわれている。幅約五センチ、長さ十二センチぐらいの餅を作り、月桃の葉で包んで、大鍋に蒸して作る。魔除けとして煮汁は庭にまき、餅を食べた後のサンニンの殻二枚をあせて十字型にし軒下に吊るす。子供のいる家庭では子供の分をひもで吊るしたり、男の子には力餅を作つてあげたりする。



ムーチー

採集S 63・12・15 沖縄県民話の会(宮城昭美)

翻字 棚原 めぐみ

あのね、えー師走の七日ねこの師走いうたら十二月ね、旧の十二月七日に読谷楚辺の方にはね、ウナムーチャーいうてあのお餅作るわけ。あのうムーチャーカーサいうてね、カーサがあるわけね。それに入れて包んで蒸してね、これを食べるわけね。

そのムーチャーの始まりはね、これどこの字か、首里かどこか知らんけどね。ウニ金城ぬウナムーチャーいうて始まったわけ。

これのわけはね、そこに何男、長男か次男か三男かこんなこと知らんけど、男の子が生まれて、その男の子がまーいえばとてもおとなしい人だったんだけどね。何か用事で出たもんか、また出稼ぎに出て行ったもんか、八重山に渡つてね。

で、八重山でいろんな生活しておつたらしいんだけど。生活が苦しかったかそれとも何か知らんけど、山奥に逃げて行って海岸べりの山奥に逃げてね。いざあの一、いろんな食物が無かったか、苦しい生活をしたためか、何か知らんけど、人間を食うようになって、まあ鬼になつておるといふ話が、この本島の方に聞こえたわけね。

で、家族中全部もう親兄弟は心配してね。自分達のこの家族からこういう鬼になつて、鬼が出たという事は、世間に対して迷惑だからね、これはどうしても本当か嘘か確かめたいかといふことになつて。

で、妹がね、まあ年頃になつた妹が、八重山に渡つて行って、で、山の中を探して確かめたらね。本当にもう最初は妹ということ分かつてどうもしなかつたけど、もうちよつと話、いろんな話、世間話するうちにはまあ鬼みたいになつて食おうとしたわけね、この自分の妹を。

もう怖がつてこりやあもう大変だ、本当の鬼になつておる。これどうにかして、今度はもう、確かめに来ておるわけだから、どうにかして逃げて家に帰つて、家族相談してまた出なおさないといかんということになつて。じゃあ何か思いついて「じゃ私、あのうおしつこに行つてくるから、ちよつと待つてくれんか」いうたら「いや、お前逃げる考えだからそのままじゃいかん。じゃあ手に縄でくびつてからおしつこにでも行け」いうて手をつながれたわけ、縄でね、くくられたわけ。で、そのまま行つて、見えない所まで行つてその縄は別の木の枝とか木の根元にくびつておいたら、ひっぱつたりしたら「あー、逃げてない」ということわかつて、そのまましておるうちに、自分は、船から逃げてまゝ本島の自分の家に帰つたわけね、その娘は。

そしたらもう家に帰つて、「本当だったか」というて家族全部心配して、待つておるもんだから。みんなから聞かれたら「本当だ、あれもう本当の人間を食つて、骨もだいぶあつた」とかいうてあの一、家族に話したら、「あーそうか、じゃあこれをどうしても自分らの家族のことだから、自分らでこれもう退治せねばいかん」という事になつて。

それでどんなしたらいいかねーて考えた末、今度は餅をたくさん、あれ、とても餅が好きだったから餅を食わさう言うて。でーその餅を、カーサね、ムーチーガーサというけどね、あれに包んで、たくさん包んで持つて行つて、それに食わしたらもう、腹も切れる、おなかもパンクするぐらい食べてね。

そうしてやるうちに、いろんな「おまえの口は上等だね」て聞いたら「これ何する口か」いうたら「これは餅を食べる口だ」と聞いて。そうしてまあ母達、みんなと相談した結果だから、あのね、この家族でお母さん達から相談してきたもんだから自分のこのズロースなんかも全部取つて、わざとこの兄弟だから見せたら、「これは何かな」いうて聞いたもんだから、「これはあのう鬼を食べる口だよ」まあズロースも取つて前にもきたもんだから、怖がつてちよつとびつくりしたらしい。

このねえ、あの鬼はびつくりしたもんだら、とーいいもの、これ確かにこれで効くかしらんいうて。「これ何か」

いうてまたも聞いたたら、「これ鬼を食べる口だ。この口はまた餅を食べる口だ。これ餅を食べる口、下の方は鬼を食べる口だよ」いうて、わざつともう兄弟に向かつて、前に進んで行ったら、もう怖がつてからに、食べられたらいかんいうて怖がつてからに、海岸の恐ろしい絶壁の所に逃げて行つたもんだからね、追いついて行つて、行つたらも一後向きになつて逃げるもんだから海に落ちてしまつて、深い谷底の海だから、落ちてしまつて死んだという意味ね。そうしてこのムーチャーで殺したということになつて、ウニ金城ぬウナムーチャーいうて、このムーチャーが始まつた。こんなこと聞いている。

採集S 52・2・20 読谷村民話調査団第七班 仲村渠清美・佐和田茂美・上原ヨシ

#### 14 ク ス ケ ー 由 来

話者 比 嘉 カマド (明治四十五年七月二十日生)

翻字 村 山 友 江

悪者ぬよ、ボージャー産しーねー親取ら子取らし、悪者ぬ来たんり。あんさぐとうティインタナーし、台所からてー、台所から悪者ぬ来たんり。左縄綯やーに、うぬ子産さーや地炉ぬ側んかい、左縄ちきてい強らすたんよ、一週間ぐらい九日ジールまでいてー。

あんししーねーくぬ小はぬ童ぐわーが鼻ひらつてーるぐとーん。鼻ひーねー命え取らんりーんり言ちやぐ

子供が生まれた時に、悪者が母親や子供の命を取りに来るそうだよ。ティインタナーといつてその悪者は台所から入つて来るということだった。子供が生まれた時には、産婦が休んでいる地炉に、九日ジールまで左縄を張りめぐらして、産婦を養生させていた。

この産まれたばかりの赤ん坊が、くしゃみをしたらしい。するとそこのおばあさんが、くしゃみをする

とう、おばあさんぬてー「クスくえーわ」、『クスたつくわーさりんどー』り言れーわ』りやーに。

あれー、親取ら子取ら、悪風てー昔ぬ、大昔るやさ  
に。あぬー親取ら子取らし来に、左縄やしちえーぐとう  
入ららんないんり。童ぐわーん鼻ひらちやんり。あん  
さぐとうまた、うぬ祖母や感心な者てー、「クスくえー  
わ』り言れーわ』り言ちやぐとう。うにーからぬぐわ  
やーり思たれー、うらんとんりぬ話やさ。

昔え悪者ぬまんどーたんり。赤ん子持ちえー、十二時  
までー夜伽しーねーうまんかいちやー泊まいしーよ、  
十二時からー行くなよ。うぬ童あ親戚達がよ、子産  
し用事んかい行ちーねーよ、うまんかいちやー泊まい  
すりたん、行かさんたん十二時過ぎていからー。悪者  
子産し家や、親取ら子取らし悪者ぬ立つちゆぐとう。

あんさーによ子産さーや、うまんかいカタナ、枕元  
ぬんかい置ちる寝んじゆたんどー。枕元ぬかい、寝ん  
じにーん、あんさーにまた、うにーからハサミよ、包丁  
ぐわーん、うぬ悪者ぬきーんり。

命を取られてしまふから、(その時は)「クスたつくわー  
さりんどー」と言うんだよ」と教えてくれた。

親や子の命を取るといふ話は昔の話だが、左縄を張  
りめぐらしてあつたので入ることができなかった。ま  
た赤ん坊がくしゃみをしたので、そこのおばあさんが  
気づいて、「『クスくえーわ』と言うんだよ」と教えて  
くれたので(その通りにした)。すると(その時はどう  
してそう言うんだろう)と思つていたら、(その悪者は)  
いなくなつていたといふ話だよ。

昔は悪者が多かった。赤ん坊が産まれた家に見舞い  
に行くと、十二時を過ぎたらそこに泊まるんだよと、  
親戚の人達が見舞いに行くと、十二時過ぎからはそこ  
に泊まったそうだよ。産家には親や子の命を取ろうと  
する悪者が立つといふことで、十二時過ぎてからは帰  
さなかつた。

それからまた産婦は、枕元にはカタナも置いて寝た  
んだよ。寝る時には、ハサミや包丁などを置くと、悪  
者をはねつけることができるつて。

翻字 津波古 米 子

な、ウスメーハーメーが一人子ぬ、男子、一人子ぬうたんり。

あんしうりなかいまた、鶏ぐわー飼なとーたんり。卵なさー鶏ぐわーや飼なてい。毎日卵なすんりやー。

あんさぐとう、うぬ子んかいうぬ卵あ、たまとーぬ卵あむるうりんかいきうてい、しちやぐとう。んちや鶏ぐわーぬ卵なすしん、ありいつペーなーしぐ意地いつちよーていなすんよーや、あんすさ。

うぬあぬだ、私がうつき卵なち、うぬ子んかいきうてい。くりが命、私ねー取りわるやるりち、なうぬ鶏や覚悟しちよーたんり。

あんしちやぐとう、うぬウスメーハーメーたーや、あぬだー聞ちよーるくとうぬあてい。(あぬ鶏ぬ、何りち言たがや、ありが鼻ひーねー命取らりんりが言たがや)。あんしちやぐとう、「鼻ひーねー『クスケー』

あるところに一人子、男の子の一人子がいたようだね。

そして、その家では鶏を飼っていた。その鶏はめんどりで、毎日のように卵を産んでいたそう。

めんどりが卵を産むと、卵はぜんぶ一人息子に食べさせていた。そのめんどりも卵を産む時は、大変力を入れて産むのであった。そうだったよ。

私(めんどり)が、これだけの卵を産んでも、ぜんぶその一人息子だけに食べさせて(と思っていた)。もう私はこの子の命を取らないといけないと、覚悟を決めていた。

すると、その夫婦は何か聞いていたんでしようね。(あの鶏が何と言ったのかな、くしゃみをしたら命を取られるとかいっていたようだが)そうしたから、「くしゃみをしたら『クスケー』と言いなさい」と、教え

り言りよー」りち、教すしがうたんり。

あんしうぬ子ぬ鼻ひつちやんり。「クスケー」りちやんり。あんさぐとう命え取いうーさんたんり。んがたーあん言たんどー。今ぬ人お、鼻ひーねー「クスケー」り言たんや。

鼻ひーねー「クスケー」り言りよーりち、あんし教すしがうたんり。いやー子取いる話いくれーしちよーぐとう、いやー子ぬ鼻ひーねー、「クスケー」り言りよーりち、あんし教すしがうたんり。いやー子取いる話いくれーしちよーぐとう、いやー子ぬ鼻ひーねー、くぬ悪物ぬるやるぐとーさー、鼻ひらすしん。あんやんりよ。

あんさぐとう、くぬ子ぬ鼻ひーねー「クスケー」り言りよー。あんしーねー命え取いうーさんぐとうりち。鼻ひつちやぐとう「クスケー」り言ちやんりや。あんさぐとう命え取いうーさんたんり。あんし命取いる覚悟やてーんどー、うり知らんあれー。「クスケー」り言葉知られあれー。

る人がいたそうだ。

そしてその一人息子がくしゃみをしたら「クスケー」と言つた。すると命を取ることができなかつたそうだ。(昔の人は) そういうふうに話をしていたよ。くしゃみをしたら、「クスケー」と言いなさいと。

くしゃみをしたら、「クスケー」と言いなさいと教える人がいたそうだ。あなたの子供の命を取るといふ話をしているから、子供がくしゃみをするのは、その悪物がさせることだよ、と。そういうことだった。

だから、子供がくしゃみをしたら、「クスケー」と言いなさいよ。そうしたら、命を取ることができないよ、と。くしゃみをしたので「クスケー」と言つたそうだ。そうしたので命を取ることができなかつた。そういうことを知らなければ、命を取られるはめになつていたよ。「クスケー」という言葉を知らなければね。

うぬ人お、鬼ぬうりしちやぐとう、鬼んかい追りやーにしちやぐとう。うぬ人おなー大事なとーんりち、慌ていていはーえーはーえーし山ぬ中んかいうりさーに。後お菖蒲ぬいつべーゆかとーたぐとう、菖蒲ぬ中んかい隠ていしちやぐとう、うぬ鬼えうぬ菖蒲ぬ植てーぬ側からすぐはーえーなてい、前んかい進ていはいぎーたんり。あんししち見ちやぐとう、「なーあまなかいはいぎーしえーなー、命え買たさ」り言やーに、なーまーんかいはいぎがやーりち、かーまあまんかいはいぎーたぐとう、命え買たさりち、うまからまた出じやーなかい。

うりさーに、あんすぐとう五月五日え、鬼なかい追りやーに菖蒲ぬ下んかい隠りやーなかい、命え買とーぐとう。菖蒲お五月五日ねー、菖蒲お厄ムン、悪返しりちやぐとう、菖蒲おうりしーよーりち。

私ねーまた、ぬが何りち今日やうぬ菖蒲さーにサー

ある人が鬼に追われてしまった。もう一大事だとうことで、慌てて山の中へと走って行った。するとしまいには、菖蒲が大変生い茂っているところに来たので、その中に隠れていたら、鬼は菖蒲の側から(そのまま気づかずに)走って前に進んで行ったそうだよ。もう(鬼は)どこまで行っているんだろうと見てみると、ずっとずっと遠くまで行っていたので、「もうあんな遠くまで行っている。命拾いをしたよ」と、そこから出て行った。

そういうふうにして、五月五日に鬼に追われた時に、菖蒲の下に隠れて命が助かった。それで五月五日には、菖蒲は厄払い、悪返しということだよ。

私はまた、なぜどうして今日は菖蒲ではちまきをし

じんすい、また帯うしびんすが、ぬが何ぬりちやがりち言いちえー  
んてー、また。うれーよー鬼うになかい追うわつたぐとうよ、  
なー逃ひんぎーる。所ところんねーらんない、くれーまーんかい  
隠かくくいがやーり。菖蒲しょうぶぬいつペーゆかとーぬ。所ところぬあた  
ぐとう、うぬ菖蒲しょうぶぬ中みんかいすくまーなかいしちやく  
とうよ。鬼うにえすぐ、うぬ菖蒲しょうぶの葉はからちやー通といしち、  
ちやー通といしはやーに、見みちやくとう、かーまあまん  
かいはいぎーたぐとう。とーなー助たすかたしえーりやー  
なかい、自分じぶんやうまから出いじやーに。

くれーなー、菖蒲しょうぶおなー、菖蒲しょうぶぬ下したんかい隠かくやーま  
命めい助たすかたんむりやーに、あんさーに菖蒲しょうぶぬ葉は。

菖蒲しょうぶぬ下したに隠かくりてい 命めいすくてい

毎年まいねん五月ご日にちや祭まつりさびら

りぬ歌うたや、うりから作つくてーる歌うたやさりち、ただうつさ  
る聞きちよーる。あんさーに五月ご日にちえ、うりさーにし  
ち。

たり、帯うしびをしたりするんですか、なぜどうしてですか  
と聞いてみたんだがね、鬼うにに追うわわれてもう逃ひんげる所ところも  
なく、どこに隠かくれたらいいんだろうと（困こっていた）。  
すると菖蒲しょうぶが大お変か生い茂さっている所ところがあつたので、す  
ぐその中に隠かくれた。鬼うには（そうとも知らずに）菖蒲しょうぶの  
側わから、ずーつとずーつと遠とくまでそのまま走り去さ  
てしまった。それで、もう助たすかつたと、そこから出い  
行いつた。

こういうことから、菖蒲しょうぶの下したに隠かくれて命めい拾ひろいをした  
という話はなしだよ。

菖蒲しょうぶの下したに隠かくれて、命めいが助たすかつた

毎年まいねん五月ご日にちは祭まつりをしましょう

という歌うたは、その意味いみから作つくつたということだよ。た  
だこれだけは聞いたよ。それで五月ご日にちを行いうようにな  
つたということ。

採集 S 63・12・20 読谷よんがゆうがおの会かい（村山友江むらやまともえ）

注 五月五日 旧曆五月五日に行われる行事で菖蒲の節句である。あまがしを作り菖蒲で箸はしを作つくって仏壇ぶつだんに供たまえた。

翻字 知花孝子

あれーよー五月五日ぬ話るやさい。餅ぬ話やあらん  
五月五日に、男のーなー美ら女んち妻そーるばー。妻  
ひちやぐとう、うぬ妻ひちよーる男のー鬼んりちえー  
分らんばーてー。妻え鬼やしが、あんしな隣ぬ  
のー分いたるばー。

あんさぐとう「いやー妻え鬼るやる。そー人おあら  
んしが、いやー分いみ。いやーがはいねー、鍋ぬみー  
ウケーメー煮ち、ウケーメー煮やーに、頭からすぐく  
みんちるさぎーんどー」んちやぐとう。なー夫のー  
妻、美ら妻んりちるやぐとうてー、化きとーるばーてー。  
あんさーになー、うぬ夫お畑かい、畑かいねーびー  
さーになー天井うてい隠きていうぬ女見ちやぐとう。  
んちや、言いねーすんねー、鍋んかいウケーメー煮ち、  
柄杓さーに頭んかいくみんちゆたんり。

「んちや、あんるやるむん」りちやーに、なーうん  
から逃んぎてーるばー、男あ。あんしさぐとう、うぬ

あれはね、五月五日の話でしょう。鬼餅の話ではな  
いよ。ある男が美しい女だと思つて、ある女を妻にし  
た。その男は、女が鬼だとは、分からないわけさ。し  
かし隣の人は分かつていたらしい。

それで、「あなたの妻は鬼だよ。人間ではないが、あ  
なたは分かっているか。あなたが出て行くと、鍋いつ  
ぱいにお粥を炊いて、頭(にある口)から食べている  
んだよ」と言つた。もう夫がは、妻が化けているとも  
知らずに美しい女だと思つているからね。

それである日、夫は畑へ行つたふりをして、天井裏  
に隠れて、妻の様子を見ていたそうだ。すると隣の人  
が話した通り鍋いつぱいにお粥を炊いて柄杓で頭(に  
ある口)に入れていたそうだ。

「こりや、まったくその通りだ。」と、もうその場か  
ら逃げ出したわけさ。その男は、それで五月五日にア

五月五日ぬアマガシよ、ありんかいかつちやーちうりんかいかむるばーぬあしえー。あんさーに、うまから逃んぎやーに、菖蒲ぬみーんかい隠きたくとう。隠きやーに命え助きてい、菖蒲ぬみーんかい、鬼え来んてーるばーてー。

あんさーに命え助きたくとう。五月五日ぬー菖蒲お帶ぐわーひちやい、頭んかい被たいさぎーしえー。うれー、菖蒲おうぬ、うりやんり。鬼ぬ返し。うれー話聞ちやさ。

18 キジムナー

キジムナーとう友達しーねー、魚おくわつちーすんりたしが。あれー、キジムナー友達とうめーいねー、魚あくわつちーさーに、毎日、毎日起くしーが来たんり。毎日なー、キジムナーとう友達なやーに、潮ぬ干

マガシを食べる行事があるでしょう。そうして、男が鬼のもとから逃げて、菖蒲のなかに隠れたそうだ。菖蒲のなかに隠れたら鬼はそこまでは、来ることができずに命びろいをしたということ。

そういうわけで、命が助かった。それで五月五日には菖蒲の帯をしめたり、頭に巻いたりしているのはそのことからだよ。菖蒲のおかげで助かったので、鬼除けだという話を聞いたさ。

採集S52・2・20 読谷村民話調査団第二班へ当真典子・鈴木信一

話者 比 嘉 カマド (明治四十五年七月二十日生)

翻字 島 袋 フジエ

キジムナーと友達になると、魚をごちそうするという話があつたが。キジムナーと友達になると、魚をたくさんもらうが、毎日、毎日起こしに来たそうだ。キジムナーと友達になつて、毎日、潮の干く頃には、「カ

ねー、時分ないねー、あれーカマー名やんりー。「カマーぐわーるやしが起きれー、起きれー」りーたんり。

あんさぐとう、起きーねー、「またん来さやー」りち、なー起きらんあいねー、くちゆくいんりよ、わちやくていんちやい、だんだんすんりー。あんさぐとう、うれー「行かんあれーならんむー」りやーにしえーるふーじ、起きてい。「りか、魚取ていくー」りち、うりが持たらん荷取てい持たすたんりしがよー。

すぐ、あーぶーあーぶーしち深くから歩かすんりー。「はーいやーやうがとーまでい連ていち、私ねー溺くわすんりちるやるい」り、言いねーよー、「溺くわしえーさん、また同ぬぐとう連てい行ちゆんどー。家までい」りち。うりとう言ちやいはんちやいしち。

「手八ちゃーや取いんなよー」り言たんり。キジムナーが人間ぬんかい。手八ちゃーりねータクてー。手八ちゃーや取らんでーるふーじ。

なー、毎日が毎日、一日ん休らさん、ちやー時分とーてい起くしーが来ぐとうよ。後ぬぬずみねーよー、陸ぬはたんかいタクおういるすてーさに。深くから取いねー私ねー溺くわさりーるむんりやーに人間ぬ思てー

マーぐわーだけど、起きなさい。起きなさい」と呼びに来た。あれはカマーという名前だったそうさ。

そうして、「またも来るね」と、もう起きないと、いたずらしたり、からかったり、いろんなことをするそうさ。もう「行かないといけないね」と起きるわけだ。「さあ、魚を取つてこよう」と、その人が持てないほどたくさん持たすそうさ。

すぐ、アップアップしながら深いところからも歩かすそうさ。「おまえはもう、こんなところまで私を連れてきて、溺れさせようとしているのか」と言うと、「そんなことはしない、同じように家まで連れて行くよ」と、キジムナーと言いつていた。

キジムナーが人間に、「手八ちゃーは取るな」と言っていた。手八ちゃーといつたらタクのことだね。手八ちゃーは取らなかつたようさ。

もう、毎日のごとく、一日も休むことなく、同じ時間起こしに来た。しまいには、陸のところからタクがいたんでしよう。深いところで魚を取ると、私は溺れるかもしれないと思つたんでしよう。陸のところからタ

んでー。陸ぬはたんかい、タクぬうたんり。あんさぐ  
とう、うんにーねーよー、タク取やーにうりんかいむつ  
ちやからちやぐとう、パーみかち逃ぎやーに、うりか  
ら連いが来んたんりぬ話やん。

注 キジムナー 木の精、古木に宿るといわれ、人間と友達になつて魚取りを手伝つてあげる。タコや屁が嫌いだとされる。

採集S 63・12・15 読谷ゆうがおの会へ村山友江

## 19 キジムナー

話者 照屋 牛五郎(明治三十一年十二月四日生)

翻字 村山友江

うれーはつきりえー何から出じーんりちえー分から  
んしが。キジムナー火りしえー、現在私達見ちんちゃ  
ん。何がり言ねーウーシなかい、キジムナー火、「あれー  
キジムナー火やさ」りち、長ゆるむんよ。はいまーか  
らまーからりち、じゅんに道ぬあたんどー。

楚辺やれー、くまなかいから見しえー、だいたい私達あ

コがいたそうだ。そのときにタコを取つて、キジムナー  
に、くつつけたので、びっくりして逃げて、それから  
は連れにこなかつたという話である。

それはもう、どういふことなのかはつきりは分から  
ないが。キジムナー火というのは、私達も見たことが  
あつた。製糖期になると、「あれはキジムナー火だよ」  
と、よく(キジムナー火)が尾を引いて現れた。それ  
はどこからどこまでというふうには、ちゃんとした道も  
あつたよ。

楚辺から見えるのは、だいたい楚辺のサーターヤー

サーターヤーから見ぢやしが、ウルワシから出じてい  
やいびんよー、ミートウジヌジに止てい、長なー止い  
たんどー。うりからまた大木ぬ上んじ止てい、まーん  
かいがはいらー、だーうんから見らんしえーや。

あれーじゆんにあたんどー、キジムナー火。なー全然  
ねーらん。よーい昔ん人ぬ話聞ちんでー、昔ぬマジム  
ンとうかヤナムンとうかりしえー、人ぬ少らさぬ勢力  
ぬ弱さぬ、うりなかいうさーとーてーるふーじやんでー。  
やしが人間ぬ多くなてい、人間ぬ勢力ぬ強くなやーに、  
うんな化物りしえーねーんなたんりぬ話。うれーな  
むつとうんやいはにり思とーん。昔え、死人とう生人  
とう相撲ん取いたんりぬ話んあん。

キジムナーりしえーまた、いえーりん何がらぬ精や  
てーんや。精ぬあてい勢力ぬあてーるばー。木ぬ精り  
ち昔えあしえーや、キジムナーとう人とう友達なやー  
に、毎日なー海かい、起くしんがち連らつてい行くてー  
がふーじ。

あんしスビガニクうてい、なー死人ぬじこー相撲取い  
たんり。あんさぐとううぬ生人のー分からん、うぬ人  
ん相撲あ好ちがやたらー、相撲取いんりちしちやぐとう、

辺りから見ることができたが、ウルワシから出てミ  
トウジヌジに止まり、そこでは長いこと止まっていた  
よ。そこからは、もうどこにいったかは知らないがね。

あれは本当にあつたよ。キジムナー火というのは、  
今はないがね。昔の人の話によれば、当時は人間が少  
なくて勢力が弱かったので、昔のマジムンとかヤナム  
ンに押されていたということである。しかし、その後  
人間の勢力が強くなって、そういうふうな化物もいな  
くなったという話。それはもう最もだと思ふよ。また  
昔は、死人と生きている人と相撲を取ったという話も  
あつたよ。

キジムナーというのはまた、何かの精でもあつたら  
しい。精があつて勢力もあり、そのキジムナーと友達  
になると、毎日のように夜起こしに来て、海に連れて  
行つたそうだ。

そしてある日、スビガニクで死人と生きている人が、  
盛んに相撲を取っていたそうだ。もう生きている人が  
は、相手が死人とは知らず、その人は相撲が好きだつ

海から帰りやてーんて。あんさぐとうキジムナーぬ、  
「いやーやくれー實際ぬ生人おあらんしが、死人るや  
しが。そーそー家かい行き」りち、キジムナーかい連  
らつてい、助きらつたんりぬ話。

タクお恐るむんやたんりがらー、キジムナーぬ。魚お  
毎日なーキジムナーぬ取つていとうらち一緒。目玉あ  
なーむるねーんたんり。キジムナーとう一緒行きーねー、  
魚ぬ目や抜じ喰ていねーんたんり。

なーじこー毎夜来ぐとう、なーにりていうぬ人ん、  
後おタクお恐るむんやぐとうりち、タク飾たんりがらー  
や、門ぬんかい。うんから来んたんり。タクお恐るむ  
んやたんり。「タクぬ手むつちやからー」りしえー、う  
ぬ例から出じたんり。キジムナー返しえー、「タクぬ手  
むつちやからー」り。また童やいねー、あたんよー私達あ  
話ぬ。キジムナー返しえー、「タクぬ手むつちやからー」  
り言ねー、逃んぎーんりぬ話いぬあたん。

たのか、漁からの帰りに相撲を取っていた。そしてキ  
ジムナーが、「おまえは、この人は生きている人間では  
ないが、（おまえと相撲を取っているのは）死人だよ。  
早く家に帰りなさい」と連れ帰り、キジムナーに助け  
られたという話を聞いた。

（キジムナー）は、大変タクを怖がっていた。毎日  
のように海に行き、魚はたくさん取ってあげていたそ  
うだ。しかし、その魚の目玉は全部なかつたとのこと。  
キジムナーと一緒にいくと、魚の目玉は全部くり抜い  
て食べて、魚には目がなかつたそうだよ。

もう、毎夜のように来たので、その人は後は飽きて  
しまった。そしてキジムナーはタクを怖がると聞いて  
いたので、タクを門に飾ったらそれ以来来なくなつた  
そうだ。「タクぬ手むつちやからー」というのは、その  
例えから出たそうだ。キジムナー返しだつたつて。ま  
た実際にあつたよ、私達が子どもの頃に。キジムナー  
返し、「タクぬ手むつちやからー」と言うと、逃げて行つ  
たという話があつたよ。

翻字 村山友江

楚辺ぬ旧部落ぬクラガーぬ洞窟ぬ前んかい、クラガーぬ西側んかい私達家やあたしが。うまから渡具知ぬずつと向こうぬ屋取ウルワシりちあしが、ウルワシからうまんかい来るばーてー。

あんし、「アカンチャメーメーグワークエーヨーカマーグワー」りねー、いそーささーに來んよーうまんかい、集まてい來さ。あんし來ぐとう、今度おありが恐るむのー、タクぬ手。タコと、また熱カマンタ、すぐたくわーしーねー、うぬ二ち恐るむん。「熱カマンタかんしだー」りち。とーありとう友達しーねーよ、魚おちゆはーら食むんりぬ話。いつペー魚取い上手やたんり。

あんしなー風んぶーない、台風ぬぐとうるあさ。私達見ちよーぐとう。すぐ私達家ぬ前までい、「アカンチャメーメー」し、だいたい男も女も十歳以下の子供がうんぐとうーしーねー、うにーねーブーブーぐわーし來

楚辺部落のクラガーの西側に、私達の家はあつたんだがね。そこからずつと渡具知付近に、ウルワシという屋取部落があり、(キジムナーは)そこから光を放ちながらやって來た。私達も實際に見たよ。

そして、「アカンチャメーメーグワークエーヨーカマーグワー」りねー、喜んでそこに集まって來た。しかしキジムナーは、タコの手と熱いカマンタが大嫌いだった。「熱カマンタうちかんしだー」と言うと、もう大変怖がつていた。またキジムナーと友達になると、魚がたくさん食べられるという、話だったよ。魚を取るのが大変上手だったそうだよ。

また、キジムナーが來ると、台風のように風が吹いた。もう十歳以下の子供達男女が揃つて、「アカンチャメーメーグワー」と歌い出すと、風もブーブー吹きながらやって來たものだった。そして、キジムナーが集

やーにかいよ。あんし「キジムナーが来んどー」しよ、あんしうまんかい来ねーまたしぐ、「タクぬ手むっちゃからー」しーねー、しぐぶーない逃んぎーんよ。あまんかい。また「熱カマンタうしかんしだー」りねー、なーうり聞かーに逃んぎーんどー。あんしまた、「アカンチャマーメーグワークエーヨーカマーグワー」りねー、寄てい来ん。カマーぐわーりねー、いつペー嬉さんばー。

うれー木ぬ精りしんうい、木ぬ精りねーうり聞かやーりち。迷信的な本当的な珍しいことさーね。また今になつて、今んうみりねー、見ちえーんらん。戦後、私達や海かい行ぢ、夜ぬ釣かい、楚辺ぬずつと向こうんかい越てい、船ぐわーから。あんしくりかーんかい、浜ぬ側、ういはに思いしが、なんじゆ見ちえーんらんたん光ぐわーや。戦前は多かつた。なーキジムナーやうぬふーじやたしが。

またありがーいつペー好きな物のーよ、目玉、魚の目玉びかーん喰いんり。目玉だけ抜じ喰てい、身体おむる残すぬばーてー。うりとう友達しーねーよ、呼びがる来んり、寝とーしが。呼びがる来んりぐとう、またなーうんにーねーうふあすんりよ。なーうふあさつ

まつて来ると、今度は「タクぬ手むっちゃからー」と言うと、すぐさま逃げて行つたそうだよ。また「熱カマンタうしかんしだー」と言つた時も、すぐさま逃げて行つたつて、「アカンチャマーメーグワークエーヨーカマーグワー」と言うと、喜んで寄つて来るんだけどね。カマーぐわーと呼ばれると、大変喜んだそうだよ。

キジムナーは木の精だという人もいるんだがね。迷信なのか本当のことなのか、大変珍しいことさあね。また今でもいるかというと、最近では見たことがない。私達は戦後は、船から夜釣りに出かけた。そして沖まで出ると、こちら辺に（キジムナーは）いるのかなと思つたんだが、見ることは出来なかつた。そのようにして戦前はキジムナーは多かつたよ。

またキジムナーの大好きな魚の目で、それだけを食べていたそうだよ。魚の目だけを食べて、身体は残してあつた。キジムナーと友達になると、寝ている時に呼びに来て、おんぶして海まで連れて行つた。そうしてキジムナーにおんぶされている時に、屁でもこいた

てい連らてい行くるばーてー。あんしありがうふあそー  
なかい、屁んでーひーねーようぬままり、すぐちゃん  
なぎー。私ねーうふあやさつてーんらんしが、起くしー  
が来んどー。「はい、はい」しよ。名前言うらしいよ。  
くれーなー聞ちゃん。私達さつてーんらん、私達や呼  
でいるんちやる。「アカンチャメーメーグワーカマーグワー」  
し、子どもの時分、六歳か七歳ね。

21 キジムナー

海人人やしがや、夜ぬ潮かい行ぢやーなかいや、し  
ぐ、なー舟ぐわーよ、かんし、ゆつたいくわつたいし、  
うりなかいわちやくさつていよ。「あはー、とーくれー  
また来さやー」りやーい、またくりんかい、「とーひやー  
くれーいやーたましやさ」りやーい、なーきうーねー  
舟ぐわーや うりさんよーい。

ら、すぐそのまま放り出してしまうんだつてよ。私は  
おんぶされたことはないんだが、起こしには来ていた  
よ。「はい、はい」と、名前を呼ぶらしいよ。私達はそ  
ういうふうに、(おんぶされたことは)ないが、呼んで  
はみた。「アカンチャメーメーグワーカマーグワー」と、  
子供の頃にね、確か六歳か七歳の時。

採集S 63・12・20 読谷村ゆうがおの会へ知花春美

話者 比嘉次郎 (明治三十七年十一月二十八日生)

翻字 知花春美

漁師だけど、夜釣りに行って、舟を揺さぶされたり  
して、(キジムナーに)いたずらされてね。「あつ、こ  
れはまた来ているな」と、またこれに、「さあ、これは  
おまえの分だ」と、あげると舟をいたずらするのをや  
めた。

あねーさんあいねーよー、すぐ舟ぐわーゆつたいくわつ  
たいしよ、わちやくすたんり。あんさーい」とーくれー  
いやーたましやさ」りちやーいよ、「かんし魚ぐわー取  
てーるむん、くれーいやーたましどー」りち。

そうしないと、舟を揺さぶりたいはずらしたそうだと。  
そして、「はいこれはおまえの分だ」と、「こんなに魚  
を取ったのでこれはお前の分だ」とね。

採集S52・2・20 読谷村民話調査団第十二班へ山入端孝子

## 22 キジムナー

話者 長 嶺 ウ シ (明治三十六年九月二十三日生)

翻字 村 山 友 江

キジムナーや、本当ぬキジムナーりしえー、見ちえー  
んらんしえーやー。ガジマルよ、ガジマル。ガジマル  
し造いる家や必じうぬキジムナー来んり。

キジムナーというのは、実際は誰も見たことがない  
んだよね。ガジマルで造った家には、そのキジムナー  
が必ず来るそうだよ。

女やれー男ぬ押すいんりばーてー。ウーウーウーし  
押すらつとーるばーてー、うんなばーや、ホロホロホ  
ローし、かんし蚊帳ぐわーんあきーぎーるばーてー、  
なーきーさ押すらつていいるうさい。私ねー押すらりやー  
やたんよー。女おすく男ぐわーぬ来んりよ。すぐ腰ぐわー  
チックイ、チックイし、あんしうひぐわーあんよ、タ

女だと男(キジムナー)が来るそうだよ。ホロホロ  
ホローと蚊帳を開けたかと思つたら、すでにウーウー  
ウーとうめき声をあげて押さえられてしまっている。  
私はよく押さえられたよ。女の所には男の(キジムナー)  
が、腰も動かしながらやつて来るんだが、性器も小さ  
い。

二ぐわーん。

キジムナーりしえーうらのーあらん。うれーなー自然に押すいが来んよ、ウーウーウーし。なー来しえー分かいんどー、ホロホロホローし。なー蚊帳ぐわーかんねーしーねー、きーさ押すらつていいるうる。必しうぬガジマル造くとーるとうくまんかいやうさ。

昔え、サーターヤーぬハーガラーぐわーがあしえー、あんしうぬハーガラーモーぐわーぬ側んかい、キジムナーぬ糞までーんりち、糞おあるばー。糞おうまんかい、赤まつかーらぐわーしコージふちあんよ。ハーガラーぐわーぬみーんかい。やつぱりキジムナーりしえーういるすさやー。誰ん見らんしえーやーうんなむのー。

23 猫化けの話

何年がないらー分からん猫がうたなり。うりが年ぬ

キジムナーというのはいないんではなくて、それはもう自然に押えに来るんだよ。もう来るのは分かるんだが、ホロホロホローと蚊帳を開けたかと思つたら、もうすでに押さえられてしまつていいる。ガジマルで造られた家には必ずいいるよ。

昔はサーターヤーにはハーガラーがあつたので、その側にはキジムナーが糞をしてあつた。ハーガラーの中にはカビのはえた真つ赤な糞があつたよ。だからやつぱりキジムナーというのはいるんだね。(しかし)そんな物は誰も見たことがないからね。

採集 S 63・12・13 読谷ゆうがおの会 へ村山友江

話者 比嘉清次郎 (明治四十三年三月二十日生)

翻字 知花春美

何年になるか分からない猫がいたそうだ。年がいき

は入りてい猫でいしえー化きーたんりや。

他ぬ人の一分からん。化きているうぐとう。外から来る十二時後よー、二時まんぐら来る人ぬ見ちえーるふーじやんや。寝んていいるうがやーりち、戸お閉みてい寝んじゆたんり。節穴みーよー、うりから、うぬ人ぬ見ちやぐとうよ。猫が化きとーたんりや。あんさぐとう、家ぬ内んかいうる人の見らん。節穴みーから見ちよーる人ぬ見ちえーるふーじや。あんしまた家んかいうる人の、猫が地炉ぐわーぬ前んかい座ちよーたんり。

うぬ子どもがね、赤子が鼻ひちよ、ぼこぼこぼこ鼻ひちえーんてー。抱ちよーる祖父母てーちがーるちがーるしだつこしよ、あんさぐとう、鼻ひーるか、

「クスケークスケー」し。

うりんかい指ささつていいるうんりち「クスケークスケー」りち、言葉ん出じーしが。いんねーすんねー、うまんかい座ちよーていひちやぐとう、なーくれー、化け物の美ら女ぬ座ちよーぐとうやー。うぬ人ぬ見ち「はい」りち開きやーない。戸お開きーにーぶく美ら女おうらなてい帰ていまた猫が座ちよーたんりや。

あんし、猫が座ちよーるとうくるんかい美ら女ぬ、

すぎると猫は化けたそうだ。

化けているといのは他の人には分からない。十二時あと、(午前)二時頃、外から入ってきた人が見たよ。うだ。寝ているのかたと、戸は閉めて寝るので、節穴から、その人がのぞいてみると猫が化けていたそうだ。家の中にいる人には見えなかった。節穴からのぞいている人が見た。家にいる人には地炉のそばに猫が座っているとしたか思わなかった。

その子ども、赤ちゃんがね、ぼこぼこくしゃみをしたようだ。祖父母が抱つこしてて替わるがわる抱つこして、クシャミをするたびに「クスケー、クスケー」と言っていた。

その子は、指さされているといつて、「クスケー、クスケー」と言った。そんなこんなで、化け物の美しい女が座っていた。その人が見て、「はい」と戸を開けたと同時に、女は帰って行き、猫が座っていた。

それは、猫が座っていたところに、美しい女が目を

またかんしみーはてい うたんりよ。女おんながね。あんし、皆みなうくさーなかい「とーとー私わんねー、なー今いまうまんか  
い来ちつし、皆みな寝なんでいるうがやーりち、目めぐわーぬし  
きたぐとうや、うまんかい女いなかぬ座いちよーしがやー。私わ  
が戸はしあきてい見んちやぐとう 女いなかおあらん猫まやしがよ、  
くれー何ながらあらんがやーりち、話はなしいさぐとう。

皆みな、感かんじとうやーに くれーんちや、かーま先まから  
猫ねが長ながからいしーねー、化ばきーぬ話はなしやぐとう、くれー  
まーがらんかい出いしていきよ。あんさーにからなー、  
三さんグワン、三さん銭せんてー、三さん銭せんのー銭じんぐわーはきやーにか  
いよ、三みつつを首くびにぶら下さげてね、そして外そとに行いつたら  
しい。

猫まん何なん年ねんたつちーねー、猫まや化ばきーぐとう猫まりしえー  
長ながかれーさんぐとうに、いかなかわいぐわーやたんでー  
まん 三さん銭せん、三さんグワンぬ銭じんはきていやらしーねー、ま  
た元もとぬ家やねー帰けてー来くん。

み開あいて座ざつていた。皆みなを起おこして、「私わたしは今いまここへ来  
たが、皆みな寝なているのかなあと、のぞいてみるとそこに  
女おんなが座ざつているがね。私わたしが戸かどを開あけると、女おんなではなく  
猫ねだった。これは何かあるかもしれない」と話はなしをした。

皆みな、感かんじとつて、これは、猫ねを長ながらく飼かうと化ばける  
話はなしなのでどこかへ出いて行きなさい。そして三さんグワン、  
三さん銭せんね、三さん銭せんのお金かねを首くびにつけて、外そとに出いしたらしい。

猫ねは何か年も飼かうと、化ばけるので、長ながくは飼かわな  
い、どんなにかわいくても、三さん銭せん、三さんグワンのお金かねを  
(首くびに) つけて出いしなさい。そうすると、元もとの家うちには  
帰かえってこない。

## 山羊マジムン

話者 上地 カマド (大正二年三月二十五日生)

翻字 村山友江

徳松ぬ東ぬあまんかいよ、山羊ぬ、ちやつペーぬ山羊ぬ降りてい歩ち行かぎたぐとう、男ぬアヒぐわー達が、「おい、うつペーる山羊が歩かぎる、うれーまーぬむんがやら分からんむんな。まーぬむんがやら分からんむん、うまんかいなーくんち置ちよーかな。明日あ、なーめーめー主え取んが来さに」りやーなかい、くんち。綱搜めーてい来やーにくんち。うぬ木んかいうちえーたぐとう。

「あぬ山羊まーぬむんやたがやー」んち、くんちみーちきてーしが、うまんかい来ぐとう。翌日あ、山羊やくんだつてーうらん、しゃもじよ。ご飯入りーぬしゃもじ、ありがくんらつとーたんり。イービラぬ、ちやつペーぬイービラぬくんらつとーたんり。あんし山羊マジムンの、イービラるやるばー。山羊マジムンりちんうんなーり言ち、話いや聞ちやんどー。

徳松の東の方から、大きな山羊が降りて歩いて行くので、男の青年達が「おい、どでかい山羊が歩いているぞ。どこのものか分からないから、ここにつないで置いておこう。明日になれば、主が取りに来るだろう」ということで、つないで置いた。綱を搜して来て、その木につないで置いた。

翌日になって、「あの山羊はどこのものだったんだらう」と、見つけてつないでいった者が、そこに行つてみた。しかし行つてみると山羊はつながれてなく、しゃもじね、ご飯を入れるしゃもじがつながれていたんだつて。イービラが、とつても大きなイービラがつながれていたんだつて。だから山羊マジムンといつてもいるか、という話を聞いたよ。

## 古ミシゲーと山羊マジムン

話者 比嘉 カマド (明治四十五年七月二十日生)

翻字 村山友江

うれーよー、まーぬまーんかいミシゲーや、古ミシゲーやてーるふーじてー。かんしおつゆ入りーしえー、木やたんよ、木ぐわーやたぐとう。「ミシゲーあまんかいあぐとう取ていくーわ」りち言ちやぐとう、親ぬ言しえー昔聞かんとーならんしえー。

取んが行ぢやぐとう、うぬサラゲー、ミシゲーや古サラゲーぬ木ぐわーぬ下んかい捨ていらつとーしるやんりー。女ぬ親のーあらん、昔ぬ人ぬ木ぬ根元んかい捨ていてーたんり。捨ていたぐとう、まーぬまーんかい取んが行きりち、取んがやらちえーんてー。やらちやぐとう、うぬサラゲーやよ、首ぐわーくんじやーによ、木ぐわーくんじやーによ、木ぐわんかいひつちやかてい「ベエー」りち鳴ちやぎーたんり。ヒージャーぐわーなとーたんり。

あんさーに古サラゲーや、うれー悪物ぬうちるやんりどーやー。悪風るやんどーやーり言たん。悪物なてい、

それはおつゆを入れるのに使う、木で作った古いミシゲーであった。親が「あそこにミシゲーがあるから取つて来なさい」と言いつけたようだね。もう昔は、親の言うことは聞かないといけなからね。

取りに行つたら、その古ミシゲーは、木の下に捨てられていた。母親が捨てたんではなくて、他の人が木の根元に捨ててあった。(それでその母親は)どこそこに捨てられているから、取つて来なさいと行かせたようだね。行つてみるとそのサラゲーは、首をくびられて木によりかかり、「ベエー」と鳴いたそうだ。つまり山羊になつていたということである。

ということだ。古サラゲーは、悪物ということだよ。悪物だと言われていた。古サラゲーや古ナビゲーは悪

26 山羊マジムン

古サラゲー、古ナビゲーや昔え焼ち焼しるする、別ん  
かいや捨ていらんたんり。自分ぬ畑んじよ、むる持ち  
行ぢやーに焼きめーすたんり。かきりわからー、うれー  
悪物りち、自分ぬ畑んじよ草しーじやー焼くたん。

ナビゲーや、古ナビゲーないねー、たっち割やーに  
薪しー。あれーまたよ、ありんかい化きーたんり。ヒー  
ジャーマジムンよ、山羊。

サラゲーぬ首ぐわーくんじやーによー、木ぬ下ぐわー  
んかいでー捨ていーさやー、うまとーてい化きやーに、  
山羊ぐわーぬくんだつとーてい、うまとーていベーべー  
すんりぬ話聞ちゃん。ナビゲーてー、ヤナムンなやー  
に、あんすぐとう、古ナビゲーや、古サラゲー、たっ

物になるということで、それらは昔は焼くんであつて、  
別の場所に捨てたりはしなかった。自分の畑などに持つ  
て行って、焼いたそうだよ。古くなって欠けたりした  
ら、悪物になるということで畑で草といっしよに焼い  
た。

採集H1・5・24 読谷ゆうがおの会へ村山友江

話者 比嘉 カマド (明治四十五年七月二十日生)

翻字 島袋 フジエ

杓子、杓子が古くなると、たたき割って、薪にしな  
さいと。あれは、山羊マジムンに化けたそうだよ。

杓子の首をくびつてね、木の下にでも捨てると、そ  
こで化けて、くびられた山羊がベーベーと鳴くという  
話を聞いた。杓子ね、悪者になるので、古い杓子やしや  
もじはたたき割って燃やしたそうである。

ち割やーに燃しるすたしが。

採集 S 63・12・15 読谷ゆうがおの会 村山友江

27 美女に化けた豚

話者 伊波カマ (明治二十六年六月十五日生)

翻字 村山友江

昔、昔、あぬだー豚ぬサングワナーひち、美女んか  
い化きてい、あぬ男騙ちよ、豚ぬ。あんしなー男達  
が多く揃とーる、青年達が揃とーる前からなーぬしか  
やーに、しら笑ぐわーし通いんりやー。あんしーねー、  
なー男あ追いしえーや、容姿ん美らさい、匂いん香さ  
い。あぬ皮サバ履り、皮サバ履り、昔ぬなー皮サバリ  
ねー裕福ぬる履むる。皮サバ履り、匂いんなーすぐ容姿  
ん美さぬ。

あんさぐとうある男ぬ追てい行ぢ、なーうりとう寝  
んてーんてー。寝てい、なー起きていしちやぐとう、  
「三貫取らし」り言たんり、三貫。あんし三貫のー  
取らちやらちやんり。

昔、昔、豚が美女に化けて男を騙していた。(美女に  
化けた豚は)、青年達が大勢揃っている前から、顔を出  
してうす笑いをうかべながら通ったそうさ。すると  
う美人でもあるし、いい香りもするものだから、男達  
は追って行くでしょう。しかも皮の草履といえば、昔  
は裕福な人達しか履けなかった。

そうしてある男が追って行き、美女に化けた豚と寝  
たようだね。寝て起きたら、「三貫下さい」と言ったの  
で、三貫あげたそうさ。

あんさぐとう、なー毎日あんしするぐとーんやー。  
あんしなうぬ男あ、男ぬうりんかい惚りとーぐとう、  
容姿ん美さい、なー匂いん香さい、しぐ皮サバ履りし  
ちやぐとう、なーある時うりが置ちえーる皮サバよー、  
隠みていひちやぐとう。なうぬ豚や歩からん歩きー  
しち、なーいーいーかーかーし歩からん歩きーしち。  
チマグるやるぐとーんでうぬ皮サバあ、あんし行ち、  
あんしなうり追てい行ぢやぐとうよ、あぬフールん  
かい入たんりや。あんさぐとう、うりから評判いじや  
ちてー、ひちやぐとう。

なうぬ主達がよー、主えなうぬ豚や殺するくとう  
んかいなたんり。あんさぐとう、うつさぬ男騙ち、な  
儲きていいじ、三貫なー、三貫なー、なうまんかい  
だてーん金たみてーたんり。

うりからの女ぬ浅はしんかいや、あれーサングワナー、  
サングワナー女るやるり言しえーや、うりからり。三貫  
なー、いやーからん、いやーからん、男からむる三貫  
なー取てい、毎日、夜歩ちゆるばーてーなー、あんし  
豚ぬ化きてい。

もう毎日のように、そういうふうにしていた。その  
男性はこの豚に惚れてしまっていた。美人でもあるし、  
いい香りもするし、皮の草履もはいているんだからね。  
ある時、その豚が置いていった皮の草履を隠した。隠  
したら、もう豚はぎこちなく歩きにくそうにしていた。  
なんと（皮の草履だと思っていたのは）チマグであつ  
た。そして男性が追って行くと、豚小屋に入っていっ  
た。その時から（豚が美女に化けていた）という  
噂が広まってしまった。

ということで豚の主は、その豚を殺すことになった。  
今まで毎日のように男性を騙し、（今日も）三貫、（明  
日も）三貫というふうには、お金をたくさん貯めてあつ  
たそうだ。

そういうことから、女が軽いにはサングワナーと  
いうようになった。あなたからも三貫、あなたからも  
三貫というふうには、男性から三貫ずつ取って、毎夜の  
ごとく出歩いていたそうだ。

翻字 村 山 友 江

畑んじよ、何回、何回、一ヶ所んかい、な、今日  
 ん明日んな、三十日ん六十日ん、な、くま、い、  
 所ぐわ、やるむんり、しつこおまにかい、便所んか  
 いしつこおし、ね、よ。うりから、うまからい、えり  
 んハブんで、ぬはい、ね、美ら男なや、に迷たい、美  
 ら女なてい迷たい。牝ハブお男騙すんり。雄ハブお女  
 騙すんり。

あんさ、にうに、からアカマター、ぬ話や聞ちやしが、  
 な、アカマターんで、ぬ女騙さ、に、うりとうハブとう  
 ニングルなて、ぬふ、じ。そ、人なてい、み、て、ぬふ、  
 じ。

あんさ、にうに、月ぬないしんれ、腹かんししちや  
 ぐとう。親ぬ、うれ、な、夫りちんうらん、うりがニ  
 ングルりちんうらんしが、うれ、いひ、ひ、よう、な、むん、やし  
 が、「ちや、ね、が」りちやぐとう。「腹ぬ、うちうてい  
 クツ、チュイ、クツ、チュイ、さび、ん」り言たんり、うぬ、女

畑仕事をしている時に、そこに良い場所を見つけて、  
 もう今日も明日もと、(しまいには)三十日も六十日も、  
 同じ場所に用を足していた。(そうしているとしまいに  
 は)そこを通るハブは、美男子に化けたり、美女に化  
 けたりするそう。牝のハブは男を騙し、雄のハブは  
 女を騙すということだよ。

そういうことからアカマターの話聞いたんだがね。  
 もうアカマターが美男子に化けて、女を騙したんでしょ  
 うね。その女はアカマターが本当の人間にみえて、そ  
 のハブといい仲になったらしい。

そうしているうちに月日が経つにつれて、しだいに  
 腹が大きくなった。親はもう、この子は夫もいなし恋  
 人というのもないが、これは不思議なことだと思っ  
 て、「どんな具合ね」と聞いてみた。すると娘は、「腹  
 の中で何か動いていますよ」と答えた。「もうアカマ

ぬ、なーアカマターん子ぬむさげーてーんてー、「腹いっ  
ペークツチュイクツチュイしちなーむさげーとーん」  
り言ちやぐとう。とーくれー三月三日ぬ白砂くんぴら  
さんあれー大事りやーによ。浜んじ浜下りしみたぐとう  
よ、浜下りし上がていち何日りーねー、うぬ子あむる  
下るちえーたんり。あんさーに浜下りやしみりり言た  
んり、三月三日に白砂くんぴりり言たん。

浜ぬ砂あ白ぐわーやしえーや、白砂くんびていくー  
ひーりちやらちやぐとうよ。浜んかい下りやーに。な  
うまー潮ぬる干つちよーたらー、皆貝ぐわー取つてい  
上がてい。なーやがてい産しがたーるなとーてーさに。  
親や「ちやーねーが」りちやぐとう、「まーぬ子が」り  
ちやぐとう、まーぬ子りちん分からんるあさに。「ちや  
ねーが」りちやぐとう、「しぐ腹ぬうちうていクツチュ  
イクツチュイクツチュイむさぐていちゆーん」りち言  
ちえーんてー。あんさぐとう白砂くんぴらさんあれー、  
下るさんあれーくれー大事りやーによ。三月三日ぬ浜  
下りすしえーよー、三月三日や皆嘉例やんり。若さし  
がゆく嘉例やんり。

うちで、子供は生人だから、あまんかいクツチュイ、

ターの子が腹中で、もう動き回っていますよ」とね。  
これは大変な事だ、三月三日の白砂を踏まさないとい  
けないと、(母親は)考えた。そして浜に連れて行き浜  
下りをさせたら、その何日か後にはその子を全部下ろ  
してあつたそうだ。そのことから三月三日には浜下り  
をさせて、白砂を踏まさないということになったら  
しいよ。

浜に降りて白い砂を踏んでこようと行つたらね、そ  
こは潮が干いていたのか、皆貝を採つて上がつて来た。  
やがて臨月になつていたのか、親が「どんな具合ね」  
とか、「誰の子ね」と聞いたんだが、誰の子ということ  
も分からなかつたんでしようね。「どんな具合ね」と聞  
いたら、「腹の中であばれまわっているんですよ」と言っ  
たらしいんだがね。だから白砂を踏ませて、下ろさな  
いと大変なことだと思つて、三月三日に浜下りをさせ  
た。ということから三月三日は嘉例で、特に若い人に  
は嘉例ということだよ。

腹の中にアカマターは、たくさん入っていたんでしょ

うぬアカマターりしえー多く入<sup>うほ</sup>つちよーてーんでー、  
だてーん。あんされーすぐクツチユイクツチユイしちや  
ぐとう、あんさーに浜<sup>は</sup>ぬ白砂<sup>しろしな</sup>くんぴらちちゃん。くれー  
いひよなむんりやーにしちやぐとう、すぐアカマター  
ぬ小<sup>く</sup>てーぐわー、バケツぬくりかーびかーん下<sup>う</sup>りとー  
たなりぬ話<sup>はなし</sup>やさ。あんさーに三月三日え若女<sup>わかいなな</sup>お、浜<sup>は</sup>ん  
じ貝<sup>かい</sup>ぐわー取<sup>と</sup>ていくーりち、侍<sup>さむれ</sup>ややらすたんり。侍<sup>さむれ</sup>ぬ  
話<sup>はなし</sup>るやんどー。あぎた百姓<sup>ひやくしやう</sup>のー分<sup>わ</sup>からん。侍<sup>さむれ</sup>やうんぐ  
とうし、白砂<sup>しろしな</sup>くんぴらち下<sup>う</sup>るちやんり。

うぬ。子供は生きているんだから、あちこちに動きま  
わっていた。そういうふうに動きまわったから、これ  
は不思議なことだと思つて浜下りをさせて白砂を踏ま  
せた。するとアカマターの小さいのが、バケツのいつ  
ぱい下りてきたという話だよ。それで侍は、三月三日  
には若い女は浜に下りて、貝を拾つて来なさいと行か  
せたそうだ。その話は、侍の話であつて、私達百姓に  
は分らないことだよ。侍はそういうふうにして白砂  
を踏ませて下ろしたそうだ。

採集H1・5・24 読谷ゆうがおの会へ村山友江

注① アカマター 琉球列島中央部の固有種で奄美大島、加計呂麻島、喜界島、徳之島、沖永良部島、与論島、久米島、渡名喜島、沖縄島、本島、その属島(浜比嘉島、伊計島、宮城島)に広く分布している無毒蛇で体長一三〇cm内外である。人家周辺から耕作地及び山地にかけて、広い範囲に生息している普通種で、主として夜間活動する。

注② 三月三日 旧暦三月三日はサングワチャー(三月祭)と称しめ、女兒のためにウジュー(お重)を作つて遊ぶ風習があつた。

アカマターぬ美ら男なとーるばーてー。うまー親子  
うたなり。うぬ家庭や、あんさーにうまー、美ら女ぬ  
うてーるばーてー。あんし、うぬアカマカーや美ら男  
なやーに、毎晩来たんりや。うぬ女しぬんびーが、あ  
んし寝んとーるばーてー。

あんし寝んたぐとう、うぬ女ぬ親ぬ「不思議なむん  
やつさー。私たーんかい毎晩あんし美ら男ぬ来るむん  
何がやー」りち、うぬ女ぬ親ぬ勘しとうつてーるばー  
てー。あんし、勘しとうつたぐとう、今度お芭蕉うむ  
しえーやー。バサーうむるうりがあしえー。うり針ぬ  
耳んかい抜かーに、頭んかいたていたんりがらーやー。  
たていたぐとう、うりすんち行いしえーやー。

あんし、すんち行ちやぐとう 洞窟んかい行ちやん  
り。洞窟んかい行ちやぐとう、うぬアンマーん追てい  
行ちやーに、洞窟んかい行ちえーんてー。「私ねーや、  
美ら女んかいやかさぎらちえーんどー」りち、洞窟とー

アカマターが美男子に化けたようだ。その家庭に  
は親子がいて、美しい女がいたそうだ。そして、その  
アカマターは美男子に化けて、女をしのんで毎晩来て  
寝ていたそうだ。

寝ていたので、女の親は「不思議なことだ。私の家  
に毎晩そのように美男子が来るが何だろう」と、女の  
親は感じたようだ。そこで、芭蕉を續むでしよう。そ  
の芭蕉を針の耳に抜いて、頭に刺したようだ。刺すと  
それをひっぱって行ったそうだ。

そして、(芭蕉)をつけたまま、洞窟へ行った。洞窟  
へ行ったので、そのお母さんは追って行ったようだ。

「私はね、美女に妊娠させてしまったよ」と、洞窟の  
中で話をしていた。そして、「でも、三月三日に、浜の

ていぬ話<sup>はなし</sup>てー。あんしひちやぐとう、「とーあんしえーよ、三月<sup>さんぐわち</sup>ぬ三日<sup>さんじち</sup>にや、浜<sup>はま</sup>ぬ砂<sup>すな</sup>んでー踏<sup>く</sup>らみらしーねーや、うぬ子<sup>くわ</sup>あむる下<sup>う</sup>りーるむん。あんしえーちやーすが」り言<sup>い</sup>ちやんり。

「とーひやー私<sup>わん</sup>ねーいーばーうり聞<sup>き</sup>ちえーき」りやーに、親<sup>うやくわ</sup>子<sup>さんぐわち</sup>三月三日<sup>さんじち</sup>に浜<sup>はま</sup>んかい行<sup>い</sup>ぢやぐとうよ、むつとう子<sup>くわ</sup>あ<sup>う</sup>下<sup>う</sup>るちやんり。アカマカー。

30 アカマタ 聳<sup>むど</sup>入<sup>いり</sup>

ハブぬ美<sup>ちゆらいまが</sup>男<sup>おとこ</sup>んかい化<sup>ば</sup>きやーによ、女<sup>いなかだま</sup>騙<sup>だま</sup>ち、妊<sup>かまぎ</sup>娠<sup>ぎ</sup>らちえーるばーて。女<sup>いなか</sup>のーうれー分<sup>わ</sup>からんしが、浜<sup>はま</sup>んかい遊<sup>あし</sup>びーが行<sup>い</sup>ぢえーるばーてー。あんさぐとう、うぬ妊<sup>かまぎ</sup>娠<sup>ぎ</sup>とーるむん下<sup>う</sup>ちえーるばーてー。下<sup>う</sup>ちやぐとう、アカマターりたがやー、ハブリたがやー、うりびかーん下<sup>う</sup>りてい  
ちやーによ。

砂でも踏むと、その子はみんな下りるよ。どうするか」と言つたようだ。

(女の親は)「私はいいことを聞いた」と、親子で三月三日に浜へ行くと、子どもはぜんぶ下りたようだアカマターがね。

採集S 52・2・20 読谷村民話調査団第三班(阿波根初美)

話者 比嘉次郎(明治四十四年十二月二十五日生)

翻字 村山友江

ハブが美男子に化けて、女を騙し、妊娠させたそう  
だ。女がはそうとは知らずに、浜に遊びに行つたら、  
妊娠していたのが下りてしまった。下りたらアカマター  
だったのか、ハブだったのか、それだけが下りてきた。

さぐとううにから、女おうぬ日なかに浜んかい下り  
てい砂踏みーねー、騙さらん、男んかい騙さらんてい  
んしむんりち。男んかい騙さらんたみなない、浜下り、  
うぬ日なかい浜下りすたんりぬ話、聞ちやるばーてー、  
うつぴやさ。

採集S 52・2・20 読谷村民話調査団第十五班へ知花利江子・新垣修子・神谷初子へ

そのことから、女はその日に浜に下りて砂を踏むと、  
男に騙されずにすむということだよ。男に騙されない  
ようにするために、その日で浜下りはするといふ話を  
聞いたさ、それだけだよ。

31 鍋蓋アカマタ

話者 比嘉 カマド (明治四十五年七月二十日生)

翻字 国吉トミ

カマンタ、あんしうすばちよーちーねー、うりがる  
化きーんでいんでー。古カマンタぬ下とーていしりー  
るアカマターぬる、人ぬ物ぬシー、芋煮やーに、あぬ  
物ぬシー 吸うとーるカマンタなやーに。古カマンタあ  
捨ていやーに 捨ていうさんしえー、うすばすしえー  
すな、反対んかい置ちよーきり。うりが下とーていし  
りーるアカマターぬどう人んかい化きーたんり。

カマンタを、古いカマンタをそのまま置いておくと、  
その中で孵化したマカマターは、人に化けるようだ。  
人の食物の精、芋を炊いて、その芋の精を吸うたカマ  
ンタだからね。古いカマンタは捨てて、捨てきれない  
人は、そのままはおかず逆にしておきなさいというこ  
とである。カマンタの中で孵化するアカマターは人に  
化けたそうだよ。

採集S 63・12・15 読谷ゆうがおの会へ村山友江へ

猫とう人とうぐーなてい、あんしなー子んでいきたりんりや。子二人でいきたくとう。うぬおじいさんのー海あつか、魚取やーやんしえーたりんり。魚とう猫とーぐーやしえー。

魚取やーやたくとう、ある日なうぬしーじやん子あ子しかすんり。あんしおじいさんが畑かいもーちよーなかい、猫や化きてい天井からあぬ鼠 取てい食てい、鼠 取てい食てい。またうぬ子供ぬ、男ぬ親んかい語とーんり。「私達お母や猫んかい化きてい、鼠、天井んかい登てい、鼠 取てい食いんどーや」り言ちやんり。あんさぐとう、なうぬおじいさんのー物のー試しんち、あぬだーあんしえーありしわるないんどーやーんち、様子見ちえーんてー。

あんしひちやぐとう、いえーりんまたうぬようなくとうぬあいるすてーはに。「いやーやなー、くりから帰てい行きよー」り言ち。言ちやぐとう、うぬ猫やいつ

猫と人間が一緒になつて、子供も二人できたらしい。そこのおじいさんは漁師であつた。猫は魚が(好きだからね)。

ある日、上の子は子守をしていた。おじいさんが畑仕事に出ている時に、猫は化けて天井で鼠を取つて食べていた。それで子供は親に「私達のお母さんは猫に化けて、天井に登つて鼠を取つて食べているよ」と言つた。そうしたらそのおじいさんは、物は試しとて、様子を見ることにしたらしい。

そういうふうにしたら、多分またも同じようなことがあつたんでしようね。「おまえは出て行きなさい」と言うと、猫は大変泣いたそうだ。だが、「どうしてもこ

ペー泣ちゆたんり。あんしやしかなー、「ちやーしんくまねー置かんぐとう、いやー帰てい」りち、魚とう芋とうあんし持つちやらち、包りやらちひちやぐとう。

風呂敷んかい魚とう芋とう持たちやらちやぐとう。

うり追てい後見し行ぢやぐとう、洞穴んかい入たんり。猫や洞穴んかい入たんり。あんしちやぐとう、あぬだー、よーいなー夜がなたらー、岩ぬ下やぐとう様子見ちえーんてー。うぬ男ぬ。あんさぐとう、「私ねーまーぬまーなかいや、今ぬえーが夫婦ひち、産しむんぬ子ん産ちえーしが、なー追ふあーていかんし出していちよーんどーや、いちかあぬ男ぬ命取りわるやる」り、入り話すたんり。ちようどう私達とー同むん、猫達が話り。「私がいつたーんかいあんいち間かちえーで、いやーがあぬ命取りんりいちやんてーま、あぬタンメーが南ぬ風ぬ吹きーねー北ぬ松んかいガツパラ、北ぬ風ぬ吹ちーねー南ぬ松んかいガツパラさりーんどーひやーり言ねー、いやーやあぬウスメー命え取いさんでー」り言ちやんり。

「あはーいい話聞ちやん」りち、なーうぬウスメーや。あんしなー今日ん、明日んかんし寝んとーでーん

こに置くことはできないから、おまえは出て行きなさい」と、風呂敷に魚と芋を持たせてあげた。

その猫の後について行くと、洞穴に入つていった。夜であつたかどうか分らないが、その男は洞穴の中の様子を見ていた。すると、「私は今まで、どこそこの誰と夫婦として生活し、子供もできたんだが、もうそこから追い出されてしまつて、このようにして出てきているんだよ。いつかはあの男の命を取らないといけない」と話していた。ちようど私達人間が話すように、その猫達が話をしていたらしい。「あなたがいくらあの男の命を取ろうと思つていても、あのウスメーが南風が吹けばガツパラ、北風が吹けば南の松にガツパラされると言つたら、あなたはウスメーの命を取ることばできないよ」と言つた。

「あー、これはいい話を聞いた」と、そのウスメーはね。そうして寝ていると、今日も明日もと、変な声

33 犬と女

ちや、いひよーな声しちちゅーんりーや、猫ぬ。やな泣きしちちゅーぬばーぬあしえー。あんさぐとう「くりやさやー」り言やーに、あんし本文読だぐとう、うぬ猫から聞ちよーるぐとう本文読だぐとうよ、うんからくーんたんり。命え取らりーるぐとーんどー。

昔よ、昔えなー、あぬだー人おなんじゆうらんしえーや。世間のーただうつびるやしえーや。

あんどやぐとう、犬とうあぬだー一緒なとーるお母さんがうたんりや。あんしちやぐとう、うれーなーいつペーいい人ぬ妻やんしえーたんり。なー上ぬ方ぬ妻やんしえーたんり。

くぬ島なかい、犬とうぐーなとーしがうんりぐとう、うりあぬだー搜めーいんりぬ事り言ち、吟味なてい。

を出しながら猫はやってきた。いやな泣き方をしてやってきたので、「これだな」と本文を読んだら、その時からこなくなった。(猫に)命を取られるとういこともあるつてよ。

採集S52・2・20 読谷村民話調査団第三班(阿波根初美)

話者 伊波カマ(明治二十六年六月十五日生)

翻字 上原ヨシ

昔よ、昔はもう人はあまり多くはいないさーね。世間はただこれだけの(小さい範囲)だからね。

それで犬と関係をもった人妻がいた。その女性は偉い人の奥さんだったそう。

この島に犬と関係を持っている人がいるということだから、その人を搜しなさいということ、吟味が行

あんしな―搜め―ていんな―、よ―いね―うらんしえ―  
や。

あんしちやぐとう、うぬ奥さんが言ぬよ、ちようどう  
真玉橋狂言と―同むん、〔犬とう一緒やしえ―、背中心  
かい爪跡ぬ入つちよ―び―さ〕り言たんり。あんしう  
ぬ奥さん調びたぐとう、背中心かい爪跡ぬあたんり。  
犬ぬ。あんしひや―かんし爪跡ぬあたんり。ちようどう  
真玉橋狂言て―、自分がる言ちよ―てい自分かいあ  
と―たんり。

34  
千 年 蛇

あれ―本当ぬ話や八重山と―ていぬできごとるやん  
り。アカマターぬ由来記りち、昔アシビすたんよ。う  
ぬアシビ見じゃ―にいへ―思いじゃ―すしが。あれ―  
八重山と―ていぬくとうるやたさ―、アカマターぬ由来記。

われた。しかし搜し出そうにも、容易には見つけるこ  
とができなかつた。

そしたらその奥さんが言うにはね、ちようどう真玉橋  
狂言と同じで、「犬と関係を持つている人は、背中に爪  
跡が入つていますよ」と言つた。そしてその奥さんを  
調べてみたら、背中に犬の爪跡があつたそうだ。ちよ  
うどう真玉橋狂言と同じだよ。爪跡があつたつてよ。自  
分から口に出して、（それが）自分のことだつたとい  
話だよ。

採集S 52・2・20 読谷村民話調査団第三班（阿波根初美）

話者 上 地 源 助（明治四十年一月三日生）

翻字 村 山 友 江

あの話は八重山での出来事だつたそうだよ。アカマ  
ターの由来記というのは、昔アシビで見たのを覚えて  
いるが、あれは八重山でのことだつたよ。

うぬマカマターりしんやつぱり、昔、しりーんりちあしえーや。ありが七回しりるえーまなかいや、人ぬ目なかい見らんむんやれー、うんぐとうし化きーんりぬ話やたしが。またハブぬごとけーうんぐとうしさんしえー。後お龍なてい天ぬんかい上いんりぬ話やるばーてー。アカマターやまたうんぐとうしるすしえー、化物なてい、人騙すんりぬ話やてーるばー。

35 天 人 女 房

天女りる言さに。うりが川うてい浴みーぎーし。女ん男ん浴みーねー、自分ぬ着物のはじている浴みーさいや。うぬはじていかきてーる、木ぬ枝んかいかきてーる着物、男ぬ見しやーに。どうく上等なやーに、今度お自分ぬ家んかいうぬ着物のー持ち行ぢやーに、隠みやーに。

昔は、アカマターは孵化するということがあつたでしよう。アカマターは七回孵化するまで、人に見られなければ、化けることができるという話だつた。またハブはそういうことはせずに、後は龍になつて天に上つていくんだがね。アカマターは化物になつて、人を騙すという話だよ。

採集 S 52・7・3 読谷村民話調査団第二班〈渡慶次典〉

話者 比嘉次郎（明治四十四年十二月二十五日生）

翻字 村山友江

天女だつたんでしよう。その天女が川で水浴びをしていたそうだ。女も男も水浴みをする時は、着物を脱いで浴みるでしよう。脱いだ着物を木の枝にかけておいたら、ある男に見つかつてしまった。それでその（天女の着物が）あまりにも上等だったので、男は自分の家に持ち帰り、その着物を隠してしまった。

今度お女ぬ浴みていから、自分ぬ着物搜めーたぐとう  
ねーんしえーや。ねーんしえー、裸なてーうららんしえー。  
あんすぐとう男ぬしかさーに、「りー、あんしえー私達  
んじ着物ぬん替やーに、うりしえーわ」りち、家かい  
連れていぢ。自分ぬ着物くしやーに、やたしが。

うれー天女るやぐとう、うまぬ人おあらんぐとう、  
自分ぬ家かい帰りわるやしがてー。うまんかい着物ぬ  
ねーらんねー、天ぬんかい上てーいからんばーてーやー。  
なー帰らんぐとう、仕方あならんぐとう、まじよー  
んちやーういしえーんばーてー。まじよーんちやーう  
いするえーだに、女とう男、若者ぬちやーるやぐとう。  
長うるえーだに、心がなしくなやーに、二人夫婦なやー  
に、子ぬちやーや産しひるぎしえーるばー。

あんさーに産しひるぎしえーるしーじやん子ぬ、自分  
ぬうつとう子守さがちー、うぬ着物のーまーぬまーん  
かいあんどーやー。うりいやーんかい、いーらさやー  
りちよーるふーじーぬ歌ぐわー。子守歌ぐわーさぎー  
し、女ぬ親あ聞ちやーに。

あんさーにうり搜めーいぢちやちやぐとう。なー自分  
やうまぬ人おあらんるあぐとう、帰りわるるりやー

すると、今度はその女が水浴みを終えた後に、自分  
の着物を搜したらないさーね。ないんだが、裸のまま  
というわけにもいかなない。だから男が、「じゃあ、私の  
家に行つて、着物もつけさせよう」と、すかせて連れ  
て行つた。そして自分の着物をつけさせた。

その女は天女であつて地上の人ではないから、自分  
の家に帰らなければいけない。しかし着物がな  
いことには、天に帰ることもできない。もう帰れないか  
ら、仕方なくそこで（その男と）一緒に暮らすことにな  
つた。一緒に暮らしているうちに、若い男女なので、  
お互いに恋しくなり夫婦となり、子供も産まれた。

ある日、上の子が下の子を子守りしながら、その着  
物はどこそこに隠してあるんだよ、それをあなたにあ  
げようねというふうな歌をうたっていた。そういうふ  
うに子守り歌をうたっているのを、母親は聞いてしまつ  
た。

そうして自分の着物を捜し出すことができた。もう  
自分は地上の人間ではないんだから、帰らないといけ

に。搜めーいいじやち、う天とーんかい上いんりぬ話  
んあしがてー。歌ぐわーんぬーんあしが忘とーん。うつ  
びる分かいる。

ないということになった。(自分の着物を)搜し出した  
からね。それから天に上ったという話もあるし、歌な  
どもあるんだが、忘れてしまつてこれだけしか分から  
ないよ。

採集S52・2・20

読谷村民話調査団第十五班(知花利江子・新垣修子・神谷初子)

36 子 育 て 幽 霊

話者 比 嘉 朝 明 (明治三十三年一月八日生)

翻字 知 花 春 美

御殿ぬ女ん子ぬ妊娠とーてい死じえーるふーじやん。  
死じやぐとう、うぬまま、まじうりしちやくとう、う  
墓んかい入つていさぐとう。う墓うてい生まりていよ。  
なー昔ぐとうるやぐとう、生まりてーんてー。

御殿の娘が妊娠して死んだようだ。死んだので、そ  
のままお墓に入れたようだ。すると、お墓の中で(子  
どもが)生まれてね。もう昔のことなので、生まれた  
ようだ。

あんさぐとう、なーうまんかい使とーる下男てー、  
下男ぬうぬお墓んかい行ぢえーういし、うまうていいつ  
ペー赤ん子ぬ泣かぎんりよ。泣ちやくとうな、自分  
の親方んかい、「いがたーう墓あ、女、子供が泣かぎー  
さー」「いえーひやー、私達あ墓んかい、うぬふーじー

もう、そこに使われている下男がね、下男がそのお  
墓に行き来しているうちに、赤ん坊の泣き声が聞こえ  
たようだ。泣いていたので、自分の親方に、「わたした  
ちのお墓で、子どもが泣いていますか」「なんといい  
とを、私達の墓にそんなことがあるか、バカ!そんな

があんりちあみひや、バカ！あんいちえーねーん」  
りちやぐとう、「あいびーんどーでーさい」あんしえー  
あいるんさー、ねーんあれーいやーちやーすが」「あー  
うりが本<sup>ふんとう</sup>当あらんむんやるさー私<sup>わん</sup>ねーなー生<sup>い</sup>ちちよー  
る間<sup>えま</sup>あ貴<sup>うじゆめ</sup>方なーんかい使<sup>ちか</sup>りーびん」りちやぐとう。「ま  
たあんしえーむしか、うりが本<sup>ふんとう</sup>当やいぬんさーやー、  
なー保<sup>ほじちう</sup>障やちやーしみしえーが、「まーぬ、私<sup>わつた</sup>達あう  
まぬ土<sup>じ</sup>地やじやつさじやつさあぐとう、うりいやーん  
かい、いーらすんどー」

あんさぐとう、うり「あんしえー確<sup>たじ</sup>かにあんやんりー  
るんしえー開<sup>あ</sup>きていんだやー」う墓<sup>はか</sup>開<sup>あ</sup>きてーるふーじ。  
開<sup>あ</sup>きたぐとう、はーな、赤<sup>あか</sup>ん子<sup>こ</sup>ぬほーやーほーやー  
すんり。「なーでーじやつさー」りち、あんやさやーり  
ち連<sup>そ</sup>ていちえーるふーじ。

あんさーにかい、うぬ前<sup>め</sup>やありやたん。うぬう墓<sup>はか</sup>開<sup>あ</sup>  
きらんまーどう、ちやー菓<sup>くわしや</sup>子<sup>こ</sup>店<sup>てん</sup>んかい、女<sup>いなが</sup>ぬ菓<sup>くわし</sup>子<sup>こ</sup>買<sup>い</sup>  
しがや、菓<sup>くわし</sup>子<sup>こ</sup>え入<sup>い</sup>りーねーあしが、金<sup>じん</sup>のー入<sup>い</sup>りーしが、  
入<sup>い</sup>りーんねーあしが、なーねーんたんりよ。開<sup>あ</sup>きてい  
金<sup>じん</sup>のーねーらん。

あんさーなかいうりやるふーじ。うりから調<sup>しら</sup>びらつ

ことはない」「ありますよ」「それではなかったらどう  
するか」「はあ、それが本<sup>ふんとう</sup>当ではなかったら、私はもう  
生<sup>い</sup>きている間は貴<sup>うじゆめ</sup>方<sup>かた</sup>たちに使<sup>ちか</sup>われます」と、親<sup>おや</sup>方と下  
男<sup>おとこ</sup>は話をした。「また、もし本<sup>ふんとう</sup>当ならば保<sup>ほじちう</sup>障はどうしま  
すか」「どこそこ<sup>ここ</sup>にわたしたちの土<sup>ち</sup>地<sup>ぢ</sup>がどれだけあるか  
ら、それをおまえにあげるよ」

そうして、「それでは確<sup>たじ</sup>かにそうであるならば開<sup>あ</sup>けて  
みようね」とお墓<sup>はか</sup>を開<sup>あ</sup>けたようだ。

開<sup>あ</sup>けてみると、もう赤<sup>あか</sup>ん坊<sup>ぼ</sup>がはいづりまわっていた  
ようだ。「もうたいへんだ」と、そうだったのかと、連<sup>つ</sup>  
れてきたようだ。

それから、その前はこうだった。その墓<sup>はか</sup>を開<sup>あ</sup>けない  
前に、いつも菓<sup>くわし</sup>子<sup>こ</sup>店<sup>てん</sup>に、女<sup>いなが</sup>の人がお菓<sup>くわし</sup>子<sup>こ</sup>を買<sup>い</sup>にきた。  
お菓<sup>くわし</sup>子<sup>こ</sup>を買<sup>い</sup>つてお金<sup>かね</sup>を入れるようだが、あとでなくなっ  
ていた。開<sup>あ</sup>けてみると、お金<sup>かね</sup>はなかった。

それで、これから調<sup>しら</sup>べて、「貴<sup>うじゆめ</sup>方<sup>かた</sup>の家に、お墓<sup>はか</sup>にその

てい、「貴方な一家んかいや、う墓んかい、うぬふーじーが、ひるまちよーぐとう、うりがいつたー墓んかい行いぎーんりぐとう、必じちがいむんやんどー」りち、あんさーに菓子え持つち行ぢ食まちえーういういしちやん、しーぬんしえーうぬ子供や生ちちよーてーるばーてー。

うぬ子あ連ていち育わーちやぐとう、一日、十五日えむるうらんないたんり。うまんかい行ぢえーういし、うぬ子あ。

あんさーにかい、うりから、うぬ人ぬ後おちやぬふーじがなたらー分かんしが。うぬウチカビりーしえー、うりから後生ぬ。ナンカとうか、う清明とうか、ウチカビしきーしえーや。供ぎるぐとうなとーる話。スーコー、スーコーやウチカビえ是非とううさざりわる後生とうぬ金のーうりやさやーりち、ウチカビりしえー出じとーん。

うぬ後ぬうれー成長しちやんりしえー分かんしが、ちやー一日、十五日え、うぬ子供あうらんなくてーういすたんり。家ねーまた翌日あ現りるばーてーな、後生んうまん行ち戻すてーるばー。なー後生うてい生ま

ようなことがあるので、それが貴家のお墓に行くようなので、きつとたいへんなことだよ」と。お菓子を持つて行つては食べさせたりして、その子供は生きていたようだ。

その子を（墓から出して）連れて来て育てた。しかし、一日、十五日はいつもいなくなっていた。（お墓に）行つたりして、その子はね。

それから、その人はどうなったか分からない。その打ち紙というのは、後生の（お金である）ナンカとか清明祭には打ち紙を供えるでしょう。供えることになつているでしょう。法事ときは打ち紙は是非供えて後生のお金はこれだねと、打ち紙は出ている。

その後は、その子は成長したということとは分らないが、いつも一日と十五日は、その子は家からいなくなつたりした。翌日は現れてね。後生もそこも行つたり来たりしたわけだ。後生で生まれたので、現世半分、

れたぐとう、生き人半年、死に人に半年なとーたり。

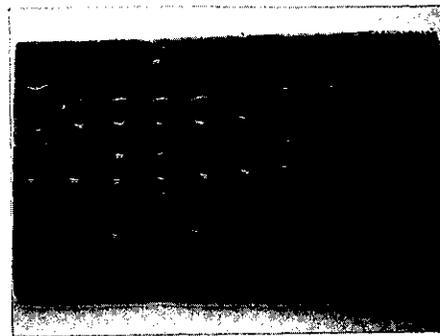
死後の世界半分だったそう。

採集S 52・2・20 読谷村民話調査団第六班 へ上原利律子

注 打ち紙 紙銭のことで、以前は店から褐色のウチカビを買って、それに丸い銭

の型をしたウチカビウツチャーと称するもので縦五個横七個に打って使用したが、

現在では、打たれたものが用意されている。焼香事や清明祭等に用いている。



ウチカビ

37 テーラシカマグチ

話者 比嘉カマド (明治四十五年七月二十日生)

翻字 島袋フジエ

シカマグチ、あれーよー、親<sup>うや</sup>お産<sup>さん</sup>しーがたーによー、  
腹<sup>わた</sup>ぬ内<sup>うち</sup>とーてい、「アヤーさい、私<sup>わい</sup>が産<sup>う</sup>まりーる時<sup>とき</sup>ねー、  
貴<sup>うんじゆ</sup>方<sup>かた</sup>おクシーしみしえーさやー」り言<sup>い</sup>いたんり。シカ  
マグチえ、「うれーなー腹<sup>わた</sup>ぬ内<sup>うち</sup>とーてい物<sup>もの</sup>言<sup>い</sup>るむん、何<sup>なに</sup>

シカマグチ、あれはね、親<sup>うや</sup>がやがてお産<sup>さん</sup>というとき  
に、お腹<sup>わた</sup>の内<sup>うち</sup>で、「お母<sup>はは</sup>さん、私<sup>わい</sup>が産<sup>う</sup>まれるときに、貴<sup>うんじゆ</sup>  
方<sup>かた</sup>は苦<sup>く</sup>勞<sup>らう</sup>しますね」と言<sup>い</sup>ったそう。シカマグチがね、  
「これはもうお腹<sup>わた</sup>の中で物<sup>もの</sup>を言<sup>い</sup>うとは、何<sup>なに</sup>だろう」と

んちがやー」りち、親あいつペー苦勞ひちえーんてー。  
あんさぐとう、産まりーる日なたくとう、親あけー  
亡しちよ、子産すんでいー。子あでいきていひちやく  
とう、生まりーんなたくとう、そー産まれーしーうさ  
んてーんてー。あんさぐとう、うぬまま墓んかい入っ  
たんりよ。

墓んかい入ったぐとう、三日、水まぢゃんりーねー  
墓ぬ内とーてい、ンガンガーしちいっペー泣ちやぎー  
たんり。「とーな、墓ぬ内とーてい泣ちゆるむんうれー  
な、墓あきてい見だんあれーならんむー」り、しちや  
ぐとう。棺箱ぬ側から、ンガー、ンガーしち、ほーい  
だらかーしち。

あんさぐとう、祖父母んちやーが、ひきそーてい來  
やーに、うぬ子や家とーてい育ていやーに。うりが成  
長いたぐとうよ、後生半分、生ち身半分通ていひちや  
ぐとう。

後生んじえーよー、うぬ董ぐわーや、三日が間あ、  
菓子ぐわー買やーに、墓ぬ近くんかい、店ぬあてーぬ  
ぐとーん。あまんじ菓子ぐわー買やーに、毎日、時間  
作てい、菓子買てい行いぎる女ぬうてーんてー。「珍

親はとても苦にしていた。

そして、産まれる日になって子を産むために親は亡  
くなつた。子どもを産もうとしているのだが、ちゃん  
と産まれないで、親は亡くなり、そのまま墓に入れた  
そうだ。

墓に入れて、三日目に水まきに行つたとき、墓の中  
で、ンガンガーしてとても泣いていたようだ。「さあ  
たいへん、墓の中で泣いているが、これはもう墓を開  
けて見ないといけない」とね。棺桶の側から、ンガ  
ンガーしてはいずつていたようだ。

そうして、祖父母が連れ出して、その子を家で育て  
た。その子は大きくなると、後生半分、現世半分とい  
うふうに行つたり来たりしていた。

後生ではね、その子は、三日間はお菓子を買って、  
墓の近くに店があつたようだ。そこで、お菓子を買っ  
て毎日時間を作つて、お菓子を買って行く女がいた。  
「珍しいことだ。毎日、お菓子を買って行く人もいる」

しむん。毎日、菓子買てい行いる人んうる」りち、あんしさーにしちやぐとう、うぬ店ぬ人ぬ感心さーに、足むとう追てい行ぢえーさに。

あんさぐとう、墓んかい入つち行いぎーたんりち、くぬ店ぬ人ぬる行かちえーんりる話で。「貴方なーたー墓んかい変な者ぬういびーん」り言ちやぐとう、侍やてーんて。「ちやーぬ変な者ぬ入つちよーんりち、いつたー分かいんなー」りちやぐとう、「毎日、時間作てい、菓子ぐわー買いが来びんぞー」りち。

あんししちやぐとう、うぬ菓子買いねー、そーまーふんとーぬ金なていよー、行いねーよーウチカビないたんり。ありなていひちえーういさびーんりち、うぬ金ぬんウチカビん見してーういさぐとうよ。

墓ぬ主ぬ開きやーに見ちやぐとう、うまから歩ちやぎーたんりぬ話やさ。うぬ童ぐわーや、あんさーにひちそーやーに、くぬ人ぬ祖父母んちやーが育ていたぐとう。後生半分、生ち身半分通やーに。

唐うていいつべー勉強しちえーんて。しちやぐとう、唐ぬ国んかい勉強しーが行ぢやーに生ち身とう後生ん人とう相撲とうえーすたんり。くれーなー生ち身とう

と、感心して後を追ったようだ。

すると、墓に入つて行つたということ、この店の人が連絡したようだ。「貴方たちの墓に、おかしい者がいますよ」と言った。(主は)侍だったのでしよう。「どういうおかしい者とあなた方は分かるか」と言ったので、「毎日、時間を作つて、お菓子を買いに来ますよ」と言った。

それで、お菓子をかうときは、ほんとうのお金だけど、帰つてしまうと打ち紙になつたそうだ。ウチカビになりますよと、お金もウチカビも見せたりしていた。

墓の主が開けて見ると、そこら辺から歩いたという話だけどね。その子どもはそこから連れ出して、その人の祖父母たちが育てた。後生と現世とを半分づつ通つていた。

(シカマグチは)唐の国へ勉強に行った。唐の国へ勉強に行つて、生きている人と後生の人が相撲をしたようだ。これはもう現世と後生を分けなければならな

後生分かさいねーならんりやーに。

うりんかいシカマグチりたんよー。足あ金さーい作らつとーたんり。ちゃーるばーるやらー黄金さーに作らつていよ。唐んかい稽古しーが、勉強しーが行ぢやぐとうよ、唐ぬ国から「くれー生ち身とう後生とう分かさんあれー。生ち身後生ん同ぬむんてーならんぐとう」りやーに。

うぬ人が勉強しちくーやーに、真玉橋んかい行かーに、生ち身後生んくまんかい集まりよーさーに、むつとう集まらちえーんてー。集まらちやぐとう、真玉橋りる所んかい集みらさーによー。なーいっばい来たんり。うまんじ唐から稽古さる引ち鐘りしよ、パーラみかちやぐとう、後生ん人お光やピンピンぐわーぬぐとうすぐ川んかいバンナイ落ていてい、生ち人おあがとーたんりる話やさ。くぬまま立つち、うれー生ち身どー、生ち身とう後生とー分かちえーぐとう、今からー生活おしちいきよーりち、墓とーてい産まりたる子ぬ、生ち身とう後生とー分かちえーんりぬ話聞ちやん。

いということだった。

その人はシカマグチといていた。足は金で作られていた。どういうことだったのか、黄金で作られていた。唐の国へ学びに行つたので、唐の国から「これは現世と後生を分けなといけな。現世と後生は同じではいけない」といわれた。

その人が勉強してきて、真玉橋へ行つて、生き身も後生もここに集まりなさいと、みんな集めたようだ。真玉橋という所に集めた。もうたくさん来たそうだと。そこで、唐で教わつた引き鐘を大きくたたいたので、後生の人にはぼたるのように川にバンバン落ちて、生きている人は残っていたという話である。このまま立つて、これは生き身だよ、生き身と後生とは分けてあるので、これからは生活していきなさいと、墓で生まれた子どもが、生き身と後生とを分けたという話を聞いた。

ある兄弟が、ひとり是非常に金持ちで、ひとりは貧しい者だったから、この貧しい者がどうしても、まあ兄さんのように金持ちにならないといかんと思つて。貧しい者の一いつペー正直者なやーに、やしが金のーねーらん。

あんし、ある日、なー神様の助きにうりさーに白りちあしえーや。うりていーち神様からもらやーに、うりんかい「今あ何出じり。今あ何出じり」言いねー、むるうりが思いるぐとう出じやーに、兄さんやか金持ちし。

兄さんのーまた白盗り、あんさーに私にん「金ぬ出じりりーねー金ぬ出じーい、塩出じりりーねー塩ぬ出じーぐとう」りやーに盗り。船んかい積り、あんし逃ぎーんり。船ぬ上うてい何う出じりりち、塩出じりりちやぐとう。

うれー弟お出じりりしとう、止みーしーとー分か

ある兄弟がいて、ひとりは非常に金持ちで、ひとりは貧しい者だったので、この貧しい者がどんなにしても、兄さんのように金持ちにならないかと思つた。貧しい者はたいそう正直な人であつたが、お金はなかつた。

そこで、ある日、神様の助けにより、白というのがあつた。それひとつを神様からもらつて、それに、「今は何出なさい。今は何出なさい」と言えば、すべてその人が思い通りに出て、兄さんより金持ちになつた。

それで兄さんはまた、白を盗んで、私も「金出なさいと言えば金が出て、塩が出なさいと言えれば塩が出る」といつて盗んだ。船に積んで逃げた。船の上で、何出なさい、塩出なさいということだが。

それで、弟は出すのと止めるのは分かつていたので

とてーんてー。あんさぐとううつきしえーしむんりー  
ねーうりん止みてい。

うぬ兄りるむのー出じゃすしえー分かいはが止みしえー  
分からんなやーに。あんさーに「塩出じりよー」さー  
に、船うていし止みしえー分からんなあぐとう、う  
ぬ船ぬなーいっばい積り後沈り船え。  
うぬ塩お今んちやー出じりる話るやる。

39 真玉橋の人柱

真玉橋んかい橋え架きていん、造ていん、真玉橋ぬ  
橋え、造ていん造ていん保かたんりよー。壊りてー  
うんしち。

あんさぐとう、七ちムーティーしぎとーる女ぬ。う  
ぬ橋えちやーひちやらーましやがやーりちやぐとう、  
「造ていん、造ていん壊りーるさぎーるむん、村中吟味

しょう。それだけでいいと思うときは止めたようだ。

その兄さんといえば、出すことは分かるが止めるの  
は分からないでしょう。船の上で「塩出なさい」と言っ  
て、止めることは分からないのだから、船のいっばい  
になつて、しまいには船は沈んでしまった。

それで、塩は今もずっと出ているという話である。

採集 S 52・2・20 読谷村民話調査団第十三班（伊波百合子）

話者 比嘉 カマド（明治四十五年七月二十日生）

翻字 島袋 フジエ

真玉橋に橋を架けても架けても、もたなかつたそう  
です。壊れたりしてね。

そうすると、七ムーティーをしている女の人がいた。  
この橋はどうしたらいいかということ、「造つても造つ  
ても壊れるので、村中で話し合いをしよう」と、鼓や

さな「りち、吟味ひちやぐとう、鼓、鐘打つちやーに、  
「全員すりりよー」りちえーんてー。

「うぬ橋えやー、真玉橋え造ていん造ていん、むる  
壊りーるすしが、ちやーさらーましやがやー」りちや  
ぐとう、うぬ七ちしぎとーる女ぬ前んかい行かーに、  
「私から話いうんぬきやびらな」りち、うんぬきたぐ  
とう、「くぬ橋ぬ保かんしえーや、七色ぬムーティーし  
ぎとーる女、埋ずまんえーがー、たむかびらんどー」  
り言ちやぐとう、「ぬぐわ、いやーうれー誰から聞ちや  
が」りちやぐとう、「昨夜ぬ夢なかい、私がうがまつとー  
びん」り言ちやんり。

あんさぐとう、とーあんしえー 七ちぬユーリーし  
ぎとーる女、女ぬあるうつさー集みたぐとう、一人な  
かーる集みてい。髪えむる結いるすしえーや。調びてー  
るふーじ。調びたぐとう、またうぬ調びやが「七色  
ぬムーティーしぎとーしえー一人んういびらんでー」  
り、上んかい言ちやぐとうよ。「あんしえーいやーや、  
今くとうば出じやちやる女お調びていー」り、言ちや  
ぐとう、「あー、うぬ人んうしが、うぬ人一人やなーだ  
やいびん」りちさーに言ちやぐとう。

鐘を打つて、「全員集まりなさい」と集めた。

「この橋はね、真玉橋は造つても造つても、いつも  
壊れるので、どうしたらいいか」といったら、七ム  
ティーをしている女が前に出て、「私からお話します」  
と言つた。「この橋がもたないのは、七ムーティーをし  
ている女を埋めない限り保つことはないでしょう」と  
言つたので、「なぜ、あなたはこれは誰から聞いたのか」  
と聞いた。「昨夜私にこのように夢を見せて下さいまし  
た」と言つた。

それでは、七ムーティーをしている女、女の人をみ  
んな集めて、一人びとり調べてみた。髪はみんな結つ  
ているでしょう。調べにあつた人が、「七ムーティー  
をしている人は一人もいません」と上に報告した。「そ  
こで、おまえは今そう言つた女も調べたか」と言うと、  
「ああその人もいるが、その人ひとりはまだです」と  
言つた。

うりがはたんかい行かーに、「とー、いやー一人やなー  
だやんむー調びらひー」りち、調びたぐとう。一ち、  
二ちそーてい、むる調びてい、七色ぬムーティー、夢  
んち、「七色ぬムーティーしぎとーる女、埋じゆみりわ  
る橋えたむかりーる」言ちえーるくとうばぬ、埋ずまっ  
とーるばーてー。

あんしさぐとう、夫むつち、子なちえーたんよ。う  
ぬ親ぬ「私ねー、人先むぬ言やーにる、うぬ橋ぬ下ん  
かい埋じゆみりーぐとうや、ナビーぐわー、いやー  
や人先えむのー言なよーやー。私ねーなー、くぬ橋ん  
かい埋じゆみりーしえー、私人先むのー言やーに  
るやぐとう」

うれーすんちよーてい行いぎんよーやー。生き埋み  
どー。生きちよーる人埋みやーに、うぬ橋えたむちや  
んり。子んかいぬ言い分のー人先えむんのー言なよー  
や」泣ち別りしち行いたんよー。

あんさーに、うぬ子や男ぬ親育ていなやーに、年頃  
なたぐとう。なー海んかい、三月アシビーりち行いぎ  
しが、貝ぐわー取いんり、すぐテイルぐわーんはちよー  
ていよ、むるふりーちめーてい行かーにさぎーしが、

その女の人のところへ行つて、「はい！おまえ一人は  
まだだから調べようね」と調べた。一つ、二つと調べ  
ると、七色ムーティーの夢を見た人、「七色ムーティー  
をしている女を埋めないとその橋は完成しない」と言っ  
た人が、埋められることになった。

その女は結婚して、子どももいた。親が(子どもに)  
「私は人より先に物を言ったために、その橋の下に埋  
められるので、ナビーぐわー、あなたは人より先には  
物は言わないでね。私はもう、この橋に埋められるの  
は、私が人より先に物を言ったからだよ」と。

その人はひっぱられて行つた。生き埋めだよ。生き  
ている人を埋めて、その橋は完成したそうさ。子ども  
へ「人より先には物は言うなよ」と、泣いて別れた。

そして、その子は父親が育てて、年頃になった。海  
へ、三月アシビに行つて、貝を採るために、カゴを持っ  
て、拾い集めていた。物は言わない。そこへ、侍が遊  
びに来て、もうその女はものすごく美しかった。他の

物の一言やん。侍ぬ、うまんかい遊びーが、侍ぬ遊びー  
が来ぐとう、なうぬ女おどくから美らはぬ。別ぬ  
女お物ん言やぎーしが、うり一人やなま笑ぐわーする  
る。あんさーになー物の一言やん。あとうぬぬずみねー、  
夫むちじくなやーに、侍ぬじこーぬじゆり、あんいる  
か、ぬじゆまーにしちやぐとう、物の一言やんていん  
しむぐとう妻しみりりちやたんよ。

あんさぐとう、うぬ男ぬ親ぬ、「くぬ子あ立身すぐとう、  
物一言あいみていとうらし」りち、橋ぬ上んかい行かー  
に、ドンみかさぎーんよ。ナビーぐわーりしえー十八、  
九びかーんなとーるばーてー。「誠、後生りちあるむ  
んやらー、くぬ子んかい一言物言らちたほり」り言ちや  
ぐとう、「スーリアガリー、飛びたちゆるハベル、私ねー  
大さる立身さびーんどー」うにーから物言やーに侍ぬ  
妻なたんりしえー。

女はしゃべっているが、それ一人は微笑んでいるだけ  
で、話はしなかった。侍がその子にほれて、結婚した  
いと思つて、物を言わなくても妻にしたいということ  
であつた。

すると、父親が「この子は立身するので、一言しゃ  
べらして下さい」と、橋の上に行つて、お祈りした。  
ナビーぐわーは、十八、九歳になつていた。「ほんとう  
に後生があるのならば、この子に物一言、言わさせて  
下さい」と言うと、「スーリアガリー、飛び立つ蝶よ、  
私は大きな立身をするよ」と、そのときから物を言い  
出し、侍の妻になつたようだ。

採集S 63・12・15 読谷ゆうがおの会へ村山友江

注 真玉橋 国場川にかかつている橋で、那覇市と豊見城を結ぶ橋。十六世紀の尚真王が三山の按司を首里城下に集めて、中央集権を固  
めたところから代官の往来やらで、南山の豊見城間切と中山の那覇を結ぶ要路としての重要な橋であつた。

翻字 村山友江

ヒーダマとう、金持人ぬ人とう賭さーに、賭しちやぐとう、「いったー家や、いちぬいつ日ねー焼き上げていとうらすしが、ちやーやが」んち言ちやぐとう、ヒーダマぬてー。人んかい掛きやーに言ちえーるばーてー。「いったー家や、ちゆらーく焼き上げていとうらすんでいしが居しが、ちやーすが」んち言ちやぐとう、「我たあー家焼きうーすしん居んなー」んち、うまぬ主ぬ我ていよ。

あんさぐとうなーうりやたんりぬ話る聞ちやんれー。なーいちぬいつ日ぬ何時ぐるりち賭ひちえーんてー。あんし賭ひちやぐとう、うまぬ主ぬ、「いったあー家ぬいちぬいつ日ぬ日や焼きーぬむん。いったー家や、ちやつペーるハジんかいまんまる、家ぬまんまるハジ置して、水いちゃーていなーすぐちようどうかんしち並びていいきーねー、まーからんヒーダマの入ゆーさんぐとう、うりしー」んち。ハジえーひち、ひちやぐとうよ、まー

ヒーダマと金持ちが賭けをしたようだね、賭けをしたら、「あなた達の家は、何月の何日には焼き上げてみせるが、どうだね」と(ヒーダマが)他の人に言ったようだね。「あなたの家を全部焼いてみせるという人がいるが、どうするか」と言うと「私の家を焼ききれるひとがいるものか」と、その主は我を張った。

それで何月何日の何時頃というふうに賭をしてしまった。賭をしたので、その主に、「あなたの家は、何月の何日には焼けるんだからね。あなたの屋敷の周囲に、大きなハジに水を入れて置いて、このように並べておいたら、どこからもヒーダマは入ることができないから、そうしなさい」と言った。そのようにしてハジを置いたんだがどこからどのように登ったかは知らないが「どうだ、どうだ」と、(ヒーダマは屋敷内に入って

からりがらー登<sup>のぼ</sup>りやーに、「ちゃーが、ちゃーが」ひち。  
ヒーダマなかいやかなーん、焼<sup>や</sup>き上<sup>あ</sup>ぎらったんりぬ話<sup>はなし</sup>  
や聞<sup>き</sup>ちやしが、はつきりえー聞<sup>き</sup>かん、分<sup>わ</sup>からん。

いったようだ」ということでヒーダマは、焼<sup>や</sup>き上<sup>あ</sup>げら  
れてしまったという話を聞<sup>き</sup>いたが、はつきりしたこと  
は分からない。

採集S 63・12・5 読谷ゆうがおの会へ村山友江へ

注 ヒーダマ 火の靈。球状をなして空を飛ぶあやしい火で、火事を起こす魔物だと信じられていた。また美女に化けるともいう。

## 41 火<sup>ひ</sup>の玉<sup>たま</sup>の話<sup>はなし</sup>

話者 比嘉清次郎（明治四十三年三月二十日生）

翻字 知花春美

火<sup>ひ</sup>ぬ出<sup>い</sup>じーねー、しぐホーハイ、ホーハイといつて  
ね、そういうふうにやつたけれど、ぬがホーハイ、ホー  
ハイするかということ、今<sup>いま</sup>から話<sup>はなし</sup>は出<sup>い</sup>るんだが。要<sup>ま</sup>  
はありが起<sup>お</sup>くりる火<sup>ひ</sup>よ、わたしも自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の親<sup>おや</sup>に、「ぬがチャ  
ヤー、ホーハイ、ホーハイすしえー何<sup>なに</sup>ぬ意味<sup>い</sup>がやー」  
どうして、そういうふーない方<sup>かた</sup>をするかといえ、  
要<sup>ま</sup>はね、この昔<sup>むかし</sup>は、草<sup>くさ</sup>葺<sup>ぶ</sup>き家<sup>いえ</sup>が多<sup>おほ</sup>かったね。瓦<sup>かいら</sup>家<sup>や</sup>少<sup>すく</sup>  
い。ずつと前<sup>まえ</sup>はまた、そのむかし、むかし、まあだい

火事になると、すぐホーハイホーハイというふう  
にやつたけれど、なぜホーハイホーハイするかとい  
とは今から話が出るが、要は火事の原因ね、私も自  
分の親に、「どうしてお父さん、ホーハイホーハイする  
は何の意味か」（と尋ねた）。

どうしてそのような言い方をするかといえ、昔は  
草葺きが多かったでしょう。瓦葺きは少なくて、だ  
いたい草葺きだった。赤瓦も非常に最近出てきている。

たい草葺き家だった。赤瓦でも非常に最近といつてもいいぐらい。

そして、ガヤブチ家があるのでしよう。あういうところには、ウセントウーぐわーんかい、ヒナカンガナシーといつてあるよ。芋煮る所、またごはん炊く所。まあヒナカン、こういうふうだね、またむかしは石ぐわー立つちやーぐわーして、その後は少しあいてるよ。

まあ要は、この霊か人か、見るかしらんが、うまんかいよ、ひつくみーしえーありやるばーてー。くぬ火玉りし。女、女お火玉やんりよ。火玉あ女やんりる話やさ。

あんしし、なうぬ女ぬいっペーそーまんごーるばーてー。芋お煮ちや時分ないねーあんさーに、こういうふうに取りやーにかい、ひとつひとつ片煮しえーうらんがやー、またうれーう箸でーん、食ろーんりるちむてー。だから、うり何べんもこうかさにてい。またうまんかい、すばんかいジールぐわーかきとーぐとう、汁煮ねー、おつゆてー、汁ぬ味さーにかい、飲り、ちゆーさがやーぬーがやーりち、あんさーにかいうぬまま味しうちよーちゆるばーてー。おつゆもまた芋ん。片煮んしえーう

そして、茅葺の家があるのでしよう。あそこの台所にヒナカンガナシーといつてあるよ。芋を炊いたり、ごはんを炊いたりする所。まあ、ヒナカンはこういうふうには、昔は石ころをおいてね。

まあ要は、霊か人か、知らないが、その後にひっこんでいるのはあれだがね。この火玉というもの。女、女は火玉らしい。火玉は女だという話さ。

そうして、もうその女はともしつかりしていたようだ。芋を炊いて、そろそろ時間になると、ちゃんと煮えているかどうか、お箸で確かめていた。何度もそのようにやった。また、側の地炉では、お汁を炊いていた。汁の味をして、飲んで、味が強くないかどうか、そのまま味をしておいてあった。お汁も芋もね、一様に煮えているかどうか、ちゃんと煮えているかと確かめて、そのままにしておいた。

らんがやー、じゅんに煮とーがやーりち、味しはんな  
ぎていよ、するばーてー。

うまんかいうる火玉あ、な〜くぬ家庭んかい、私がー  
たたらんりちよ、現りていよ。うまんかい、人間ぬん  
かい現りてい美ら女。すぐうぬ主人んかいよ、「おかあさ  
ん、くまから私が出じーねー、アンマー、くまから私  
が出じーねー、くりさーにかい 私たたきんそーりよー」  
りち、うりくる。

アンマー、目まちゃんてーん「何が、くぬ人お、あ  
ん言がやー」りち、すぐなー、ぴーんとちえーるばー  
てー。うれー反対に考りわるないりち、「いい」りち。  
あぬ時分のーちやーバチチャーやていん ターグやてい  
ん、水おうち準備してある。

それで、「私が出じーねー、くりさーにかい、くりさー  
に私殺しみそーりよー」りち、言ちやぐとう、「うー」  
りち、はにげーしえーさんり。「うー」りち。あんさー  
にかいその女はね、アンマーや、うまんかいあるウー  
キぬ水、水えくんかきていよ。シューりち煙出じーた  
んり、それが火玉やるばーてー。消ちよーるばー。う  
りたつくわーちえしえー家ぐわーむる燃とーんり。火

そこにいる火玉は、もうこの家庭には私はいること  
はできないと（姿を）現した。そこに、人間に現れて、  
美しい女にね。すぐその主にね、「おかあさん、ここか  
ら私が出たら、アンマーここから私が出たらこれで私  
をたたいて下さい」と自分で言った。

アンマーはびつくりして、「どうして、その人はこう  
いうのだろう」と、すぐぴんときたようだ。これは逆  
に考えないといけなると、「はい」と言った。あの頃は  
いつも、バケツでも桶でも、水を入れて準備しておい  
てあった。

そして、「私が出るときは、これで、これで私を殺し  
て下さい」と言ったので、「はい」と答えた。返しはし  
ないで「はい」とね。それから、その女はね、アンマー  
はね、そこにある桶の水、水をかけた。シューと煙が  
出たようだ。それが火玉なんだよ。それを消した。そ  
れに触れたものは家にあるもの、ぜんぶ燃えたようだ。  
火が出てね。たたくと火が出るようだ。たたくと火が

ぬ出じやーにかい。うつちーねー火ぬ出じーるばーてー。  
「たたちーねー火ぬ出じーるしくみやるばーてー。火玉あ  
うつちえーさんぐとう、しぐ水くんかきてい、ジュー  
りち、天井までい上がてい「あつさよー、助かたん」  
りち。

それから出じてい、そのお母が、「女るやたんでー」  
りち、ホーハイ、ホーハイ。家ぐわーぬ、火ぬ燃いねー  
ホーハイ、ホーハイと。

注 ヒヌカン 火の神。かまどの神。

出るしくみになつていた。火玉はたたきはしないで、  
すぐ水をかけて、ジューと天井まで上がつて、「あつ助  
かつた」と。

それからでて、そのおかあさんが、「女だつたんだよ」  
と、ホーハイ、ホーハイと。家が、火事になると、ホー  
ハイ、ホーハイというようになった。

採集S 63・12・15 読谷ゆうがおの会へ知花春美



ヒヌカン

妊娠人ぬ、下男ぬ妻、妊娠てい、またあぬだー主人ぬ妻、妊娠ていひちよーる家庭ぬあてーるぐとーしが。うまぬ、あぬだー家庭や何んりが、主人ぬちやーや大変ぬ大金持なてい、また下男やなーうまぬかい夫婦働らち、同ぬ日なかに、うぬ子ん産まりていひち。

また、うぬだー主人のー海かい、夜ぬ潮かいりち行ぢやーに、夜ぬ潮やなー少えー時間ぬ早はぬ、うぬ寄とーる木ぬあてーるぐとーしが、浜んかい寄とーる木んかい枕ひち、いとうかー寝んとーらりち。寝んとーる場なかに、うぬ寄木ぬ精んかい、竜宮ぬ神ぬ、「いえー寄木ぬ精、あぬーシジャ、今あぬだー上ん下んあぬ子ぬ生まりとーん所ぬあしが、私ぬー御名付しんがりちやしが、貴方や御名付しんがー行かに」りち言ちやぐとう。「私ぬー御名付しんがなー行けーやー思たんてーまんぬー、私ぬーシジャなかい枕さつてい押しちきらつとーぐとうなー起きーんならんむんなー、貴方一人さー

あるところに、主人の妻も妊娠し、下男の妻も妊娠している家庭があつたようだ。主人は大変な金持ちで、下男夫婦はそこで働いていたが、両方とも同じ日に子供が産まれた。

主人は夜釣りに行つたが、少しだけ時間が早かつた。そこで浜に寄りかかっている木があつたので、しばらくの間はその木を枕にして寝ることにした。寝ている時に、その木の精に竜宮の神が「おい、木の精よ、人間の世界では今、主と下男に子供が産まれている所があるが、私はその子に命名しに行くんだが、貴方も一緒に行きませんか」と言つた。すると「私は命名しに行こうと思つていても、人間に枕にされ押さえつけられてゐるんだから、もう起きることもできないよ。貴方一人で命名してきなさい」と言つた。

に御名付しちくわ」んり言ち。

あんし、うぬ龍宮ぬ神え、自分一人さーに御名付しーが来、あんし帰れる間、うぬ主人のー寄木ぬ精枕ひち、あぬだー浜んかい寝んてい。あんし、うぬ寄木ぬ精から、あぬだー話言やぎし、うったー二人ぐーな語いぎし、あぬー主人のー聞かーに、「くれーじやーふえーなむんなどーん。部落んかい上ん下ん妊娠とーしえー私達あ家庭るやるむん」り言やーに。

あんしうまんかい、あぬだーうしちきていなー帰りん聞きわるないさーりち、うーちきやーに、帰り聞ちしちやぐとう、「いえー寄木ぬ精、御名付えーひちちやんどー」りち言ちやぐとう、「何んち御名付ーしちやが」んり言ちやぐとう。「あぬー下男子ぬ子や女子生まりてい、主人ぬ子やまた男子産まりとーしが。あぬー下男子や蔵ぬ主なりよーりち、御名付しちやん。また主人ぬ男子やティールバーキ作やーひち食よ、んり言ち、御名付えひちやん」り言ち。またうぬ話竜宮とう寄木ぬ精とう語らてい話いさぎしうり聞ち、主人のー聞かーに。くれーなし、くったー二人やなし、あぬー私達あ金持えなーむるねーらんさん考や、くったー二人夫婦なさー

そうして龍宮の神は、自分一人で命名しに行った。その龍宮の神が帰る間は、主人は木を枕にして浜で寝ていた。そして龍宮の神と木の精が話をするのを聞いて、「これは大変なことになってしまった。部落で主人と下男の妻が妊娠しているといえば、私達家庭のことだ」と言つてね。

そして帰りにも話を聞かつもりで、そのまま（木の精）を押えておいた。帰りに聞いてみると、「おい木の精、命名して来たよ」と言うと、「何という名を命名したか」と問うた。「あとう、下男には女の子が生まれて、主人には男の子が産まれたんだがね、下男の女の子には蔵の主になりなさいと命名した。また主人の男の子には、バーキ作りになつて生活しなさいと命名してきたよ」と言つた。そのような竜宮の神と木の精が話すのを、主人は聞いていた。もうこの二人は（大変なことを話しているなど）、私達の富を減らさないようにするには、この二人を夫婦にして、家庭を盛りあげないといけない、というふう考えた。

なかに、あぬ家庭むたしわるないり、いるとうくまぬまた考えんじやち。

あんしうつたーが育いーしんれーなーうつたー二人や御名付、あぬだー結婚しみてい。後からまた親達やむるあまんくまん、うらんていしちやぐとう。

ある正月ぬ場なかに、「あぬ年ぬ夜ぬ年取いウブコお白ご飯を炊くんちある、赤豆ご飯炊くんちあんなー」りち。うりから一言いー二言いーさーに夫婦喧嘩んじていしちやるむんぬ。妻えなー「早くなーうまから出じてい行き、いやんぐとーる者のー何ん分からん。白ご飯を炊くんちある、赤豆飯炊くんちあんなー」んちなー喧嘩んじやさーに出じていはりよーさつたぐとう。

なーうりん下男子ぬ子るやぐとう、まーんかいん行くぬような所んねーらん。なーちゃーすがやーんち、哀り苦りに、なー自分ぬうまぬ蔵んかい出じてい一晚お、うまとーてい過ぐち。

あんし、朝早くクラークわーぬ私あ前んかいすぐちよこちよこちよこち、三步なー歩ちえーまたちよこちよこちよこち、三步なーや前んかい進れーういひち、ひ

その二人が成長するうちに、いいなずけと結婚させた。その後、両方の両親とも亡くなってしまった。

ある正月に「年の晩のウブクは白いご飯を炊くのであつて、赤豆のご飯を炊くということもあるか」とね。そのことからひと言ふた言、言っているうちに、とうとう夫婦喧嘩が始まってしまった。(夫は)妻にむかつて、「早くここから出て行け！おまえみたいなやつは何も分からない。白いご飯を炊くのであつて、赤豆のご飯を炊くつてこともあるか」と喧嘩が始まって、家から出されるはめになってしまった。

しかし、妻は下男の娘であり(出て行けと言われても)どこにも行く所がなかった。もうどうしようかと悲嘆にくれ、自分の家から出て一晚は蔵で過ごした。

そして朝早く、クラークわーが私の前にきては、ちよこちよこちよこち、三步進んでは、またちよこちよこちよこち、三步進んだりしていた。このクラークわーは何ご

ちよーしが、くぬクラークわーや何ぐとうがやー、私にんかい物言ら言らーひちよーさー、り言やーに。くぬクラークわーなかい私ねー助きらりーがすら、ぬーがやら分からんむん、なーくまから出して行けーわ、まーにん行くんとうくまんねーらんむん。くぬクラークわー頼てい行きわるないるんち。

なー朝からひつちーうぬクラークわー追てい行ぢ山ぬ奥山までい行ぢやるばーねーなー、また夜暮りてい、あんさーにうぬ夜暮りたるばーねー、うまんかい炭窯炭焼かーが、光ぬあぬ、灯籠んちきていうたぐとう、「なーうまんかい一夜泊まらちくり」んち、あんしうまんかい一夜泊まちら。

あんし、ひちやぐとう、朝あまた早く起きてい茶水沸かちうさぎたぐとう。

うぬ女ぬまた、「貴方お、妻子んうらんるあいびみ」んり言ちやぐとう、「私ねーなー妻子ん居らん、自分一人者るやんどー」んり言ちやぐとう。「あんしえー私ねなーくまぬ女中とうひちなー、飯めーすがやーぐわーくまんかいうちよーちみそーらんなー」んり言ちやぐとう、「あべ、ぬーが貴方があん思いるんさーなー、う

とかな、私に何か物言いたそうだがと（不思議に思っていた）。私はこの家から出て行っても、どこにも行くあてはないし、もしかしたらこのクラークわーに助けられるかもしれないし、このクラークわーを頼って行こうと考えた。

もう朝から一日中、このクラークわーの後を追って行き、山奥までついて行ったら、日が暮れてしまった。すると近くに炭窯があり、灯もついていたので、「そこに一晚は泊めて下さい」とお願いし、一晚はそこで泊まることになった。

翌朝は早く起きて、お茶も入れてさしあげた。

その女が、「貴方はどうして、妻や子もいなんですか」と聞いたたら、「私はもう妻子もいない。一人者だよ」と答えた。「そういうことでしたら、私は女中、飯炊きとして、そこにおいて下さいませんか」と言う、「あ、貴方がそう思うんでしたら、こんな汚ない家にでも住むことができるんでしたら、いいですよ」ということ

んぐとーるやな家ぐわーんかいんうらりーるむんやらー  
うとーれーわーりち。あんさーになー二人ぐーな、なー、  
うまんかいあぬだーうていひちひちやぐとう。

なーまた夫お炭焼かーや、山んかい炭焼きーんが出  
じひちやぐとう。また昼飯すがていまた炭窯んかい昼飯  
すがいが、すがてい持つち行ぢー。昼飯賄いんがりち  
行ぢやぐとう、うまぬ炭窯ぬ側ひらーんかい立つちよー  
る石え、うぬ女のー全部黄金なてい。黄金なてい見てい。  
あんし黄金なていひちやぐとう、うぬ炭窯ウスメーん  
かいや「貴方おくぬ石え何んち見ちよーが、くれー黄金  
るやんどーやー。くぬ黄金ていらむんなーうまんかい、  
うぬまま立ていていあんしうりしちえーんちんある」  
んち言やーに。あんさーにうまから、「うれーひやー黄金  
るやんなー」、「私あ目さーね黄金るやいびんれー」ん  
ち。

あんさーになーうまとーてい、うぬ黄金石ぐわー持  
たちやらち、夫婦、うまとーてい「貴方ん行くん所ん  
ねーんあらーなー私とーう夫婦ならー、そう夫婦ならん  
なー」り言やーに。あんさーにうぬ黄金石ぐわー持た  
ち、夫んかい「村から降りてい、町んじありやーくり

になり、二人で住むにことになった。

ある日、その男は山へ炭焼きに出かけた。(女は)昼  
飯の準備をして、炭窯に持つて行くと、炭窯の周辺に  
ある石が、なんとその女には全部黄金に見えたのであ  
る。そして男に「貴方は、この石は何に見えるんです  
か、これは黄金ですよ。黄金たるもの、そこにそのま  
ま置くつてことがありますか」と言った。それでその  
時から、「これはもう黄金だったのか!」ということであ  
ね。

そのようにして、その場で、男に黄金石を持たせた。  
すると男は女に「貴方は行くあてもないんだつたら、  
私と夫婦にならないか」と言った。そして夫に黄金石を  
持たせて、「村から降りて行って、町であれこれ買って、  
私達は結婚式を挙げようね」と、村から降りて買ひ物

やー買（か）いて、んがたー結（け）婚（こん）式（しき）挙（あ）げらやー」んち、あんし村（むら）かんい買（か）んがりちやらちやぐとう、ガートウイグムイとーいて、石（いし）ぐわー持（も）つち投（な）ぎやーなかに、ガートウイんかいいなーねーらんていうぬ石（いし）ぐわーやあまんかいうりしちさーやーりち。

家（や）かい戻（も）でいて行（い）かーに「石（いし）えーなー、ガートウイグムイんかい投（な）ぎていねーらんなどーん」り言（い）ちやぐとう。「はつきびよーなー、うつびなーぬ黄金（くわん）でいらむん捨（ひ）ていーんちんあんなー」り言（い）やーに。あんさーにガートウイグムイんかい行（い）かーに、またうぬ女（いんな）のー搜（た）めーいんじやさーに、町（まち）んじ何（なん）んきーん買（か）ていくーやーに、うつたーなー夫（み）婦（ふう）なー結（け）婚（こん）式（しき）んしち。

あんさーになー側（そば）ひらーぬ、黄金（くわん）石（いし）さーなかに、うぬ炭（た）窯（がま）、夫（うと）んなー、またあぬだー学（がく）問（もん）しみやーに、うまからなー出（で）じやーに降（う）りやーに、村（むら）降（う）りやーに学（がく）問（もん）しみやーにまた役（やく）所（しょ）歩（あ）つちち。

うぬ夫（うと）うなたる一（いち）番（ばん）ぬ夫（うと）やたしえー、テイルバーキ作（ちゆく）てい物（もの）お食（か）みよー、物（もの）お食（か）みよーりち言（い）ち、名（な）付（け）きらつとーぐとう。やつぱしうぬ先（ま）ち夫（うと）おテイルバーキ作（ちゆく）やーひち。あんしうぬ家（か）庭（てい）から、来（き）ぐとううぬ家（か）庭（てい）

に行（い）かせた。すると途中（ちゆうちゆう）でガートウイグムイがあつたので、持（も）っている石（いし）を投（な）げてなくしてしまった。

夫（うと）は家（か）に戻（も）つて、「石（いし）はガートウイグムイに投（な）げてしまったよ」と話（わ）したら、「ああ！もう大（だい）変（へん）だ、あんなに大（だい）切（せつ）な黄金（くわん）たるもの捨（す）てるということがありますか」と（妻（さい）は）言（い）つてね。それからガートウイグムイに行（い）き、妻（さい）は黄金（くわん）も搜（た）し出（で）して、町（まち）に行（い）きいろいろと買（か）い物（もの）もして、二人（ふたり）は結（け）婚（こん）式（しき）を挙（あ）げて夫（うと）婦（ふう）となつた。

そういうふうにして、もうその黄金（くわん）石（いし）で、炭（た）焼（や）をしでいた夫（うと）にも学（がく）問（もん）をさせた。山（やま）から降（う）りて村（むら）に行（い）き、学（がく）問（もん）もして、役（やく）所（しょ）勤（ごん）めをするようになった。

その女（め）の前（ま）夫（うと）は、「テイルバーキを作（ちゆく）つて食（た）べていきなさい」と命（いのち）名（な）されていたので、その通（と）りにテイルバーキを作（ちゆく）るようになった。そして（先（ま）妻（さい）の家（か）とは知らずに）その家（か）に行（い）き「テイルバーキはいりませ

んかい、「ティールバーキ買んそうり、買んそうり」しち、先妻や家んかい来やーに。

うぬ妻や腹んかいまた、あぬーなうぬ子んあぬだー作いさーち出ぢていひちよーぐとう。うぬ子ん産まりとーるぐとーびーしが、うぬ子やなー五ち六ちなとーるふーじーやいびーしが。うぬ子やうまんかい、あぬだー尻ひつちやきーしち「バーキ買んそうりよー」ひちさぐとう、うぬ子ん知らん人るやし股ぬ上んかい抱かつてーうい、抱かつてーういしちやぐとう。「うぬ子や、あんしそういらーぐわーやる。私ぐとーる者ぬんかいん、あぬだー、股ぬ上んかいあんし、抱かーぎーんれー」り言ちやぐとう、「血ぬするくとうんちやいびーくとうやー」りち、うぬ女お言ちやぐとう。「あんあんしちーぬが、血ぬするくとうりせー何んかいがやー」りち、考、ひんげーしんじやちやーに。「あいえー私が捨ていたる、くれー女るやがやー。くれー私が捨ていたる女るやさやー」んり言やーに、うまとーていなー舌噛ん切つち、死じやぐとう。

うぬなー蔵んみーんかい、石ぬ下んかい、うぬ人お、先夫お埋みやーに、「恨みんすなよー、自分しるいやー

んか」と言つたようだ。

先妻は先夫の家から出される前に、すでに子を身ごもつていたので、子も産まれてもう五、六歳になっていたようだ。そのバーキ売りが、「バーキはいりませんか」とやつてきたので、子供は（バーキ売りを）知らないのに、股の上に抱かれて座ってしまった。「この子はなんて良い子だ。私みたいな者に、このように抱かれるよ」と言うのと、「血のつながりのなすことですよ」と女が言った。そうこうして（バーキ売りは）「いったいどういふことだ。血のなすことというのは、私のことか」といろいろ考えてしまった。すると「ああ！あなたは私が捨てた女か。あなたは（確かに）私が捨てた女だね」と、その場で舌を噛み切つて死んでしまった。

そして蔵の石の下に「恨んではいけないよ。貴方は自分で仕損じたことだから」と埋めた。（門口の側に）

やうりしちえーぐとう」んち。うまんかい茶ぐわー供  
きてい祭てーうりーひちようせー、あぬだーうぬたつ  
びーから。うぬ門口んかい、かんしー茶碗茶あうまん  
かいはんなきてーしえー飲むしえーあらんどーりる、  
理由や、うぬ理由やいびんりー。

また夫ぬ、役所あつちよーる夫お暑はるむん、私が  
帰てい来し待つち、うまんかい茶ぐわー冷まち置ちえー  
さやー」り言ちやぐとう。うぬ茶ぐわーやうぬ茶ぐわー  
うんぐとうーしー茶碗茶あ、うまんかいはらち置ちえー  
しえー飲むしえーあらん。うれー飲むしえーあらんどー  
り言ち、あまんかい外んかいぶつとうかさーに。あん  
しひち、うまんかい、うりが家んかい家ぬ内んかい入つ  
ち、茶やまた飲みけーちしちよーしが。うぬ茶ぬ、  
一茶碗茶あうまんかい飾らつとーしえー飲むしえーあ  
らんどーりしえーうぬ理由。うぬ理由なている、あぬ  
だー、うぬ一茶碗茶や、うまんかいはらち、注じえー  
しえー飲むな、んりる事やいびんり。

お茶を供えて祭つてあるのは、そのようなことから始  
まっている。だから門口にお茶が一杯おかれているの  
を飲むものではないというのは、そういうことだから  
だよ。

夫は役所勤めをしていたので帰つて来て、「ああ、私  
が暑いということ、帰りを待つてここにお茶も冷ま  
してあるんだな」と言ったら、そのお茶が一杯置か  
れているのは飲むものではないよと、外にむけて捨て  
て、家に入つてからお茶を飲ませたということ。お茶  
が一杯門口に飾られているのを飲んではいけないとい  
うのは、その理由からだよ。(門口に)すでに注いで置  
かれていますお茶一杯は、飲んではいけないということ  
だよ。

注 ティールバーキ バーキ状になつた竹製紐つきのかご。

翻字 知花春美

一束しよ、芋を炊いた。大きな鍋のみ、炊いた話を聞いたですな。藁一束しよ、芋ちゆ鍋煮し、これは聞いています。

自分ぬ嫁んかいて、「藁一束芋煮るんさ、私達あ嫁すんど。ちやーしーすんど。またあんにーしーさんらー、いやーがー私達あ嫁えならんど。」りち。

これはですな、藁一束し、芋おちやーしん煮らん。これはですよ。これは、藁一束やくまんかい持ちつち、あまからんくまからんよ、集めてい煮ちよーるばーるど。あまからん、くまからん、寄り集めていち、薪小屋から、あまからん、くまからん、ちりんぬーんくい取いんち、燃し燃しさい、こういうふうにやるのが、本当ぬくめーきとーる嫁ないん。

一束でね、芋を炊いた。大鍋のいっばい炊いた話を聞いたよ。藁一束で、鍋いっばいの芋を炊いたということ聞いています。

自分の嫁にね、「藁一束で芋を炊くのなら、私達の嫁にするよ。ずつとおいてやるよ。また、できなければ、おまえには私達の嫁にはできない」と。

これはですな、藁一束で、どうしても芋を炊くことはできない。これは問題ですよ。これは、藁一束をこつちからも、あつちからも、集めて炊いたわけだ。あつちからも、こつちからも寄せ集めてきて、薪小屋やら、あちらこちらから、塵も何もかも取り集めてね。燃やして、こういうふうにするのが、本当の節約できる嫁になるでしょう。

44 茶腹飯腹

話者 松田トシ（大正十年一月五日生）

翻字 村山友江

昔人およ、婿ぬちやーよ、近はる婿お御馳走食ま  
ち。遠はぬ婿や茶あ飲まち、あたんどー。クンチがま  
んどーんり、お茶あ。

昔はね、近くにいる婿には御馳走をあげて、遠くに  
いる婿にはお茶を飲ませていた。そういう話があつた  
んだが、お茶の方が力がついたということだよ。

採集 S 63・12・21 読谷ゆうがおの会へ（知花春美）

45 婿えらび

話者 比嘉ウト（明治三十二年一月八日生）

翻字 安里和子

婿さん調びに、侍ぬ婿取いしるやてーさに。山原婿  
がやたらーや。あんさーにかい、とにかく婿調びやてー  
んてー。なーま取らんまーるぬ。

婿さん調べで、婿をとるということだったのでしょ  
う。山原の婿だったのか。とにかくまだ迎えないうち  
の婿調べだったんでしよう。

かたじよーぐぬ婿とう、ごはんじよーぐぬ婿とう、  
山原お島米えまんどーしがよ、「私たーや根気ぬあしか  
らどう婿おする」りち言ちやくとうよ。いちばんかけつ

お茶が好きで婿と、ごはんの好きな婿がいて、山原  
は島米はたくさんあるが、「私たちは根気がある人から  
婿を取る」と言った。かけっこみたいな感じでやつた

こふーじーてー行ぢちやぐとう、うぬかたじよーぐー  
やしえー、一番着かーによ。茶やよ、かたじよーぐか  
ら、婿お取つたんり。茶やいつペー根氣えあんりんろー。

ら、お茶の好きな人が一番に着いた。濃いお茶の好  
きな人から婿をとつた。お茶を飲むと根氣があるそう  
だ。

採集S50・2・20 読谷村民話調査団第八班（石嶺まさみ・奥間圭子）

46 継子の麦搗き

話者 長嶺ウシ（明治三十六年九月二十三日生）

翻字 大浜洋子

あれーよー、かんやたんり。サナギ麦てー、継子ん  
かいてー、実子ああらん継子んかいよ、麦。麦え搗ち  
ん搗ちんうりやしえーや。皮やんぎらんしえー。

あれはね、こうだった。サナギ麦ね、継子にね、実  
子ではなく継子に麦を（搗かせた）。麦はそのまま搗く  
といつこうに皮はむけないでしょう。

あんさぐとうよ、「あんちゆか私ねーくんぐとうし、  
苦しみんし難儀しみていやー」りち、アジン持つちやー  
に泣ちやんり。泣ちやぐとうなー、うぬ涙ぬたやーに  
やつぱり粉あんじたんり。あんさぐとう、麦りしえー  
水んかきてい搗ちゆしやさやーりち考たん。

それで、（継子は）「私をこんなにまで苦しませ、難  
儀させて……」と杵を持ったまま泣いてしまった。泣  
いたら涙が落ちて、麦の皮はむけたそうだ。そういう  
ことから麦というのは水を入れて搗くということが分  
かった。

採集S63・12・13 読谷ゆうがおの会（村山友江）

翻字 知花春美

んかしよ、あるとうくまなかい、継子ぬうたんりしが、うぬ継子あいつペー親孝行ぬ子やんり。継子やぐとう、いつペー親なかい悪さつてい、雪ぬ降いにん「雪、垣から降とうちくー」りち、いいちきてい、いつペー寒さるばーにん、なーうりつし。

また、「海んじ潮汲りくー」りち、潮汲みーがんやらち。あんするうちねー、なーるく雪ぬ降いぐとう、寒さぐとう、なー殺するちむえー。死なするちむえーやてーんてー。

あんすたしが、ある巡視官りぬ人ぬ、社会みぐてい、悪さしえー罰すい、ゆたさしえーふーびきうーんりぬ役目ぬめんしえーたんり。

あんしうぬ役目なかい見らつてい、うぬ子供あなー雪降いぐとう、なー凍れ死にさーに道んかい寝んとーたんり。巡視官りーしが起くち、あんしうぬ巡視官のー、自分ぬ着物ぬん脱じてい、着してい。あんし温

むかしね、あるところに、継子がいたようだが、その継子はいへんな親孝行の子だそうだ。継子なので、親にとってもいじわるされて、雪が降るときでも、「垣根から雪を降ろしておいで」と言い付けて、たいへん寒いときでも、もうこうだった。

また、「海で潮を汲んでこい」と潮汲みにも行かした。そのようにして、もうすぐく雪が降って寒いので、もう殺すつもり、死なすつもりだったようだ。

そうだったが、ある巡視官が、社会を廻って、悪い者は罰を与え、良い人には褒美を与える役目がいらしたそうだ。

そして、その子は雪の降る中、もう凍え死にかかって道に倒れているところを、巡視官に見つけられた。巡視官が起こして、自分の着物を脱いで着せてあげた。温まった頃、「どうい理由があつてあなたはこうして

まらちから「ちやーるちむえーし、いやーやあんそーが」りち、「実えーなー小さるばーなかに、女ぬ親ぬ亡し。あんし男ぬ親ぬ妻とうめーてい、あんし、うぬ妻なかに憎まっつてい、私ねーくんぐとうし、殺さんばかーじぬちむえーしうりそーんてー。自分しえー殺しえーしーさんぐとう」あんさぐとう「そうか」りち。

あんさーに、うぬ男ぬ親んまた巡視官りぬ人ぬ尋にてい行ぢ、「いやー子ああんしやんりしが、本当やみ」りち、言ちやぐとう、「うれーなー私が使たん」りち、「あんすんなー」りち。

あんし、うまなかい、うぬ村なかい、村頭りちうたなりよ。うぬ村頭呼ばーなかい、うりがいっペーうぬなりゆちまた、うぬ巡視官が、村頭から聞ちよーるぐとーん。

「うぬ子供やいっペー親孝行ぬ子やしが、親ぬちやーかんし、うりっしそーびんどー」り言ち、「あんさんなー」りち。

うぬ巡視官ぬ親んちやーや罪んかい落とうすんりちやたんりしが、また、うぬ子供ぬ、「あー罪んかいやうとうちえーきみそーるな。子とうしえー親ぬいいちき

いるのか」と聞いたので、「実は、小さいときに母親を亡くしました。その後、父親は後妻をめとったが、その人に憎まれて、わたしを殺そうと思つてそのようにしているんだ。自分では殺せないのね」「そうだったのか」と。

そして、巡視官は父親を尋ねて行つて、「おまえの子はあういうことがあつたが本当か」と言つたので、「これはわたしが使いにやつた」「そうか」と。

そこで、その村に、村頭がいたそうだ。その村頭を呼んで、巡視官がなりゆきを聞いてみたようだ。

「その子はとても親孝行だが、親がいつもこのようにいじめていますよ」「そうですか」と。

この巡視官が、親を罰しようと思つたが、その子が「罪にしないで下さい。子どもとしては親の言いつけも聞くべきであります。罰をしないで許して下さい」

んぬーん聞ちゆしやいびーん。罪んかいうとうさんぐー  
とうー許ちきみそーり」りち、あんしう願しちやぐとう。

「いやーがうぬあたいやらー、うつき親なかいすそー  
にさつていんうりだき親うむいらー、罪え許ちとうら  
すんどー」りち、あんしぬがーたん。

とお願いをした。

「おまえがそのように言うのであれば、これだけ親  
に粗末にされても親を思うのであれば、罪を許してあ  
げよう」と、免れたということである。

採集S 52・2・20 読谷村民話調査団第十二班（伊波百合子）

48 継子の芋掘り

話者 比嘉 カマド（明治四十五年七月二十日生）

翻字 村山友江

うれー親ぬ、自分ぬ産ちえーる子やかなはぬ、女ん  
子やたんり。また継子ん女ん子やたんり。親あけー亡  
しちやしえーやー。

実子は女の子であったが、親が大変可愛がつっていた  
そうだ。また継子も女の子であった。

あんさぐとう今日ぬ芋お、継子んかいよ、「いやーや  
側から掘りよー」り。また自分ぬ実子や「真ん中から  
掘り」言たんり。あんさぐとう二人ぐーな親ぬ言ち  
きーぬぐとう掘たぐとう、中から掘てーる芋お入らん  
側から掘たしえーなー、芋おたでーま大はぬバーキぬ

母親は実子と継子に芋を掘らせたんだが、継子には  
「あんたは側から掘りなさいよ」と、実子には「真ん  
中から掘りなさい」と言いつけた。それで二人共親の  
言いつけ通りに掘ったら、真ん中から掘った芋は小さ  
くて、側から掘った芋は、大きくてすぐバーキのいっ

満ち。

さーにしちやぐとう、側から掘りりる言ちやし何が  
がやーりち、自分ぬまた実子ぬ掘てーぬ芋お小さぬ、  
しちやぐとうくぬ子から命取らんあれー、私あ子あ大事  
ないん、粗末しみらりんむーり思やーに。

くりとーてーくぬ女ぬ親あじこー、後妻アンマー  
やじこー悪者やてーんてー。豆腐よ、ゆし豆腐、豆腐  
さーにすぐなクワツタイ、クワツタイたじらさーに  
よ、たじらちすぐちやつペーぬどんぶり、マツカイぬ  
みー入りやーに、「とー今日や、いやーかいちゆはーら  
豆腐、ゆし豆腐食ますぐとう、早くなー食めー食めー」  
さーによ。うぬゆし豆腐さーに継子ぬ命取ったんり。  
すぐ胸焼かーに、うまうていうりさーに命え取らった  
んりぬ、継親ぬ悪なやーにあんいちる話すたんでー。  
継子あ粗末るしちやんりち。

ばいになった。

母親は、側から掘りなさいと言ったのに、どうして  
だろうと（不思議に思った）。実子が掘った芋は小さかつ  
たからね。もうこのままでは私の子は大変なことにな  
る。粗末にされてはいけな思つて継子を殺すこと  
を考えた。

その後、妻は大変な悪者であつたんでしようね。豆  
腐をつくり、ゆし豆腐をどどん沸騰させて、大変大  
きなどんぶりに沸騰させたゆし豆腐を入れて、「今日は  
あなたにたくさんのゆし豆腐をあげるから、早く食べ  
なさい、早く食べなさい」とせきたてた。そのゆし豆  
腐で、継子を殺すつもりだった。そして（継子は）そ  
こで胸を焼いてしまつて、命を落としたそうだ。継親  
が悪者で、継子を粗末にしたという話を聞いたよ。

翻字 知花春美

昔んかしえて、継子ままぐわん実子そいぐわん、田ただんかい、メー草ぐさかきーが行がんぢやんり。メー草ぐさかきーが行がんぢやぐとう、持むち飯やし、持むちち、継子ままぐわや先まぢなていやらちえーるばー。自分どういぬ実子そいぐわやまた弁当べんどう持むちち行がんぢやらちえーるばーてー。

あんしちやぐとう、ナビゲーてーや、ナビゲー、田たんじ忘わすてーたんり。あんしちやぐとう、うぬ継子ままんぐわやらちえーるばーてー。取とんが。ナビゲー取とんが、汁しるい入りーるやんてー。あわり泣なく泣なくに取とんがやらちやぐとう、ウジャサーりしがてー、「いやん一人ちゆいやらちえーならんぐとう私わんにん行んちゆき」り言いちやんりー。あん言いちやぐとう、「あらんおじさん、私わんちゆいん一人ちゆい行んち来きさ」り言いちえーるばーてー。「私わんちゆい一人ちゆい取とてい来きびん」でいー取とていちやんり。

自分どういぬ子くわあかなさしちえーしえー、行んぢえーるえーかねー、みーなとーたんり。しぐちゆーちやんに。あんなさぐとう、継子ままぐわんち粗末すそいんされー、産なちえーる親つやぬ

昔ね、継子も実子も、田んぼに草取りに行つたようだ。継子は先に行かせて、実子は弁当を持たせて行かしたようだ。

そうすると、杓子ね、杓子を田んぼに忘れてきた。杓子を取りに継子を行かせた。杓子を取りに、お汁を入れるものね。泣く泣く取りに行こうとすると、おじさんが、「おまえひとり行かすことはできないので、私も行くよ」と言つたそうだ。そう言つたので、「いいよ、おじさん、私ひとりで行つて来る」と言つた。「私一人で取つて来ます」と取つてきた。

自分の子、かわいがつていた子どもは、(杓子を)取りに行つてゐる間にきょう、明日に死んでいたそうさ。それは継子を粗末にしたので、亡くなつた親の霊がと

りついていたという話であった。

まゆいぬ、うちかんとーてーさに、りぬ話すたん。

採集S 52・2・20 読谷村民話調査団第十班〈村山知義〉

50 継子の機織り

話者 松田ウシ(明治二十四年十月十日生)

翻字 知花孝子

昔てー、昔どー、継子ぬうてーるばー。あんさぐとう  
自分ぬ子あ布ぬ真中織らち、継子あ初まい、またちび  
ぬー。

昔ね、昔だよ、継子がいたそうだよ。自分の実子に  
は、布の真中の部分を織らせ、継子には、初めと仕上  
げを織らせた。

なー自分ぬ子や真中やぐとう どうーやつさるばー  
てー。自分ぬ子あ、なー秀り者なすんちるやしがよー。  
端々なー継子ぬる織とーぐとう、うぬ継子や上手なやー  
に、自分ぬ子や上手えならんたんり。

実子は真中なので、簡単に織ることが出来るわけさ。  
実子を秀れた者にするつもりであったんだけど、継  
子は布端のむづかしいところは織ったものだから、上  
手になり、実子は上達しなかつたそうだよ。

うつさ継子あ、みつくわふあてーるばーさ。あんさー  
に継子や上手なてい、ちびくち織とーしえー、どうー  
ぐるはる所、自分ぬ子やなー、真中織らちよーん。

それほど、継子というのは、憎い存在だったんでよ  
うね。そうして継子は端々を織ってむづかしい部分を  
始末していたので、上手になった。実子は真中しか織つ  
てないものだから、いっこうに上手にならなかつた。

採集S 52・2・20 読谷村民話調査団第二班〈当間典子・鈴木信一〉

51 継子と二十日月

話者 山内マツ (明治三十八年七月一日生)

翻字 知花春美

田んかいサラゲー忘やーに、必し夜から、「取っていくー」  
りちひちやぐとう。

「ちゆーぬ月や早く上がていきみそーり」りちやぐ  
とう、十八日と十九日、十九日ぬ日や早く上がいんり  
る話。

サラゲー忘たんり。あんさぐとう、「必し取っていくー」  
りちひちやんりぬ話。また聞ちよーるばーてー。

52 継子話 (お茶と) 馳走

話者 比嘉カマド (明治四十五年七月二十日生)

翻字 知花春美

うれー昔ぬ走えー勝負。継子とう本当ぬ子とうしみ  
てい、まーまでいうつちきていくーよーりちやてーる

これは昔の走り勝負。継子と実の子に、どこまで行っ  
てきなさいということだった。継子に「お茶を飲むと

杓子を忘れたそうだ。それで、「必ず取ってきなさい」  
と言ったという話。聞いたわけだ。

採集S 52・2・20 読谷村民話調査団第十二班 (山入端孝子)

ふーじ。「いやーや、茶やクンチャやぐとう」継子んかい  
てー、うりいそーさしみーんでいー、茶ぬくんちでいー  
ねー。継親のー、強く煎てい飲ましーねー、茶酔さー  
にとーらするうみー。あんさぐとう あぬ継子あ茶あ  
かたく飲でいよ。また自分ぬ実ん子あくわつちー喰ま  
ちやんでいー。

遠はんとくまやてーんでいー。うつちきていくーり  
ち、走えーなしみたくとう、継子ぬ早く着ちやんり。  
うぬまた、くわつちー喰ろーしえー歩ちーさん、だてー  
ん後なたんりる話るやたんでいー。

53 継親念仏

継子芝居、うりんよーまたあだ名ちきらつてい、う  
れーまた継子芝居、うれーなー必じ、あぬいつペー冬  
ぬ寒さいない、「潮汲り来」りち、「潮汲り来」りち

根気がでるよ」と、継子を喜ばせて、濃ゆいお茶をあ  
げた。継親は、強く煎じて飲ませば、お茶酔いして倒  
れるだろうと思っていた。また自分の子どもにはご馳  
走をあげた。

遠いところだったんでしよう。行つておいでとかけつ  
こをさせると、継子が早く着いたそうだ。ご馳走を食  
べた実子は走れずにずっと後になったという話である。

採集日 1・5・24 読谷ゆうがおの会 へ村山友江

話者 上地源助 (明治四十年一月三日生)

翻字 島袋喜美子

継子の芝居というものもあつたんだがね。この話は、  
冬の大変寒い日に、「潮を汲んで来なさい」と言つたこ  
とからの始まりだよ。

からぬ始(はじ)まいや。

あんしがな―いえば、沖繩(うちなみ)ね―雪(ゆき)え降(ふ)らんしが、大月夜(うーちちゆい)にな―「潮汲(うずく)り来(く)り」りち。あんしやらすしがな―二時(にじ)間(かん)、だ―継子(ままつくわ)るやぐとう、着物(ちん)ちゃんはらんで―まん裕福(ゆうふく)に着(く)して―ね―らん。な―潮汲(うずく)んが行(い)ちがち―、な―道中(どうちゆう)と―てい、寒(ひ)さぐわいすなりぬあたぬ、いつペ―ししみて―たるふ―じ。

あんしき―なかい後(あと)ぬぬずみね―、な―ちや―しんくぬ子(くわ)あ死(し)なしわる、私(わ)あ子(くわ)ぬ世(ゆい)ないりち。うれ―な―後妻(あとどうみ)なや―なかい、うぬ年上(しーじやんぐわ)子(くわ)あやて―るふ―じて―、うぬ殺(ころ)しりちよ―しえ―。あんしうり死(し)なしわる私(わ)あ子(くわ)ぬまた財産(ざいせん)ぬん与(あた)えているないりち。あんな―悪事(あくどうたく)企(たく)らみ、うぬ継子(ままんぐわ)あ粗末(すま)んし、あんしんな―うぬ子(くわ)あ死(し)なんたぐとう。後(あと)ぬぬずみね―、な―夫(うと)んかい通報(つうほう)やんば―て―、夫(うと)んかい。

な―あんさ―に仮病(ちやくい)すぬば―て、うぬ女(いなか)お。あんしさぐとうな―ありやんれ―、な―夫(うと)んかい言(い)い分(ぶん)の―「くぬ生肝(いぢぢわ)食(か)みわる私(わ)あ病氣(びやうき)え治(の)いぐとう。隠(かく)りてい―うりが生肝(いぢぢわ)私(わ)んかい食(き)りよ―」りち、あんし夫(うと)んかい通報(つうほう)するば―て―。あんしな―夫(うと)お、やっぱしな―

沖繩(うちなみ)では雪(ゆき)は降(ふ)らないんだが、大寒(だいかん)寒い日に「潮(うし)を汲(く)んで来(き)なさい」と行(い)かされた。継子(ままつくわ)だから、着物(ちん)も満足(まんじく)に着(き)させずに潮汲(うずく)みに行(い)かせば、途中(ちゆうちゆう)で凍(こ)え死(し)ぬだろうという、(継親(けいしん)の)企(たく)みだったようだ。

そうしているうちに終(は)いは、どうしてもこの子を殺(ころ)さないことには、私(わ)の子(こ)の勝手(かたて)にはできないと(考(かん)えた)。この女(め)は後妻(あとどうみ)で、殺(ころ)そうと思(おも)っている継子(ままつくわ)は上(う)の子(こ)であつたらしい。それで継子(ままつくわ)を殺(ころ)さないことには、自(みづか)分の子(こ)に財産(ざいせん)を与(あた)えることもできないと思(おも)つた。継母(けいぼ)は悪事(あくどうたく)を企(たく)んで、継子(ままつくわ)を粗末(すま)にして殺(ころ)そうとしたが、どうしても殺(ころ)すことができなかつた。もう終(は)いには夫(うと)に頼(たの)みこむことにした。

その後妻(あとどうみ)は仮病(ちやくい)をつかつて、夫(うと)に「私の病氣(びやうき)は(継子(ままつくわ)の)生肝(いぢぢわ)を食(か)べなと治(な)らないよ、だから私(わ)に(継子(ままつくわ)の)生肝(いぢぢわ)を隠(かく)れて食(か)べさせて下さい」と頼(たの)んだ。夫(うと)は、もうやっぱり妻(め)を愛(あい)していたんでしようね。ついつい妻(め)の言(い)う通(と)りにして、その子(こ)を殺(ころ)すということになつ

妻えかなさがあたらー、ついなー言るぐとうし、うぬ子あ殺ちすんりる番までいちなねーらん。

あんしすしがうぬ道中いる、継子念仏りちあんよ、あぬ歌ぬ。うぬ歌りしえし、くぬ継子ぬ作てーぬ歌やるばーてー。あんさーに、この子ん粗末さつてい、まー母親ぬ墓ぬ前んじ「かんしかんかんしち、私ねーなー継母とー私ねー生ちからんぐとう。私ねー早くなー、私あけー引ち取てい、まー本当ぬお母とう、私ねーまーさせてくれ」りち、かんし墓んかいちやーかんし行ち来すし。

その場合に、この戌ぬ日や七月七夕ぬ日やるばーてー。うぬなかにんなー、墓とーていさがちー、かんし親ぬ前んじあんしな泣ちかかてい、親んけー頼でーるばーてー。「私ねーかんし苦しどーてー、くぬ世う生きちよーていんゆちらねーんぐとう、早くお母さんの元に引ち連てい、お母さんと一緒になちとうらし」あんし墓ぬ前うてい泣ち。

するうちねー、仲順大主という、大主というあのその方がくる。それでその仲順大主という人がね、「なんで君はそんなして、墓ぬ前とーていあんししくしく

てしまった。

この話の中に、継子念仏という歌があるんだがね。その歌というのは、この継子が作った歌だよ。この継子はあまりにも粗末にされたので、母親の墓の前で「こうういうわけで、私はもう継母と一緒に暮らすことはできません。早く私を引き取って、本当のお母さんと一緒にさせて下さい」と、毎日のように墓に行き来していた。

そして七月七夕の日、継子は母親の墓の前で、泣きつき実母に頼むのであつた。「私はこのようにして、苦しんでいては生きていく価値もない。早くお母さんの元に（私を）呼んで、お母さんと一緒にさせて下さい」と、墓の前で泣いて頼んだ。

そうしているうちに、仲順大主が現れた。仲順大主が、「どうして君は墓の前でしくしく泣いているのか。その理由を話してくれないか」と言った。「こううい

しち泣ちゆが。その理由話してみんか」ということで、まーその仲順大主が言うたから、「まーこういうことで、継母んかい私ねー粗末んし、私ねーなーじひとつ生ちからん。お母さんと一緒にないぶさる、かんしお母さんかいちやーかんしちやーびん。あんしがなーお母さんとうしん、むる目に見らん」りぬくとう言ちえーるばーて、仲順大主んかい。

言うたら、その仲順大主はね「まーあなたのお母さんはいつの日には拝まれない、見られない」、「これなつたらいつ見られるか」と言うたら、「七月の七夕、その時に来なさい。その時は拝まれるから」と。その時に、持つて来る物はクーダグーシという竹の節をね、切つてね。そのクーダグーシというあつたでしょう。それ七つ持つて来なさい、切つて。

それでまー、その七本を持つて、脇にはさんでおいで、ひとつずつで見たらしい。これが見なければまた次の物、また次の物で見たら、七本目のばあいには実際にお母さんの顔が、その時にお母さんと対面して、まー後生の人と対面して話するわけさ。「こういうわけで、私は、今の継母とは私は生きてはいけなから、お母さ

けで、継母に粗末にされて、このままでは生きていくことはできない」と、仲順大主に言った。

すると仲順大主が「あなたのお母さんは日頃は見ることはできないよ」と言うると、「いつになつたら見られるんですか」と聞き返すと、「七月の七夕に来なさい。その時は見る事ができるから」と。その時にはクーダグーシという竹の節を切つて、七つ持つてきなさいと言つた。

それで、その継子は七本のクーダグーシを脇にはさんで、一本ずつ取り出して見たらしい。最初ので見えなければ次の物、それで見えなければまた次の物というふうに見ていると、七本目にお母さんが現れて話をする事ができた。その子はお母さんに、「こういうわけで、私は今の継母とは生活することはできない。ど

んと一緒に私は連れて、お母さんと一緒に連れて行くてくれ」という。そういうことをお母さんに言うた。

お母さんとしては「実はそういうより、けれどね。

しかしまー本当の男としては長男として、君ひとりだ。

だからしてお正月も七月もね、迎えてくるんだから、

ぜひと祖先の孝行を考えてね。まー辛抱しておりなさい。

い。それで七月、正月にはお茶、たばこもまた七月な

んかユンヌクといつて、この染めよつたさ。そういう

ものも忘れんで、またお茶、水も、八月も長男んかい」

そういうぐあい話してね。「また夏になったら急にその

にわか雨というものが降るばあいがあるでしょう。そ

の時の雨なんか、また冬はとても寒い小雨の降る時な

んかは、自然にお母さんの涙と思つて、辛抱しなさい」

と。そういうぐあいにお母さんと対面して、始めてそ

の子は「そうかな」と引返して、辛抱していたと。

また、その墓の上ね、まー殺しに行くときなんか

はね、そのヤカーといつて、昔はムイングワ、ムイア

ナーりち、あの一人の背中でおっぱされて、なにしよう

たでしょう。それを使って、そのヤカーにその子供を

処分させるといふぐあいに、やつたけれどこのヤカー、

うかお母さんと一緒に連れて行つて下さい」と頼んだ。

するとお母さんは、「あなたはそういうよりも、あそ

この家の長男だ。私は七月や正月には帰つてくるんだ

から、祖先の孝行だと思つて辛抱しなさい。だから七

月や正月にはお茶やたばこも供えてね。そういうのも

忘れないでちゃんと供えてほしい」と話した。「また夏

には急に、にわか雨が降ることもあるでしょう。冬に

なると寒い日には小雨の降ることもあるでしょう。そ

の時はお母さんの涙と思つて辛抱しなさい」と。そう

いうぐあいにお母さんと話して、その子は「そうかな」

と思ひなおして引き返し辛抱すことにしたそうさ。

また継子を殺しに、墓の上まで行くときはね。昔はムイングワ、ムイアナーというのがあつたでしょう。

そのヤカーというムイアナーを使って、ムイングワである継子を処分させようとした。しかしヤカーは自分

で育てた子供だから、どうしても殺すことができなかった

その者は自分でもって養つておる子供だから殺しきれない。それで、実は隠しておつて、あのう継母達には「殺してきた」というぐあいとその話をして、始めてその子を自分で隠して育てて、後はその子供がやつぱしいい子になって、始めて、こういうことはやつていけないといつて、世間にその戒めのまゝ場面見せてね。まゝ部落芝居しよつたよ。それは昔、昔の念仏といつてね、昔の歌があるよ。

た。それでその子を隠して、継母たちには「殺してきた」と話した。そして隠して育てた継子は、いい子に成長した。そういうことから、こんな（継子を殺すよいうなこと）はしていけないという、世間への戒めの場面を見せていた。部落の芝居でやっていたよ。それは昔の念仏といつて、歌もあるよ。

採集 S 52・7・3 読谷村民話調査団第二班（渡慶次勲）

注① 仲順大主 大主は中城間切仲順村（現北中城村仲順）の創始者である。大主の時代に、王位を英祖に譲つて野に降つた義本主が国頭の奥地から読谷山に移りそこに寄遇していたころ、大主の善政を噂に聞いて、王は仲順に身を寄せ大主の厚遇を受けて晩年を過ごしたということである。

翻字 知花春美

うれー親離りしちやぐととう、七歳ぬ年ねー思出じやち。うぬ子あちやーぬ秀り者がやたらー国々さまさま、私あ親んかい似ちよーる人がめーがやーりち、廻たんり。廻たぐととう、私あ親んかい似ちよーる人お一人んもーらんりち。

今度お仲順大主とうはい会ちやたるばー。あんし、「仲順大主、私、頼ま」りちやぐととう、「ぬが、いやー子供ぬ、私頼る」りちやぐととう。

「あぬー、私ねー五歳ぬ年なかい、女ぬ親ぬもーらんない、あぬー七歳ぬ年なたくととう、継親どうやてい、私あ親に似ちよーる親あうらんるやーりち、廻たぐととう私あ親なかい似ちよーる人、一人んもーらん。私あ親、見していきうみそーり」りち仲順大主んかい、う願えしちやぐととう。

「いやー親や、まるねーうがまらんんどー。七月、七夕なーかぬ十日ならば、クーダグーシ、七グシちがーに、

その子は親と死別して、七歳の時に思い出した。その子はどんな秀れた子だったのか、私の親に似ている人がおられるかなと、国々をめぐったそうだ。めぐつたけれども私の親に似ている人は一人もいなかった。

今度は仲順大主に出会った。それで「仲順大主、頼みがあります」と言ったので、「どうして、おまえ、子供が私を頼むのか」と言った。

「あのう、私は五歳の年に母親を失い、七歳の時に継親がいたので、私の親に似ている人はいないかなあ」と探し歩いたが私の親に似ている人は一人もいない。私の親を見せて下さい」と仲順大主にお願いした。

「おまえの親は、ふだんは見えないよ。七月、七夕中の十日になれば、クーダグーシ、七グシついで、左の

左ぬ袖さーにうし隠さーに右ぬ袖さーに一目どう見ん  
どー」りちやぐとう。

ぬしきたぐとう、トートーメーんかいめーんり。「ぬ  
がよ、私あアンマーやうまに見る」りちやぐとう「私  
や継親ひれーさびらんぐとう、私にんアンマーとう、  
ちゆ道なていくうみそーり」りち言ちやんりー。

言ちやぐとう、「いやん一人あとうなし子たていてい  
あぐとう七月、正月ならば、う茶ぬ八月ひきていきり  
よー茶ぬ八月ひきていきうてい、また八月ならわ、  
グソーユーぬ宝ミンヌクーどー」りち、歌あうつさや  
さ。

袖で隠し、右の袖から一目見えるよ」とおっしゃった。

見ると、仏壇におられた。「どうして私の母親はそこ  
にいらつしやるのか」と。「私は継親といつしよにはで  
きない。私もおかあさんと供にして下さい」と言った  
そうだ。

言ったので、「おまえひとりしか子どももないので、  
七月、正月になれば、お茶の八月を供えてちょうだい。  
また七月になれば、後生の宝はミンヌクーだよ」と、  
歌はこれだけだ。

採集S 52・2・20 読谷村民話調査団第四班 富村朝夫・比嘉澄子

55 嫁と姑

薬一束さーなかい、芋煮ちやんりぬ話私たー先輩  
ぬちやーから聞ちよーる話やしが。うりん嫁、姑るや

話者 比嘉次郎 (明治三十七年十一月二十八日生)

翻字 知花春美

薬一束で芋を炊いたという話を私たちの先輩から聞  
いた。これも嫁と姑か、継子なのか分からないが、た

らー、また継子<sup>ままくわ</sup>るやらー、うりがさけーみーや、分かん<sup>わか</sup>んのーあしが、ちやーしん嫁<sup>ゆみ</sup>、姑<sup>ひじょう</sup>か、継子<sup>ままくわ</sup>ぬいるていがあてーやり思<sup>おも</sup>いん。

やてい、芋<sup>いも</sup>、大鍋<sup>うふなべ</sup>ぬみー、藁<sup>わら</sup>一束<sup>いちぶ</sup>さーに煮<sup>に</sup>らんあれーならんどーやーりち。うれーなー、いへー憎<sup>にく</sup>でい、家<sup>や</sup>からやらしえーやーり、うまぬ主人<sup>しゅじん</sup>がやたらー。あん言<sup>い</sup>いそーちやぐとう、いいしえー嫁<sup>ゆみ</sup>やてーるはじ。

うぬ嫁<sup>ゆみ</sup>んまた、うぬ事<sup>こと</sup>ねー関<sup>かん</sup>心<sup>しん</sup>ぬ深<sup>ふか</sup>い嫁<sup>ゆみ</sup>るやたらー、「なーあんしえー あんさびーんてー」りち、まじめに、親<sup>おや</sup>ぬ言<sup>い</sup>いしえー聞<sup>き</sup>かんあれーならんりち。あんひちやぐとう、「ちやーしすがやー」りち、うりがしじやまー監<sup>かん</sup>視<sup>し</sup>さぐとう。すばらしい嫁<sup>ゆみ</sup>子<sup>こ</sup>るやぐとう、ちやつささーに芋<sup>いも</sup>煮<sup>に</sup>りりるくとお、誰<sup>た</sup>やてい考<sup>かん</sup>ららんくとうやいやすが、うぬ芋<sup>いも</sup>煮<sup>に</sup>ちやんりるうれー、ほん<sup>ほん</sup>とに藁<sup>わら</sup>一束<sup>いちぶ</sup>、燃<sup>も</sup>しえーすが、あまからんくまからん、かちんみーからん、芥<sup>あくと</sup>、ちくたぐわーん持<sup>も</sup>つちち、うりしーじやー一<sup>まじ</sup>緒<sup>よ</sup>ん取<sup>と</sup>い集<sup>あ</sup>ちえー燃<sup>も</sup>ちえーういういし。とーとーちやつペーぬ大<sup>うふなべ</sup>鍋<sup>なべ</sup>ぬみー芋<sup>いも</sup>煮<sup>に</sup>ち、成<sup>せい</sup>功<sup>こう</sup>しちさぐとう、やつぱしくれーなんじゆぬ嫁<sup>ゆみ</sup>子<sup>こ</sup>ああらんがやーり思<sup>おも</sup>れー、やつぱりすばらしい人<sup>ひと</sup>やるむんなーりち、

ぶん嫁<sup>ゆみ</sup>姑<sup>ひじょう</sup>か、継子<sup>ままくわ</sup>の分けへだてのことであつたかと思<sup>おも</sup>う。

そこで、大鍋<sup>うふなべ</sup>一杯<sup>いちぱい</sup>の芋<sup>いも</sup>を、藁<sup>わら</sup>一束<sup>いちぶ</sup>で炊<sup>炊</sup>きなさいとい<sup>い</sup>うことであつた。これはもうたいへん憎<sup>にく</sup>んで、家<sup>や</sup>からおい出<sup>い</sup>そうと、その主人<sup>しゅじん</sup>（の考<sup>かん</sup>え）だつたんでし<sup>し</sup>ょう。いわば嫁<sup>ゆみ</sup>をね。

その嫁<sup>ゆみ</sup>も物<sup>もの</sup>分<sup>ぶん</sup>かりのいい嫁<sup>ゆみ</sup>だつたのか、「もうそうしましようか」と、まじめに親<sup>おや</sup>の言<sup>い</sup>うことは聞<sup>き</sup>かないとい<sup>い</sup>けないと思<sup>おも</sup>つた。（姑<sup>ひじょう</sup>は）「どのようにしてやるのかな」と見ていた。すばらしい嫁<sup>ゆみ</sup>だけど、どのくらいで芋<sup>いも</sup>が炊<sup>炊</sup>けるとい<sup>い</sup>うことは、誰<sup>た</sup>にも考<sup>かん</sup>えられないことではあるが、芋<sup>いも</sup>を炊<sup>炊</sup>いたとい<sup>い</sup>うことは、ほんとに藁<sup>わら</sup>一束<sup>いちぶ</sup>燃<sup>も</sup>やしはするが、あつちからもこつちからも、藁<sup>わら</sup>の中<sup>なか</sup>からも、芥<sup>あくと</sup>などを集<sup>あ</sup>めてきて、いっしよに拾<sup>ひろ</sup>い集<sup>あ</sup>めて燃<sup>も</sup>やした。とうとう大<sup>うふなべ</sup>鍋<sup>なべ</sup>いっばい芋<sup>いも</sup>を炊<sup>炊</sup>いて、成<sup>せい</sup>功<sup>こう</sup>したので、たいした嫁<sup>ゆみ</sup>ではないと思<sup>おも</sup>つていたのにすばらしい人<sup>ひと</sup>だつたと、その後<sup>のち</sup>信<sup>しん</sup>用<sup>よう</sup>して、一<sup>いっ</sup>緒<sup>しょ</sup>に仲<sup>な</sup>良<sup>ら</sup>く暮<sup>く</sup>らして成<sup>せい</sup>功<sup>こう</sup>したとい<sup>い</sup>う話<sup>わ</sup>を聞<sup>き</sup>いています。

うりから信用し、共に一緒仲良くし、暮らち成功し  
ちやんりぬ話を聞いています。

56 嫁とナス

親ぬ、嫁なていいじよーる姑親てー、姑親ぬ。何カ  
年りがらー、三、四カ年やがやー子産さんたんり。

子産さんなたぐとう、なーいーほーらりーるたちわ、  
「いやーがーなー子あ産さんぐとう、くぬうちえー孫  
んらん」りち。うれーまたナスビぐわー、自分くる  
作てい植てーん、あんし水ぐわーかきていしちやぐとう、  
うぬ嫁え出じやさりーるちわなたぐとうよ。うぬナス  
ピンかい

なりよナスビ、ならなそてい  
嫁ぬ出じていいちゆさ

りちよ、うぬナスピンかい嫁ぬるかきていうりさん

採集 S 53・7・3 読谷村民話調査団第五班へ新垣修子・大宜見光一

話者 比嘉 カマド (明治四十五年七月二十日生)

翻字 村山友江

姑のいる家に嫁に行つたんだが、三、四ヶ年も子供  
ができなかつたようだね。

子供に恵まれなかつたので、もう家から出される際  
に、「おまえは子供は産めないから、とうぶんは私は孫  
もみることができない」と姑に言われた。この嫁はま  
た、自分でナスを植えてあつたようだ。そして嫁は家  
を出される際に、

早く実りなさいよ、実らなかつたら

私は出て行かないといけないんだよ

と、ナスビに例えて歌をうたつた。

りんどー。

あんさぐとう、あんしちやる月から、子あ妊娠やーに、またりつぱにうりさんり。ナスビとうかきていうりさんり。親あよ、また嫁ぬ子妊娠たぐとう入ったんりちやる話る聞ちやる。なげー妊娠らん、子んむったんたんりー。

57 嫁と姑へうどんはミミズ

たとうれーな子供あ旅はいはちやぐとう、うぬ姑や盲目やてーんてー。嫁ぬな、ミミジャーあさていち、煮ちなーうぬ盲目んかいみそーらちえーるばー。いえーりんちやーがらるやてーさに、食らーに、自分ぬ座ちよーるムスルの下んかいな、何やがやーな物の一見じんそーらんぐとう、何やがやーりちかんし押すてーういし。

そうしたからその日から嫁は妊娠して、りつぱに(子供も産むことができた)。ナスビにかけて歌ったからね。姑は嫁が妊娠したので、家に連れ戻したという話を聞いたよ。最初は嫁は長いこと子供に恵まれなかったようだね。

採集H1・5・24 読谷ゆうがおの会(村山友江)

話者 松田ウシ(明治二十四年十月十日生)

翻字 玉城和美

子供(息子)が旅に出かけたのだが、母親は盲目だったんでしようね。嫁はミミズを取ってきて煮て盲目の姑に食べさせていたそう。多分おかしいと思ったのか、姑は自分の座っているムシロの下にミミズを隠しておいた。もう目は見えないんだから何だろうと。

子供ぬな―旅から来やに、「私ね―くり食まさつと―  
しが何やがや―」りちな―子供んかい見したぐとう、  
「貴方やうりみそ―ちな―」りち聞ちや―に、うりさ―  
に、うんに―ね―うぬ親や目や開きや―に開ちや―に  
うぬ嫁んかい盲目なたんりぬ話聞ちやんど―うれ―。

58 嫁と姑〈芋〉

昔ぬ人ぬてし、あんし芋たるむんたつ切るや―り、  
思と―て―んて―。あんし、「うぬたつ切ら―芋おま―  
さるや―」り言ちやぐとうよ、主人ぬ。

嫁えよ―掘ていちゃんがちやら―よ、うぬ嫁え、親  
ぬ前んかいたつ切ら―芋びか―ん持つち行ぢえ―たん  
り。たつ切ら―芋おま―さるりち、裏からるやしが、  
あん言ちやぐとうよ、選び選び御膳ぬみ―うり持つち  
ちえ―たんり。

そして息子が旅から帰ってきたので「私はいつもこ  
れを食べさせられているが何だろう」と息子に見せる  
と、「貴方はこれを食べたのですか」とびっくりしてし  
まった。その時からその姑は目が見えるようになり、  
かわりに嫁が盲目になったという話を聞いたよ。

採集S 52・2・20 読谷村民話調査団第二班へ当間典子・鈴木信一

話者 比嘉ウト (明治三十七年十月十五日生)

翻字 村山友江

昔、ある人がね、芋をこんなに傷つけてと求めてい  
たんでしようね。「この傷ついた芋はおいしいね」と、  
言つたようだね、主人が。

嫁は芋を掘ってきて、親の前に傷ついた芋だけを持っ  
ていったそうだよ。切れた芋はおいしいねと嫌みで言っ  
たんだが、傷ついた芋だけを御膳にいっぱいのせて持っ  
てきてあつたそうだよ。

採集S 63・12・13 読谷ゆうがおの会へ村山友江

59 兄弟の仲直り

話者 松田ウシ(明治二十四年十月十日生)

翻字 玉城和美

兄弟二人やて、仲ぬ悪さぬ他人とう友達さーに。なー山猪殺さーに、うぬ仲ぬ悪さぬ人ぬてー。たとうれー二男てーな、あんさーに人殺ちえーんりちる思とーるばー、うりがー。

「人殺ちえーん」りち言ちやぐとう、なー友達ぬ家んかい行ちやーに「私ねーなー人殺ち、うりやしがりかひじみていくー。大変なとーんれー」りちやぐとう。かなし友人ぬ、「うれー私がーならん」りちひちやぐとう。なー兄弟ぬみーんかい行ちやーに、兄弟んかいあん言ちやぐとう、「なーあんやていから、りか」りち兄弟やまた、弟ぬかしーしーがりち行ちやぐとう、人おあらん山猪やたんりちぬうれー話ぬあさ。

あんさぐとう、ちやーしんかーしん兄弟やよ、うりやるばーよー。人お食むるえーかるやる、いざぬあいねー兄弟がるする、人がーしえーとうらさんり。

兄弟二人は仲が悪かったので、別の友達と仲良くしていたそう。例えば二男が山猪を殺したんだが、人を殺したと勘違いしてしまった。

そして友人の所に行き「私は人を殺してしまい、大変なことになってしまった。一緒に始末してこよう」と言ったが、友人は「私はできない」と断られてしまった。今度は、兄弟の所に行くと、兄は「そうなら一緒に行こう」と弟の手伝いをしに行った。そしたら殺したのは、人ではなくて山猪だったという話があった。

そういうことから友人(人)は物を食べている間はいいが、いざとなった時に助けてくれるのはやっぱり兄弟で、他人がは助けてくれないという話である。

翻字 安里和子

長男とう三男までいうしが、親あな一病氣しち、食事ん落ていらんぐとう、食事ん食まらんぐとうや、な一長男んかい、「いやー子あ捨ていやーに、私、乳い飲まさんなー」りち言ちやぐとう、「あーうれー、子捨ていてー、私ねーあねーしーうさんどー」りち、親んかい。

うりから二男ぬんかい、あん言ちやぐとう、同ぬぐとうてー、「私ねー食事ん食みうさんむー、いやー子あ捨ていやーなかい、私にんかい乳ぐわー飲まさんなー」りちやぐとう、二男ぬん「んば」りちやるばーてー。

うりから三男ぬんかい、むる子持ちやてーんてー。一人なー一人なー呼ばーに、「かんし病氣なてい、私ねーなー食事んかみうーさん、いやーん子あたらはしが、捨ていやーに、あぬー飲まさんなー」りちやぐとう、三男のー「おー」ひちよーるばー。

「あんすらー子あ産しけーれー幾人んあいるさびーる、親あなー一人るめーんとう思れー、長生きしんそー

長男から三男までいるが、親はもう病気で、食事もできないので、長男に、「おまえの子を捨てて、私に乳をくれないか」と言うのと、「そんなことは、子を捨てるなんて、私にはできません」と、親に言った。

それから二男に同じように、「私は食事もできないので、おまえの子を捨てて、私に乳を飲ましてくれないか」と言うのと、二男も「できない」と言った。

次に、三男に言った。みんな子持ちだったのでしよう。一人一人呼んで、「このように病氣なて、私はもう食事もできない。おまえも子どもは大事だが、(子を)捨てて、(乳を)飲ましてくれんか」と言うのと、三男は「いいですよ」と言ったようだ。

「子どもは幾人でもできますが、親は一人しかいないので、長生きさせる考えですので、私の子を捨てて

らする考やぐとう、私あ子あ捨ていやーに、貴方んかい、お父んかい、乳いうさぎらやー」りちしちやくとう。

あんさーに、ある森んじ捨ていーんりそーしが、うぬ親ぬ、「まーぬまーんかい、木ぬ一本のーあぐとう、うまんじ子あ埋すりよー。穴掘てい埋すりよー」。

あんさーになー、うったーがー、ちゃーしん子あ捨ていぶしこーねーん、熱心になとーんてー、「子あ埋みらやー」りち、掘てい、幾けーんぬん掘ていすんりしーねー、涙ぐわーたらちえーういし、夫婦、埋すいんりしーねー。とうとう何尺りがらー掘たぐとう、黄金ぬ出じたんりがらー。

うぬ子んちやー試し、見じゆんりちやてーんてー。三人が、誰が親孝行やがやーりち、宝あ分きてーいーらさらん、一人んかいいーらするうりやてーんてー。三人から一人選り、掘たぐとう、金ぬ出じたぐとう。金、昔え金なとーしえーやー。あんさーなかい、二人ぐーなー、夫婦、子ぬ命ん助きてい、黄金ぬ花んうがまりてい。あんさーに、うったーやいっペー栄ーたりんり。

貴方に、お父さんに乳をさし上げます」と言った。

そして、ある森に捨てることになった。親が「どこそこに木が一本あるので、そこに子を埋めなさい。穴を掘って埋めなさい」と言った。

もう、三男はどうしても子を捨てたくなくて、しかたなく、「子どもを埋めようね」と掘った。幾度も掘ったりして、涙を落としたりして、夫婦で埋めようとした。そして、何尺か掘ると、黄金が出たそうだった。

子どもたちの心を試してみるつもりだったのでしよう。三人のうちで、誰が親孝行か、宝は分けてあげることはできないので、一人にあげるつもりであった。三人から一人選んでね。掘ってみると金が出てきた。金は昔お金でしょう。そうして、夫婦、子どもの命も助かって黄金の花も授かったということである。それで、三男はたいそう栄えたそうだった。

61 塩が一番おいしい

話者 照屋 牛五郎 (明治三十一年十二月四日生)

翻字 村山友江

御主加那志ぬハンメーすがや、女中ぬうてーんて。  
うぬ人ぬある場合に塩、塩俵ぬ上んかい下がとーてー  
ぎさしが。うりから汁ぬ垂やーに、食事すがいる、作  
くいる所ぬ上んかい塩俵ぬあたんりよ。あんさぐとう  
うぬお汁やてーんや、いえーりんお汁やてーんや、じ  
こー味ぬあてーぬふーじ。

あんしさぐとう御主加那志が、「今日ぬ食事のー変わ  
とーしが、ぬがちやーぬちむえーが何ぬ入つちよーが」  
りち言ちやぐとう。分からん、食事すがやーん分  
んしが、なー大変なたんりち、怒りがすらーりち、や  
てーるふーじやしが。うり考ていんちやれー、上んか  
い塩俵が下がとーたんり、あたんりよ。うりから汁ぬ  
垂ていしちやぐとう、うぬ食事のーじこーまーしくな  
てい、うりから後お、まーさ物のー塩りぬ話。

御主加那志の食事当番の女中がいた。女中が食事を  
作る時に、上の方に塩俵が下がっていた。そして、食  
事を作っている最中に、上から塩が垂れてきたんでしょ  
うね。多分、お汁でも作っていたのか、大変おいしかつ  
たそうだ。

そうして御主加那志が、「今日の食事は変わっている  
が、どういうことか。何が入っているのか」と言った。  
すると、女中はもう分からん、その理由が分からなかつ  
たので、これは大変なことになってしまったと、てつ  
きり怒られるものだとばかり思っていた。そしてあれ  
これ考えているうちに、上に下がっていた塩俵に気づ  
いた。それから汁が垂れてきて、その食事は大変おい  
しくなっていたのである。その後は、塩は一番おいし  
いということになったという話。

あれはね、金持ん人とう貧乏者とううたんり。あんさぐとう、いちばんのー天ぬ神様やんしえーてーんてー。なー金持ん人とう貧乏者ぬ氣持ち確みーがもーちえーぬふーじ。いちばんのー金持ん人から行かーに、年ぬ夜ぬ日どうやんりんどー、うぬ神様るやし、すぐやな着物ぐわー着ち、フクター担みてい、わざとう金持ん人とう貧乏者とうたていわきすんりー。あんさぐとう金持ん人からいちばんのー入っちやんり。

あんさぐとう、「ちゆうー一晚のー家んねーんぐとう泊まらちきんそーり」りち言ちやぐとう、うぬ金持ん人お「うんぐとーる物乞やーたるむん、くぬ殿内んかい私たー泊まらさんむー」言やーに、「いやー泊まらずしえー私たーねーんどー」り言やーに、泊まらさんたんり。あんさぐとう「ぐぶりーさびたん」りち行ぢえーんてー。

またうりから貧乏者ぬんかい行ちやぐとう、「ちゆうー

あれはね、金持ちと貧乏人がいたそうだ。天の神様だったんでしょね。もう金持ちと貧乏人の気持ちを確かめに来たのでしょ。最初は金持ちの家から行った。大晦日の晩に、神様だけど、汚ない着物を着け、ポロを担いでね、金持ちと貧乏人の心を試すために、最初金持ちの家へ行った。

そして、「きょう一晚は、家もないので泊めて下さい」と言う、その金持ちの人は「こんな物乞いをこの殿内に泊めることはできない。おまえを泊めることは、私たはできない」と泊めなかつたようだ。それで、「失礼しました」と帰って行った。

次に貧乏人の所へ行き、「きょう一晚泊めて下さい。

一夜あ泊まらちきんそーり。なー家人ねーらん、困てい  
る来びーぐとう」りちやぐとう。年ぬ晩やしえーや。

「私たーや年ん取いうーさん 肉ん買いさんや、食む  
していーちんねーらん。火正月るひちよーんでー」り  
ち、火よ燃ちぬくまぎーたんり。フクターぐわー着ち。

あんさぐとう、神様るやんしえーぐとう「肉え私が  
多く持つちよーぐとう、肉え心配あしんそーんな」あ  
んどやいびーみ」りやーに、「ちやつペーぬ鍋んかい、  
サンジュダチーんかい、貴方なー二人うたんでーまん、  
サンジュダチーんかい、水入つてい、早くなーくわん  
ないむげーらしんそーり」りち言ちやぐとう。「あんしえー  
あんさびーみ」、うまぬおばあさんが、チリドーシーん  
かい火やむげーらさーに、かんしむげいたんでー。

くーてんぐわーる入りーぎたんり。くーてんぐわー  
るかんし入りーぎんねーあたしが、すぐ鍋ぬみー肉な  
ていよー。あんさーにうまーな、神様ぬもーちよー  
ししーていー三人、ちゆふあーらみそーやーに「あん  
しえーな、私ねーちゆー」夜あくまとーてい夜明か  
しみりやー」り言やーに。くわつち、正月え、年え  
取やーに、くわつちーひちやぐとう。

もう家もなく、困つてこうして来ました」と言つた。  
大晦日でしょう。「私たちは年を取ることもできず、肉  
も買えず、食べ物もひとつもありません。火正月をし  
ているのですよ」と火を燃やして温まっていた。ポロ  
着を着けてね。

それで、神様なので、「肉は私がたくさん持っている  
ので、肉は心配しないで下さい」「そうですか」「大き  
な鍋に、サンジュダチーに、貴方たち二人でもサンジュ  
ダチーに水を入れて、早くもう炊きなさい」と言つた。  
「それではそうしますか」とそこのおばあさんは、チ  
リドーシを火にかけた。そして沸とうしていた。

少し入れたようだ。こんなにして、少し入れたよう  
だが、すぐ鍋一杯に肉ができた。そして、神様と三人  
で、お腹いっぱい食べて、「それでは、私はきょう一夜  
はここで夜を明かさして下さい」と言つた。正月のご  
ちそを食べて、年もとることができた。

朝あさなたぐとうよ。神様かみさまるやしえーや、「いったーや、くぬまこぬまま年取としといしとう若わかくないしとー何なにやましやが」りちやくとう「あいえーな一年取としとていやぬーんならんるあいびるむん、ちやー若わかくないしえーましるやいびるむん」りち言いちやくとう。「とーあんしえーよー、いったーやハジぬあみ」り言いたんり。「水みづたみーるハジぬあみ」りーたんり。「ハジえあいびーんどー」りち、「うりんかいや水みづ入りやーに湯ゆう沸わかし」りたんり。

あんさぐとう、「湯ゆうあちらち湯風呂ゆふろ入れー」りち、入いつちやくとうよ。おじいさんから入いつちやくに、また、後あとおおばあさんから入いつてーんてー。あんさぐとう、おじいさんからすぐ若わかくなやーに、すぐ美ちゆら青年にーしえーなてい、あんさーに、また次つぎねーおばあさんるやしが、また次に浴あみたくとうな若わか姉わかれえさんなやーに。なー二人たいやなー、じこーうむつさしよー。「とーくぬとうーいや、ちやーな若わかくなてい、今いまから働はたらちみそーりよ」りち、あんさーに行いぢんぎせーたんり。うまから出いでていいいうつさぐわー行いぢよーたんり。

あんさぐとう、うぬ辰むしとちやる隣となぬ金持えいき人ちゆぬウスメーが、「ぬがいったやあんしん年寄としよやてい、あんしん若わかく

朝あさになつて、神様かみさまが「おまえたちは、このまま年をとるのと若わかくなるのと、どちらがいいか」と聞いたので、「もう年を取ると何もできないし、いつも若いのがいいですよ」と答えた。「それでは、おまえたち桶かがあるか。水をためる桶かがあるか」と言いった。「桶かはありますよ」と言いうと、「それに水を入れてお湯を沸わかしなさい」と言いつたそうだ。

それから「お湯を沸わかして、風呂ふろに入りなさい」と言いわれて入いつた。おじいさんから入いつて、後あとにおおばあさんが入いつた。すると、おじいさんは若わかくなって、美ちゆら青年にーしえーになつて、次つぎにおおばあさんが浴あびると、若わか姉わかれえさんになつた。二人ふたりはもうとても喜よろこんだ。「このように、いつも若わかくなって、今いまから働はたらきなさい」と言いつて、行いかれたようだ。そこを出いていって、すこし前ままで行いつた。

そこへ、(神様かみさまを)追おい返かした隣となの金持えいきちのじいさんが、「どうしておまえたちは年寄としよりだったのに、あんな

なとーる」りち、言ちやぐと、「昨夜やー、おじいさ  
んるやんしえーしが、年寄るやんしえーしが、私たー  
やうぬ人ぬ年取らち、また朝湯風呂ん入つちひちや  
ぐと、かんし若くなとーびんどーやー」りち言ちや  
ぐと、「あんしえーまーまんぐら行ちよーが」り言た  
んり。「あままんぐら行ちよーびさ」りち「走えーない  
ねーいちやいびんどー」り言ちやぐと、うまぬ  
主えなー年寄のー歩ちうさんむし、若主人から「走えー  
なてい、あぬウスメーうんちけーしちくーわ」りち。

うんちけーしちやくと、「いったん若くないぶーは  
んなー」り言みしえーぎたんり。「私たん若くないぶー  
はぐと、なーくぬならびぬ貧乏者のーあんすか若く  
なていやー、うらやまさあいびーぐと、私たんなー  
若くなちきうんそーり」り言ちやぐと。

「とーあんしえー、私ねーいったー家や分かいるす  
ぐと、いったー家んじ、いったや家族や多はぐと  
や、ちやつペーぬハジンかい水入つてい、早くなー湯う  
あちらしえー」り言たんり。

あんさぐと、先なてい、うまぬ若青年や行かーに  
湯うあちらち、「とーあんしえー」一人なー一人なー浴み

に若くなっているか」と言った。「昨夜ね、おじいさん  
だけど、年寄りだけど、私たちに年をとらし、また、  
朝、風呂に入ると、このように若くなっていますよ」  
と言った。「どの辺まで行っているでしょうか」「あの  
辺までいつているでしょう。走ったら追いつくかもし  
れませんよ」と言うと、その主は年寄りなので早く歩  
けないので、若主人に「走って、あのじいさんを連れ  
て来なさい」と言った。

連れてきたので、「おまえたちも若くなりたいか」と  
言ったようだ。「私たちも若くなりたいです。もう隣の  
貧乏人があんなに若くなって、うらやましいので私た  
ちも若くして下さい」と言った。

「それでは、私はおまえたちの家は分かるので、お  
まえたちは家族も多いので、大きな桶に水を入れて早  
く湯を沸かしなさい」と言ったようだ。

そして、若主人は先に行つて湯を沸かした。「はい、  
一人びとり浴びなさい」と言った。一人びとり浴びて

れー」りち。浴みやーに、とーりちから、一人なー一人なー間あ動物んかい化きらんてーんてー。終わりまでの浴みたくとうよ、うりから、うまぬいちばん戻ちやる主人えよー、猿なやーに、また動物、とうび鳥んかいなていはいしんうい、ぬー動物りがらーやーなていはいしんうい、うまぬ主人えなーすぐちりちりばらばらなやーに、鳥ぐわーからなたりしんうんりぐとう。猿や、いちばん主人やたり。

あんさぐとう、また、うぬ貧乏者ぬ家んかい来やーに「とーくまーやー、心ぬ悪さぬ人間ぬ人ぬちやーやぐとう、早くなーうぬ家やいつたー入り。若者ぬちやー入り」りち、「入つちんしまびーがやー」りち、入つちえーんてー。あんさぐとう、「うまー、家族おむる私が逃がちえーぐとうや、うまから入つちちゆーるわけーねーんぐとう、早くなーうまんかい入り」りち、若者ぬちやー入つてーるふーじ。

あんさぐとう一カ月びかーんないねー、みぐていくーやーによー、うぬ猿やみぐていくーやーに、キーキーさぎーたたりー。猿りーしえー見ちんんだん、恐るさしえー。あんさぐとう、うぬ神様やみぐていもーやー

いる間は動物に化けなかつたが、みんな浴び終えると、そのの（おじいさんを）戻した主人は猿になって、動物・鳥になるのもいるし、動物になってみんなちりちりばらばらになった。鳥になったのもいるし、主人は猿になったそうさ。

それから、おじいさんは、貧乏者の家に来て「ここは心の悪い人間だから、この家に早くおまえたちが入りなさい。若者が入りなさい」と入つたようさ。「その家族はみんな私が逃がしたので、そこから入つてくるわけはないので、早く入りなさい」と若者たちが入つたようさ。

それから一カ月ぐらい経つと、猿がやってきて、キーキー鳴いていた。猿というのを見たこともないので恐いでしょう。そこへ神様はまわつてきて、「どうか居心地はいいか」と言うと、「もう庭で、猿がキーキー鳴い

に、「ちやーねーが、いーやんべーやみ」り言ちやぐとう、  
「なー庭んかい猿ぬキーキーさびーしが、ちやーひちや  
らーましやいびがやー。うぬ家んかい入つちよーてい  
苦勞る、あんしーねーさびーんでー」りちやぐとう。

「とーとーうりん大丈夫、私が教すぐとうしーよー」  
りち、「何時まんぐら来が」り言やぎたんり。あんさぐ  
とう「何時まんぐら来ん」り言ちえーんでー。言ちや  
ぐとう、「何時まんぐら来ねーよー、うまんかいちやつ  
ペーぬマー石、すぐタムンの燃さーにやー、うりん  
かいたつくまーに、うりがぐりーるか焼きよー」り  
言たんり。すぐ赤くないるか、うぬ石ぬくがりーるか、  
なーうりが来るじぶんの焼かーにうぬ石えうまんか  
い置ちえーてーんでー。うりが来るとくまんかい、  
うぬ石ぬ上んかい、ちやー座いさんりよ、うぬ猿や。  
あんさぐとう何時まんぐら来んでー。来ぐとう、うぬ  
猿やすぐうまんかい座ちやぐとう、はーみかさーに、  
あんさーにから、うぬ尻え赤どーんりちぬ話聞ちや  
ん。

ていますが、どうしたらいいでしょうか。この家に入っ  
ていて苦勞ですが」と答えた。

「はい、これも大丈夫。私が教えるので、何時頃来  
るか」と言った。「何時頃来ます」と言うと、「何時頃  
来たら、そこにある大きい石に薪を燃やして、それが  
こげるまで焼きなさい」と教えた。猿が来る時間に石  
が赤くなるまで、こげるくらい焼いておいた。猿が来  
るところにおくと、猿はやってきて、すぐそこに座った。  
猿はその時間にやってきて、すぐそこに座ったので、  
ワァー（とびつくりしたが）そのときから、猿のお尻  
は赤くなったという話を聞いた。

注① サンジユダチー 三升炊き用のなべ。

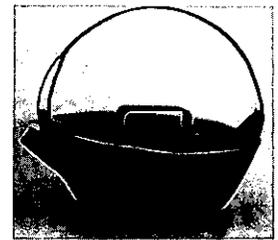
② チリドーシ 汁物の煮炊に使うなべ。

63 大みそかの棺

あま東恩納、今ん屋号あんどー。やしが貧乏なてい  
首里奉行あつちやぐとう。

あまうていなー皆、くぬ年ぬ晩に、「皆、年んくま  
うていとうりよーや」りちやしが、うれーなー、親ぬ  
くとう思てい、なー家かい行ちゆんりや。うまから何  
んいえーりんあいるすてーはに。なーあたらちえーてー  
んてー。

うりなー親んかいうさぎーんりち、あがとうー首里  
から東恩納んかい、あぬだー持つちいくるばすに、あ  
ぬだーうまうていひよーな者はいいちやたんりや。



チリドーシ

話者 伊波カマ (明治二十六年六月十五日生)

翻字 津波古米子

あそこは東恩納、今でも屋号は残っているよ。そう  
して、貧乏だったので、首里に奉行に出ていた。

そこである年の晩に、「皆、ここで年の晩は過ごしな  
さいよ」ということになった。しかし、その人は親の  
ことを思つて、家に帰つたようだ。たぶんその雇い主  
から、何か食べ物でも分けてもらったんでしようね。

そしてそれを親にあげようと思つて、あんなに遠く  
から東恩納まで持つて行く途中で、変な者に出くわし  
てしまった。

うりんちむひれーるやてーはに。棺箱前なち、親とう子とう、なー泣ちよーたんり。泣ちよーたぐとう、「なー何んち、貴方達やあんしんしえーが」り言ちやぐとう。「私達やなー、親ぬ亡ひち、かんしなー棺箱んかい、ありひち。ひちえーしが、葬むいぬあぬだー金ぬねーらん、なー何んち私達や、あぬだー人兄弟りちんうらん。かんしなーちやーひち葬むいがたすがやーりち、泣ちよーんどー。かんひちよーんどー」り言ち、しちやぐとう。「あんるやんしえーりー、りー私達家あ行けー親、兄弟んういびーぐとう。私達家んかい行かびらやー」りち、うぬ棺箱ん、棺箱持ちち家んかい行ぢ。

あんししちやくとう、棺箱やうまんかいしちやくとう。「私達やまーぬえーまー、行じくーひー」り言たんりや。二人、親子。あんさぐとうなー、待つちん待つちんくーん。うぬ棺箱やうまんかいうちきてい。

あんさぐとう珍しむんりちなー、「りーまじいがたーうつさ家族すりとーるむん。くり開きていんだやー」りちしちやくとう、宝やたんり。宝箱やたんり。

それは心を試すためだったんでしようね。棺箱を前にして、親子が泣いていたそうさ。泣いていたので、「もう、どうして貴方たちはそうなさっているんですか」と言った。すると「私達は親が亡くなつて、このように棺箱には納めてあるんだが葬式すら出すお金がない。私達には、もう親戚、兄弟というものもない。どのようして葬むればいんだらうと、このように泣いているんだよ」と言った。「そうなんですか、私達の家に行けば、親や兄弟もいますよ。私達の家に行きましようね」と。その棺箱を持って、(一緒に)家に行つた。

そして棺箱も持って行って、そこに置いた。「私達はどこそこまで行ってこようね」と言ったそうさ。一人、親子でね。すると、もう待つても待つても帰つてこなかつた。棺箱をそこに置いたままね。

そこで、珍しいこともあるもんだと、「私達は家族もそろつてしているし、これを開けてみよう」と開けてみたら、宝になつていた。宝箱だったそうさだよ。

64 後生での借金問答

話者 比嘉清次郎(明治四十三年三月二十日生)

翻字 知花春美

「だいたい生ちちよーる借金むる払んねーよ。あぬ、請求がちゅーんでい。ちむがかいしよ。同ぬ後生ん人るやんどー。」

たとえばAとBとの話や。AがくぬBぬよ、金借たぐとう、AがBぬ金借てい、二人ぐりー死じよーるばーてー。二人死じやぐとう、Aりる人お、なーBから金のー借とーしが、払ん持ち行ぢよーるばーてー。Bや早く行ぢよーるばー。後生んかいや、あんしAりしえー後行ぢよーるばーてー。

あんし、借金取いが来よー。「いやーん来んなー」りち。うまんかいうる間あ行ちうーさんしえー。現世かいうる間あ取いうーさん、うりまた靈界行ぢやぐとうよ、Bぬ「いやーん来さやー」りちよ、「いやー借金払いすみ」りち言ちえーるぐとーん。

「あんやさやー、いやーから借てーさやー。払らんさやー。とーとー、明日あさてー、私たーナンカぬちゅー

生きている間に、借金はすべて返済しないと、(死んでからも) 気にかけて請求に来るそうだ。同じ後生でね。

たとえばAとBの話だけだね。AがBのお金を借りてね、二人とも死んでしまった。AはBからお金を借りて、払わずに死んでしまった。Bは早く死んで、その後にAも亡くなったわけだ。

そして、(Bは) 借金を取りに来た。「おまえも来たか」と。現世にいる間は取ることはできず、靈界に行つてから、Bが「おまえも来たのか。おまえは借金を払うことができるか」と言つたようだ。

すると(Aは)「そうだね、おまえから借りてあつたね。払つてないね。では、明日頃、私のナンカなので

ぐと、初ナンカないぐとう、うりなかい来ぐとう、あぬうりなかい払いさ」りち、初ナンカやぐとう払いさりち。あんしBややらちやぐとう 墓んかい借金取りが来たんり。

うれー本当ぬ話どー。城間親方が墓で相談して、墓うてい、相談すしよ。うれー浦添うていやしがよ、うぬ話や。

Aぬ言い分のー「私たーナンカやぐとううりなかい払いさ」りち。「とーあんしえーうみなく」りち、「とーあんしえー払いよー」りち。

あんさーなかい、なーAやよー、家や何んねーんばー。家やまた貧乏むんなてい、家やナンカする家庭やがやーりち。

あんさーなかい、くぬ話い聞ちよ、城間さんのー家かい行ぢえーるぐとーん。「私ねーいつたー墓うてい聞ちやしが、いつたー青年や金借とーさやー、あんし、うり取いが来、ナンカしーが来ぐとうや、うりなかい払いさりち言いぎんでー。いつたーナンカやちやーなとーが」

「あいやいびーさー、なーいちぬ何日ナンカあたとー

初七日なので、そのときに払うよ」と、初七日に払うと言った。そのようにしてBは、墓に借金を取りに来たそうである。

それはほんとうの話だよ。城間親方が墓で相談しているのを聞いているよ。その話は浦添でだけどね。

Aが言うには、「私たちは初七日なので、そのときに払うさ」と。「それじゃ安心した。払ってね」と。

しかし、Aの家には何も無い。家は貧乏なので、ナンカもできるかどうか分からなかった。

そして、城間さんはその話を聞いて、(Aの)家へ行つたようだ。「私はあなたの方の墓で聞いたが、あなたたちの青年はお金を借りているね。借金を取りに来てね、ナンカに払うよと言っていた。あなたの方のナンカはどうなっているのか」

「そうですね、もう某月某日は初七日になっている

しが、うぬナンカぬ品物買いる金ぬねーんなてい、なー  
金ぬねーんぐとうや、なー待つちよーかな」

「とーいったー話、聞ちなかいどう来ぎんでー。う  
ぬ話聞ちどう。いったータラーがやらー、うぬタラー  
が金借やーなかい、カミジューが取いが来たんどーやー。  
うぬ事んでー、とーいったー払んねーならんでー。とー  
とー私があぐとうや、くりさーなかいナンカズーコー  
せーわ」

うぬ買いぬ金のーむる城間さんが払つてよ。貸らち。  
「いったーが出しーなかい取ていしむさ」あんしにへー  
やいびさ」まあ、うまん貧乏むんやしなかい、なーナ  
ンカする金ぬんねーん、いーばーにへーでーびる。あ  
んさーなかい、ナンカンしやー、買ていしちやくとう。  
いそーさしよ、うれーふくてい、シムチから出じとー  
たなり。「にへーやたんどー」

が、その初七日の品物を買うお金もなく、すこし延  
ばそうかなと思つています」

「あなた方の話を聞いて来たんだよ。その話を聞いて  
ね。あなた方のタラーかね、タラーがお金を借りて、  
カミジューが取りに来ていたよ。そうだから、あなた  
たちは払わないといけない。さあさあ、私があげるか  
ら、これで初七日をやりなさい」

その買うのに使うお金は全部城間さんが貸して下さつ  
た。「あなた方があるときに取つていいよ」「たいへん  
ありがとうございます」と。そこも貧乏だったので初  
七日をするお金もなく、(城間さんが貸してあげたた  
めに)品物も買って初七日を済ませた。(タラーは)と  
ても喜んで「ありがとうございます」とシムチから出  
たということである。

翻字 村山友江

昔よ、おじいとうおばあとう二人暮らちよーたん、貧しい、貧乏な者ぬ家庭があたんり。あんしおじいや山から薪出ぢちやち売とーんばーるやんてー。やしがちやつさ薪のー切り出ぢちやち売ていん、むる金のーたまらんよ。貧乏やたきちきてい、おばあん二人、今日喰わ明日ちやーすがやーりぬあたい貧乏やたきちきてい。

また山から取ていちゆる薪ぬん、金ぬんかい替てい売らんまーるむるねーらんてーういういし。あんさーにうれー不思議やつさー、何がやー、うれー盗人ぬる薪持つちはいぎーさい。しーしーしウスメーや、今日やなーくぬ盗人かちみりわるやつさーりち、うぬ薪ぬ上んかい夜盗人ぬ番さんり。あんしさぐとううぬウスメーが昼ぬ疲りから、いひぐわートウルトウルぐわーしさぐとう、御天とーからちやつペーぬガラマーぬ降りていちやーによ。うぬガラマーさーにひつかきらりやーに、御天とーんかい上しらつていよ、うぬウスメー

昔、おじいさんとおばあさんの二人暮らしの、大変貧しい家庭があつたそうだ。おじいさんは山から薪を切り出して売っていたんだが、どんなに薪を切り出して売つても、お金はいっこうにたまらなかつた。おばあさんと二人で今日一日暮らせば明日はどうしようというほどに、貧乏生活は限界に達していた。

また山から切り出してきた薪も、売らないうちになくなつたりしてちつとも金にはならなかつた。薪は盗人に盗まれているんだから、これは不思議なことだ、どうしてだろうと(考えた)。そうこうしているうちに、おじいさんは、今日こそは盗人を捕えようと、夜になつてから薪の上に座つて番をしていた。しばらくして、おじいさんは昼間の疲れから、ウトウトしていると、天から大変大きなつるべが降りて来たようだ。そのつるべにひつかけられて、おじいさんは薪といっしょに天に上げられてしまった。

や、薪しーじやー。

薪しーじやー御天とーんかい、物取いがちえーさやーりりちさーに、御天とーぬ神様ぬ前んかい行ぢやぐと。

神様ぬ家んかいや、なー米から桶からまんりるうぐと、ちやつさん。うりんかい米ぬあんりく入りいっばい積

まつとーぬ桶んあい。うりからまた半分入りらつとーる桶あい、また大さる桶あい、小さる桶んあるばてー。

あんしただ桶ぬ底んかいただ一粒ぐわー、米ぬ粒が一粒入つちよーる米んあしが、何やがりち神様んかい

問ていんちやぐと、「いやーや薪アチネーしいえーきすんりはまとーしが、いやー食果報やくりるやんどー

りち。あぬー、うぬ桶んかいやただ少てんぐわーぬ、桶ぬ底んかい米粒一ち入つちよーたんり、うぬウスメー

食果報や。あんし「私あ食果報やうつさるやいびんなーり言ちさぐと、」うー、いやー食果報やうつさるやん

どーり、神様やまた。

「あんしあまんかいあんりく入り入つちよーる、桶んかい入つちよーる食果報や誰食果報やいびーが」り

ち問たぐと。「あれーよー、あれージョーヌタルガニーりいる人ぬ食果報やさ」りち。「えーあんのやいびーでいー。

薪といっしよに、天に物取りに来たんだということ  
で、神様の所に行つた。神様の家には、もうたくさん  
の米や桶があつた。そこには桶にあふれるほど米が入つ  
ているのもあれば、また半分入っている桶もあるし、  
大きい桶もあれば小さい桶もあつた。

そして、桶の底にただ一粒だけ米粒が入っている桶  
があつたので、何だろうと神様に聞いてみた。(すると)  
「おまえは薪商いをして、金持ちになろうと頑張つて  
いるようだが、おまえの福分はこれだけだよ」と、そ  
の桶の底には米粒がたった一個だけ入っていたそうだ  
よ。そのおじいさんの福分ということだね。そして「私  
の福分はこれだけですか」と言つたら、「ああ、おまえ  
の福分はこれだけだよ」と神様は答えた。

「あそこに溢れるほどに桶に入っているのは、誰の  
福分ですか」と聞いたら、「あれはジョーヌタルガニ  
という人の福分だよ」「ああそうですか。そうでしたら  
もう福分は決められているんですね。天の神様から決

あんしえー食果報や決みらつてゐる、御天とーから決  
みらつとーびさやー」「うん、今分かつていー」り言ちや  
ぐとう。「あんしえーなー、家かい帰ていきみそーり」  
りち。分かとーらー家かい帰れーり、帰てい。

うぬウスメーが家んかい帰ていちやぐとう、おばあ  
や家うとーてい赤ん子抱ちよーるふーじ。あんにーさ  
ぐとう「ぬぐわ、うぬ赤ん子あ何そーが」り言ちやぐ  
とう、「くれーウスメーよ、おじいがうらんなくていから  
私ねーうぬ赤ん子搜めーていさしが、私達あ門んかい  
ウエーウエー泣ちよーたぐとうよ、育ていとーんどー」  
りち。

あんしざぐとう、うぬハーメー話が、「なー門んかい探  
てーぐとう、ジョーヌタルガニーりち付きてーんどー」  
りち言ちえーるふーじ。「とーひやーノでいかちよーさ  
ハーメー、なー御天とーんかいぐぬ子ぬ食果報や決み  
らつてい。すぐちやつびぬ桶んかいあんりくんに米ぬ  
あたんどーやー」りち、あんしえー、くぬ子ぬ食果報  
やいっペーまぎささやーりちいそーさし。

あんしうにーから、うぬウスメーとハーメーや、う  
ぬ子、ジョーヌタルガニー育ていたぐとう、うぬ家庭

められてゐるんですね」「ああ今、分かつたか」「もう  
分かつたんでしたら家に帰つて下さい」ということにな  
つた。分かつてゐるんだつたら家に帰りなさいと言  
われて、おじいさんは帰つていった。

おじいさんが家に帰つてくると、おばあさんは赤ん  
坊を抱いていたそうだ。「その赤ん坊はどうしたのか」  
と聞くと、「おじいさんよ、この赤ん坊はね、おじいさ  
んがいなくなつてから、私達の門でウエーウエー泣い  
ていたので、このように私が育ててゐるんだよ」とい  
うことだつた。

そのおばあさんは「もう門で見つけたので、ジョー  
ヌタルガニーと名付けてありますよ」と、おじいさん  
に話した。「ああ！でかしたぞおばあさん。もう天では  
この子の福分は決められていてね。大変大きな桶に米  
が溢れるほど入つていたよ」と、もうこの子の福分は  
大変大きいんだねということ（夫婦で）喜んだ。

そういうふうにして、おじいさんとおばあさんは、  
ジョーヌタルガニーを育てるようになってから、その

や目にみーてい裕福。食果報りしえー御天とーうてい  
決みらつとーんどーやー、というような話。

66 はしかの神様

イリガサガナシーや、ぬが、ありが神えー。すぐイ  
リガサガナシーぬ神えよ、顔から何からフクターなてい  
めーたんり。すぐぶつぶつしち、ちようどうやなふー  
じーぐわーひちすたぐとう。うぬイリガサぬ吹き出じー  
ねー、なーうれーりつぱさんあれー、うぬ子や熱ぬ強  
さぬ、うりどーんち。

なー、イリガサガナシーぬ神え、枕元にん、後じ  
んにん、フクターぬ顔あ隠ち、二人座ちめーんりしが  
よー。うまんかい前なち「くぬ子あなー嘉例吉あらち、  
軽ていんぐわーうたびていきんそーり。くぬ分さーに  
しまさびーぐとう、別んかいうもーち、くぬ子やなー

家庭は目にみえて裕福になつていった。(人間の福分と  
いうのは)天で決められてるんだよという話。

採集S 63・12・22 読谷ゆうがおの会(村山友江)

話者 比嘉 カマド(明治四十五年七月二十日生)

翻字 村山友江

イリガサガナシー(はしかの神)は、あの神はね、  
顔やら体やらどこもかもぶつぶつだらけで、醜い容姿  
をしていた。はしかが吹き出すと、ちゃんと手当てを  
しないと、高熱が出て大変なことになると言われてい  
た。

イリガサガナシーの神は、醜いぶつぶつの出た顔は  
隠して、(はしかにかかった子が寝ている)枕元に二人  
座っていた。そしてその子を前にして、「この子にお恵  
みを与え、軽くすませて下さい。もうこのくらいです  
ろしいですので、○相のこの子は今でも重い方ですの

くぬ分ぶんさーに、何相なにそうぬんり言いたんよ。已みぬ人ぢゆうやれー、  
已み相そりち。何相なにそうぐわーやなー、くぬ分ぶんさーに強ちゆうぢゆうー  
とるあいびーぐとう、また別べつんかい、なーだぬ方かた  
かい渡わたていうたびみそーり」んち、あんさーにちやー  
かんし手ていうさーちしーねー軽かるくさーに、別べつんかい渡わたてい  
くめいんりぬ話はなしるやたんで。

うまんかい神かみんいめーぐとう、側すばとーていなー心くるぬ  
中なかうてい、ちやつびんなーあびらんよーく、「軽かるくぐわー  
うたびみそーり」んち。あんさーによー、本ほん人にんのー前め  
なさーに水みづぐわー、「今日ちゆうや三日さんじちみび水みづやいびんどー」「明日あちや  
五日ごじちみび水みづやいびん」「また一週いつしゆうかん間かんまでいやいびーぐとう、  
別べつんかいひきなていうたびみそーり」んち、うぬ子こん  
かいすてーるむん。子こ抱だちよーていよ。子こぬ前めんかい  
水みづぐわーよ、三回みけいんなー、かんし手ていぐわーけーん、足ひきぐわー  
んけーん撫なでいてい。「くぬ分ぶんさーに、なーいーさくや  
いびーぐとうや、なーひんのーうたびていきんそーん  
な。なーだぬ方かたんかいうもーちきんそーり」りちよ。  
うぬ話はなしいイリガサーや、うつぷる聞ちちゃんれー。あん  
しーねー軽かるくぐわーないんり。

あんし水みづぐわー撫なでいらんあいねーちやーうぶはぬ

で、どうぞ別の所へ行いつて下さい。まだ(はしか)に  
かかってない人の所へお渡わたりになつて下さい」と言いつ  
て、いつも手を合あわせると、軽かるく終わおつて、別の所へ  
渡わたつて行きなるといふ話はなしだつた。

そこに神様がいらつしやるんだから、心の中で「軽  
くして下さい」と祈いのつた。そして「今日は三日の水で  
すよ」「明日は五日の水ですよ」「また(今日は)一週  
間になつていきますので、別の所へお行きになつて下さ  
い」といふうに、その子に向むかつて言いつた。子ども  
を抱かかいて、手や足を三回さんかいづつ水みづで撫なでるんだよ。「この  
くらいでいいですので、これ以上重おもくしないで下さい。  
まだ(はしか)にかかっていない)方かたへいらつしやつて  
下さい」と言いつてね。イリガサーの話はなしというのはこれ  
くらいしか聞きかなかつたよ。

また水みづで撫なでなかつたら、いつまでも重おもくてね、手

や、手足軽てんのならんどーりち。あんさーにとーりねーよ、また一週間さーに、また九日水。「また九日なとーびーぐとう早くなー軽てんに、あしばふいたていらちうたびみそーり」入りねー、「軽ていんぐわーなやーに、遊ばちきんそーり」るしんかいよ、あしばふいたていらちきんそーり、言たんよ。軽てんぐわーなちきんそーりしえー、「足軽しくぐわーなてい遊ばちきんそーり」しんかいや、「あしばふいたていらちきんそーり」り。

67 はしかの神様

材料、満載うーちえーるふーじやたんりや。あんし、うーちよーしが、ある人ぬ、あるおじいさんやんりしがうぬ船んかい、「私ねーまーまでい行くしがやー、うぬ船んかい乗していとうらさんなー」り、言ちやんり

足も軽くはならないということ。そしてまた、一週間経つたら、九日水というのがあつた。「また、九日目になつていますので、(はしかも)早く軽くして、足もとも軽く遊ばせて下さい」とね。「あしばふいたていらちうたびみそーり」というのは、「足もとも軽く遊ばせて下さい」という意味だよ。

採集S 63・12・15 読谷ゆうがおの会 村山友江

話者 比嘉 カマド (明治四十四年四月十五日生)

翻字 知花孝子

材料を満載している船があつたようだ。あるおじいさんがその船主に、「私はどこそこまで行くのだが、その船に乗せてくれないか」と言った。すると「この船は満載だから、おまえを乗せることはできない」と言っ

やー。「くぬ船え満載やぐとう、いやー乗しーるくとー  
ならん」り言ちやんり。あんさぐとう、またなー一人  
ぬ船んかい頼らんりやー。あんし頼らしが、「船え満載  
やしがやー、乗らりーびーぐとう乗いんそーり」り言  
ちやんり。

あんさーに今度お港んかい着ちえーるばーてー。  
うぬ船え。あんし港んかい着ちやぐとう、「私ねーや、  
イリガサーぬよ、神るやんどー」り言ちやんりやー。  
あんさぐとう「いったーや、何りる屋号が」んち聞ちや  
んり。うぬタンメーが、あんし聞ちやぐとう、「何りる  
屋号やんどー」り言ちやしが、(屋号、私ねー分から  
んしえーや)。あんし言ちやぐとう、「あぬ船ぬ、船持  
ちやーぬ、名前ぬーが」りちやぐとう、「何やんどー」  
り言ちやんりやー。あんさぐとう「私ねーイリガサぬ  
御神るやぐとうや、今日やくぬ島んかい、イリガサー  
うりしんがるやぐとう、あんしいったーや、ミシジナ  
イリガサやうがまさやー」りち、うぬタンメーがんじや  
ねーたんりやー。話やたんり。

助きたぐとう、うぬ船持ちやー、うぬ一門のーむる  
軽さたんり。あんしあぬ一門のーよー、強はたんり。

たそうだ。それでもう一方の船主に頼んだところ、「船  
は満載だが、どうぞ乗って下さい」と言った。

そして今度は、その船はある港に着いた。港に着い  
たら、「私ははしかの神様だよ」と言った。そして「あ  
なた達は何という屋号か」と、そのタンメーは聞いた。  
そういうふう聞いたので、「〇〇という屋号です」と  
答えた。そう答えると、「あの船の船主の名前は何とい  
うのか」と聞いたそうだ。「〇〇です」と答えると、「私  
ははしかの神様だけどね、今日はこの村にはしかをも  
たらすためにやって来た。あなた達は軽くすむように  
しようね」と、そのおじいさんがおっしゃったそうだ  
よ。そういう話であつたつて。

助けてあげたから、その船主の一門ははしかは軽く  
すんだが、他の一門は重かつたそうだよ。それでその

あんさーによ、うぬ山原島よ、「私達や、ぬー一門や  
ぐとう、イリガサーやよ、ミシジナーうたびんそー  
りよー」りちよ、お願いやたんり、ちゃー。あんさー  
にイリガサーりしえーあんしやんり。ミシジ御願えん  
ち、うぬ道理やたんり。宮城ぬおばあから聞ちよーる  
ばーてー。

68 穀雨

百姓の話だがね。百姓の話はいちばん一カ年ぬ宝  
雨え穀雨やたんど。だからいつペーな一薬雨やてー  
さ。薬雨、アンモニアぬ混んちよーんでー思に。  
うれー四月なかいあんよ。清明ぬ後、穀り言やっ  
とーんよ。清明から穀ね、穀ぬ降いにから、な  
だいたい清明までいなか、肥料くわーち、穀雨んか  
いうたしーね、あんし百姓やうつさ分かりわるやっ

山原の村はね、「私たちは〇〇一門なので、はしかは軽  
くすまさせて下さい」と、いつもお願いしていた。は  
しかのミシジ願いというのは、この道理だということ  
だよ。(この話は)宮城のおばあさんから聞かされたわ  
けさ。

採集S52・2・20 読谷村民話調査団第三班(阿波根初美)

話者 比嘉清次郎(明治四十三年三月二十日生)

翻字 知花春美

百姓の話だがね。百姓にとって、一年でいちばんの  
宝雨は穀雨だったよ。だからとても薬雨だった。アン  
モニアが混じっているとかわらないか。

それは四月にあるよ。清明の後は穀と言われている。  
清明から穀ね。穀が降る頃から、もうだいたい清明ま  
でに、肥料を与えて、穀雨にうたすとね、百姓はその  
ぐらい分かってやれば、百姓として、食べていけるで

しえーや、うつき分かていしーぬんしえー百姓やむん  
のー食でいいちゆさ。

あんし、うぬ嫁ぐわーやいつペーやからやてーんてー。  
嫁ぬ穀なかい、雨ぬ降たぐとうよー、自分ぬ家ぬ前  
かい立つちよーていよ、自分ぬウストウてー、シ  
ム。

今降いる雨や 穀雨やしが

我が生まれ島ん 降いがさびら

りちじゃつびんあびていよ。

うり姑親が聞ちよ。「はあ、すばらしい。私たー嫁え」  
りち、うりが話 村中「私たー嫁えうぬあたいかんし  
聞ちんだん歌、吉屋チルーと同ぬむんどうやんでー」

あんすぐとう、嫁りーしん、ちゃー自分か心おいち  
までいん、何扱んかい行ぢやんでーまん忘らん。自分  
が心ぬ島あ。

しよう。

そこで、その嫁はたいへんしつかりしていたのでしょ  
う。穀に雨が降ったので、嫁は自分の家の前に立って、  
台所の前に立って。

今 降る雨は 穀雨だけど

我が里も 降ったであろうか

と大きな声で詠った。

それを姑が聞いてね。「なんとすばらしい。私たちの  
嫁は」と、その話を村中にした。「私たちの嫁は、聞い  
たこともない歌を、すばらしいことだ。吉屋チルーと  
同じぐらいだ」とね。

そこで、嫁というのは、いつにつけても、自分の心  
は、何扱に行つても忘れることはできない。自分の心  
の島は。

採集S 63・12・15 読谷ゆうがおの会へ知花春美

渡嘉敷ペークーは、あのう碁ぬありやたんり。御主加那志前んかい、ちやー碁打つちありやんりしが。わざわざ家ぐわーや小く造やーい。あんさーい御主加那志メーがめんしえーねー、うつちんち入るあたいてー。あんすぐとう渡嘉敷ペークーや、「御主加那志が来んてーん、私にんかい御辞儀しんしえーん」り、いつペー知恵持ちやたんり。

それでサナジンかきらんよーい畑ぬヒー草取いたんり。渡嘉敷ペークーよ。前やはやーに。あんさーに「ぬがペークー、いやーやサナジンかきらんよーい」「くぬひやーや、むるイーブンギーくぬひやーがむるうちゆ喰ていねーらん。くれーいへー苦しみりわるやるりちやいびんでー」りち、すんち歩ちゆたんりぬ話やし。

渡嘉敷ペークーは、碁が好きであつたようだ。それでいつも御主加那志の所に行つて、碁を打つていた。(渡嘉敷ペークーは) わざと家は低く造つてあつた。御主加那志がいらつしやつた時に、かがんで入れるほどにね。それで渡嘉敷ペークーは、「御主加那志がいらつしやつても、私に御辞儀をなさるんだから」と、大変な知恵者であつたそうだ。

またある日、フンドシもせずに畑の草取りをしていたそうだよ。渡嘉敷ペークーがね。それで「どうしたペークー、フンドシもしないで」と(言つたら)「こいつがイーブンギーを喰つてしまつて、もうこいつは苦しめないといけないと思つてそうしているんですよ」と、そのまま歩いていいたという話だよ。

注 渡嘉敷ペークー 渡嘉敷親雲上。尚敬王三一年（一七五〇年）首里赤田村の渡嘉敷兼倫の三男に生まれ、和名を兼副という。兼副は長じて花当の職を奉じていたが、二七歳の時鹿兒島へ行き、和歌、書道、生花、謡、茶道等の諸芸道を修得して七年後に帰朝し、尚穆王の世子、尚哲公の仮右筆となり、翌年右筆となった。尚育王十四年（一八四一年）九二歳のとき、北谷間切真栄城の名島を賜わり、「真栄城」に改称。尚育王十七年（一八四四年）旧曆三月二四日九五歳で桑江之前的奄で死す。

70 渡嘉敷ペークー〈二十日月〉

話者 池原昌繁（昭和二年四月五日生）

翻字 村山友江

仕事に出るといって、みんなで時間は遅れて出て来てね。あんさーに監督んかい、「なー私ねー、今日や月ぬ上がるえーま私ねー仕事おさびーさ。うりさーなかいぬがーらちきみそーり」りち、遅りとーしえー。  
あんさぐとう三時頃なたぐとう、ちようどう月や上がてい、「とー私ねー、月や上がとーびんむー家かい行かびらひー」りち、んなかー後う来やーい。んなかー先家かい帰たんり。

仕事にみんな一緒になって、遅れて出て来た。それで監督に、「もう私は今日は月が上がるまで働きますから、仕事に遅れてきたのはこれでかんべんして下さい」と言った。

するとその日の月は、三時頃には上がってしまった。「もう月は上がりましたので、私は家に帰りましょうね」と、みんなより遅れてきて、みんなより先に家に帰ったそうだよ。

採集 H 1・5・24 読谷ゆうがおの会（村山友江）

71 勝連バーマはつかづき 二十日月にじふがつ

話者 比嘉恒健(大正十二年一月十二日生)

翻字 玉城和美

あれは、首里城しゅりじょうの修復しゆふくで、勝連かつれんの人ひとを連れて行いったら、時間じかんに遅おそれてしまつて、その時ときに「君達きみたちは、こんなに遅おそくまで何なにしているか」と怒おこられたら、「今日けふはすいません。」勝連かつれんの人ひとは「お月様つきさまがでるまで、今日けふは、頑張がんばりますから許ゆるして下さい」と言いったら、じゃあ、今日けふはお月様つきさまが上あがるまで遅おそくまでやるといふような考かんがえ方かたで許ゆるしてあげた。それで三時頃さんじごころになつたら月つきが上あがったので、勝連かつれんの人ひとは、月つきが上あがったから帰かえろうと言いつて帰かえつたと、さういふような知恵しんがんがあつたと。

採集 S 63・12・22 読谷ゆうがおの会 村山友江

注 勝連バーマ 尚穆王時代の人。前浜三良、一七〇四年に勝連村平安名に生まれ、浜掟(浜の行政責任者)をしていたので、勝連バーマと呼ばれた。後に勝連間切地頭代となる。

72 喜屋武ちやん ミーぐわー

話者 山内昌永(大正三年十月十五日生)

翻字 村山友江

喜屋武ちやん ミーぐわーや背丈ふらぐまーぐわーやてーさ、馬ば

喜屋武ちやん ミーぐわーは背が低くて、馬車ばしやを持もつていた。

車持つちやーんやい。あれー喜屋武ミーぐわーや素足し歩ち、喜屋武ぬターリーり言たんよ。

ウフヤーぐわーが、ウフヤーぐわーがあれー喜屋武ぬターリーんかい習ちえーる手やしが、そーむのー習さんたんり。あんさーなかい後お喜屋武ぬターリーんかいさつたんり。弟子んかいさつたんり。

あんしからサーター持つちやーんやたんりぐとうや、製糖会社ぬ人達がうしえーいたんり。背丈お小さくとう。あんし何やんきーやん言たぐとう、なー製糖会社ぬ人が、あんしまた頑丈者やたぐとう、「うぬサーターぐわーりるあたい、うり持つちゆんなー」りち、喜屋武ミーぐわーが、馬車からブットウかちえーしー投ぎたぐとう、うぬ製糖会社ぬ人達が恐り入つちよーたんり。あぬ人お、くぬ世なていからる亡ちよーる。

喜屋武ミーぐわーは素足で歩いており、喜屋武のターリーと言われていた。

ウフヤーぐわーという方が、喜屋武のターリーに空手を教えていたんだが、本当の技術は教えなかつたそうだ。そうしているうちに、しまいには喜屋武のターリーにやられてしまったつて。弟子にやられてしまったそうだ。

それから砂糖運搬もやっていたんだが、背が低かつたので製糖工場の人達が馬鹿にしていた。それで製糖会社の人達が何やらブツブツ文句を言った。(喜屋武ミーぐわーは)力持ちでもあったので、「このくらいのサーターでも持つか」と、喜屋武ミーぐわーが、馬車から(サーターを取つて)パツと投げたから、その製糖工場の人達は恐れ入つたという話。喜屋武ミーぐわーは、戦後亡くなっているんだよ。

採集S 63・12・22 読谷ゆうがおの会 へ村山友江

注 喜屋武ミーぐわー 本名は、喜屋武朝徳。チャンミーぐわーとあだ名され、大正、昭和にかけて空手の名手として有名であった。首

里儀保町にある喜屋武殿内の三男で、三〇才の頃読谷村比謝江南橋通りにある本永家の養子となり、嘉手納にあつた沖縄県立農林学校で、空手の教官として六カ年務めた。昭和二〇年九月、七七歳で石川市石川にて死亡。妻は屋良の林堂家の娘カマド。

あれー小さい頃から武士やるばーてー。武士なやーにかい、あれー今、何歳なんしえーがやー。戦前ぬ午ぬ人やしが、百余いしが。

うぬ人おでーじな、またあちらこちら行つて、相当活躍そーる人やしが、ありが話や幾ちん三ちんあいやすしが。自分が女んでーやれー、脇んかいひつくわーちやーに。ジャクジャク橋りち、航空隊の第三ゲートぬ川ぐわーぬ橋が架かとーしが、昔え丸木橋やぐとうよ。

うりからクンノイ青年たーんかい追ーりやーにかい、あんさーにかい、かんえーぬ者、うんにーねー待ち伏せしーねー青年たー、揃とーていすぐとうよ。まーくれー「喜屋武ミーりーしが来ぐとう、たたき殺ちとうらさ、夫婦」りちやぐとう。

あんさーにから、くぬ人がかちみんそーち、自分ぬ女かちみんそーやーにかい、すぐ川ぐわー飛んじ、うっ

あの人は小さい頃から武士なんだね。武士で、今(生きていたら)何歳なられるかな。戦前の午の人なので、百は余るだろう。

その人は大変な人で、あちらこちらで相当活躍している人で、その人の話は幾つもあるよ。自分の女であれば、脇にかかえてね。ジャクジャク橋といつて、航空隊の第三ゲートの川に橋が架かっているが、昔は丸木橋でね。

そこで、クンノイ青年たちに追われて、その頃は待ち伏せるときは青年たちが揃つてやるのでね。「こんな奴、喜屋武ミーという人が来るので、たたき殺してやろう。夫婦とも」と。

そうして、(青年たちに追われたので)この人は自分の女をかかえて、川を飛び越えたので、青年たちは追つ

たー追てー来うさんてーるばーてー。

話やしがよ、うぬあたいたい武士やたんり。あんさーにかい、あれー、くぬ戦争なかい亡ちやんり。石川うてい。

て来れなかつた。

そのぐらい武士だったという話である。そうして、この戦争のとき、石川で亡くなつたそうだ。

採集S 63・12・15 読谷ゆうがおの会へ知花春美

注① 航空隊 嘉手納飛行場のこと。嘉手納町、沖縄市、北谷町にまたがり、面積は二〇、四三六、〇〇〇平方メートル。

② クンノイ 嘉手納字国直のこと。現在は米軍用地(嘉手納飛行場)に接收されている。

74 佐久川三郎

話者 比嘉清次郎(明治四十三年三月二十日生)

翻字 知花春美

佐久川三郎という者は、あれー人騙さー。読谷ぬ比謝人、魔法がき。

佐久川三郎という人は、読谷の人だが、魔法をかけて、人の目をくらましていた。

巡査んぬーん「うまんかいとうとーり」でいやーに逃ぎやーにかいよー。くぬ掃除みぐいねーよー、巡査人がみぐいぐとう、(今る婦人幹部ぬみぐいしえーやー、掃除まーいや)巡査ぬるみぐいぐとう、「くれー騙ちとうらしわるやつさー」りち、巡査ぐわーんよ、自分ぬ家

巡査にも、「そこにいなさいね」と言つて、(自分は逃げた。清掃検査のときは巡査がまわるので、(現在は婦人会の幹部がまわるでしょう。清掃検査はね)「これは騙してあげよう」と、巡査が自分の家へ来ると、「はい、いらつしやい」と、魔法をかけた。巡査は気がつ

んかい来ねー、「はい、いらっしやい」りち、あんしか  
きやーさーによ。行ったり来たり、自分ぬ家ぬ前から  
巡査の一分からんばー、魔法かきらりてい。

あんさーにかい、二、三時間、うまんかい行ちえー  
はちやいしち。巡査るやしえー、人ぬ見ちんよ。歩か  
ぎーさやーりちる見じゆる、掃除まーいやぐとう、う  
まから来る人お魔法かきとーんれー思んたんよ。とい  
う話があつた。

75 床柱の逆立て

イークぬ柱、チャーギぬ柱、なーイークおしえーる  
人ぬる分かとーる。見じならとーぬ人ぬる分かいる。  
人ぬ勘どうやぐとう。

くれーくまー境目、くりが根つこやみ分かいみ、う  
りとー同ぬむんさー。分からんしえーや。同ぬぐとう

かないので、自分の家の前から行ったり来たりして  
た。

そうして、二、三時間、そこを行ったり来たりして  
いたが、人が見ても、巡査が清掃検査でまわっている  
んだねと思つていた。魔法がかけられているとは知ら  
なかつたという話があつた。

採集S 63・12・15 読谷ゆうがおの会へ知花春美

話者 比 嘉 清次郎（明治四十三年三月二十日生）

翻字 知 花 春 美

いぬまきの柱、もういぬまきはやつた人が分かつて  
いる、見なれている人が分かる。人の勘なのでね。

ここは境目、これの根は分かるか、これと同じこと  
さ。分からんでしよう。同じようにしかみえないので、

るあぐとうよ。そういうふうなたてて、大工一人しる  
分かいぐとう。うりとうつたぐとう。な〜くまぬ。主  
かい私ね〜さったん。負きたん。な〜かんないね〜落  
度やんば〜。ありんかい損の〜さわん替りりち、二番  
大工頼ど〜るば〜。あり替りり。

あんさ〜にかい願ていよ、祝ぬ日ね〜ティーンモー  
イしみていきみそ〜りり。あんさ〜なかい、大工おティ  
ンモーイそ〜るば〜て〜。今度お傷ちきていよ、すぐ  
ボンみかち。な〜んちや顔るやしえ〜や。アンマー怒  
みち、「いや〜、わん顔んかいティーンかき〜るば〜い」  
「悪さいび〜たん。おか〜」りちやぐとう、「くり替てい  
うさぎ〜び〜ぐとう」逆立ちやぐとうる言やんど〜、  
うり言やんぐとうに「替ていうさぎ〜び〜ぐとう無傷  
さ〜に、ま〜んいたみんなきらんぐとうに無傷しわつ  
た〜替ていうさぎ〜び〜ぐとう、ぬ〜ん悔やみんそ〜  
な。おかあさん」「あんすみ、あんやれ〜しむさ。人ぬ  
顔んかい、傷ちきてい、あり切らつと〜ぐとう」とい  
うふうに。

ティーンモーイというのは、それから出た。逆立ち  
し〜わから主え長えまつたん。あんすぐとう家あ造く

(柱を) そのように立てた。大工ひとりにはか分から  
ないのでね。(しかし主にさとられて、) もうこの主  
人に私はやられた。負けた。もうこうなったら落度  
なるわけだ。損はしても替えてくれと、二番大工に頼  
んだ。替えてくれと。

そして、お願いをして、祝の日にティーン踊りをさ  
せて下さいと。それで、大工はティーン踊りをしたわ  
けだ。今度はボンと(柱に) 傷をつけてしまった。も  
う顔になるでしょう。奥さんは怒つて、「おまえは、私  
の顔にティーンをかけるのか」「すみませんでした。奥  
さん、これは替えてさし上げます」と、これが逆立ち  
だとは言わないでね。それを言わずに、「替えてさし上  
げます。無償で、どこにも傷みをかけないように、無  
償でわたしたちは替えてさし上げますので、何も悔や  
まないで下さい。おかあさん」「そうするか、そうだつ  
たらいいさ。人の顔に傷をつけて、あれを切つてある  
からね」というふうだね。

ティーン踊りというのはそれから始まった。逆立ち、  
柱が逆になっていると主は長くは生きない。それで家

いねー柱あちやーあるとうーい。

を造るときは、柱はいつものようにね。

採集 S 63・12・15 読谷ゆうがおの会へ知花春美

注 ティーン 手斧の一種。柄の長さ五十センチぐらい、刃が鋏のように柄と交差する方向についているもの。

76 話千両

話者 松田平信(明治二十六年十二月一日生)

翻字 知花春美

んかしよ、ある村なかい、夫婦うてーるぐとーしが、  
貧しい者なやーによ、皆あ税金払いしが、うったーや  
税金のー払いさんぐとーん。

むかしね、ある村に、夫婦いたようだが、貧しかつ  
たので、皆は税金も払っているが、その夫婦は税金も  
払えなかつたようだ。

うれーちやーがらし働ち、皆ぬぐとう、税金ぬん納  
みりわる同じ人間やるりち考てい、夫婦相談さーに、  
夫お旅んかい行ぢもーきがやらすんてー。

その人は、どうにかして働いて、皆のように税金も  
納めることが同じ人間であると考えて、夫婦で相談し  
て、夫は儲けるために旅へ出た。

あんし、行ぢ、一カ年に三十両ぬ約束さーに ある  
所んかい働ちえーるぐとーん。あんし一カ年ぬちりた  
ぐとう、家んじ妻子ぬ見舞んしち来わりち。あんし、  
よんなーよんなー歩ち三十両や主人からいいやーにさ  
ぐとう。なー今ぬぐとうし道んゆたさーねーん、乗い

そして、一カ年に三十両の約束で、ある所で働いた  
ようだ。そして、一カ年が過ぎたので、家にいる妻子  
に会ってこなければと思つた。三十両を主人からもらつ  
て、ゆつくりゆつくり歩いてた。もう今みたいにお道  
もよくないし、乗り物といつてもないので、旅するに

物りちん　ねーんどうあぐとう旅から歩ち。

あんしするうちねー、夜んゆつ暮つたぐとう、なーある家庭かかてい、うまんかい願えし、いーねー「なー一夜あ泊みていくみそーり」りちしちやぐとう。

「んー、泊みーしえー泊みーしが、いやー私話い買いみ。話い買りわる泊みーしが」「話いどうやんむー、ちやみし大くおさのーあらに」りち考てい。「買いびーぐーとう泊みていくみそーれー」りちやぐとうよ。

「雨降いぬばーねー、岩宿おすんなよー」りちやぐとう。雨降いぬばーなかい、岩ぬ下に宿はしない。やつていかない意味てー。岩宿。うつび言やーに、「はい！十両」りちやぐとう、約束やぐとう、なーうつささーに十両、あんし払てい。

またよーんなー、よーんなー歩ちしー、ある港んかいはつちやかていよー。あんし、うぬ港から、船から行ちゆがやー、また遠みぐいすがやーりち考ていあんしまた、うまんじ夜ゆつ暮つたぐとう。

ある家庭かかていしちやぐとう、「なー泊みていくみそーり」りち「泊みーしえー泊みーしが私話い買りわるいやー泊みーる」りちやぐとう。何処にん寝ら

も歩いていたわけだ。

そうしているうちに、日も暮れてたので、ある家に寄つて、「もう、一夜でも泊めて下さい」とお願いをした。

「んー、泊めることは泊めるが、あなた、私の話を買うか。話を買うのであれば泊めるが」「話だのに、そんなに高くはないでしょう」と考えた。「買うので泊めて下さい」と言った。

「雨が降るときは、岩宿はするなよ」と言った。雨が降るときは、岩の下に雨宿りはやっていけないという意味だね。岩宿はね。それだけ言つて、「はい十両」と言つて、約束なのでもうそれだけで十両を払つた。

それからゆつくりゆつくり、歩いて、ある港にきた。その港から、船で行こうか、また遠まわりをしようかと考えているうちに、日が暮れてしまった。

ある家に寄つて、「もう泊めて下さい」とお願いをした。「泊めることは泊めるが、私の話を買うのであれば泊めてあげる」と言った。どこへももう寝るところが

らんぐとう泊まてい。

うぬ人が言い分の、「急がば廻れ、はい十兩」りちやぐとう。うぬ人ただ「急がば廻れ」りち。あんさーにうりし。

あんし、また歩ちゆんでいしーにん、またうぬふーじーさーなかい、また泊みていすんなていし。うまんじまた「私あ話し買りわる泊みーる」「買やびん」りち、「短気は損気」りち、「はい十兩」りちやぐとう。

なー一カ年働ち儲きてーる金のー三十兩るやし、むる十兩、十兩なー、三回買たぐとう、家かい持つち来る金のー無ん。うれー妻え、なーちやーし話しすがやーりち。

あんし、家あ行ぢやぐとう。なー家やまた、男、女すりていよ、いっぺー御馳走すがてい、だんだんやてーぐとう。

あんさぐとう、うぬ夫お「私ねー旅んかい行ぢやち、くれーくんぐとうし、女りち、ぜいたくるそーる。くれーたたき殺ちしわるやる」りち、考ていよ。一応ブイジラーんぬーん持つちよーたんりしが、「まていよー『短気は損気』りる話し、私ねー買ていくれーあだな

ないので、泊まることにした。

その人が言うことには、「急がば廻れ、はい十兩」と言った。その人もただ「急がば廻れ」と言つてね。

それからまた、歩いて、同じように（日が暮れて）泊まることになった。そこでもまた、「私の話を買うのであれば泊めてあげる」「買います」と。そして、「短気は損気」と言つて、「はい十兩」と言つた。

もう一カ年働いて儲けたお金は三十兩しかないが、十兩ずつ、三回買ったので、家へ持つていくお金はなくなつてしまつた。もう妻に、どのようにして話をすればいいか困つてしまつた。

そして、家へ帰つた。家では男、女そろつて、たくさんのお馳走を作つてあつた。

それを見て、夫は「私は旅へ出して、これは、このように、女というものはぜいたくして、たたき殺してやろう」と考えていた。一応、棒を持つていたが、「まてよ、『短気は損気』という話し、私は買ったので、それをあだにしてはならない」と、思いなおした。

ちえーならん」りち、いいねー考なかい。

ちやーならわん行ぢ、いんねーすんねー通たぐとう、

「来しえー」りち妻んかい。「私ねー昨夜え貴方がめん

しえーんりち、夢見じゃーなかい、貴方迎んりち皆す

りてい作てーんろー」りちやぐとう、「あんなるやるい」

りち、「私あうぬ話聞かん買らんでーるむんやれー、

うぬブイジラーさーにうち殺すてーさやー」りち。

やつぱり人お賢いならんあれー金のーもーきららん

さーりち。あんしうりから感じてい夫婦働ち、皆ぬ

ぐとうし税金ぬん納みーるくとうなたんり。

どうなつてもいいからと行つてみると、妻に「来た

よ」と言つた。「私は昨夜は、貴方が帰つてくる夢を見

て、貴方を迎えるために、皆そろつて、(御馳走も)作つ

てあるよ」と言つた。「そうだったのか」私は「短気は

損気」という話を聞かずに買つてなかつたとしたら、

その棒で殺していたかもしれない」と思った。

やつぱり人は賢くなければ金儲けはできないと。そ

のときから感じて、夫婦働いて、皆のように税金も納

めるようになったということである。

採集S 52・2・20 読谷村民話調査団第十三班〈伊波百合子〉

77 白銀堂由来

話者 池原昌徳(大正五年十月二十一日生)

翻字 棚原 めぐみ

白銀堂に祭られていゝ、あの神様は、だからさういうような不貞ですか。えー女の身を守るためにです。その

まあ夫婦がおります。そして一人はおります。その家庭にね。その旦那は薩摩に、あの役人の勤めで仰せつかつて、

薩摩に旅行するわけです。重大なまあそれらしい地位のある人で、上様からの命令を受けて、そしてそれを軍用し

に行くわけですよ。したらそれは妻はもう、その自分が留守のうちに、人に犯されはしないかというようなことがあるわけ、心配があるわけ。あるんですけれども、もうこれ勤めだからうちわけなければいけない、旅に出なければならぬ行って行くんだが。

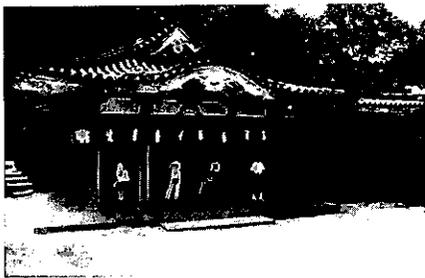
帰つてくると、自分の家に、自分の寝室に男が、男がその自分の家内とこう並んで寝ておるわけですよ、寝ている。かーつとなつてね。こりやあもう私の留守中に不貞のやからが入っていると、かーつとなつてね。男の支度して寝ているもんだから、そして刀を抜いてね。「さてよ、これ」、「意地ぬ出じらー手引け、手ぬ出じらー意地引け」という言葉を親から教えられているわけ、親から。それを思い出してね。「さてよ」、そして刀を納めて、実際に調べてみたら自分のお母さんであったということ。お母さんが男の支度をしてね、この嫁の身を守るために寝ていた。そしてそれが親を救った。そして親のその遺言をね、私はあの思い出して、親がこういうふうにして教育させておいたために、親も助かつて、勤めもりつぱに終わって、その家庭は安全で幸せに暮らしたと。

だからそういうような言葉そのものは、後の人に伝えるために、あの白銀堂というのに祭つておったという話。

採集 S 63・12・21 読谷ゆうがおの会へ知花春美

注① 白銀堂 国道三三二号線から報得川を渡ったところ、糸満の人口にある。古く

から糸満の人々は、出漁や旅立ちの時に、この白銀堂に無事を祈った。ハーリー競争も、この氏神への奉納行事のひとつ、又、空手の守護神でもあり、空手を志す人々の参詣も多い。



白銀堂

昔え沖繩や唐ぬ子、孫やたんりちよ。あんし、唐んかい税金の納みりわるやたんり。

いいねー、あんさーに親あな沖繩ぬ大将やたんりよ。王様。あんさーに親んかい、唐からぬ注文ぬよー、雄鶏ぬ卵とうまた弁御嶽、二ち唐んかい持ち来りちぬ命令ぬちやぐとうよ。なうぬ親ん雄鶏ぬ卵りちん、なーあがやー、また、弁御嶽、うへーるむんちやーし壊ちいちゆがやーりち、いつペー心配しよ、いつペー苦労しめーたんりしが。

うぬ子ぬ盛毛や　なーむるふりたふーなーし、昼遊び、勉強やむる夜しつよー。あんさーにかい、さぐとう、あんしな親ぬいつペー心配そーし聞ち、後おなー「心配しみそーんなけー。貴方がならんあらー、親、子あていーちるやる、親ぬ身代わい私が行ちやびーさ」んち。あんさーに、「あんしえー　いやーがていらむんなー」、親がーふりむんりちるんちよーしえー。い

むかしは、沖繩は唐の子、孫ということ、唐に税金を納めなければいけなかつた。

いえば、(モーイの)親は、沖繩の大将だつたそう。王様。それで、親に、唐からの注文で、雄鶏の卵と弁御嶽、二つを唐に持つてきなさいと命令がきた。もう親は、雄鶏の卵といつてもあるか、また弁御嶽、こんな大きいものを、どのように壊して持つていくのかとても心配し、苦労なさつていた。

その子、盛毛は、バカなふりをして、昼は遊び、勉強は夜やつていた。そして、親がとても心配しているのを聞いて、「心配なさらないで下さい。貴方ができないのであれば、親も子もひとつなので、親の身代わりとして私が行つてきます」と言った。「そうか、おまえがね」親にしてみれば、(モーイは)バカとみているからね。

いぬんしえー、ふりむんりちる。

あんさぐとう、女ぬ親あいつペー心配しみそーちよ。うりが行ちゆんりちやくとうな、あぬ寺はい、くぬ寺はい、なう願んうさーぎんり。な毎日休い暇んねーん、女ぬ親あしみそーちやんり。

あんさぐとう、くぬ盛毛や、お母さんが夜ゆつくみせーなかに、うーばんじ鼻ごーごーし寝んじんしえーるばーなかに「アヤーさい、アヤーさい」し起くち、あんし起きーねー何りん言らん、またん寝んじんせーに、またん「アヤーさい、アヤーさい」し何べん起くち、むる返事えさんてーるぐとーん。

アヤーん怒みちよ、「人お起くちから何やら何やんりる言る。うぬふーじーしひや、人お昼おくだんりていんういる。起くすんなー」りち。

「貴方おあんし怒みちよーんせーる。とーよーさい、貴方が怒みちよーしとー同むん、う願、てい願ぬん親ふーじーんかい、また一回なーしる供ぎーる、あぬ寺はい、くぬ寺はいし、神様ん怒みちるしんしえーぐとうや、止みみそーれー」りち。

「あーそうか」りち、あんさーに、るくいっペー親

そうすると、母親はたいへん心配なさってね。モーイが行くとなつたので、あの寺、この寺へ行き御願いをした。もう毎日休む暇もなく、母親は寺まわりをした。

そこで、この盛毛は、お母さんが、夜休んでいるとき、いびきをかいて寝ている最中に、「お母さん、お母さん」と起こして、起きると何も言わない。また眠ると、「お母さん、お母さん」と何度も起こしたが、(盛毛は)何も言わなかつたようだ。

お母さんも怒って、「人を起こして、理由があつたら何か言いなさい。そのようにして、人は昼は疲れているのに起こすのか」と。

「貴方はこんなに怒っているが、貴方が怒っているのと同じく、御願でも祖先に対して一回でいい。あの寺行ったり、この寺行ったり、神様も怒るのだから、止めて下さい」と言った。

「あつそうか」と(お母さんは)言った。親があつ

ぬあまはいくまはいすし見らん止みてい。

あんしなー、無事に唐んかい親ぬ身代わいとうし行ぢ、あんしあまんかい行ぢやぐとう、「いやーや親あ来らん、いやーが来が」りちやぐとう、「親あ産むゆーし私が来びたん」り、「あんし、男ぬ親あ産むゆーしんなー」りちやぐとう、「あんし、貴方なーや、雄鶏ぬ卵ん御用り言みしえーるむんぬ、言いるんしえー」りちやぐとうよ。「あーくれー変わとーさー」りち、唐ぬあんさーにかい、御馳走ぬだんだん。

いちばんのー、人お、いいるんしえー男んでー、煙草吸ちゆぐとう、煙草盆から出じやちよ、あんし、火い茶わきりち、はさだぐとう、齒しくーやーによー、またうぬ火鉢んかい入つたんり。

あんし、また魚よ。どんぶりんかいうちきてい、うりんなー生ち物るやぐとう食まりーやさんしが、なーうぬ人お何んくい茶あ飲みしえーがちー、うめーしさーにかい ちつくじやーなかい、パタみかちしちえーういし、楽しみやたんりよ。

あんさぐとう、「うれー沖繩んかい返しーねー、くり

ち行つたり、こつち行つたりするのを見かねてそう言つたわけだ。

そうして親の身代わりとして唐に行つた。そこに着くと、「おまえの親は来ないで、おまえが来たのか」と言つたので、「親は産気づいて私が来ました」と答えた。「それで、男の親でも産気づくのか」と言つたので、「そうですね、貴方たちは、雄鶏の卵御用とおっしゃるのに」と返した。「この人は変わっている」と、唐でいろいろ御馳走でもてなされた。

最初は、人、いえば男は煙草を吸うので、火のお茶受けだと、煙草盆を出されたので、口にくわえて火鉢の中へ入れたそうだ。

それから、魚ね。どんぶりに入れて、それも、生き物なので食べることはできないが、(モーイは)お茶を飲みながら、何もかも箸でつついて、パタツと動いたりして楽しみだつたようだ。

そして、「これを沖繩に返したら、どんなことをする

がーちやーぬくとうるすらー分からんむし、くれーく  
まうてい殺ちさんあれーならん」りちよ。あまー考てい  
殺するちわなてい。くぬ人お武士んやたんりさー。武  
士んやぐとう。

あんさぐとう、あとー唐ぬ王ぬ、「いやー望みえねー  
に」りちやぐとう　くれー「あいびーん」「ぬー望みが」  
りちやぐとう、「ちよーどう一日しえーしまびーぐとう、  
唐ぬ王なちくみそーれー」りち、願たんりよ。いいねー  
ただ一日しえーしむぐとう唐ぬ王なちくみそーり、  
りちやぐとう、「あんすん」り言ちやぐとう。

あんしーなー「沖繩から五年間のー税金のーむるとう  
らんぐとう」り言ち。だー一日なー唐ぬ王なとーしえー  
やー。うぬ命令し。あんさーにかい、家かい帰ていもー  
ち、五か年間のー沖繩ぬ税金のーぬがーたんりる話。

か分らないので、ここで殺さないといけない」と考  
え、殺すことになった。この人は武士でもあつたそう  
だ。武士でもあつた。

そして唐の王様が、「あなたの望みはないか」と言っ  
たので、「あります」「何が望みか」と言つたので、「ちよ  
うど一日だけでいいので、唐の王様にして下さい」と  
お願いをしたそうだ。いえば、「ただ一日でいいですか  
ら唐の王様にして下さい」と言つたので、「そうするか  
と言つた。

そうして、ここ五年間は、沖繩から税金を取つては  
いけない」と言つた。一日だけ唐の王になつてい  
しょう。その命令をした。それから家に帰つてきて、  
五年間は、沖繩は税金をまぬがれたという話である。

採集 S 52・2・20 読谷村民話調査団第十三班〈伊波百合子〉

注 モーイ親方 本名は伊野波盛平で毛氏八世。親方の位にあり伊野波親方と呼ばれ三司官職につき、知行高三百二十石都合四百石を賜  
う、同十月美御大親職に任ぜられる。

翻字 知花春美

親あ今度お支那からいろんな問題がち「モーヤーちゃーすが」りち「心配そーんでー」「何ぬくとうやいびーが」りち「うれー丸太ぬちよーしがや、うぬ丸太棒ぬ、何処が根つこがや、先がやーりち、うり調びてい。私ねー見ちやんでーまんむつとう分からん。模様ぬ、切り口ぬ模様、見ちん分からん。「ちやーすがやー」りちやぐとう「えーあんさびーみ」りやーなかい、「心配あしみそーんなけー」りち、また親んかいなぐさみ。

「いやー分かんなー」「んー私ねー分からんのーあていん心配あしみそーなけー」りち、あんし「うりが心配さーんねーないんなー。うりちやーし決みーが」りち、あんさぐとう今度お、うっさんかいしまさーなかい。

夜、夜中よー、またすんちやーすんちやーし、首里ぬ下ぬリングムイんじ、浮きやーなかい。夜、印ぐわーちきてい、釘ぐわー打つちよ、まーがらんかい、根い

親のところは今度、支那からいろんな問題がきて、「モーヤーどうするか。心配だが」「何のことですか」「これは、丸太がきているが、その丸太棒の根つこと先を調べなさいと。私は見ても全く分からない。模様、切り口の模様を見ても分からない。どうしようか」「あつそうですか。心配なさらないうで下さい」と親をなぐさめた。

「おまえ分かるのか」「んー私は分からないが心配なさらないうで下さい」「それでも心配しないといけない。それをどうして決めるか」と話は、終わった。

そして、夜、夜中に、またひっぱって行って、首里の下のリングムイで浮けてみた。夜、印をつけて、どこかに釘を打って、根つこのところにね。

ぐいやんとくまかいてー。

なーあんしきびてい、すびちんぢやーい、あんし親んかい言ちやるふーじや。「まーや根ぐいやいびーぐとう、まーや、すーだやいびーぐとう」あまから役人決まいしえー。「すーだ、根ぐい、いやーやちやーし分かいが」りち、「言いるんしえー、証拠物件りしが、水んかい浮きみそーりよー」りち、「あんし水んかい浮きーねー、沈むしえー、根ぐいやぐとうー先えまたすーだなとーぐとうや、浮くる所おうつきしわかいいびーさ。うれー誰がやていん目し見ちえーやー先がやら、根がやら、根つこがやらー、試験さんかじれー分からんるあぐとう、私にん試験のーしちんじやびてーぐとうりち、自分ちゆいなーさーにかいうんぐとうーしえーるふーじや。

あんし、親んかい言ち、「ありがとう」りち、とうとう薩摩ぬ連絡んちやぐとう、まじ試験、根ぐいんかい釘打つちよ。「うまー根ぐいやいびーん」りちやぐとうよ、「いやーちやーし分かいが」りち。あんしまた、今度ん前んかい浮きやーにかい「やつぱり沈むん所あ根ぐいやさ。浮ちゆん所あ先、すーだなとーびーぐとう。くりまちがいねーびらん」りやーい。

もうそのようにして、ひっぱって行って、親に言ったようだ。「どこが根つこで、どこが梢です」と。役人は決まっているでしょう。「梢と根つこ おまえはどうして分かるのか」と聞くと、「いわば、証拠には、水に浮けて下さい。水に入ると、根つこは沈んで、先の方は浮くでしょう。それだけで分かりますよ。」とこれは誰がでも、目で見て、先なのか、根つこなのか 試験しない限りは分からないので、私も試験しましたのでと、自分ひとりでやったようだ。

それから、親に「ありがとう」と言った。とうとう薩摩の連絡もきたので、まず試験、根つこに釘を打つてね、「ここが根つこです」と言うと、「おまえはどうして分かるか」と聞いた。そして 今度は前にして(水の中に入れて)沈む所は、根つこ、浮く所は先、浮く所は梢になっています。まちがいありません」と答え

それで試験は合格、やつぱり向こうも、まあ沈むん所、あ根ぐい、浮ちゆん所、あ先というふうには口答がきたらしいよ。

あんさーにかい、うりから親あ信用し、くれーちやー遊どーんねーしが、やつぱり遊ぶんりちやんでーまんなー、夜ぬ、人ぬ分からんないからぬ勉強、相当ぬ勉強苦学しよ、しちよーてーる話。

それから恩納山ぬ話、うぬ後お灰繩御用ぬ話。

灰繩し「綱あの一やんかい焼きみそーれー」うりんまたモーヤー考え。あんさぐとう、灰繩ちゃんとう作てい。灰しん繩作らりんなーりち、なー皆びつくりやしが。あんしうぬ答なーちゃんとううまんかい、うり答さんていん灰し繩のーてい。ちゃんとううまんかいコンクリーんかいやていん、地んかい置ちよー、うぬまま焼ちえーるふーじや。灰ぬ繩のーてーんりち、灰繩御用や。

恩納山、あぬー内地ぬ薩摩んかい じひ持つちとうらし。恩納山、ひとつの物考えぬ試みさんがたみやぐとう。うりんなー親あ心配し、ちやーし口答すがやー。あんさぐとう、うりが答や「くひぐわーぬ沖繩んか

そして、試験は合格。やつぱり向こうからも、沈む所は根っこ、深く所は先というふうには答がきたようだ。

そのときから、親は信用してモーヤーはいつも遊んでいるようだが、やつぱり遊ぶにしても、夜、人に氣づかれないように勉強、苦学したという話である。

それから恩納山の話、その後は灰繩御用の話。

灰繩は、「綱を縛って焼いて下さい」とそれもモーヤーの考えであった。そうして、灰繩を作った。灰でも縛ができるのかと、もう皆びつくりした。そして、その答がちゃんとそこにあつた。答えなくても灰繩で繩を縛つてあつた。ちゃんと、コンクリートか、地の上に置いてそのまま焼いたようだ。灰で繩を縛つたということ、灰繩御用である。

恩納山、あもう 内地の薩摩にせひ持つてきなさい。恩納山、ひとつの物考えを試そうというのである。それも親はどのように答えようかと心配した。

その答は「これだけの沖繩に、(恩納山を)積んでい

いよ、くぬ船ぬねーらんよ、積ち行ちゆる船ぬねーらん、またうぬ引越しえーやーり思いしがよ、根からうぬ杭ぬねーらんない、杭とう船とう積むる段どりえお願ひします。あんしーねーしく、私たー恩納ぬ山あ薩摩んかい送いんどー」り言ちやぐとう、「なるほど、これも負けた」り。あんしな、うりんいえばことはあつている。

うにーねー、モーヤー親あ三司官りちよ、三司官りち、そういう役目やたんりよ。それで恩納山とうか、灰繩とうか丸太棒ぬうんなこんなぬ口答、モーヤーがぜんぶあかちし。

「ようやくこの自分ぬ親ぬ勤めは向こうから終わつて、盛大に表彰がきたらしいよ。表彰状とう相当ぬあまからぬ、くまんかいぬ何がやたらー品物がやたらー分からんしがよ、くぬ表彰さつたる話てー。

あんさぐとう、親あこれも自分一人が考えやあらん、私たんかい、モーイぬおかげでかんしし、あんさぐとうモーイんなー丈ふるふるなたぐとう、また沖繩ぬくんとくとうし救たるたみなかい、三役んかいうりから勤みーるくとうない。なー偉いというふうな位んかいモー

く船がなくて、引越しやろうと思つても根をおこす杭もなく、杭と船と積む段どりはお願ひします。そのあとに、すぐ私たちは恩納山を薩摩に送ります」と言つた。「なるほど、これも負けた」と。これも道理はあつている。

その時には、モーヤーの親は三司官といつて、その役目であつた。それで 恩納山とか、灰繩とか、丸太棒の問題は、モーヤーがぜんぶ解答したということである。

ようやく、この自分の親の勤めは 終わつて 盛大に表彰がきたらしいよ。あそこからここにどういふものか分からないが、たくさん品の物が送られた。表彰された話である。

それで、親は、これもひとりの考えではなく、モーヤーのおかげでこのようにできた。そしてモーヤーも、大きく成長して、沖繩をこのように救つたので、三役に任せられるようになった。もう偉い位につき、モーイ親方という名もその後からついたという話である。

イ親方えいかたという位くらいはその後あとから聞きちやぬ話はなし。

その前は伊野波いぬはモーヤーまゑりち、話はなしやあしが伊野波親方いぬはえい話はなしえそうかたいうふうになつたらしい。

注 三 司 官 首里王府の職名および位階名。

80 モーイ親方えい

モーイ親方えいりる人ちよお、あれちいーこゝろ小さい頃りくちやから理屈りくちやん  
どどー。あれあたまー頭すくが秀すくりていよ。小ちいさい頃じぶんからよ、子こ供ども  
の頃じぶんからよ、だいたい分わかいてーんてー。

あのう、ビレイティンわて分わかるかね。首里しゅりぬ疏大りゅうだい跡  
側すば、円覚寺えんかくじぬ側すばやさ、ビレイティンえんかくじ。あぬ円覚寺えんかくじぬ側すば  
んかいよ、あのう看板かんばんかきてーたんりよ。「くまんかい  
小便しべいすしえー十銭じっせんぬ罰金ばつぎん」りち。

あんさぐとう、モーヤーしべいや小便しべいしみらつていよ。ま

その前は伊野波いぬはモーヤー、伊野波いぬはモーヤーと話はなしはあ  
るが、伊野波親方いぬはえいの話はなしはそうかたいうふうになつたらしい。

採集S 52・7・3 読谷村民話調査団第八班〈知花利江子〉

話者 比 嘉 清次郎（明治四十三年三月二十日生）

翻字 知 花 春 美

モーイ親方えいという人は、小ちいさい頃じぶんから理屈りくちばい人ひとだ  
よ。あれは頭あたまが秀すくれていてね。子こ供どもの頃じぶんから、だいた  
い分わかつていたののでしょう。

あのう、ビレイティンわて分わかるかね。首里しゅりの疏大りゅうだい跡  
側すば、円覚寺えんかくじの側すばだが、ビレイティンえんかくじ。あの円覚寺えんかくじの側すばに、  
看板かんばんをかけてあつたそうだ。「ここに小便しべいする者は十銭  
の罰金ばつぎん」といつてね。

そうすると、モーイはそこに小便しべいをしてね。津覇親

た、津覇ぬ親方がらーや、「えー伊野波、いやーうまんかい小便すりー。いやーくれー見らんるありー」りちやぐとう、「見ちよーびんどー。見ちよーぐとうどうさびんどー。うり十銭うちきれーしちしまびらんに、十銭うちきれー」、「こつちに十銭りちよ。十銭うちきれー小便しんしむんりちよ。「あんすみ。んだ十銭ねーれー」うぬ親方が取やーにかいよ。

モーイぬ話や煙草。親ぬ、「モーヤー、いやーあんすかまでいん煙草吹ちひやー、ならんどー」りち、叱たぐとう、「ぬぐわ、あんしえーちやぬあたい吹けーしまびーが」りち。「二回なーどう吹くどう」りち、「一日に一回なーししむんよー。二回ちやー吹きーしんないるばーい。一回、二回しえーしむんよー」りち。

あんし、うぬ一日分の束しなてい置ちえーたんりよ。にぎやーなかい、ちやつペーぬキセルうたち、カシジャーんじ。あんし自分が家ぐわーんじ吹ちやぐとう。煙まぢやーち、あぬ「伊野波ぬモーイや家ぐわーむる燃とーんどー」し揃てい來ぐとう。「ぬぐわ私ねー煙草どう吹ちやぎんどー」、ちやつペーぬキセルしブークワーブークワーし、うれー夜。

方が、「伊野波よ、おまえはここに小便をしているのかね。おまえはこれは見えないのか」と言ったので、「見ているよ、見ているからやつているんだよ。はい、十銭おけばよいでしょう。十銭おいてね」、十銭おいたら小便してもいいとね。「そうか。それでは十銭ちようだい」とその親方が取つたようだ。

モーイの話は煙草。親が、「モーヤー、おまえ、そんなにまで煙草を吸つてはいけないよ」と叱つたので、「なんで、それじゃ、どのくらいだったらいんですか」と。「一回ずつだよ。一日に一回でいいよ。二回吸い続けてもいけないよ。一、二回でいいよ」と。

そして、その一日分は束ねて置いてあつた。大きなキセルを鍛冶屋で作つてもらつて、自分の部屋で吸つた。すると、煙がたちこめたので、「伊野波のモーイの家が燃えているよ」とみんな揃つてやつてきた。「なんで、私は煙草を吸っているんだよ」と。大きなキセルにつめて、ブークワーブークワーして、夜、吸つてた。

また、朝あさんちやー吹ふかんねーならんしえー。親うやあ合がつ  
点てんさん、「いやーなー、いやーがましやぬぐとうしー」  
りち、うぬキセル取とい上あぎやーない。「自由じゆうにあんしえー  
吹ふかしんしえーみ」りち。

ゲタの話はなしは、チャーチャーがよーひー、「あぬ、ちゅー  
や雨降あみふいぐとうや、学校がっこうからまーがらかいゲタくり行い  
きよー」「いい」りち。

アンマー話はなしやまた、「いい天気うわちぎないんどー。草履ぞうりさー  
にしむんどー」りち、うりん「いい」りち。

あんさぐとう、片足かたひきあゲタぐわー、片足かたひきあ草履ぞうりはち  
行んぢ、「うね、モーヤー、いやーや変かわとーる」りち、  
「ぬーぐわさい」「片足かたひきあ草履ぞうり、片足かたひきあゲタ、ちやーし  
くり。「ちゅーや雨降あみふいぐとう、チャーチャーが、スー  
がゲタ履はち行いき。またアヤーが草履ぞうりぐわーさーにしむ  
さりちやぐとう、二人ふたりがむのー、親おやぬむのー、むるか  
らんぐとう、二人ふたりが話はなしや私わんねー聞きかーない、二ち親おや  
ぬ孝こあいびらんがやー」りちやぐとう、なー「やさ」  
りちやんりよ。

また、朝あさも吸すわなないといけないでしよう。親おやは合がつ  
せず、「おまえはもう好きなようにするがいい」と、そ  
のキセルを取り上げた。「自由に吸すつていいですな」と。

ゲタの話はなしは、お父ちちさんは、「きょうは雨が降ふるので学  
校がっこうやどこかに行くときはゲタをはいて行きなさいね」  
と言うと、「はい」と答こたえた。

お母ははさんはまた、「いい天気うわちぎになるよ。草履ぞうりでいいよ」  
と言いったので、これも「はい」と答こたえた。

すると、片足かたひきはゲタ、片足かたひきは草履ぞうりをはいて行いったの  
で、「おいモーヤー、おまえは変かわっているね」「どう  
してですか」「片足かたひきは草履ぞうり、片足かたひきはゲタ、どうしてか」  
と言いったので、「お父ちちさんが、きょうは雨が降ふるのでゲ  
タをはいて行きなさいと。また、お母ははさんは草履ぞうりでい  
いさと言いったので、二人ふたりの親おやが言うことを私は聞きか  
ないといかない。それが親おや孝こ行いではないですか」と答こたえ  
た。「そうだね」と言いったそうだ。

翻字 知花春美

ちよーどう今ぬカーニバルふーじてー。うんな時ぬ  
 あたるふーじよ。集まり。私たー島んじえーアブシバ  
 レーりちあしえーやー。シングワチアブシバレーりち。  
 十五日、十六日え、うぬいえは祭日ふーじーぬあてー  
 ぐとう、カミアシビーしよー、うぬふーじとうくまん  
 かいやてーるふーじや。

あんさぐとう、親あまた、モーヤーンかい、着物のー  
 うりなかい、夏衣、クンジてー、クンジ着しーん  
 りちそてーるふーじや。

あんさぐとう、フルクンジーやあしがよー、ミーク  
 ンジー、くれーやなさみとーるむんりちよ、親あまた  
 よ、ミーククンジーうぬ布機かんし作てーたんりよ。な  
 だ着物のー縫てーねーんたんりよ。着物お、なーだ  
 縫てーねーんあいなかいてー、古クンジー、今までー  
 大丈夫りち、うり着しーる思やてーしが女ぬ親あ。

あんさぐとう私あ物りち名あちちよーんりち、あん

ちよーど今のカーニバルのようなものだね。それが  
 あったようだ。集まり、私たちの島ではアブシバレ  
 とあるでしょう。四月にアブシバレと。十五日、十  
 六日は、いえば祭日のようなものがあつたので、カミ  
 アシビそのようなものがあつた。

そこで、親はまた、モーイに着物は、夏物のクンジ、  
 クンジを着させようとしていた。

それで、古いクンジーはあるがね、新しいクンジー。  
 これはもう(色も)さめているのにと、親は新しいク  
 ンジーを作ろうと機にかけてあつた。まだ着物にはし  
 てなかつた、まだ縫つてなかつたので、古いクンジ  
 をこれまでは大丈夫だと、それを着せるつもりであつ  
 たようだ。母親は。

しかし、私の物と名前はついているので、母親はま

し着物の縫ていんねーんしが、女ぬ親あうり着しー  
んよー。布まきくり。

あんさぐとう、「えーまたモーヤー あぬしじやまし、  
とーとーぬがモーヤーひやー、皆あんし縫てーる着物  
る着ちよーる。いったー親あ着物縫いさんるあん  
なー」りち、なー皆んかい笑つたぐとうよ。

「くれー私あ物りち、名あちちよーぐとうや、くぬ  
ちゆーぬまにあわしりち、私たー親あ作くてーしが、  
なー親んかい、あまり『縫り、縫り』しあぎまーしん  
ならん。くれー私あ物りち、親ぬちゃんとう準備えな  
とーぐとう、うぬまま私ねー着ちよーんでー。ちゆー  
ぬ遊びぬまにあわしえー、うぬ見よーしとうらし」り  
ち、あんしん平気。すぐ布まるはきーそーたんり。

だ着物を縫ってないのに（モーイは）布をまいた形で  
それを着けた。

それで、「えー、モーイ、そんなことをして、おいお  
い、モーイ、皆、あのように縫った着物を着けている  
のに、おまえの親は着物は縫えないのか」と、皆に笑  
われた。

「これは私の物と、名前がついているのでね。きよ  
うにまにあわすつもりで、私の親は作つてあるが、も  
う親に、『縫って縫って』とせかすこともできない。こ  
れはもう私の物と、親がちゃんと準備してあるので、  
もうそのまま私は着けているよ。きょうの遊びのまに  
あわせは、それなりの見方して下さい」と平気だった。  
すぐ布を巻いていたそうだ。

採集S52・7・3 読谷村民話調査団第八班へ知花利江子

注① アフシバレー 畦払いの意。旧曆四月に田植えのあとに、畦の草刈りを行ない、虫払いをして、豊作を祈願する年中行事。仕事を

休み、御馳走を作つて一日を遊び暮らす。

② クンジー 紺地。紺の地の布。着物

翻字 名嘉真 宜勝

小はる間あふるむんなじきしよ、ふらーふーじーや  
たなり。あんすしが頭おちりとーたんでいー。

嫁をもらったからな。親ぬいーていとうらちやく  
とう。鶏や好きやたんでい。鶏持つち遊ぶたんでい。  
鶏持つち、んまぬ門し、鶏飛ばちやんでいよ。あん  
さぐとうな一族とうん出たぐとう「ぬーが」でいち、  
んまんかい家族んじたぐとう、えーりん、うぬ妻ない  
しん出していちえーんてー。「今日ーや、私あ妻見ちや  
ん、見ちゃん」でいもーきたんりる話でー。

な、くれー馬鹿者るやるでいち、くりんけー妻や  
しみてーならんでいいち、親ぬ断わてーるふーじよ。

また、うぬ後んじえー、門ぬんじすくどーてい、う  
ぬ人ぬ外んかい、用事んかいめんせーんない、カナ  
ない。（昔えカンブーやしえーや）カタカシラかき  
てーるふーじ。あんさくとう、うぬ人おなー怒みち、  
えーうりしちやくとう。「かきてーる、かにぬんはんでいー

小さい間は馬鹿なまねをしてよそおつていた。だが、  
頭は秀れていたそうさ。

（モーイ）に親が、嫁を世話してあげた。鶏が好き  
で、鶏を持って遊んでいた。鶏を持ってその門で鶏  
を飛ばしたそうさ。すると、家族が出てきて、「なんだ  
ろう」と出てきて、たぶんその妻も出てきたんでしよ  
う。「きょうは私の妻を見た。見た」と、もうけたとい  
う話である。

もう、これは馬鹿者だからと、これの妻にしてはい  
けないと、親は断つたようさ。

また、その後、門にひそんでいて、（嫁の親が）用事  
で外に出たとき、鉤で（昔はカンブーでしよう）カタ  
カシラをかけたようさ。その人は怒つた。「かけた鉤で  
もはずれるか。結んだ縁でもはずされるか」とモーイ  
が言つたので、その人は何も言えなかつた。そして、

み。結でーる縁ぬはんさりーみ」でい言ちやぐとう、  
うぬ人おぬーでいん言らんなどーしえーや。あんさー  
に、やむをえない。妻えうりし。

やむをえず、妻にさせた。

83 モーイ親方

話者 比嘉ウト (明治三十七年十月十五日生)

翻字 村山友江

モーイ親方りしえーよ、学問じよーじやたんりがらー  
や。あんさーによ、自分ぬ教ちえーぬ紙ぬよ、自分ぬ  
親ぬ前んかい飛でい行ちやーに、足んかいかかたんり。  
あんすぐとう、うぬ親や言やぎたさ、「いやーぐとうフ  
リムンなてい遊でーならんでー。くぬぐとうし勉強し  
書ち習わ」り言ちやぐとう、舌ねーらつたんり。

モーイ親方という方は、学問は得意であつたようだ  
ね。そして自分が書いた紙が飛んでいって、親の足に  
かかってしまった。するとその親は、「おまえみたいに  
馬鹿になつて、遊んでばかりいては、ダメだよ。この  
ように読み書きでもして勉強しなさい」と言つたら、  
(モーイ親方)に舌を出されたそうだよ。

またあんいる人お、ブイぐわー持つちちやーフリム  
ンふーなーし、友達なかいフリムンリ言やつてい、一  
番やたんり。一番ないねー殺さりーるすらーりちあん  
そーたんり。あんさーにブイぐわー持つちよ、知らん

また、馬鹿みたいに棒を持つて歩いていたので、友  
達からは馬鹿呼ばわりされていたが、学問は一番であつ  
た。一番になつたらいじめられると思つて、そういう  
ふうにしていた。それで棒を持つて歩いて、みんなが

みーんじ書ちゆたんり。

知らないところで学問をしていたそうだ。

採集S 63・12・13 読谷ゆうがおの会へ村山友江

84 侍と小僧

話者 松田芳子(明治四十四年二月十日生)

翻字 村山友江

あるタンメーが、うまんかい尋にてい來ぐとう。うまんかい尋にてい來ぐとう。うぬ童一人家んかい、留守番ひちうたんりしが、「いったーお父さんのーまんかいが」りちやぐとう。ユンヌミ、お父さんがるユンヌミ取んがやらや、なーうまんかい。

子どもが一人で留守番をしている所へ、あるタンメーが尋ねて来て、「貴方のお父さんは何処へ行かれたの」と尋ねた。(すると多分)「ユンヌミ取りに」と答えたのでしようね。

また、「お母さんのーまんかいが」り言ちやぐとう、「冬青草、夏立枯り刈んが」りがらー言ちひちやぐとう。「あんしいやーやそーいらーぐわーやる」んり言やーに、菓子、あぬ手にんくぬ手にん、二ちかまちやぐとう。うぬ童え、うりからん食り、またくりからん食だぐとう、「いえー童え、じるぬ菓子ぬまーさたが」んり言ちやぐとう。うまんかいうかーに(手を叩き)、じるぬ

また「お母さんはどこに行つたの」と尋ねると、「冬青草、夏立枯刈んが」というふうと言つたらしい。(このタンメーは)「お前は実にお利口だね」と言われて、二つのお菓子を両手に握らせた。

すると、子どもは両方の手からお菓子を交互に食べたので、「どの手に持っているお菓子がおいしいか」と聞いた。すると子どもは、即座に自分の手を叩き、「ど

手ぬ鳴いびーたがさい」「むる返ちやぐとうてー。

返ちやぐとうよ、「いえー童えいやーや今幾ぢないが」  
りち言ちやぐとう、「五ち」。「七ちぬ年ねーや、百んちや  
んり思りよー」んり言ちよ、しちやぐとう。七ちぬ年  
ねーうらんなたんり。

85  
忘れんぼう息子

うりんまた、うぬ子供あなーでーじな覚やねーんてー  
るばーて。物ん言いちきていん、ていーちん忘りていー  
しーよ。あんし指ぐわー括ちえーたんりや、糸ぐわー  
さーなかい。うりが括だつとーんりちかんし分かいる  
たみなかい、うぬ物忘すし直すたみなかい、親ぬ指  
ぐわーまでい括ちうつちえーたんりや。

の手が鳴ったかおわかりですか」と、問い返した。

タンメーのすべての間に言い返したので、「おい、  
お前は今幾つになるか」と言うど、「五つ」と答えた。  
タンメーが「お前は七つになったら、百歳の年になっ  
たと思いなさい」と、言い残したそうだ。するとこの  
子どもは、七つの年に亡くなったということだ。

採集S52・2・20 読谷村民話調査団五班〈宮里洋子〉

話者 上地源助(明治四十年一月三日生)

翻字 島袋喜美子

その話もまた、その子は大変物覚えの悪い子だった  
ようだ。用事を言いつけても、いつも忘れるばかりだっ  
た。それで親はその子の物覚えのひどいのをなおすた  
めに、糸で指を括つておくことにした。その糸が括ら  
れている間は、なぜ自分の指が括られているかを分か  
らせ、物忘れがひどいのを直すために、親は指まで括つ  
ておいたのだった。

あんしうぬ指ぐわーぬなー括だつてい、なー痛しり  
やーに、親ぬ何り言いたん、何り言いたんりち、あん  
し後おまーりつばなうり、頭ちゆくたんりぬ話からる  
始とーんり、初めぬ話やたんどー。指ぐわー括ちよ、  
あんさーにうりさーなかいまーちゆくたんりる、うれー  
うぬ話やさ。あんしうぬ親達ん偉いやてーるばてー。  
うれーかんし物覚ぬねーん子供あ、くりちやーすがやー  
りち、なーいつペー考えむんげーしちえーんばてー。  
品物何が買いが行くしやたんでーがん、やつぱし  
うれー括だんまーるやてーるばてーな。うれーや、  
しぐ言やんあれー分からんぐとうや、あまんかい行ちゆ  
るえーまや、何が借んがるやんりれー、何が道具  
借んがやてーるふーじ。あんぐとう何が借ていくー  
りちやぐとう、「うぬ名あ言やーに、しぐちやー言しよー」  
りち、やらちえーるふーじてーひやー。あんし溝ぐわー  
渡いんりちやぐとう、「ヒットウカチ」りち、なーけー  
渡ちやぐとう。「ヒットウカチ借らし」しちやぐとう、  
あん言しえーねーんしえーや、名ねー、あんさーに戻  
ちやらさつたんりぬ話るやんどー。

糸ぐわー、かんしじるとうじるとう括ちよー。あん

そうして指が括られていた間は、親がどうこう言  
いよつたというふうに忘れることがなかった。そして  
後には、(物覚えもよくなり)頭もよくなつたという話  
だよ。指を括つてね、そうこうしているうちに物覚え  
もよくなつたという話さ。この両親は偉かつたんでしょ  
うね。こんなに物覚えの悪い子は、どうすればいいん  
だろうと、あれこれ考えたんでしようね。

何か品物を買に行くにしても、指を括らない以前  
の話だつたんだよ。(例えば)何か道具を借りに行かせ  
たようだ。そうして、これは目的地に着くまでずっと  
言い続けないと覚えきれないからということ。「その  
(借りる道具の)名を、ずっと言い続けるんだよ」と、  
使いにいかせた。途中で溝を渡ろうとしたら、「ヒットウ  
カチ」と言つて、渡つてしまった。すると「ヒットウ  
カチ借してくれ、借してくれ」と言つてしまった。す  
るとそういう名はないでしょう。それで戻されたとい  
う話だよ。

糸で、これとこれというふう括つてね。そうして

## 親捨山

さーにうりがあてぬあれー、まーてーげー覚らりち、  
ぬーんりちくま括らつとーんりち。あんさーなかいなー  
うぬ子供あいつペーそーいっちゃんりぬ話やさ。

指が痛い間は、どの指が括られているかということ、  
物を覚えるようにさせた。そのようにしたら、その子  
供は大変りっぱに育つたという話だよ。

採集S 52・7・3 読谷村民話調査団第二班へ渡慶次殿

話者 松田平信(明治二十六年十二月一日生)

翻字 具志堅 タケ

昔は六十歳越えたなら、越したならば、山に捨てに行きよつたそうですよ。それでそのー、おばあさんをみのー  
て、子供が山に捨てていったもんだから、おばあさんはまた子供に、「こんな山の奥に私捨てに来るから、これ一人  
で家に帰って行くのも、あー非常に困難である。道迷うかもしれない」と言うて、おんぶされてその木々に手を延  
ばして木の枝を折っておいておつて。

そしてとうとう山の絶頂に登つて、その子供がおばあさんにお別れを告げて、そして自分はまた家に帰つて来た  
そうですが、やつぱり自分が来た道は分からない。で、またおばあさんの所にこの子供は帰つて来たそうです。だ  
からその時には日が暮れてですね。自分一人また帰る事は出来なくて、その一晚もうおばあさんと一緒にそこで明  
かしたそうです。

そこでその翌日、おばあさんは「ぜひ行くならこうこうして私が木の枝は折つてあるから、これを頼りにして家  
帰りなさい」と言うたもんだから無事に家、着いたそうです。

そこでその子供は考えたところ、「いつなつてもおばあさんのような考えはなかった。おばあさんがこう言う事をやらなければ、私もおばあさんといっしょに山に捨てられておったんだから、これではいけない」といつて、早速おばあさんをまた山に連れ戻しに行つて、家に帰つて来て、おじいさん、おばあさんはいつまでも大事にしなればいかなんじやないかというて。それから六十歳越しても捨てには行かなかつたという話です。本当であつたか分かりませんが。

採集S52・7・3 読谷村民話調査団第九班〈伊波百合子〉

87 親捨山〈難題〉

話者 池原カマ (明治三十六年七月十日生)

翻字 知花春美

昔え、六十から一開き墓んじ座しーたんり。座したぐとうな一、持ち飯めーしち、持つち行ぢ、みそーらちえーんてー。

昔は、六十歳になると、開き墓に連れて行つたそうだ。食事は弁当を持っていつてあげた。

あんすしが、村からてー、黒繩御用ぬあたんり。黒繩御用ぬあたぐとう、な一誰ん分からんてーるばーてー。「くれ一親んじ習ていくー」りち、習いが行ぢゃんり。

そこへ、村から黒繩御用が出た。黒繩御用があつたが、もう誰も分からなかつたようだ。「これは親のところて聞いてこよう」と習いに行つたそうだ。

あんさぐとう、「うり分からに」りち、「分かいはらんどー、貴方んかい習いがちよーる」りち訴たいひちえー

すると、「これ分らないのか」と、「分かりません、貴方に習いに来ました」と言うて、「藁を持って来な

るばーてー。あんひちやぐとう、「藁むつち来わ」り言  
たんり。藁一束持つち行ぢやぐとう、すずやーにてー、  
上等してーやーに持ち行ぢやぐとう、「金ん探めーてい  
来わ」りち、「トウータン金、探めーてい来わ」りち、  
トウータン金、探めーてい行ぢやぐとう。

あのー、うぬ親ぬ繩のーやに、ハブぬぐとう、かん  
し、かんしーし、ガンシナぐわー巻ちえーるばーてー。  
あんさぐとう、「カ所かいしり口から火やちきやーに。  
火やちきたぐとう、んちや、ぐわんぐわんのー燃らん  
しえーやー、なー絢てーる纏るやぐとう、ぐわんぐわ  
んのー燃らんぐとう、よーいよーい燃いはていたぐとう、  
「とーうり持つち行けー」りち、「役所んかい、番所ん  
かい持つち行けー」りち、持つち行ぢやぐとう、親あ  
宝やさやーりち、さつそく、親あ連いらひーりち、連  
たんり。

い」と言った。藁一束を、きれいにふいて、上等から  
持つていくと、「金属を探してきなさい。トタンを探し  
て来なさい」と言ったので、トタンを探して持つて行っ  
た。

そして、親が蛇のように繩を纏つて、ガンシナのよ  
うにくるくる巻いてあつた。それから、両端から火を  
つけた。火をつけると、ポーポー燃えないで、繩なの  
でゆつくりゆつくり燃えていった。燃え尽きたので、  
(親が)「さあ、これを持つて行きなさい。役所に、番  
所に持つて行きなさい」と言った。持つて行つたので、  
親は宝だねと、さつそく連れ戻したということである。

採集S52・2・20 読谷村民話調査団第十班〈村山知義〉

注 ガンシナ 頭上にザルや荷物を乗せる時に、荷物が固定するように作られたもの。  
ワラで丸めてつくられている。



ガンシナ

翻字 伊波邦子

うぬドウーヌヒヤーリしえー、あぬだー赤ちゃんぐわーやいに、首里ぬ寺ぬ屋敷内んかい捨ていらつとーたり。うぬ子や捨ていらつていしちやぐとう。捨ていらつとーぬ子、「うまんかい赤ちゃんぐわーぬ捨ていらつとーびんれー」りち、坊主ぬ見当ていやーに。とーひやーあんしえー、あがたー屋敷内んかい、赤ちゃんぐわーぬ捨ていらつとーし、あぬだーうりやれー、あぬ黒まーくーちやつペーぬ人ぬうまから行いし見ちよーしん、うぬ赤ちゃんぐわー見当ていたる人。うぬ坊さんが見ちえーるばーて。「あん何がやたらー、いつペー黒衣着ちよーる人ぬ、うまからまぎつ人ぬ逃んぎてい行いぎーたしが」んち。

あんさーにあぬ、うまから歩く赤ちゃんぐわーやな、うぬ寺ぬ育ていてい、育ていていひちやぐとう。うぬ赤ちゃんぐわーやなー育いしんれーな、あぬなー神るやたらー、あぬ昔ぬよー精霊やてーるばーて、う

このドウーヌヒヤーは赤ちゃんの頃に、首里にある寺の屋敷内に捨てられていたそうだ。捨てられているのがある坊主が、「ここに赤ちゃんが捨てられているよ」と見つけた。そうしてその坊さんはまた、その場から黒衣装を身に着けた大変大きな人が、逃げて行くのも見てしまった。「どういふ人であったのか、大変大きな人が、そこから逃げて行ったよ」とね。

そうしてその赤ちゃんは寺で育てられることになった。赤ちゃんはそうにして育てられていったのだが、神様か精霊だったのでしょね。そのようにして育てられた赤ちゃんがある程度大きくなった頃、沖縄

れー。あんさーにうぬ寺とーてい育かーに、なーいー  
時分なたぐとう、あぬーんがたー沖繩ぬ首里城落とう  
すしが生まりとーん。生まりとーんち、噂ひちやぐ  
とう、うぬ親坊主えなー心配ひちてー。

うぬ赤ちやんぐわー育ていたぬ坊主えなー、なーゆー  
くる仕事ぐわーしみーんなたぐとう。うにーねーな  
仏てー、寺や仏ぬあしえーやー。仏えどうきなきーに、  
なーうまー掃除ん何んかんすしが。うりが掃除しんが  
入ねーよ、「どうけーひやー、うま掃除すしが」り言ち、  
自分一人。誰とう物言やぎがやーんち、節穴ぬ穴から、  
あぬ坊さんのー見ちえーるばーてー。あんさぐとう、  
うぬ仏ぬ、ひきなていよー、自分くるひきなてい。  
うりが手んかからんよーい、自分くるひきなてい。

珍ましむんうれーひやー、うぬ子や変わとーさー。  
「どうけーひやー、うま掃除すしが」、ぬーぬーりち、  
自分一人物言やぎーしが、あんしうぬ仏自分くるぐわー  
どうきなきんれー。ひきなてい、むる掃除えしみー  
ぎん。うぬ、あぬだー普通ぬ坊さんがーなー、あんい  
ち認みていうてーんてー、なー、うぬ節穴ぬ穴から。

なーうりが育いーていうりなたぐとう、首里城なー

の首里城を打ち落とす人が生まれているよ、という噂  
が流れたので、その親坊主は心配になってきた。

赤ちやんは、親坊主が仕事を言いつけるまでに成長  
していた。その時分は寺には仏があつて、仏を掃除す  
るのも仕事の一つであつた。寺には仏があるでしょう。  
その仏を避けて掃除をするんだがね。坊主が掃除をす  
る時には中に入ると、「どいてくれ、そこを掃除するか  
ら」などと言ひ、一人言を言つていた。いったい誰に  
物を言つているんだらうと、親坊主は節穴から覗いて  
見た。すると、仏は誰の手を借りることもなく、勝手  
に動いていたということ。

珍しいこともあるもんだ、この子は変わった子だ。  
「どいてくれ、そこを掃除するから」などと、一人言  
を呟いているが、そうすると不思議なことに仏が移動  
するのであつた。そのようにして掃除を済ませていた  
ので、節穴から覗いて知つていた親坊主は、この坊主  
にこのような力があるということを認めていた。

坊主が成長した頃に、沖繩に首里城を打ち落とそう

落とうすしがうん、うんしちやぐとう。「とーひやー、  
いやーやあらのーあに」りち、またうぬ親坊主ぬ育てい  
とーぬ親坊主ぬ、「いやーあらのーあに、うんぐとうん  
れーしーねー大變やしがりち。なーうにーねーなー、  
「早くなー逃んぎり」りち、親坊主さんがあぬだー、  
親ぬ黒衣てー、着物きしやーに、馬乗して、い田舎んか  
い逃んぎれー、逃んぎれーしち、あんし田舎んかい逃  
んがちしちやぐとう。

うまぬ田舎ぬうれー、逃んぎとーんどーしちやぐとう。  
なーあまから馬乗てい、城ぬ臣下ぬ馬乗てい、城ぬ臣  
下ぬ馬乗やーに、うり追とーしえーやー、追ていしちや  
ぐとうてー。あぬ北谷、北谷トンネルてー、北谷トン  
ネルよ。あぬトンネルおよー、高山んかいかんし立っ  
ちるうたんり。あんさぐとう、うまから通ていよー、  
ドゥーヌヒャーやなー、うまから抜ぎてーるばーてー。  
抜ぎたぐとう、うれーかんし道うすてい、あまから来  
しえー通らさん考ーしちや。あんし道うすてい、うぬ  
サンのーたーちかんしうさーち、あんし道うすていし  
ちやぐとう、なー抜ぎたしえーりち、あんさーになー  
田舎んかい。田舎んかい行かーに、田舎ぬ干さつとー

とじている者がいるという、噂が流れ出した。すると  
親坊主は、「おまえではないか、そんなことでもしたら  
大變なことだぞ」と。そしてすぐさま「早く逃げなさい  
」と、自分の黒衣を身に着させ馬に乗せて、田舎  
に逃がしてやった。

そうこうしているうちに、田舎に逃げているという  
噂が広まった。そして城の臣下が馬に乗って、坊主を  
追ってきたのである。ドゥーヌヒャーは高山にある北  
谷のトンネルを、無事に抜けて田舎に逃げて行った。  
そこでまた、田舎で干されている着物に着替えて、さ  
らに山原に向かつて行った。しかし、昔は那覇から山  
原に通ずる道は一本しかなかった。

る着物ぐわゝ、着物ぐわゝ替てい。あんしなゝ、昔ぬ  
なゝ、那覇道、かゝま山原かい、道えなゝうぬ道中通  
いしえゝ、うぬ道ていゝちるあてゝるばゝ。

しちやぐとう、うぬ道中通いんり、あぬだゝ逃んぎ  
とゝぐとう、うりが銅鉦銅鉦てゝ、昔ぬ綱引ちねゝ、  
ドウドウドウゝりち、うっぺゝぬ茶盆ふゝじゝぬ鉦ぬあ  
たしえゝや。うぬ銅鉦てゝ、銅鉦ありが打つちゝねゝ、  
すぐ地震ぬ揺いねゝすたんり、地面ぬ。

あんしちやぐとう、とゝあぬだゝ道中通いしえゝ、  
あまからぬ命令てゝ、首里城からぬ命令。道中通い  
しえゝうぬ銅鉦打たしえゝわ。あんしゝねゝ分かいさ  
りち。あんし銅鉦打たちやぐとうてゝ、一人ぬくさん  
むる銅鉦打つちやゝに、トウトウゝしちえゝるばゝ  
てゝ。あんさぐとうしえゝんちや、なゝかんしゝかん  
しゝしちやんでゝまん、ドウドウドウゝさんしえゝ  
や。うぬ銅鉦打つちゝねゝ、うぬ銅鉦ドウドウドウ  
ドウドウドウドウすしえゝや。あんさぐとううぬ音さゝ  
にるうりん揺いらゝてゝ。

うりがあたやゝにかにな、「うり銅鉦打つてゝ」りち、  
「いやゝん鉦打つてゝ、あんしやらする」りち、あん

また、昔は綱引き等に打つ、銅鉦という茶盆のよう  
な鉦があつた。その銅鉦をドウゝヌヒヤゝが打つと、  
地震のように地面が揺れたそうだ。

そうしたから、もう首里城から、道中を通る者は銅  
鉦を打たすようにという命令が出された。そうすれば  
誰ということが分かるということで、一人残らず、「トウゝ  
トウゝ」と銅鉦を打たせたようだ。もうそのようにし  
ても一向に地面が揺れることはなかつた。

そうしていると、ついにはドウゝヌヒヤゝの番にき  
てしまい、「銅鉦打て」と、「お前も打て、そうすれば

し道中や鉦打たちえーやらし、やらししち。後おなー  
うりが番あたたぐとう、なー打つたんとーならんしえー  
や。あんし打つちやぐとう、すぐ地震ぬ揺いんねーし、  
かんしーかんしーしちやぐとうよ。あんさーに」とー、  
くりわ「り言やーにうりすしがてー。すぐいつさん走  
えーし逃んぎーしえーな、うりぐるはぬばーてー。あ  
んしぐるはぬ比謝缸ぬ橋越てい、あんさーにくぬあぎ  
たー湾、古堅ぬんかい入つちち、いぎたークミンドウー  
んかい、クミンドウーすぐちやつたきーぬ木ぬないてー  
ぬぐとーたんり。あんさーにうぬクミンドウーんかい  
隠くていてー、いぎたー楚辺ぬクミンドウーんかい隠  
くてい。あんさーにクミンドウーんかい隠くていしちや  
ぐとう。うぬ何りちクミンドウーりち名付ちよーがり  
れーよ。あぬ久米島んかいくまから渡てい逃んぎてい  
行ぢやぐとうてー。あんさーに久米ぬ字とうドウー又  
ヒヤーとう、クミンドウーりち付きてーんり、うまー。

あんさーに、なーくまとーていん、なー凌がらんむー  
り言やーに、またんがたー浜から、那覇んかいぬ昔ぬ  
山原船、山原船うぬ船ぬ、あぬだーちやーあまんかい  
通てい出じーたんり。また前又浜から、あんさぐとう

通してやる」と、銅鉦を打たせた。ドウー又ヒヤーが  
打つと、もう地震が揺れるように地面が揺れてしまつ  
た。「ああ、こいつだよ」と、捕まえようとしたが、ドウー  
又ヒヤーは一目散に逃げ出した。とてもすばしこかつ  
たので、比謝缸の橋を越えて、大湾、古堅に入つてき  
て、ここ楚辺のクミンドウーまで逃げ延びてきた。ク  
ミンドウーには昔、大きな木があつたが、そこに隠れ  
てしまつた。クミンドウーはどうしてそのような名が  
付いたかというとね。そこから久米島に逃げて行つた  
ので、久米の字とドウー又ヒヤーと合わせて、クミン  
ドウーと名が付いたそうだ。

しばらくは隠れていたが、そこでもまた凌ぐことが  
できないと、判断した。その時分はこの前又浜から  
も、那覇に山原船が行き来していたそうだ。そしてそ  
の人も、「もうこの土地では生活することができない」

「あぎたー前又浜から出じーんなたぐとう。うりんなー  
うまからあぬだー、「なーくぬ土地とーてー育からんむー」  
り言やーに、クミンドウーから出じやーに。あんさー  
にまた前又浜からあぬー船乗ていて、出じたぐとう。  
出じたぐとう、船乗やーに出じたぐとう、沖出じたぐ  
とうてーひやー、なー沖出じたぐとう。沖出じたぐとう、  
すぐ台風、台風。あんし打たさーに、台風打たさーに、  
那覇んかいやんりるやしえーや、那覇んかい行きーねー、  
うれーかちみらりーしえー。あんさーに向き変わらす  
んりよー、台風打たち。あんさーに船ぬ針、あぬだー  
乗組員いっぺー哀り苦しみていよー。ひちひちやぐ  
とうよー、「騒じんすなけー」、うりがどーなー。「騒じ  
んすなけー、まじ待つてー、騒じんすなよー」りち。  
あんさーに自分がまた呪文ふーじーなー書かーに、海  
んかい、海んかい投ぎたぐとう、静かなたんり。  
あんさーになー、くぬ方角がなーうりりち言たらー、  
あまんかいや那覇んかいややらさん考ー。久米島んか  
い、久米島んかい流りてい、うぬ船え。「うぬ船ぬや、  
流りてい行くんとうくまんかい行きぬんさー、命え助  
かいぐとう、騒ぎんすなよー」りち。あんさーに久米

と、クミンドウーから出て、前又浜から船に乗って出  
て行った。

船に乗り沖まで来た。沖までくると、すぐ台風が吹  
いてしまった。船是那覇に向かっているんだから、那  
覇に行けば捕まってしまうから、台風が吹いてしまっ  
た。船の進路を変えるために台風が吹いてしまったが、  
乗組員はそのために大変苦しんでいた。すると、ドウー  
ヌヒャーは「騒ぐな、まじ待つて。騒ぐな」と言った。  
そして呪文を書き、海に投げると、不思議に台風はお  
さまってしまったのである。

もう方角を変えて那覇に行かない考えだっただんでしよ  
うね。その船は久米島に流れて行った。「この船は、流  
れにまかせて進めば、命は助かるから、騒ぎもするな」  
と。そのようにして久米島に流れ着き、そこで暮らす  
ようになった。

島んかい流りてい行ぢ、あまとーてい暮らち。

久米島りちいぬとうくまぬ、米ていーちんねーらんしがな、山から、かーま上からぬ、山からぬ湧お出じやちゃんりぐとう。うぬ人がる湧お出じやちゃんりんどー。かーま上ぬ山から湧お出じやさーに、あんしくまとーてーな、米んねーらん、何んねーらんむーな、かんしえーな、くまとーてーあんしえー育からんり言やーに。かーま山ぬ頂上から、あぬー湧出じやさーにて、あんさーにうまーむるターブックワしち、あんさーにターブックワ作やーに、田稲作てい。

あんさーにうまとーていよ、長れーく育かーにる、あまドウーヌヒャーぬあり、太陽ぬあり取つてい、取つてい計いんりるあれー、取つてい計りりちやたんり。あんし今ちきていうまな、浜ぬ近くんかい部落がありやぐとうよ、部落がありやぐとうな、危なはるむんりちよ、山ぬあぬ割れ目ぐわーからて、岩ぬやがていうまんかい転りていちゆるふーじーぐわー。な、なたぐとう、危なはるむんな、うまから入つち行ぢ、なま上から移動しみてーんよ。

初めえ馬あ海ぬ生物やたんり。あんすぐとううれー

久米島というところは米がなかつた。それでずっと山の割れ目に湧を作り、水が出るようにしたということだよ。この人がもう米もないし、何もない、このように何も食べる物がないと生きてはいけないということだね。ずっと山の頂上から湧を作り、水を引いてたんぼを作ったそうさ。

そのようにして久米島に長い期間住んでいた。昔、部落近くにある山の割れ目から岩がやがて落ちてきそうさ、危険な状態にあった。それで危ないということ、そこから移動させて、今の浜の近くに部落はあるそうさ。

また、馬は初めは海の生き物だったそうさ。しかし

陸ぬ物る喰いるむん、陸とーてい暮らちいくさやーり  
やーによ、あんさーに陸んかいすびち出じやち、人ん  
かい使ていあんそーん。馬ああんすぐとうよ、爪ぬ抜  
ぎーるえーか泳じゆんりんどー。いつペー泳じ上手り、  
馬あ。ドゥーヌヒャーが、「ドー」り言ねー、すぐ止ま  
いんり。あまから海から上がていちゅーしよ、「ドー」、  
うまぬチュクイムジユクイ喰らん考ーしよ、「ドー」り  
ねー、むる止まいたん。

陸の食べ物食べていたので、これは陸の食べ物食  
べるんだからと、陸に引つ張り上げて人に使われるよ  
うになった。だから馬はね、泳ぎが上手で、爪が抜け  
るまで泳ぐそうだよ。その馬も、ドゥーヌヒャーが「ドゥー」  
と一声かけると、すぐ止まるそうだよ。海から上がる  
うとしている時に、陸の作物を食い荒らさないように、  
「ドゥー」と声をかけると、すぐ止まるそうだよ。

採集 S 52・2・20 読谷村民話調査団第四班〈宮里洋子〉

注① 首里城 那覇市首里当蔵にある。琉球王国の居城であつた。城の創建年代は不明であるが、第一尚氏による三山統一後、王城として確立されたことが知られている。今次大戦で破壊され、またその跡に琉球大学が建てられるなどして壊滅に近い状態にあつたが、現在、再び国営公園として応時の姿にもどりつつある。

② クミンドー 部落西側にあるイキガガミ。

翻字 知花春美

意地試しは、意地のある人を集め、あのう、線香といつてあるから、線香ぬ、戦前から線香りちあてーん。何時間とうぶいんりちえー分からんばーてー。あんし、うりがちやつさとうむれーかーきーさーりち。

あんさーにかい、夜中、墓前んじ、グーシ立ていていくーといつて、またこの男は、グーシぐわー立ていてい来んりち、かーきーするばーてー。

そういうかーきー、何もさんしが、役おたたんしが、なー集まてい男どうしが集まていわじやるやぐとう。

あんし、じゆんに立ていていちーやすんどー何本。

また先いつてい、もう、あれかぶつて、丹前、驚るかすんよー。あんさーにかい、その男も、意地ばーやさ。覚悟おそーるばーてー。あんし、ぎやくに、驚かす人ぬ負きていよーという話ぬあん。

意地試しは、意地のある人を集め、あのう線香といつて、戦前からあるが、それが何時間ともるか分からないわけだ。そして、それがどのくらいともるか賭けをしよう。

それから、夜中に、墓の前へ行つて、竹串を立てておいでと、また、いいつけられた男は立てて来るといつて、賭けをした。

そういうふうな賭け、何もしないで、役に立つことではないが、もう男どうし集まてのあそびだった。

そして、ほんとうに立ててくるよ。何本とかね。

また、先に行つて、丹前をかぶつて驚かすよ。行く男も意地があるのだろう。覚悟はしているのだから。そして、逆に驚かす人が負けたという話もある。

翻字 村山友江

タナフアクルー食み賭やたんり。ありよ、すぐ昔えなー五十銭なぬタナフアクルー買やーに、すぐバークぬみーな、あり四分五厘なぬやしえー。ありひやーいやー食みーすらー、いちやんだ食ますんり。

あるワタブターがな、あれー水ん飲まんよーいるやしえー、水ん飲まんよーい。半分、なーあとう三分一りーにから、なーちやんならん。なーうまからありっし口ぬ中うてい、なー口から出じゃち、うれー負きたんり。「いやーなー五十銭ぬ銭出しやし」りち。いちやんだ食むしが銭のー出じらん、うり食みーするむんやれー。ぢやつびなーあたんどー。

注 タナフアクルー 小麦粉と黒糖を使ったお菓子。

タナフクルーを食べる事ができるかどうかという賭け事であった。昔はもう五十銭分のタナフクルーといえ、バークのいっばいもあった。それを食べる事ができるんだつたら、金はいらぬということだった。

ある腹のでかい人が挑戦したんだが、その賭というのは水も飲まずに（食べる）ということだった。あと半分、もうあと三分一というところで、（その人は）どうしようもできなくなつてしまった。そうしてついには、口から出してしまつて負けたそうだ。それで「おまえはもう五十銭出さない」と。それを全部食べる事ができるのであれば、ただで食べられるということだったんだね。大きい（タナフクルー）だったよ。

採集 S 63・12・23 読谷ゆうがおの会（村山友江）

翻字 玉城和美

昔、侍とう百姓とううりやしえーや。うぬ侍やうまんかいめんそーやーに、なーひらんめーうさぎたぐとう、やーはぬばーなたぐとういつペーまーはぬなー。

あんしまーはたるやーりち、家つち煮らちうさがいんりちやぐとう、まーはねーんばー、腹あみつちよーぐとう。まーはーねーん、なー煮ちん煮らん「うれーあまぬむんぬぐとーねーん」りちやぐとう。

後おうぬ食事煮やーがて、「なーくれー考えんじやしわるやる」りち。「煮とーみ、持つちくわー」りしが、「なーだ煮らん、なまー煮らん」あんし、「なまー煮らん、煮らん」し、むるうさぎらんなたぐとう。なーいつペーやーさる時分なやーに「なまー煮とーびん」りちうさぎたぐとう、「とーなまやさ。あんしまーはたさ」りたんり。

やーはいねー何やていんまーはんどーりーぬちむえー

昔は侍と百姓がいるでしょう。侍が百姓の家に行き、おし麦を食べさせたら、とてもお腹が空いている時だったので、とてもおいしかったそうさ。

大変おいしかったので、家に帰ってから炊かせて食べようとしたが、満腹なのでおいしくなかった。満腹なので何度炊き直しても、「これは(百姓の家で食べたようには)おいしくない」と言った。

それで後は炊事の人は「もうこれは何とか考えないといけない」と(思った)そして主人(侍)から「炊けたか炊けたら持つてきなさい」と言われたが、「まだ炊けていません。まだですよ」と「まだまだですよ。まだ炊けていませんよ」と言つてさしあげなかった。そうして、もう大変お腹が空いたのを見計らつて「あつ、やつと炊けましたよ」とさしあげると「この味だ。とてもおいしかった」と言つたそうさ。

お腹が空いている時は、どんな物でもおいしいとい

やんでー。腹みつちよーねー、まーはーねーんばー、  
うぬちむえーやるばー。

うことだよ。また満腹している時はおいしくないとい  
うことだよ。

92 臆病者の話

話者 山内 昌 永（大正三年十月十五日生）

翻字 村山 友江

いやーんしかーぐわー、私にんしかーぐわーやるばー  
てー。あんさーなかい、いやーや北人、私ねーまた  
楚辺人やるばーてー。

（例えば）あなたも気が弱いし、私も気が弱かった  
ようだね。それであなたは北側の人で、私はまた楚辺  
の人であった。

私ねー北から、北りねー座喜味からてー、私ねー座  
喜味んかい行ちゆし、用事かい行ちゆんりちやるばー  
てー。祝かみーが。なー二人ぐーな者しかーぐわーや  
るばーてー。あれーマジムのーなっている、マジムン  
はいいちやていりち。なー北から来しん、かんし、とう  
んけーてーういうい。また楚辺から北かい行ちゆしん、  
うちやかていなまん立っちよーさやーりち、またかん  
ねーかんねーし。

私は座喜味に祝いがあつて、そこに行く途中であつ  
た。もう二人とも気の弱い者同志が、途中で出会つて  
しまったので、お互いにマジムンに出会ってしまった  
と思った。もう北の方からやって来る人も振り返り振  
り返り、また楚辺から北の方に行く人も、今も（マジ  
ムンは）立っているのかなーと（恐々歩いていた）。

な一立つちよーしマジムンリ思やーい、ありん石投ぎーん、くりん石投ぎーん、石投ぎえーしちやぐとうよ、人るやるりち。マジムンリち二人ぐーな一石投ぎえーしちやぐとう、いやーるやてーさやーりち。二人ぐーな一しかーぐわーやてーるばーてー。あんさーにマジムンリ言やてーるばーてー。

注 マジムン 妖怪

93 盗人の話

うぬ家庭んかい盗人ぬ入つちよーたんり。年ぬ夜なかい盗人ぬ入つちよーたん。あんさぐとう、うまー良い家庭、ウスメーんまた物分かたる家庭やてい。

あんすぐとう、うぬ盗人りーしえー、まーぬりちえー分からんしが、夕方よ、家庭え見じゃーなかい、誰ん

もうお互いに、相手の方に立っているのはマジムンだと思つて、石を投げ合っているうちに、人だということに気づいた。マジムンだとばかり思つて石を投げ合っているうちに、おまえだったのかとね。二人とも臆病者であつたので、マジムンだと感違いしてたようだね。

採集S 63・12・22 読谷ゆうがおの会 村山友江

話者 比嘉清次郎(明治四十三年三月二十日生)

翻字 具志堅タケ

ある家庭に盗人が入つたそうだ。年の晩に、盗人が入つた。その家はとてもいいところで、おじいさんも物分かりがいい家庭だった。

また、その盗人はどこの人か分からないが、夕方、その家を見て、誰もいる様子がなかつたので入つたん

うらんぎさーやたぐとう。なー入いし見ちゃんりよ、うぬウスメー何処んかいがうたらー分からんしが、入いし見ちゃんりよ。あびーんさんぐとうに。

二階んかいすぐ。シムから入らりるあたひ、あんさーに二階んかいうたなりよ。何りん言らん。ねーんどうまた取いむんじえーくしーが来さやーりち、うぬウスメーや知らんふーなーし。うぬ盗人お入つてーるふーじゃ。

あんし、なー家族お幾人がうらー分からんしが」とー年ん取り。はい。(昔え年ん取やーに、また年取い茶わきりち、後から出じていちゆーたん。初めえ年取い夕飯。「年え重びてい若くなしみそーり」)

今度お年ん取てい。夕飯のー「ちゆーぬマツカイやうすばすなよー」りち、妻んかい、嫁んかい言やーなかい。「うれーうぬまま置ちよーき」りち、「ぬぐわやー」りちやぐとう、「富ぬたまいんり」うつさ言やーに。ハンジリーがあしえー。ターレー。うりんかいうちよーてい、ミージョーキかぶせて、翌日ぬえーか洗いんさん、うぬ夕飯。

うぬウスメーが呼びーんばー。「はい上びんかい昇とー

でしよう。そこのおじいさんはどこにいたか知らないが入るのを見たそうだ。声も出さずにね。

二階にすぐ行つたようだ。台所から入つて、二階に行つたそうだ。おじいさんは何も言わなかった。(何も)ないからどろぼうに入つたんだねと知らんふりしていた。

そして、その家族は何人いるか分からないが、「はい年も取りなさい」(昔は年も取つてから、年取り茶わきといて、後から出てきよつた。最初は年取い夕飯。「年は重ねて、若くして下さい」)

今度は年も取つた。夕飯もすんで、「きょうのお碗は洗うなよ」と妻に、嫁に言つた。「そのまま置いておきなさい」「どうしてですか」「富がたまる」それだけ言つた。タライの中に入れて、ミージョーキをかぶせて、洗いもせずに翌日までおいていた。

そのおじいさんが呼んだ。「はい、上に昇っている二

し、二階ぬ青年よ。下りていくわ。一緒に年ん取れ」  
りち。あれ別々に年え取らすん。あんすぐとう、な  
うれ、あらわりたるむんりちよ。な「上ーびんか  
いうる青年」りちやぐとう、「なー行きわるやる。な  
くまぬ人おいつペー心ぬある主人やいぎさーやんむ。  
なー顔んわやーに行きわるやる」。

なー取いむんじえーくしーがりち分かとうぐとう、  
「下りていち年ん取れ」なーあんさーにかい、下り  
てい悪さいびーたん」りち、なーうつちんちよ、長  
顔ん上ぎらん「青年、いったー家族、子ぬちやーうみ」  
「うー」りち、「なー年ぬ夜ぬ支度すしんねーらん、夕  
飯しき物んねーらん。貴方から、うんちえー持つち行  
ぢ、子供ちやー年ん取らち、ちゅーやうんちえーむん  
しーが来びたん。ちゅーや見あていらつてい、どうも  
残念やいびーさ。心配やいびーさーおじい」りち。

「とーあんしえー年ん取れ。いやーうまんじ年ん  
取れ。家んじえー、子供ちやーんかい、また持つち  
行ぢ、年ん取れ」「うー」りち、「いったー何処が」  
りち、「まーやいびんどー」りち、名あ言ち。「くま  
なさらん家庭やあらんぐとう、いやー年ん取ていやー

階の青年よ。下りてきて一緒に年も取りなさい」とね。  
その人も別々に年を取らす。盗人は、「上にいる青年よ」  
と言われたので、「もうばれたか。この人はたいへん  
心がよさそうな主人のようだから、もうあきらめて行  
かなければならない」と思った。

もうどろぼうに入っていると分かっているので、「下  
りて来て年も取りなさい」と言われ、下りて、「悪うご  
ざいました」と、うつむいて長らく顔も上げなかった。  
(主人は)「青年よ、おまえの家族、子どもはいるか」  
「はい、もう年の晩の支度することもできず、供える  
夕飯もなく、貴方の家に拝借しに来ました。きょう  
は見られてしまつて、残念で心配です。おじいさん」  
と言つた。

「そうか、それでは年も取りなさい。おまえはここ  
で年を取つて、子どもたちの分のごちそうは家に持つ  
ていきなさい」と(主人は)言つた。「はい」「おまえ  
たちはどこか」と聞くと、どこの誰ですよと名を言つ  
た。「この家は貧しい家ではないので、おまえもごち

また子供ちゃーんかい年ん持つち行ぢとうらしよー

食らい持つちやい、また内ぬお母んかい、「持たしえー  
アンマー。ねーらんどどういらいが来るむん、いらーちよー  
けー。いらやーにかい、またいつたが払いすに払れー」  
りち、うつき言ちよ。うぬ主人のー。「おーりち、年  
ん取つてい食らい持つちやいし。

何年後んぢやぐとう、うぬ人おもーきていよ、「やつ  
ぱり貴方おかげなかい私ねーしーあーさびてい。子供  
ちゃーん育いていにへーやいびたん」りち礼儀しーが  
ちよーたん。「にへーやいびたん。はあ貴方たーあやか  
てい、私たーん裕福さびたんどー」。

裕福さんりしえー、物かみやしくなとーんどー。とー  
うぬふーじぬくとうがあぐとう、ちゃーぬ人んねーら  
んばーんあぐとう、いらいがちゆーぐとう、しれーく  
さいしち、いい心やしんかい、いらーしよー。金ぬん  
貸らしよー。

そうを食べて、また、子どもたちの分は持つて帰りな  
さい」。

そういうふうには、食べたり持つたり、主人が奥さん  
に、「持たしなさい、母さん。なくてももらいにくるので、  
貸しておきなさい。今は貸りていて、できるときに払  
いなさい」と言つた。「はい」と言つて、年も取り、食  
べたり持ち帰つたりした。

何年か後に、その人は成功して、「やつぱり貴方のお  
かげで私は立ち上がることができた。子どもたちも大  
きくなつて、ありがとうございます」と、お礼に來  
た。「ありがとうございます。貴方をあやかつて私た  
ちも裕福になりました」と。

裕福ということは、生活がやりやすくなつたという  
ことである。そのようなことがあるので、どんな人  
でもないときは貸りにくることがあるので、いい心を持  
つている人にはあげなさい。お金も貸しなさいね。

採集S 63・12・20 読谷ゆうがおの会へ知花春美

注 ミージョーキ み(箕)。米麦など穀類をふるつて、殻や塵をよりわけける道具。竹を編んで作り、円形で、浅く広い。

翻字 村山友江

嫁ぬてー、鳩汁わかちやぐとう、まーさぬ味ぬあてー  
 なんてー。うりばかーん味しーしーに、しまいねー  
 むるねーらんなたんり。あんさぐとう、「汁入つていくー  
 わ」り言ちやぐとう、「実ねーびらんでーりち」、「んな  
 汁入つていちえーたんり。

嫁が鳩汁を作ったから、あまりにもおいしくて味が  
 あったようだね。それだけを味見しているうちに、し  
 まいには(実)が全部なくなってしまった。そして「汁  
 を入れてきなさい」と言われたら、「実はないですよ  
 と、汁だけを入れてあつたそうだよ。

採集 S 63・12・13 読谷ゆうがおの会 村山友江

翻字 村山友江

じこーぬ子供持ちぬ盗人どーしーねー、先行くなり。  
 火どーしーねー先行かーに、消しり。

子供持ちは盗人が入った時は、人より先には行くなっ  
 て。火事の際は、先に行つて火を消しなさいって。

あんさぐとうてー、ある金持人ぬてー、「りかウスメー、  
 盗人くんちうちえーたさ」りち、言ちやぐとうてー。

すると、ある金持ちの人が、「りかウスメー、盗人を  
 捕えてあるから行こう」と、見に行つた。するとその

「りかおじい、行か」り言ちやぐとうてー、うぬ人お  
自分どろが子こなとーたんり、金持いえーきんちや人ぬ子こ。

あんすぐとうよ、子持こわちえーよ、「盗人ぬするどー」しーねー  
よ、人先ちゆさちえ行くなり。「火どー」しーねー、人一番行かー  
に火ひや消ちやしりち、話はなしやあたんどー。

96 盗人ぬすの屁つと

昔んかしえ大和やまとガマリちあたんよ。うまんかい盗人ぬするぬくま  
とーてーんてー。あんさーによー、うりが屁ひひつちえー  
んてー。あんさぐとうよ、うまぬ嫁ゆみえすくちなむんや  
てーんてー、「あぬ屁ひ、くぬ屁ひ、誰たがひつちやが、島尻しまじり  
婿むくぬ七ななジムヤーがるひつちやる屁ひ」りちやぐとうよ。  
うぬ盗人ぬするお笑わらやーにかちみらつたんり。

盗人は、自分の子供であつたそうだ。金持ちの子供ね。

ということから子持ちはね、「盗人だよ」と言つたら  
人より先に行くものではないそうだ。また、「火事だよ」  
と言つたら、人より先に行つて火を消しなさいという、  
話があつたよ。

採集S 63・12・21 読谷村ゆうがおの会〈知花春美〉

話者 比嘉ウト (明治三十七年十月十五日生)

翻字 村山友江

昔は大和ガマというのがあつて、そこに盗人が隠れ  
ていたようだね。そしてそれが屁をしたようだ。そこ  
の嫁はさぞかしこつけない人だつたんでしようね。「あ  
ぬ屁、くぬ屁、誰がひつちやが、島尻婿ぬ七ジムヤー  
がるひつちやが屁」と歌い出した。するとその盗人は  
笑つてしまつて、捕らえられたということだよ。

採集S 63・12・13 読谷ゆうがおの会〈村山友江〉

97 つんぼの話

話者 比嘉ウト(明治三十七年十月十五日生)

翻字 村山友江

伊良皆んかいういによ、私女姑や耳くじらーやたさ。  
芋お四十斤なーんかみていちゅーしえーや、「芋降ろしえー  
パーパー」りちん、むるいれーらんしえーや。あんす  
ぐとう私ねえ歩ちやがなーよー、石なぐ石ぐわー三ば  
かん取やーにてー、クワラまかしーねーよ、自分ぬ  
前んかい石ぬちやーぎーねーさつた降すたん。

伊良皆にゐる時に、私の姑は耳が遠かった。私が芋  
を四十斤ほども担いでくるんだが、「芋を降ろして下さ  
いおばあさん。」と言つても全く返事がなかった。だか  
ら私は途中で石ころを三個ばかり拾つて、(姑の前に  
投げ出すと、その時は自分の前に石ころがきたらさつ  
と降ろしてくれたよ。

採集S 63・12・13 読谷ゆうがおの会へ村山友江

98 つんぼとめくらの話

話者 比嘉ウト(明治三十七年十月十五日生)

翻字 村山友江

耳くじらーやよ、留守番のーならんり。言や留守番  
ないんり。何がねーよ、耳のー聞からんしえーや、  
火ぬいじやーにパチパチしーねー、「あい！隣や火やあ

つんぼはね、留守番をすることができないが、盲は  
できるそうだよ。どうしてかというとね、つんぼは火  
事になつてもが聞こえないでしょう。しかし盲は、隣

らんがやーり、すぐ分かいる。盲や留守番ないしが、耳くじらーやならんり。

99 聞き違 いへヒル

「ヒルんなみせーんなー」り言ちやぐとうよ、初めていぬ人ぬ家庭んかい来やーにてー。なー田舎ん人お、自分ぬ家庭んかいアーシーや作てーしえー、客んかい食ますしやいびんてー。ヒル漬きていあいびーてーるばーよー。「なーやヒルんないしえーんなー」り言ちやんり。「うーないんどー」り言ちやぐとうよ、あんしえーヒル取いがクチャんかい、ヒル出じゃしーが行ぢえーんばーてー。あんさぐとう、うぬ男あよークチャんかい追てい来たんりー。

が火事にでもなつて、パチパチと音を立てたら、「あ！隣は火事だ」と、すぐ分かるそうだよ。だから盲は留守番ができるが、つんぼはできないということ。

採集S 63・12・13 読谷ゆうがおの会〈村山友江〉

話者 池原昌繁（昭和二年四月五日生）

翻字 村山友江

初めて来るお客さんに、「ヒルも大丈夫ですか」と聞いたようだね。もう田舎では、お客さんを接待するために、各家庭でニンニクなどの漬け物を作っておいてあつたそうだ。「あなたはヒルも大丈夫ですか」と言ったら、「ああ、大丈夫だよ」と答えたので、ヒルを取り出すために裏座に行った。するとその男は（感違いいしってしまった）、そのまま裏座に追ってきていたそうさ。

採集H 1・5・24 読谷ゆうがおの会〈村山友江〉

100 屁へひり嫁よめ

話者 比嘉ウト (明治三十七年十月十五日)

翻字 玉城和美

まーりがらんかい行ぢえーんてー。どうくまーさむん食だーなかいよ。あんさーにいいとうくまんかい行ぢえーんてー、どうく屁ひやーやぐとう、あんさーによー足ぬ踵し尻うすりりち、習さつたんり。「踵よーまージュー」りち。

どこかい所に嫁いだようだね。とてもおいしいものを食べたので、(その嫁は)おならばっかりした。それで、「踵でお尻をおさえておきなさい」と教えてもらったそうだ。「踵だよ、まージュー」とね。

101 山原と団亀

話者 比嘉カマド (明治四十五年七月二十日生)

翻字 知花春美

ぬが、山原旅え幾旅ん行ちえーさに。

なんで、山原の旅は幾度も行つたでしょう。

うまんかい亀ぐわーぬうてーんてー。亀ぐわーぬ上んかい、うんこしちえーんてー。

そこに亀がいたのでしよう。亀の上に糞をしたようだね。

あんさぐとう、とうん返てい見ちやぐとう、なー亀

そして、ふり返って見ると、もう亀が歩いたようだ

ぐわーぬ歩ちるすてーさに。うんこぬ。

上んかい糞まやーに うぬ亀ぐわーぬ歩ちえーんてー。

あんさぐとう、

山原ぬ旅え 幾旅ん歩ちやしが

糞ぬ歩ちゆしや 今度初みてい

なま初まい。珍しいむん。うりがん、糞ぬん歩くが

やーりち、珍さるしちえーんてーやー。

ね。糞がね。

(亀の)上に糞をして、その亀が歩いたんでしよう。

そうすると、

山原の旅は 幾度もしたが

糞が歩くのは 今度初めて

今度初めて、珍しいことだ。その人がも、糞が歩く

のかなと珍しかったのでしようね。

採集H1・5・24 読谷ゆうがおの会へ村山友江

102 ジュリの話

話者 名城 幸子 (大正五年二月二十日生)

翻字 村山友江

下宿していたところのおばあさんが、きれいなおばあさんだったわけ。御主人がジュリ呼ばーだったから、おばあさんが怒つてよ。ウケーメー(おかゆ)炊ちやーなかい、朝、すぐ玄関に撒き散らかしてきたって。ジュリぬ家にやってきたというような話を聞いた。昭和四、五年頃に、もう八十ぐらいになるおばあさんだったけど、話をしていた。とてもきれいではあるけど、那覇人、金持だけど、「私ねーあんさんどーやー」と言つて話をしていた。おかゆをふり撒いてきたと。

採集S63・12・22 読谷ゆうがおの会へ村山友江

注 ジュリ 女郎。遊女。娼婦。歌も歌い、三味線も弾くので、芸者も兼ねている。「ジュリ呼ぶん」は女郎を買い女郎遊びをする意。女郎屋の入口をたたいて女郎を呼び出すので「呼ぶ」という。

103 坊主の話

話者 山内昌永（大正三年十月十五日生）

翻字 村山友江

昔ぬよ、坊主ぬ話やよ、川渡いぬとうくまぬあてーぬふーじて、川。あんさーなかい美ら女ぬ来ぎーたるむん、美ら女ぬ。あんしうぬ坊主えうまんかい立ちよーてい、うぬ女待ちよーてーんばーてー。

昔、ある所に川があつたようだね。そこへ美人の女の人がやってきたので、坊主はそのままそこに立って、女の人が来るのを待つていた。

あんさーにうまー川、渡ららんしえーやー、女のー、男のー渡いすんり。あんし「川渡ちきみそーらんなー」りち、坊主んかい頼でーんばーてー、「ウーウー、上等やさ」りち、うぬ坊主りしえー理屈るやぐとうよ。托鉢ぬ玉よ、うり女ぬ来ぬえーか、自分ぬ性器んかいかきていうちえーるばー、チンチンぐわーんかいてー。

その川というのは、男の人がは渡ることができるが、女の人が渡るには無理だった。それで「川を渡して下さい」と坊主に頼んだら、「はいはい、いいよ」と、その坊主は何か企んでいるんだからね。その女の人が来るまでに、すでに数珠玉を自分の性器にかけておいたようだ。

あんさーなかいきーさなし、うぬ女ぬサルマタン前んはじやーに担みてい、またうぬ玉あ、はちよーしえー

そしてすでに（川を渡す時に）、その女の下着などは脱がして担いだ。（女がは）坊主が数珠玉をはいている

わからん坊主りち、あんさーなかい「うまから渡らち  
きみそーり」りちやぐとう、「上等やさ」りち。川か  
ら渡ち、うふあさーに渡ちえーるばーてー。

あんし渡ちやぐとう、托鉢ぬ玉あねーらんしえー。

ねーらんなたぐとう「私あ玉がねーらんしえー、いやー  
がけー取つてーん」りち。あんさーなかい検査しちえー  
るばーてー。あんさーなかい女ぬ物見ちやぐとう、「く  
れー何やが」り言ちやぐとう、「監獄」り言ちえーるばー  
やさに、金網てー。あんし自分裸なやーにかい性器  
んかいる隠ちえーしえーやー。あんさーにかい「くぬ  
ひやーがる盗どーてーさー」りやーに、「いやーや監獄  
んかい入りらやー」りち、女ぬ物んかい入ったんり。

104 肉売りの話

昔えよー、肉売やーや赤箱担みていよ。あんさーな

ということとは分からなかつた。「そこから渡して下さい」  
とお願ひしたら、「いいよ」と、その川からおぶつて渡  
したようだね。

そのようにして川を渡したんだが、数珠玉はないん  
だからね。なかつたから「私の数珠玉がなくなつてい  
るのは おまえが取つたんだらう」と、検査をしたよ  
うだね。そして女の物を見て「これは何か」と言つた  
ら、「監獄」と言つたんでしようね。刑務所。(その数  
珠玉は)性器に隠してあるんだから、自分も裸になつ  
た。そして「こいつが盗んでいたんだな」と言つて「お  
まえは監獄に入れような」と、女の物に入れたという  
話だよ。

採集S 63・12・22 読谷ゆうがおの会へ村山友江

話者 山内昌永(大正三年十月十五日生)

翻字 村山友江

昔の肉売りは、赤箱に(肉を入れて)担いで売つて

かい女ぬ理屈さーなかいよ、「牛ぬ肉買れー、買れー」さぐとう、「来よー、来よー」さーなかい、なーパンツお取やーなかい。うにーねーハカマの言たしえー。あんさーなかいうれー取やーなかい、牛ぬ肉売やーがよー「とーあんしえー、いやーや何斤買いが」り言ちやぐとう、何斤買いんり、なうほーくやてーんばーてー。あんさーなかいうぬホーミ見ちやぐとうよ、うぬ女お理屈な者やてーんてー。あんさーいうぬ牛ぬ肉うच्चうりするえーかねー、うぬホーミの見ちやる、うほーく切やーなかいたつ切ちえーるばーてー。あんさーにかい「なーや昼なんしえーんなー」りちやぐとう、「あい、昼なんするする」り。あんさーにほーやなかい、「うまうていんないんなー」、女おほーやーなかい、ホーぬ話いしーねー。あんすぐとううにーねーサナジるかきとーしえー、あんしうわーびえーはじやーなかい入りーんりしーねーじゃーふえーぬクムイぬあたんり、大昔え戦前のクムイんかいる浴みーたんよー、アナガー。馬ん浴みーん、また私にん、馬ん浴みしていなー、また自分ん浴みーるばーてー。あんし「タニハイフラーフリムンドー」り言ち、はーえーはーえーな

いた。ある女性が悪企みをして、「牛の肉はいりませんか」と肉売りが声をかけたので、「どうぞ、どうぞ」と、（招き入れすでに）下着を取っていた。当時のハカマをね。それを取って持っていて、肉売りが「何斤買うんですか」と言ったら、〇〇斤買うと、もうたくさんの肉を注文したようだ。

その女性は理屈っぽかったんでしようね、その肉売りは肉を切る間、目は女性の性器の方を見てしまって、（肉を注文以上に）切ってしまった。それから女性が「あなたは昼でもできますか」と言ったら、「ああ、昼でもできるよ」と、すると女性は、「ここでもできますか」と、そこに寝そべってしまった。その頃の男性はフンドシをしていたので、上を取って入れようとしたらクムイがあった。戦前はクムイで浴びていたんだよ、アナガーね。馬もそこで浴びたし、また私達もそこで浴びていた。そして女性が、「気違いだよ、気違いだよ」と言ったら、（その肉売りは）走って逃げて行ったという話。

てい逃んぎたんりぬ話。

肉え女ぬ儲きてーんばーてー。昔え、ハカマ、ズボンのーはかんしえーやー、ズボンのー着らんしえー、着物る着ちよーぐとうよ。あんし赤箱お担みてい、はーえーはーえーし行ちゆたんり。

105 世の始まりの話

世ぬ始まりに、あんしうぬ女ん造ていひちやぐとう、うぬ世ねー着物ぬん着らん、ホーんはとーたんり。全部真裸。あんさーなかいなー、あぬだー神様ぬくーくーひちん、なーていーちんくーんりや。くまんかい私あ前んかいくーくーひちんくーんり。

あんさぐとうかんやんり。「ぬがいったーや、あぬだーあんしくーんしえーぬーやが」んちやぐとう。「恥ぬくとう思てい」、うりが先え恥ぬくとーむる思んたんり。

(そういうことで) 女性は肉を儲けたわけだよ。昔はズボンじゃなくて着物でしょう。(その男性は) 赤箱を担いで走って行ったって。

採集S 63・12・22 読谷ゆうがおの会 へ村山友江

話者 伊波カマ(明治二十六年六月十五日生)

翻字 上原ヨシ

世の始まりに造られた女は、着物や下着もなく全裸だった。そして神様が来なさい来なさいと、どんなに呼んでもいつこうに来なかつたそうだ。私のところに来なさいと、何度呼んでも来なかつた。

そして、「あなた達はそんなに呼ばれても、なぜ来ないのか」と聞くと、「恥を思うようになって」と。それ以前は真裸になって、人前に出ようと、神様の前に出

くまー真裸まっぱだかなてい、なー人ぬひとぬ前めんかいぬーん、神様かみさまぬ前めんかいぬーん行くいしが。

あんしうれーハブぬよ、「あぬ柿かきの実みやいつペーまーさんどー。いったーん食かみ、私わんにん食かむんどー」りち、聞ちかちやんり。あんさぐとううり食かり、男いさかとう女いなかとー食からぐとう、恥はぬくとう思おもていよ。あんしなーけーうすいうすいしよ。あんさーにうぬハブお、うぬ神様かみさまにかい罰ばちさつたんり。「いやーやあぬあつたんかいや、うり聞きかちえーさやー。あつたーやなー私わん前めんかいちーうさんどー」りち、あんやたんり。

うぬ女いなかぬ、あぬ腹わたやり子産くわなすしえーうりが罰つみやんりよ、くぬハブぬ。あり神様かみさまるやしえーや、あぬハブおよ、あぬだーあんし神様かみさまから罰ばちさつてい、んじ女いなかお腹わたやり子産くわなすんり。あぬ一番いちばん男いさかとう女いなかとー造つくてーる人ひとぬ、うぬ女いなかおよ腹わたやり子産くわなちやんりや、あんし私達いながら代々たいていんかい継つがつている腹わたやり子産くわなすんりつさー。一番いちばんのー女いなかお、あんしる七罰ななちみかんでいる生うまりーんりる。

一番いちばんなー、着物ちりものぬんねーらん、だー始はじめぬ世よや、塵ちり芥あきたする吹ふきんち、男いさかとう女いなかとー神様かみさまぬ、あぬ神様かみさまよ、あぬ人ひとぬ造つくんそーちやんり。あんしなー裸はだかなていん、

ようと、恥はずかしいとも何なにとも思おもわなかつた。

ハブが、「あの柿かきの実みは大変たいへんおいしいよ。あなた達も食たべなさい。私も食たべるから」と教おしえたそうだ。男も女もその実みを食たべたあとから、恥はを知るようになった。そしてもう恥はを隠かくすようになったので、そのハブは神様かみさまに罰ばちされたらしい。「おまえはあの人達ひとたちにそれを教おしえたね。あの人達ひとたちはもう、私の前まへにくることができなくなつたよ」とね。

女性おんながおなかを痛いためて子供こどもを産うむのも、そのハブの罰ばちらしい。ハブは神様かみさまでしよう。そのハブから罰ばちを受けて、女性おんなはおなかを痛いためて子供こどもを産うむようになったそうだ。最初に造つくられた女性おんなは、おなかを痛いためて子供こどもを産うんだので、そのことが代々たいてい受け継つがれて、おなかを痛いためて子供こどもを産うむようになった。それで女性おんなは、罰ばちを背負せいつて産うまれるようになったそうだ。

最初は着物ちりものもなく、塵ちりや芥あきたに息いきを吹ふきかけ、神様かみさまが男いさかと女いなかを造つくつたそうだ。それで全裸ぜんぶだであつても、何なにひとつ恥はも知らなかつたが、ハブに「これは食たべていい

ていーちん恥ぬくとうん思んたしが、後おあぬだーハ  
ブぬ、「くれーや食りしむんどーや、いつペーまーさん  
どーいったーん食み。私ねーちゃーうり食どーんどー  
や」り言ちやぐとう。うり食らぐとう恥ぬくとう思てい  
てー、神様ぬ前んかい何度呼でいんきーうーさんり。  
あんすぐとう、「いったーや、ぬーんちあんすが」りちや  
ぐとう。「なーありから私達や聞かさつてい、あぬ柿(栗)  
りる言たがやー)、うり食らぐとうあんなとーびん」り  
言ち、あんしえーいったー女お罰んちよ、あんしるん  
じ女お、子、うぬ罰さーにるあんなとーんり。腹やり  
子産すんり。うりあんいち話ぬあんどー。

106 人間の始まり

猿ぬよー、人間の始まりり。かんやたんり。一番世  
やてーんてー。ナージキする始まいやてーんてー。猿

よ。大変おいしいからあなた達も食べなさい。私は毎  
日これを食べているよ」と言った。それを食べて恥を  
知るようになったので、神様の前に何度呼ばれても行  
くことができなかつた。そして「あなた達はなぜそう  
するのか」と聞かれたので、「私達はハブから聞かされ  
て、あの柿の実を食べたらそういうふうになつたんで  
す」と答えた。そしてらおまえたち女性に罰というこ  
とで、女性はおなかを痛めて子供を産むようになった  
ということだ。そういう話があつたよ。

採集S 52・2・20 読谷村民話調査団第三班〈阿波根初美〉

話者 長嶺ウシ(明治三十六年九月二十三日生)

翻字 大浜洋子

猿がね、人間の始まりだそうだ。こうだつたそうだ。  
世の始まりで、名前をつける始まりだったのでしよう。

107 阿麻和利

ぬ、あぬくれーやー、上んかいなしーねー尻尾やたつ切りわる人おないぐとう。あんしる人お造らりーぐとうり。猿から人なたんりる話んあたさ。

阿麻和利りしえー、小はいに生まりたぐとう、七びーるなたんり。七歳がえーま歩きんしーうさん、七ちびーるやたぐとう。親ぬ山んかい捨ていんがるんじやんりれー。うりがー人間のーならんりち。山うてい、あんさぐとう捨ていがんじやぐとう。七歳なるえーま、なー歩かんなたぐとう。親ぬ捨ていんが、薄情、昔ぬ世やてーんばーてー。

捨ていんが行ぢやぐとう、山とーてい。なー七歳ないくとう、知恵のーあてーるばーてー。ホーヤーホーヤーしちよーてい、サンチナぬ実りねーぬーが、あり

猿を（人間にするには）尻尾を切らないといけなからね。そのようにしないと人間にはなれないからね。猿から人間になったという話もあったよ。

採集S 63・12・13 読谷ゆうがおの会（村山友江）

話者 比 嘉 カマド（明治四十五年七月二十日生）

翻字 村 山 友 江

阿麻和利は七か月の未熟児で生まれたそうだ。それで七歳まで歩くこともできなかった。親は、これがはりっぱに成長することはできないと、山に捨てに行つたそうだよ。七歳まで歩くこともできないということ、親が山に捨てに行つたというから、昔は薄情な世の中だったんでしょね。

山に捨てられはしたものの、七歳になっていたの、知恵はついていたらしく、這いずりまわりながら、サンチナの実をあさって食べ、成長したという話だった。

あさてい食り成長いーたんりぬ話やたん。サンチナリ  
ぬ芋ぬあしえーや、サンチナぬ芋りち。うまーあさやー  
に、ありやふあらーはるあたらー、なー七歳からー歯  
ん生しえー。あんさーにうぬサンチナぬ実やあさてい  
食り、成長いーやーに。

後おなー、キンブ木ぬ下んかいよ、寝んてーういし  
ちえーんてー。ミカンのーじこーキンブおなとーしが  
なー、思いるぐとーびーらーやぐとう、思いるぐとー  
なーむららんやーによー。「あいえー、くまんかいミ  
カンぬんあしがやー。私にんかい落ていーねー、ていー  
ちんちよー食りんれーやーり、思いぎーしがなー」り  
ち。足ぐわーりがらートンみかちやんり。あんさぐとう、  
ポンみかち、うぬミカンのー落ていてーんてー。あん  
さーに、「あさてい食みりちやさやー」りち。足ぬあり  
しかんさーに、「あんし御馳走んあるむん」り言やーに。  
あんしさーに蜘蛛ぐわーや、かけーむけーうりすしえー、  
かんし家ぐわー造いしえーやー。蜘蛛よ。あんすぐとう、  
くぬ蜘蛛、くんぐとーぬ生物ぐわーぬん、かんし家造  
ていさぎーるむんりち。しちやぐとうよ、自分がまた  
かけーむけーしちしちやぐとう、網作い出じゃちえー

サンチナの芋というのがあるでしょう、それは柔らか  
かつたらしく、七歳からは歯も生えているからね。だ  
からサンチナの実をあさって食べて、成長していた。

そして、後はみかんの木の下で寝そべったりしてい  
たようだ。しかし、ミカンはたわわに実っているのだ  
が、体が弱いばかりに思うように（取って食べること  
も）できなかつた。「ああ！ここにはこんなにミカンが  
実っているんだが……。私の所に落ちるんだったら、  
たった一個でいいから食べてみたいものだ」と。足を  
トンとしたようだ。するとポンとミカンが落ちてきた。  
そうして、「これは食べてもよいということだな」と。  
足をトンとたたいたおかげで、「こんな御馳走にもあり  
つけた」と言つて（食べた）。

そして蜘蛛は、あちこちに糸をかけながらするでしょ  
う。蜘蛛よ。このような蜘蛛みたいな生物でも、こう  
して家を作るのだのと思つていた。そういうふう  
にして、網を作り出したって。

たんり。

網作あみぢやくいいじやぐとう、川端かわらばたんじ。川ぬあてーんてー。  
うぬ蜘蛛くぐらぐわー見けんじやーに、網あみぐわー作ぢやくたぐとう、魚いぬ  
ぬかかてーぬぐとーん。あーうれー、自分じぶんあがち、育ふ々  
なたぐとうてー。自分じぶんあがち、食かむしやさやーりやー  
に。物もの企たくらぬ、企たくらみんありやしえー。あんさーにうりし  
ち。

また、なー大人おとななたぐとう、護ご佐さ丸まるぬ女いん子な、妻よめし  
ちえーんてー。あんさぐとう、「勝かつ連ちんぬ按あ司じぬ、今いま、謀むん  
及ぐ企たくらり、寄ゆしかきていちゆーぐとう。注ちゆう意いしーよー」  
り言いちやぐとう。護ご佐さ丸まるりしえー、「勝かつ連ちんぬ按あ司じぬん、  
あんし謀むん及たくら企たくららむがやー」りち。あんし、「人ひとぬ手てにか  
かてい死しなやか、自分じぶんくる死しぬしえーまし」り言いやー  
に、あぬー死しじやんり。

網を作り出したら、近くに川があつたようだね。その蜘蛛を見て、網を作り出したら、魚が取れた。ああ！これはもう食べるもんだねと、成長したので自分で食べ物を得るようになった。

その後、成人したので護佐丸の娘を妻とした。すると、「勝連の按司が、今、悪いことを企んで（戦を）寄せてくるよ。注意しなさいよ」と言った。護佐丸は、「勝連の按司がもう悪いことを企むか」と（思っていた）。そして、「人の手にかかって死ぬよりは自分で死んだ方がいい」と言つて、死んだそうだよ。

採集H1・5・24 読谷村ゆうがおの会へ村山友江

注① 阿麻和利 北谷屋良村に十五世紀初頭に生を受けた英雄である。十歳の頃まで体が弱く、山に捨児されていたが、山中で蜘蛛が

巣をはるのを見て網をつくりだしたという。成長の後、勝連按司につかえたが、勝連按司茂知附を亡ぼし勝連城主となる。また、海外貿易も盛んにしたとされるが、護佐丸や第一尚氏と対立抗争し、一四五八年に越来按司（鬼大城）にひきいられた軍勢に亡ぼされてしまった。阿麻和利の墓と称されるものが大木のエンミ原にある。

注② 護佐丸 一四二〇年代の英雄、護佐丸はもと大北(説谷山、恩納)地方を領し、最初山田城にいたが、後に座喜味に城を築いて移った。ここで北山地方をおさえ、長浜港を利用して南蛮貿易を行ったといわれる。更に、その娘が尚巴志の妃(夏氏大宗由来)記には尚泰久の妃)となり、北山も一四二六年に滅亡したので、一四四〇年に中城城を築造して移った。

108

## 屋良のアマンジャラー

話者 照屋 牛五郎(明治三十一年十二月四日生)

翻字 玉城 和美

アマンジャラーという人およ、屋良ムルチ(註①)にかい捨てて子やてーるふーじ。あんしやてーるふーじやしが、うぬ人おなー、ちゃーしん人間のー運命りちあぐとう。小さいになぎらつていん、うまから魚んぬーん取ていが食らだー、ちゃーしが育いーたらーくれー分からんしが、あまうてい育いーていなー人間なてーるばーて。捨て子やしが。

あんさーにしれーしれー育いーてい頑丈者なたぐとう、また勝連城(註②)んかい百姓やしがなー、使つてーるばーて。あんししれー力ぬ強くなたぐとう、なー城お、按司え殺ち、私が大将なりわるりぬ思ぬあてーるばーて。

アマンジャラーという人は、屋良ムルチに捨てられていたらしい。そういうふうな捨て子であつたらしいが、人間には運命というのがあるからね。小さい頃に捨てられても、そこで魚でも取って食べたのか、どのように育ったかは分からないが、無事に成人したらしい。捨て子だったけどね。

そしてだんだん大きく育っていき、頑丈者になつたので、勝連城で百姓として使われるようになった。そしてだいに力も強くなったので、城主を殺して私が大将になつてやるという、思いを抱くようになったん

ある場合なかいありやたんり。漁師頼り、漁民てー、頼まーに、「松明ちきてい、船幾ちんうまんかい寄して来よー」りち、漁師んかい頼まーに。海から松明ちきてい来ぐとう、「今、あまから戦ぬちやーびーしが」りち、按司合図さーに出じやさーに。出じてい海のふあんとんかい、しれーしれー寄しやーに押し落とうち、勝連按司え。あんしから勝連城の按司なみそーちゃんり。たつたんに。

あんしからまた、中城御殿ぬ長女が、護佐丸ぬ妻えやみしえーたらー、次男のーまた、くりがーなー私にんかい、またうまんかい嫁ひち来ぐとう。女子いーらちよーけーあねーさんむーりち、女子、妻、ウナジャラんかいしみてーるふーじ。

あんしやしが、なーうれー、アマンジャラーりぬむのー、阿麻和利りぬむのー、勢ぬどうく強さるあぐとう。ちやーしん天下あ私あ勝手しわるやるりぬ、思なやーにやてーるふーじやしが。中城護佐丸お實際や座喜味城んかいめんせーたんりよー。山田城から座喜味城んかい。座喜味城や、あぬ人ぬ造みそーちゃんり。

でしようね。

ある時、漁師に「松明をつけて、船を何隻もこちらに寄せて来てくれ」と頼んだ。そして海の方から、松明をつけて攻めて来たので、「今、あそこから戦争が攻めてきますよ」と、城主に合図して外に出した。外に出して、海の岸壁にだんだん追いつめていき、突き落としたそうさ。そういうふうにして勝連按司を突き落とし、それから（阿麻和利は）勝連城の按司となった。しだいしだいにね。

それからまた、中城御殿の長女が護佐丸の妻だったらしいが。次男もまた、この人に娘を嫁としてあげておけば、私にはそういうことはしないだろうと、娘をウナジャラとして、妻にさせたそうさ。

そうであるんだが、このアマンジャラーというのは、阿麻和利はあまりにも勢力が強かった。もうどうして、「天下を自分の思いのままにしなければいけない」という思いがあったようさ。中城護佐丸は、実際には座喜味城にいたそうさ。山田城から座喜味城に移り、座喜味城は護佐丸が造ったそうさ。

あんしうまんかいめんせーし、護佐丸お山田城から、あぬー座喜味城んかいめんそーち、うまつち城造ていめんせーしが。首里城ぬ、中山ぬ、「中城、勝連とうぬたなかんかい、護佐丸連てい来んあれー、勝連城から私にんかい呼びに来る恐れがあんり」りち。あんさーに読谷、座喜味城んかいめんせーし、中城んかい引つ越しし、みそーちあんり。中山ぬ命令てー。

あんやしがまた阿麻和利え、「くれー護佐丸落とうしわる首里城んじ婿おやみせーくとう。首里城んじ嘘し、あんさーにあぬー一番のー中山ぬんがつていんのーしみそーらんでーぬふーじやし。うぬ場合や中城お工事中、家造いぬ工事中やたんり。あんさーにうまから使え使てい、あまぬ様見じーが行ぢやぐとう。なうーれーまんもーとうぬ様子の見ちよーぐとう、はつきりえー分からんでーるばーて。あんさーに「ああやいびつさー、うぬふーじーやいびつさー」りち、返答しちやぐとう。勝連城やまた嘘し、自分ぬ大将なてい、中城んかいや使つたんりよ、大将なてい。

あんしえーな、實際やれーくれー護佐丸ぬあんするわけーねーんしがりち、信じらんしが。あんし様子

そして護佐丸は、山田城から座喜味城へ移つてきて、城を築きあげていた。しかし首里城、中山が「中城と勝連との間に護佐丸を連れて来ないと、勝連城から私の所へ攻めてくる恐れがある」と。それで読谷の座喜味城にいるのを、中城に引つ越したということだ。中山の命令でね。

阿麻和利はまた、「これは護佐丸を倒さないことには、首里城も手にすることはできない」と(企んだ)。首里城の婿ではあるんだからね。首里城で嘘をついたが、最初は中山も信じようとはしなかったようだ。その時、中山は新築中であつたそうだよ。それで使いをよこして、あちらの様子を見に行つた。もうそれは周囲から様子を見ているだけなので、はつきりは分からなかったようだ。そして「ああそうでしたよ。その通りでした」と返答した。勝連城は嘘をついて、自分が大将になつて中城に使いをよこしていたのである。

そうしたらもう、実際に護佐丸がそうするはずはないと、信じられなかったが、様子を見に行つた人が悪

見ちち、うぬ様子人ぬ悪さてゝるばゝて、な。眠た  
ぐとう使やゝに、中山ぬ命令やんどーりち、中城んか  
いや戦争あしかきたぐとう。護佐丸ん、あーうれーあ  
ねーあらんしがでー思しいしが、しかも中山ぬんかいや  
手んけーならんぐとう。なー私あ誠おまちげーねーん  
ぐとう、誠。戦争しーねー中山のー勝ちゆる可能性や  
あしが、やむを得ない、中山ぬ命令なたぐとう切腹し  
みそーちやんり。

うれーぬが芝居にんあしが。うつとうんぐわーや乳  
親ぬ、子供達ん、妻、子ん全員殺ち、中城お自分ん切  
腹しみそーちやしが。うり一人や、なー暇いーやゝに、  
乳親ぬ連てい行ぢ。あんしからうりがはつきりさぐとう、  
また中山ぬんかいな、阿麻和利えしかきゝるくとう  
んかいなてゝるふーじ。やしが中山ぬんかいや、な  
負きてい。

楚辺ぬエーミりちあんよ、エーミ原りち。うまーな  
まん、戦前のー牛ナーやたるばゝ、造てゝたるばゝてゝ。  
うまーモーやんよ。赤モー。うまぬえーが追つてい來  
やゝに、うまつちえーな、中山なかいぬ命令なかい  
押てい、エンミせーひち、エーミりち付きたんりる話。

かつたんでしようね。眠っているうちに使いをよこし、  
中山の命令だと言つて、中城に戦争をしかけていった。  
すると護佐丸もそうではないと思つていたんだが、中  
山の命令なので手向かうわけにはいかない。私の誠に  
まちがいはない、(私は)誠だと。戦争をしたら中山に  
勝つ可能性はあるんだが、中山の命令なのでやむを得  
ないと切腹したそうだと。

またそれは芝居にもあつたよ。子供達や妻も殺して、  
中城の(按司は)、自分も切腹するというふうだね。そ  
して下の子一人だけは、乳親が暇をもらつて連れて行つ  
た。その後、それがはつきりしたので、阿麻和利は中  
山に戦争をしかけていったが、負けてしまったそうだと。

楚辺のエンミ原というのがあるがね。そこには戦前、  
闘牛場があつた。そこまで(阿麻和利は)中山の軍勢  
に追われてきた。それでもう中山に追いつめられてし  
まって、エンミ(ごめんない)でしたということ、  
エンミ原と付けたという話があつた。そこにはエンミ

エーミ原りんよ、うまー。あんさーにうまつちエーミ  
さーに、いえーりん殺さりがしちらー、屋良墓りち  
今んあんどーうま、楚辺ぬ上んかいあんどー。あん言  
ちやんりる話。

原というハル名があつたよ。闘牛場も造られていてね。  
そうしてそこでエンミして、多分殺されたのか、今で  
も楚辺の上の方に屋良墓というのがあるといふ話だよ。

採集 S 52・2・20 読谷村民話調査団第十四班 伊芸弘子・運天悦子・知花春美

注① 屋良ムルチ 嘉手納町屋良にある。俗にムルチグムイと称し、比謝川の支流である茂呂木川上流の知花へぬける県道十六号線沿いの森の中にある。この湖は、昔は約千坪の広さがあつたといわれるが、米軍基地拡張で半分埋め立てられた。

② 勝連城 与勝半島の中央部勝連町南風原に在つて、中城湾をまたいで南の方には中城城跡が望見される。首里城第一尚氏尚泰久(一四五四—一四六〇)時代、勝連按司阿麻和利の居城であつた。

③ 座喜味城跡 読谷村座喜味の城原にある古城跡で、十五世紀の初期に護佐丸によつて築造されたものである。しかし、座喜味城での護佐丸の動向は明らかではないが、そこに二十年程居城し、一四四〇年後に中城へ移つたといわれる。座喜味城跡は、国指定史跡で環境整備もすすみ、松林の奥深くたたずみ、風光明媚なところで訪れる人も多い。

④ 山田城 座喜味城から直線距離にして約四km東北の地にある。恩納村字山田の東方を通る国道五八号線の東側に平行して走る琉球石灰岩の丘陵の北端部に山田城は立地する。十四〜十五世紀頃護佐丸が築城したといわれ、座喜味城が築城された一四二〇年には廃城になつた可能性が強い。

⑤ 首里城 一六八頁参照

⑥ 中山 十四世紀から十五世紀にかけて、沖縄本島は北山、中山、南山の三つに分かれて統治された。北山は石川と仲泊を結ぶ地峡を境にした北の方で今帰仁城が居城であつた。中山は首里(浦添、西原、南風原、真和志の一部)を中心とし、首里城が居城であつた。南山は、沖縄本島の南部地長を統治し、高嶺大里城が居城であつた。

翻字 村山友江

昔ぬ王やしんかしおぢが、長男ちやくしとう次男じなんとう生なちえーるばーてー。  
 長男ちやくしえ先妻さきづまぬ子こ、またくぬうれーチーグーやるばーてー、  
 先妻さきづまぬ子ことー。また次男じなんとうし生なちえーしえーチーグー  
 あらんしてー。

また二人ふたりぐーなーめーめーぬヤカーりしがうるばー  
 てー。長男ちやくしぬヤカーんうい、次男じなんぬヤカーんうるばー  
 てー。うったー二人ふたりや必かなじなー、次男じなんのーなー本ほん当とうぬ  
 なーチーグーあらん、実じつ際さいぬ物もの言いぬ人ひとやんてー、長男ちやくし  
 やなーチーグー。

くれー沖繩うちなぬ王おう継ちがすんり、是じ非ひとうむチーグーぬ  
 王おう継ちぐぬくとーならん、次男じなんぬんかいる継ちがしやない  
 るりち。あんさーなかい、長男ちやくしぬまたヤカーがー、「長  
 男ちやくしや長男ちやくしるやるちやー、うりんかいる継ちがする」りち、  
 二人ふたりぐーなー争あいそーるばー。

必かなじ物もの言いらちとうらしりち言いちやるばーに、物もの言いちや  
 ぐとう。「ちやーが」りやーなかい、くぬチーグーが王おう

昔の王だが、そこには長男と次男がいたようだ。長男は先妻の子供で啞であつたが、次男はそうではなかつたようだ。

また、二人には各々のヤカーがいたようだね。長男のヤカーもいれば、次男にもヤカーがいたんだが、長男は啞で、次男は実際にちゃんと物の言える人間であつたそうだ。

これは沖繩の王を継承することだから、啞に継がすわけにはいかない、是非とも次男に継がさないとけないと(次男のヤカー)は思っていた。また長男のヤカーは、「(例え啞であつても)長男は長男であつて、王は長男に継がすべきだ」と、二人の争いが始まつた。(そうして長男のヤカーが長男に対して)必ず物を言つてくれ、と頼んだ場合に、この啞である長男は物

継じやるばー。あんすぐとう人間りしえー、必じなー  
長男え、長男、次男のー次男のこういうふうな争いや  
しが。うりがーならん、物のー言らんあるむんぬ、  
王継がちえーならん、くりがる継ぐるりち、争いしちよー  
しが、物のー言出しやーなかい。お願いそーるばーてー、  
必じりち、あんし言出したぐとう、かんしチーグー王  
ぬ物言出しやーに、これがありがたさからかぎやで風  
や出したんりぬ話。

110 楚 辺 部 落 の 繁 栄

自然発火りぬ話やしがよ。あれは、あがたー楚辺に  
あることやぐとうよ。あれは私達あ楚辺の人にはね、  
いつペー大切なむん。私ねー前宇座ぐわーぬおじいか  
ら聞ち。あの時に昭和一年、二年頃ね。

を言ったようだ。すると「どうか」と、この啞だった  
長男が王を継いだということ。だから、人間というの  
はいつまでたつても、長男は長男、次男は次男という  
争いだよ。物も言わないからこれ（長男）には継がす  
わけにはいかない、これ（次男）が継ぐんだよ、と争  
いしたんだが、物を言い出したということ。必ずとい  
うこととお願ひしたわけさ。すると物を言い出したの  
で、啞が物を言い出したのでというありがたさからか  
ぎやで風も始まったということだよ。

採集52・2・20 読谷村民話調査団第十二班（山人端孝子）

話者 比 嘉 清次郎（明治四十三年三月二十日生）

翻字 知 花 春 美

自然発火という話だがね、あれは私達の楚辺にある  
ことなのでね、私達楚辺の人にはたいへん大切なこと  
である。私は前宇座ぐわーのおじいさんから聞いた。  
昭和一、二年の頃である。

私達あ楚辺村あ農道造いんりよ、石グー採つていよー。  
石グー何処から採つたがりれー、なーいい石んねーん  
ぐとう、へ私達ああまるやしえー、今ぬ部隊ぬ。くまー  
あらんぐとうへ農道造いんり、前から採つとーんよー。  
前ぬ石がつばい所から。楚辺から家ぬ後りーねー部隊  
からあまかい、喜名ぬ所、ローヤルぬ前よ。あの付近  
はね、ずつとふがちえーたんよ。石グー採いんり。農  
道んかい石グーほーいんりよ。私達あふがさーぐーん  
やい、入りやーぐーんやい、ふがちえーたさ。私達あ  
十五からやぐとう青年のー。

あんし、前宇座ぐわーぬおじいさんが区長まんぐら  
てー、相当ぬ出火出していよ。字出火、火災ぬ出じ  
ぐとう、ひるまさぬあたひ火事出していよ、大きい家  
が相当出火し、三十世帯あまい、四組えすぐ三十世帯  
むる燃とーん。

あんさぐとう、「はい、いぎたー島あサカワイが出じ  
とーさー。家ぬクサツテイぬ弱はぬ腰ぬ弱はぬよ、だ  
から出じーんどー」りち、強ばーハンジやぐとう、ス  
ムチぬ本から。「あんし、ちゃーさらーましやいびが。  
とーちやぬふーじーやいびが、サカワイリしえー」調

私達の楚辺村は農道を造るといって、石グーを採つ  
ていた。どこから採つたかといえは、もういい石もな  
いので、へ私達は今の部隊（トリスティーション）の所  
だったでしょう。ここではなかつたよへ農道を造ると  
いって前の方から採つた。前の石だらけの所からね。  
楚辺の後といえは、トリイ通信基地から喜名方面、ロー  
ヤルレストランの前よ、あの付近は石グーを採るといつ  
てずつと掘つてあつたよ、農道に石グーをまくといつ  
てね。私達は十五歳からは青年だからね。

そして、前宇座ぐわーのおじいさんが区長の頃、大  
火事があつた。字出火、不思議なくらいに大きな火事  
で大きい家が燃えて、四組は三十世帯全部燃えてしまつ  
た。

それで、「はい、私たちの島はサカワイが出ているよ。  
家のクサツテイが弱くてね、腰が弱くて、出火してい  
るんだよ」と、強いハンジが易の本から出した。「どう  
したらいいかね、サカワイというのはどういふことで  
しょうか」と調べてみた。すると、石ごと取つて採掘

びていんちやくとう。むる石ぐとうふがちえーるばー。  
ガマなちえーるばー。ふんとうクサツテイがんじゅー  
はぎわるやる。島ぬクサツテイ、村ぬクサツテイガマ  
なちやくとうよ、「とーうまー埋みり」りち、埋みやー  
に、私たーガジマルぐわー今んあんどー。私たーが  
青年会じぶん植いたるガジマル今んあんどー。また、  
前んあんししちやくとう改まとーるばー。

なーていちあん。なーていちえー何がりれー、倉ぬ  
あたん。いったー倉ぬタンカーや城間やしが、すぐま  
タンカーなとーしが。あまぬ倉あ栄えとーしが、いつ  
たー倉あしびりとーん。とー倉作れー。

うにーから、くま埋みたい、倉造たいしちやくとう  
うんなむのー、むるねーんなてい、改たみていよ、村あ  
栄てい。私たー楚辺村あこういう出火ぬ出していうり  
がゆいやたんり。まー判断してね。

今ちえー私たーや、楚辺村あくまんくーやーなかい。  
私ねーくまんかい来ぐとうよー、くぬ話皆から聞ちよー  
ぐとうよ。あぎたークサツテイえでいきとーさ。比屋久  
ぬ墓あいつばー残てーちえーぐとう。あれーいいクサツ  
テイ、楚辺ぬクサツテイなとーぐとうや。とーとーく

して、洞窟になつていた。ほんとうはクサツテイは強  
くなければいけない。島のクサツテイはね。村のクサツ  
テイが洞窟になつていたので「そこは埋めなさい」と  
埋めた。私たちが青年会の時に植えたガジマルは今も  
あるよ。そのようにしたので改められた。

もうひとつある。もうひとつは何かというと、倉が  
あつた。おまえたちの倉の前は城間だけど、すぐま向  
かいにあるがね。あそこの倉は栄えているが、おまえ  
たちの倉はさびれている。さあ倉を作りなさい。

そのときから、ここを埋めたり、倉を造つたりした  
ので、そんなことはなくなつて、改められ、村は栄え  
た。私たちの楚辺村にこういう出火が出たのは、そん  
なことが原因だつた。まあ判断したわけだ。

現在、私たちの楚辺村はここへ移動した。私はここ  
へ来てから、この話を、皆から聞いた。私たちのクサツ  
テイはすばらしいよ。比屋久の墓を残していてよかつ  
た。あれはいいぐあいに楚辺のクサツテイになつてい  
る。もしここが洞窟だつたら大変だつたでしょう。

まなかいガマないねー、ゆく弱みやてーさ。

採集 S 63・12・15 読谷ゆうがおの会〈知花春美〉

注① 部 隊 トリイ通信施設のこと。西太平洋地域におけるアメリカのもっとも重要なスパイ通信・情報基地。

② クサツテイ 沖縄の古村落はクサツテイ（腰当て）として集落の背後に御嶽を配置し、村の繁栄を願っている。

③ ハンジ 易者の判断。

## 111 楚辺の地名由来

話者 比嘉恒健（大正十二年一月十二日生）

翻字 玉城和美

兄さん達の話によれば、昔は砂糖小屋は、ずっと今の上原にひとつしかなかったって、読谷村では。村中の砂糖小屋が向こうにあったというので、いつも楚辺の方は生産高が多くて、別の部落より一番後になった。それでも楚辺が終つたらシースピーになるということで、「もう砂糖はスピなつたかなあ」という言い方で、ここは楚辺というふうにつけられたという話があった。

※方言で終わりのことを「シースピー」という。

採集 S 63・12・15 沖縄県民話の会〈宮城昭美〉

話者 比嘉恒健(大正十二年一月十二日生)

翻字 玉城和美

親見原は、まあ伝説とかいう昔からの話によれば、阿麻和利が、エンミ毛というところで、エンミというのは降参という意味で、中山軍に追われて、ここでエンミしたと、詫をしたと、降参したといういわれから、そのエンミ原が、エンミ毛というのがあってこの名前をとってエンミ原と、その周辺がエンミ原とついたんじゃないかなと。親見原とは、当て字じゃないかな。

採集S 63・12・15 沖縄県民話の会(宮城昭美)

注 親見原 現在の大本部落で、古堅小学校西側一帯の原名、そこに、阿麻和利の墓がある。「エンミ」とは方言で「降参する」意で、首里の追手が阿麻和利を討取る時に言った言葉が小字名として使われるようになったといわれる。

113 大本部落の由来

話者 照屋牛五郎(明治三十一年十二月四日生)

翻字 名嘉真 宜勝

大木ぬトウクブサーや、大木でいち大木ぬあたんよ。  
うまーんまなかい大木ぬあたんてい。大きな木。

大木部落のトウクブサーには、大木が生えていた。  
そこには大きな木があったそうだ。大きな木。

あんさーに、大木おおきでいち名な付きけやーに、うまートウ  
クブサーなたんでい。なまんあんどー、トウクブサー  
あんさーに、うまうていうま追りおやーに、うまふかやま深山なやー  
に、大木おおきぬあてい、うまうていうま命ぬちしぬじやんでい。

ちようどう防空壕ぼうくうごううてい命ぬちしぬじやん。うぬ壕ごうや運うん  
ぬあんでいち、たといとーしとーゆぬむん。  
でいち。

114 夫うとこ振ふい岩い

親おやぬちやーがてー、なー夫婦みふとなすんりちやしが、なー  
うれーカンパチャーやぐとう、男いさかあうぬ女いながぬふていな  
らんばー。

ならんしが、親おやぬ考かんやーに、親おやぬ相談そうだんさーに、舟ふねぐわー

それで、そこで（ある武士が）追われたが、山深く  
て大木が生えていたので、そこで命拾いをしたという  
ことだそうだ。

ちようど戦時中防空壕で、命を凌しのいだのと同じよう  
にね。その壕は幸運に恵まれているということ、例  
えられているのと同じだよ。

それで、大木おおきという地名がつき、トウクブサーとい  
う拝所おまつりはあるよ。

採集S 52・7・3 読谷村民話調査団第四班（運天悦子・大本敬子）

話者 松田ウシ（明治二十四年十月十日生）

翻字 棚原 めぐみ

親おやが、もう夫婦みふとにしようということだが、男はカン  
パチャーだったので、女が嫌がつっていた。

もう親が考えて、相談して、舟ふねに乗せて離島に連れ

乗やーに、離島んかい行ぢ。海ぬ真ん中んでーるやてー  
さに。

あんさぐと、物のー忘とーるむん、取ていくーひー  
りちやぐと、またうぬ嫁ぬ、「私が行ちやびん」りちや  
ぐと。「いやーうまんかいとーれー」りち、なーカ  
ンパチャーと、女とうちえーてーるばー。

親あ行やーに、あんさぐと、大寒さ、寒はしあた  
やーに、うぬ男あ寒さひちよーていん、うぬ女かくぐ  
ひちよーるばーてー。あんさーに寒さにしらちやぐと。  
うりから愛さひちやーに夫婦なたんりんろーりち話聞  
ちやんどー。

て行つた。海の真ん中だったんでしよう。

そして、親が、「忘れ物をしたので取ってこようね」  
と言うと、嫁は「私が行きます」と言った。「おまえは  
そこにいなさい」と、カンパチャーと女の二人を残し  
た。

親は行って、そこはもうとても寒かった。男は、自  
分は寒くても、その女を思つて寒くさせないようにし  
た。それから愛情がでて、夫婦になったという話を聞  
いた。

採集S 52・2・20 読谷村民話調査団第二班へ当間典子・鈴木信一

注 夫婦岩 名護市羽地の源河のほぼ真北一・四キロメートル沖にある海拔三・五メートルの岩礁をいう。

翻字 島 袋 喜美子

普天間グジーというお方、女の大変な美人やてい。

まー男ぬかーじ、くぬ美人りる女見じぶさぬやしが、全然外んかいや顔あ出じやさん、見らんたぐとう。あ若者達が、じひとつ見りわるやるりち。あんさーにくぬ普天間グジー、あとう驚かち家から出じやさーに、男皆なかい見らつていしちやぐとう、くぬ普天間グジーや、なーかんし生きちえーまー望めーねーらんりち。

あんさーに自分ぬ毎日ぬ紡じえーるウーバーラから芭蕉ぬ先紡ぎ、先えかちみやーに、あんし家からちやー出じーししちやぐとう。くぬ芭蕉や、紡じえーる芭蕉や普天間ぬ洞窟んかい入つちんじよーんりる事お分かてい。皆し捜ちやしが、普天間グジーりしえー見ちからんたぐとう。まーやはりくぬ普天間グジーでいぬ女お、まー普通ぬ人おあらん、やつぱし神るやてーさやーりぬ、皆、まー想像し、この普天間宮りしえー、

普天間グジーという方は、女性で、大変な美人であった。すべての男性は、美人で評判な女性を見たいと思つていたんだが、全く外に出ることがなかつたので、見ることができなかつた。それである若者達が、ぜひその女性を見たいということになった。そうして普天間グジーを驚かせて家から出し、男性みんなに見られてしまった。普天間グジーは、こんなにして生きていても何の望みもないと悲観してしまった。

そうして自分が毎日紡いでいるウーバーラから芭蕉の先をつかんだまま、家を飛び出してしまった。(後をついて行くと) 芭蕉は、普天間の洞窟に入っていると、いうことが分かった。それでみんなで捜したんだが、普天間グジーを見つけ出すことができなかった、というところで、普天間グジーという女性は普通の人ではなくて、やつぱり神様であつたんだなと、みんなで想像しそれから普天間宮というのは、お宮としてできた

まー家とうしできたんでいる昔話やさ。

あんさーに、まーことにこの大和から、くぬ武士ぬ来、まーいえば兵隊ふーじーやてーるばーてー。うぬ人お来やーに、普天間宮かんし見ちすんでいしーねー、自分ぬくぬ刀ん忘てい、また大和んかい帰てい行ぢから、戻ていち来るえーま、くぬ自分ぬ刀んあたんりち、くぬ御神様あ本當ぬまーりつばな御神様やんりるくとう分かやーい。

あんさーい近頃ぬ世までい、普天間宮や普天間権現注⑤りちあだ名んちきてい、まー昔ぬまでー徴兵検査しぬ合格すぬばーねー、まー普天間権現さん、まー拝むんりぬ習慣なとーたんりぬ話やるばー。

という話だよ。

また、大和から兵隊のような人がやって来た。この人が普天間権現を拜んでいるすきに、自分の刀を忘れてしまった。しかしその人が、大和に帰り沖縄に戻つて来るまで、刀は残っていたということで、(普天間権現の)神様は本當にりつばな神様であることが分かった。

そういうことから近頃まで、普天間宮は普天間権現というあだ名も付けられていた。昔は徴兵検査に合格した場合にも、普天間権現を拜む習慣になったという話だよ。

採集S52・7・3 読谷村民話調査団第二班〈渡慶次典〉

注① ウーバーラ 糸芭蕉の繊維を入れる籠。「ウー」は芭蕉の繊維、「バーラ」は籠のこと、竹で編まれたもので、直径三五センチ、高さ二〇センチくらいの籠。

② 普天間宮 琉球八社の一つ。宜野湾市普天間にある。

③ 普天間権現 宜野湾市字普天間。普天間神宮内にある洞穴。戦前は森厳な森の中の大鐘乳洞窟の中にあつた。沖縄の古神道の神々と共に伝説の美女の普天間女神が祀られている。普天間権現という名称は観音像を祀つて熊野権現の信仰が移植され、普天間神宮寺とも呼ばれるようになってからであろう。

116 普 天 間 権 現 の 由 来

話者 松 田 ウ シ (明治二十四年十月十日生)

翻字 知 花 春 美

姉弟ぐわー、ウナイ、イキー、男とう女とううたぐとう。うぬ油ぐわー売やー男ぬ、なうぬ女、見じぶさるばー。

あんひちやぐとう、「いったーンミー、見じぶさしが、ちやーひちやらー見だりーがやー」りちやぐとう、「私たーンミーや人ねー見らんどー」りち。「ンミー、ンミー」し呼びやーに、イキーぬ呼びやーに、うまにかい出していちやぐとう、なうぬ油ぐわー売やー男ぬ見ちえーるばーてー。

人んかい見らつたるむんりやーに、あんさぐとうよ、うぬ芭蕉る紡ろーん、ンミーやすぐ針んかい、芭蕉さーに、頭んかいかみていんじ人ん見らつたるむんりやーに、普天間権現ぬんかいしまたんり。うぬ人ぬ神なとーるばーてー。

姉弟、男と女がいた。油売りの男がいて、その姉の方を見たいと思つていた。

そして、「おまえの姉さんを見たいが、どうしたら見ることが出来るか」と言うと、「私の姉さんは、人の前には出ないよ」と言った。しかし、弟が、「姉さん、姉さん」と呼ぶと、そこに出てきたので、もう油売りの男が見たようだ。

すると、人に見られてしまったと、紡いでいる芭蕉を針に通したまま頭にのせて、人に見られてしまったと、普天間権現に入つていったそうだ。その人は神になつたそうだ。

翻字 村山友江

ウシザチジーフアーりねー、昔ぬ唐カンブーぐわーや、ジーフアーさすたしえー。あり七ち飲どーたんりるいーぎーさに。

屋良ムルチりち、退治りちあしえーや。あれー、夜おうまから歩からんたんりよー。悪物がち、うまからー、用事ひち帰りにん、夜からー。昔え、夜るやぐとう、川端から歩ちゆしん。夜、川ぬ側から歩きーねー、人うちゆ喰てー、出していよ。出してい、むる人おうちゆ喰いたんり。

あんさぐとう、退治しちやぐとう、ウシザチ七ち飲どーたんりぬ話や。あれー芝居からんれー、酒る飲まさぎんれーや、酒、酒、かんしちぢがーちーありさーに、酒る飲まさぎん。

なーうれー天ぬ神様るやてーさに。退治しちやぐとう、ジーフアー七ち飲どーたんりぬ話や、あれー夜出してい人喰いたんり。

ウシザチジーフアーというのは、昔の唐カンブーはかんざしをさしたさー。あれを七つ飲んでいたという話だよ。

屋良ムルチの退治というのがあるでしょう。夜はそこから歩くことができなかつたそう。昔は、夜の用事の帰りに、川端から歩くことはできなかつた。夜、そこから歩こうものなら、(蛇が出て)人を喰っていたそう。出てきては人を喰っていた。

そうして、退治してみると、ウシザチを七つも飲んでいたらという話だ。あれは芝居では酒を飲ますんだよ。

もうそれは天の神様であったそう。退治してみると、かんざしを七つも飲んでいたらという話で、夜出てきては人を喰っていた。

あんしうり退治しちから、あれーまた何やたが、親あ  
盲。親あ盲ぬ子ぬ、辰年に生まりてい、辰ぬ人、うぬ  
蛇んかい喰りーぬ年なとーんよ。

あんさぐとう辰年ぬ辰ぬ日に生まりたぬ女童くべー  
りりちなたぐとう。貧乏者ぬ盲、盲親ぬ一人娘ん  
かいあたとーたんり。あんさぐとううりやしえー、女  
ぬ親あうぬ子捨ていやーに、女ぬ親あ金持人とう夫婦  
むつちよーしえー。むつちやぐとう、継親ぬ。盲親  
子身投するたちわに、あまんかい夫むつちいじよーん  
とうくまぬ女中がる、助きたんりぬ話やさ。夫持ちん  
じよーる金持人んかい。

盲りちはんなぎたぐとう。くりがー物のーきーうー  
さんるある、なーいっぺー金持人ぬ嫁なてーんてー。  
うぬ子生ちえーる親あ。あんさぐとう、うまんかい女  
中さつとーしかいなー、うつたー助きーぬ助きるやる、  
親子たるむん身投するちわなとーぬ場合に、助きやー  
にしちやぐとう。

丈ふるいーていしちやぐとう、辰年に生まりてい辰  
ぬ人ぬ、幾ちなやーりちやてーんてー。あんしうりな  
たぐとう、うぬ盲お父たー子んかいあるあたとーたんり。

またあれは、親は盲。盲の子が、辰年に生まれた人  
が、その蛇に喰われる年になっていたそうだよ。

そうしたら、辰年の辰の日に生まれた女の子を（い  
けにえ）にしなさいということになった。すると貧乏  
人で盲の娘にあたってしまった。その貧乏人で盲の妻  
は、自分の子を捨てて、金持ちのところへ嫁いでいた。  
それで、盲の親子が身投げしようとする時に、前妻の  
嫁ぎ先の女中が、助けたという話だよ。金持ちの家に  
嫁いでいたそうだよ。

盲だということ捨ててしまった。もう（盲の夫）  
がは生活させることもできないと、大金持ちの嫁になっ  
たのでしょね。その子の母親は。そうすると、親子  
が身投げをしようとしているのを、女中が助けたよう  
だね。

子供が成長した頃に、辰年生まれの何歳の子を（蛇  
のいけにえにしないといけないということになった）。  
そういうことになったら、盲の父の子供にあたってい

あんさぐとう、「私ねーりつぱにうぬ子育ていてやー、  
ひちえーる子たるむん。うぬ蛇んかいうちゆきーんり  
ちあんなー」りち。しちやぐとう、「私が行かびん」り  
やーに、うぬ女ぬ、女ん子ぬ望り。継親子ねー、連らつ  
てい、金持人ぬ女中るやたんりしが、うりが盲妻な  
やーに。

しちやぐとう、なー金のー包まーに。金持人ぬ子ん  
かいるうれーあたとーたんどーやー。あんしが金持人  
ぬ子あ、うぬ金さーに、「うぬ盲たーがー金欲しりやー、  
子んでー欲さーねーんさ。りー、うぬ盲たーとう替ら  
やー」り言やーに。盲たーが本当や当たらんしちよー  
しが。辰年に生まりたる辰ぬ人お、言やあらん、うぬ  
金持人ぬ子んかいるあたとーしが。金とう替やーに。  
あんさぐとう、産し子ぬ命ん助かてい、ヌブシぬ玉さー  
に目したぐとう、すぐ目んふらちやんり。

たということだよ。

すると、「私がりつぱに育てた子供なのに、この蛇に  
喰わすつてこともあるものか！」と(言った)。その子  
は自ら、「私が行きます」と望んだ。金持ちの女中が、  
その盲の父の妻となっていた。

本当は、そのいけにえになるのは当初は金持ちの子  
があたつていたそうだとすると金持ちはお金を包んで、  
「盲の人達が金は金が欲しいんであつて、子供など欲し  
くはないよ。その盲の子と取り替えよう」ということ  
になつたらしい。盲の子供にはあたつてないんだがね。  
辰年に生まれた辰の人というのは、盲の娘ではなくて、  
その金持ちの子供にあたつていたんだがね。金と替え  
てしまった。すると、その子の命も助かり、ヌブシの  
玉で目をこすると、すぐさま(父親の)目も開いたと  
いうこと。

採集H1・5・24 読谷ゆうがおの会 へ村山友江

注 屋良ムルチ 嘉手納町屋良にある。俗にムルチグマイと称し、比謝川の支流である茂呂川上流の知花へぬける県道十六号線沿いの森  
の中にある。この湖は、昔約千坪の広さがあつたといわれるが、米軍基地拡張で半分埋め立てられた。

昔楚辺ぬ部落およ、飲料水ぬ少らはぬ水ねー非常に困とーたんり。ウフカーんりちんあい、ソーガーりちんあしが、うぬ二カ所から水使とーてーるぐとーしが、うっさしん足らん。後んじ、イーガーりしんあい、イーガーぬ上なかい大きな溜池掘やーに、あんし、うぬ雨ぬ降いなかい、水貯えていうちよーてい、濾過し、水え飲り補みそーちやんり。

あんさぐとう、水ぬ悪さぬせいがやらー、ふんとーぬ泉ぬ水えあらんぐとう、楚辺ぬ人お、むる目ぬ悪さぬよー、男ん女ん、目ぬあかり、楚辺ミーハガーりち、評判やたんり。

ところが、屋号、屋嘉んりる家なかい、二十歳ぐるぬ一人女ん子ぬうたんりよ。くぬ女ん子あ、同じ水飲り、水使ていん、なー目ん悪こーねーらん、非常に美人やたんり。

あんさぐとう、うぬ娘、うれー屋嘉美らーりち評判

昔、楚辺の部落は飲料水が少なく、水にとつても困っていた。ウフカー、ソーガーというのがあつて、その二カ所から水を使っていたが、それだけでも足りなかつた。後に、イーガーというのがあるが、イーガーの上に大きな溜池を掘つて、水が降るときに、水を貯えていて、濾過して水を飲んで補なつていたそうさ。

それで、水が悪いせいだったのか、泉の水ではないので、楚辺の人はみんな目が悪くて、男も女も目が赤くなつて楚辺ミーハガーと評判だったそうさ。

ところが、屋号、屋嘉という家に、二十歳ぐらいの一人娘がいたそうさ。その娘は、同じ水を飲んで、水を使つても、もう目も悪くないし、非常に美人だったそうさ。

そして、その娘は、屋嘉美人といつて評判だったそ

者やたんり。くぬ女おるく美人なたぐとう、部落ぬ青年よ、他村、他字ぬ青年ぬん なーぜひ、くぬ屋嘉ぬ娘とう会つて、なー縁談ぬ話しえーわやーり思ていん、夜、昼ひつきりなしに、青年ぬちやーが来てーるぐとーん。

あんさぐとう、くぬ娘えなーかんしえー仕事んならんなどーるむんりち、用心棒とうしよ、犬やしなたんりよ。あんさぐとう、屋嘉ぬ娘え、犬ぬ泣ちーねーまた誰がら来さやーりち、裏門から逃ぎやーに誰とうん会わんぐとう。

あぬだー、うりがちかなたる犬のー屋嘉ぬ赤犬りち、また名前えちちよーたん。

ある日、うぬ犬ぬ、雨ん降らんしが、いつペー濡りていち、家んかい帰ていち。玄関うてい、ワンワン犬ぬあびやーさぐとう、うぬやしなとーる屋嘉ぬ娘え、出していちやぐとう、なー濡りていしちよーしが、うぬ犬のーしっぽんいっペーふやーふやーし、いっペーうつさそーるぎさーしよ。しちやぐとう、何ぬわきがやーりち、立つち見じゆるうちねー、うぬ犬のー、「なー水ぬあんとうくま私が見ちよーぐとう。なーりか見し

うだ。この女はとても美人だったので、部落の青年、他村、他字の青年も、もうぜひこの屋嘉の娘と会つて、縁談の話でもしようと思つて、夜、昼ひつきりなしに青年たちが来たそうだ。

この娘は、もうこんなでは仕事もできないと、用心棒として、犬を飼つたそうだ。屋嘉の娘は、犬がほえると、また誰か来ているねと、裏門から逃げて誰とも会わなかつた。

その飼っている犬は、屋嘉の赤犬と名前はついていたそうだ。

ある日、その犬は、雨も降つてないが、とても濡れて家に帰つてきた。玄関で、ワンワン犬がほえたので、屋嘉の娘が出てみると、もう濡れているが、犬はしっぽをふつて、たいへんうれしそうであった。どうしてだろうと、立って見ようとすると、その犬は、「もう水のあるところを見つけたよ。さあ見せてあげよう」と、言わんばかりに、娘の着物の裾をくわえてクラガーというところへ連れて行つた。

ら「りぬ言い分ぶん、ちむえーさーに、うぬ屋嘉やかぬ娘むすめ着物ちんぶつぬ裾すそくーやーなかに クラガー注①りるとうくまんかい、連そてい行いち。

あんし、クラガーぬ前まへ行いちーねー、うぬしぐ、内なかんかい犬いんのー行いちやーなかい、あんし、水みづぬ前まへんじ、ワワンあびやーしちやぐとうよ。うぬ屋嘉やかぬ娘むすめえよーやく、明あかりぬあんとうくままでー行いち、うりから先さきえ暗くらさぐとう、うまんかい立たつちよーてーるぐとーん。立たつちよーるうちなかい、うぬ犬いんぬ水みづぬ中なかんかい、飛とびぬかーに、バタバタ泳いじさぐとう、あーくまんかいうつさ水みづぬあんりちやさやーんち、考かんてい。

あんさーに、さつそくくぬ屋嘉やかぬ娘むすめえ家やんかい帰かえてい、うぬくとう字あぬ当とう役やくんかい、話はないさぐとう、字あぬ当とう役やくんさつそく調ち査さし、調ち査さしちやぐとう、水みづぬいっペーまんりよ。あんし、うりから字あ総そう出でんじさーに、清せい掃そうしち、あんさーに、何な不ふ自じ由ゆうんねーんぐとう、今こん日にちまで水みづが豊ゆたかに飲ぬらんり。

あんまりなー美人びじんやくとう、うりいっペーしぬりんてーやーりる男いぬうたしが、昼ひるん夜よるん犬いんぬうてい、入いりやならん。後あとお男いまが、くぬ屋嘉やかぬ娘むすめがクラガーん

そして、クラガーの前まへへ行くと、犬はすぐ内へ入って行き、水の前まへでワワンほえた。屋嘉の娘はようやく明あるいところまで行いって、それから先さきは暗くらいのでそこに立たつていたようだ。そのうちに、犬は水の中に飛とびこんで、バタバタ泳いいで、ここにこんな水があるといつてゐるんだねと思おもった。

屋嘉の娘は、さつそく家へ帰かえり、そのことを字あの役員やくいんに話はなをする、役員やくいんもすぐ調ち査さをすると水みづがたくさんなあつた。それから字あ総そう出でで、清せい掃そうして何な不ふ自じ由ゆうなく今日こんにちまで豊ゆた富ふに水みづを飲ぬんだそうだ。

(屋嘉の娘は)あまりにも美人びじんなので、ぜひ会あつてみたいと思おもっている男おとこがいたが、昼ひるも夜よるも犬いんがいるので入いることはできなかつた。それで、屋嘉の娘が、ク

かい水汲みーが行ちねー、自分ん水汲みーが行ぢ、クラガーぬ内うてい縁談ぬ話いすんりち考ていさくとう、なーあまり思わしくんいかんがあたりーいたずらすんりしちえーるふーじ。うぬ男ぬ。

あんさぐとう、くぬ女ぬ慌ていやーに、あんし、うりが後からまた水汲みが来る女ぬうたんりよ。うりが来んてーれー大事なくとうんかい生じてーるふーじやし、うりが来ぐとう、幸いに難のーぬがりてい。

うまんかい出していちーねーちやねーる男るやらー、見ちんじゆんりち待つちよてーるぐとーん。

あんさぐとう、なー道えーちるあぐとう、じひ出じらんねーならんしえー。うぬ男あなーひーじーから、屋嘉ぬ娘んかいなー注目そーる男やてーんてー。「いやーるやていなー、いやーやあんねーる男るやんなー」りち、なーうりから恥かちやんりよ。

うぬくとう字ぬ当役ぬ間かーなかい、今からあんしえー字内ぶ作てい、女ぬカーんかい水汲みーが行ちねー、すぐカーぬ入口なかい左側なかい丸い石ぬあぐとう、あぬガンシナ、うぬ石ぬ上んかい置ち、内んかいやウーキばかーん持つち行ぢ、水えくまがえーま持つちち、

ラガーに水汲みに行くとき、自分も行ってクラガーの内、縁談の話をしようと考えていたが、もうあまり思わしくいかなかったのか、いたずらしようとしたんでしよう、その男が。

この女は慌てたが、そのあとに、水汲みにきた女がいたそう。その人が来なければ、たいへんなことになつただろうが、幸いなことに難をのがれることができた。どんな男かみてみよう、出てくるのを待っていたそう。

もう道は一本なのでぜひ出ないといけない。その男はふだんから屋嘉の娘に思いをよせている男だった。「おまえだつたのか。おまえはこんな男だつたのか」と、恥をかいたそう。

それを字の役員が聞いて、今から字の規則を作つて、女がクラガーへ水汲みに行くときには、入口の左側に丸い石があるので、ガンシナをその石の上に置いて、内には桶だけを持って行って、ここまでは水を持ってきて、それから頭にのせて帰るようということであつ

あんし、うまからかみてい帰いるぐとう。

あんし、男ぬ水汲みーが来ねー、うまにかいガンシナぬあれー、内んかい入つちえーならん。また男あくまんかい来ねー、ウーキ担みーる棒ぬあしえーや、うぬ棒や石んかい立ていていうち、あんしウーキばかりん持つちんじ、うままでーひさぎていち、くまから担みてい、家んかい帰いるぐとう。あんし、女んまたうまんかい棒ぬ立つちよーる間あ内んかい入つちえーならんち、字ぬ規則つくやーなかい、あんし飲らんりる話やてーしが。

あんさーなかい、なうぬ男あうりんかい恥かちえーぐとう、くんどおまた、うぬ女、恥かかすんりち、うぬ男ぬ、「うぬ屋嘉ぬ娘、犬ぬ子、かさぎとーんどー」りち、あまくまんじあびやーさぐとう。なうぬ娘んうんにーねー、すでに妊娠しえーうたんりさー。

なうぬれー、犬ぬ子ていらむんかさぎとーんりち、私にんかい恥かかすん、もしや犬ぬ子がんれー生まりーねーならんりちる考たらー、うぬ女おなー、夜逃げさーに、津堅島んかい行ぢよ。うぬ赤犬子りる人お津堅島んじ生まりてい、あんし生まりたぬ子ぬ、何ん犬なか

た。

また、男が水汲みに来たら、そこにガンシナがあれば内に入つてはいけない。男は、桶を担ぐ棒があるでしょう。その棒は石に立てておいて、桶だけを持って行って、ここまでは持つてきて、それから担いで家に帰るようということであつた。また、女もここに棒が立っている間は内に入つてはいけなないと、字の規則を作つて、そして飲んだという話である。

ところで、その男は（屋嘉の娘に）恥をかかされたので、今度は、この女に恥をかかそうと、「屋嘉の娘は犬の子を妊娠しているよ」と、あちらこちらで言いふらしたようだ。この娘もそのときにはすでに妊娠していたそうだ。

もうこれは、犬の子を妊娠していると、私に恥をかかして、もしも犬の子がでも生まれたら大変と考えたのか、その女は夜逃げして津堅島へ行った。赤犬子は津堅島で生まれて、生まれた子はどこも犬に似てなくたいへんかわいい子どもだつた。また自分の子も連れ

いまーん似らん、いつペーかわい子やたぐとう。また自分の子ん連てい、元ぬ所んかい帰ていちーうまうてい赤犬子お育ていてい。

あんし、大人になたぐとう、くりが中国んかい、勉強しーが行ぢ。くぬ赤犬子ぬあまから戻やーや、麦、豆、粟、マージン、トーヌチン、うりから野菜ぬニービラーりちあてーしが、うつさおみやげ持つちち、あんし字民かい普及し、あんし穀類ぬ恩人りち、字民のー考てい。

あんさーに、旧ぬ九月ぬ二十日あ毎年、赤犬子祭やんよー。うぬばーにお供え物のー五穀ぬうれーチャンポンし、混ぜ飯炊ち、お供えし、今までいん盛んにやつている毎年。

あんさーに帰ていめんしえーに、昔え道ん悪さるあぐとう、那覇からん歩ちる来ぐとう、疲りているめんしえーたらー、嘉手納ぬ村うてい転りよ。転ばーなかい、残いぬ品物のーほーりらんしが、ニービラばかーじえーほーりたんりよ。うまんかい、あんしうりうまんかいうつちやんぎてい、ある分、家んかい持つち行ぢ、うまんかいほーりとしえー取らんしが、「く

て、元の所に帰つてきて、そこで赤犬子を育てた。

そして、赤犬子は大人になったので、中国へ勉強に行つた。中国から帰るとき、麦、豆、粟、マージン、トーヌチン、それから野菜のニービラというのがあるが、これだけのおみやげを持つてきて、字民に普及し、穀類の恩人として字民は考えた。

それで、旧曆九月二十日は毎年、赤犬子祭をやっている。そのときのお供え物は五穀の混ぜ飯を炊いて、お供えして、盛んにやつている。

赤犬子が中国から帰られるとき、昔は道も悪いので那覇から歩いてきて、疲れていたのか、嘉手納で転んでしまった。他の品物はこぼれなかつたが、ニービラだけこぼれてしまった。こぼれた分はそこにそのままおいて、残つた分は家へ持つて行つた。その時、こぼれた分は取らないで、「ここにはニービラは生えないでね」と言つたので、嘉手納ではニービラは生えないと

まねー、ニービルおみーんなよー」り言ちやぐとう、  
嘉手納字ねーニービルおいつさいみーらんりぬ話。

あんし、うりから三味線、クバぬ骨さーに三味線作  
てい、あんし弦お馬ぬしつばぬ毛さーに作てい三味線  
ぬ音出じやち。あんし、国々沖繩中、東海岸から西海  
岸ぬんかいみぐていち、歌、三味線ぬ普及んかい励  
んそーち。

あんし、中城安谷屋ぬ村んかいさしかかいるばーに  
水欲くなてい、水ぬあんとうくま見ちよーしが、水え  
見つからん。あんし、ある青年が畑からいつペーま  
さぎさる大根よ、担みてい来しがうたぐとう、うりん  
かい頼でい、うぬ青年ぬんかい「うぬ大根一ち分きてい  
きうらん。水欲さぬ、うりやしがりちやぐとう、  
「いいですよ」りち。あんし、うぬ青年ぬん道んかい  
道具おうるち、鎌さーに皮やいつてい、あんし中味び  
かーん四ちんかい分きてい自分ぬ手の平んかいうちき  
てい、犬子ぬ前んかい、「今やれーなー食みやつさいび  
さ」りち、「あんた親切な青年だな」りち、赤犬子お感  
じみそーやーなかい。

あんし、うぬ青年ぬんかい、「青年、そなた名前え何

いう話がある。

次に、三味線、クバの幹で三味線を作つて、弦は馬  
のしつぽで作つて三味線を考えた。そして、国々沖繩  
中、東海岸から西海岸をまわつて、歌、三味線の普及  
に励まれた。

それから、中城安谷屋の村にさしかかったときに、  
水が欲しくなつて、水があるところを探しているが、  
水は見つからない。そのとき、ある青年が畑からたい  
へんおいしそうな大根を担いできたので、その人に頼  
んで、「その大根をひとつ分けてくれないか。水が欲し  
いんだが」と言つと、「いいですよ」と言つた。その青  
年は道に道具をおろして、鎌で皮をむいて、中味を四  
つに切つて、自分の手の平において、犬子の前に出し  
て、「今だつたら食べやすいでしょう」「あなたは親切  
な青年だな」と赤犬子は思われた。

その青年に、「青年、そなたの名前は何か」と聞くと、

りが「り言ちやぐとう、姓や言らんよーい、ただ、「マツ」りちる言ちやんり。

あんさーに、うぬ青年の一家かい帰てい行ぢやぐとう、「あー世の中にこんな親切な青年もいるもんだなー」、あんさーにし、松、竹、梅のマツるやがやー、また中城若松るやがやーりち、犬子さん考そーやーに、「どっちでもいいが、この青年は将来、役に立つ人間になるだろうな」りち。

あんさーい、小言言いがちー、また旅続けて、西海岸ぬんかい来やーなかい、瀬良垣ぬ浜うていよ、山原船くしらやーに、進水式ぬ日やたんりよ。あんし、うぬばーねー、うぬ連れ子んそーし、うぬ連れ子ぬ水欲さんりち、あんし船大工んかい、「連れ子ぬいっぺー水欲さそーぐとうや、水分きていきうらんなー」りちやぐとう、うぬ船大工お、「なに！」りち、なー三味線ぬん見ちんんだんしえーやー。あんし、うりん担み担みどうやぐとう、「乞食みたないったーんかい分きていきーぬ水えねーらん」りちやぐとう、「あーそーか。あんししかたない」、歩ちやがちーうぬ犬子様あ、「瀬良垣水船だなー」りやーに言んそーやーい、また

姓は言わないで、ただ「マツ」と言つたそうだ。

青年は家へ帰つて行つた。「ああ世の中にこんな親切な青年もいるもんだ」と、松、竹、梅のマツなのか、中城若松なのかと、犬子さんは考えられて、「どつちでもいいが、この青年は将来、役に立つ人間になるだろうな」と思つた。

それから小言言いながら旅を続けて、西海岸に来て、瀬良垣の浜で、山原船の進水式の日だったそうだ。そのとき、子どもを連れていて、その子が水が欲しいとねだつたので、船大工に、「子どもが水を欲しがっているが、水を分けて下さい」と言うと、船大工は「なに！」と、もう三味線も見ることがないし、それを担いでいたので、「乞食みたないおまえに分けてあげる水はない」「あつそうか、しかたがない」と、犬子様は、歩きながら、「瀬良垣水船だな」と言つて、また歩いて行つた。

歩ち。

またうりから、谷茶ぬ果ていんかい来ぐとう、うまうていん、また山原船はじ、あんし、うまんかい、うり頼だぐとう、うまぬ船大工お、「あーいいですよ。たくさんいただきますい」りち、あんしちやぐとう、「あー助かった」りち、あんさーになー「谷茶速船だな」り言んそーち。

あんし、家んかいまた、小言言いがなちー歩ちやぐとう、うぬ人が言んせーんねー瀬良垣ぬ船えむる旅ぬかーじ、水難ぬんはつちやかていよー、むる水船なてい。あんすしが谷茶ぬ船え谷茶はやーりち、うりしからん水難ぬんかい遭わん、いつペー良い旅りち。あんさぐとう、瀬良垣ぬ船大工ぬ憎り、「谷茶ぬ船んかいいい名あちきてい、私達あ船んかい悪な名あ付きてーぐとう、うれー殺しわるやる」りち。

あんさーにかい、殺するみじふあなたぐとう、うり犬子様あくり聞ちみそーやーなかい、なんじゆ悪い事さんしが、私殺しんるすんなー。あんし人に殺さーりしやかねー、自分し始末すしえーましりち。

あんさーに、今ぬお宮ぬ上んかいめんそーち、あん

それから、谷茶の果てに来て、そこでも山原船を作つていて、そこでも頼むと、その船大工は「ああいんですよ。たくさんいただきますい」「ああ助かった」と、そして「谷茶速船だな」と言われた。

そして、家へ帰る途中、小言言いながら歩いて、その人が言うには、瀬良垣の船は海に出る度に水難に遭つて水船になったが、谷茶の船は谷茶速といつて、水難にも遭わず、たいへんいい旅をした。そうすると、瀬良垣の船大工が憎んで、「谷茶の船にはいい名前をつけて、私達の船には悪い名をつけてあるので、殺してやろう」と言った。

そこで、殺そうとしていることを聞いた犬子様は、何も悪い事もしてないのに、私を殺すのか、こんなふうの人に殺されるよりは、自分でやった方がいいと思つた。

現在のお宮の上の方に行かれて、杖をついていたら

し、杖<sup>つえ</sup>んちちめんしえーたんりよ。杖<sup>つえ</sup>んかい

赤木<sup>あかぎ</sup>赤ヌクぬ ハベルなてい飛<sup>と</sup>ばわ

いちやし訪<sup>たず</sup>にやい 行方<sup>ゆくい</sup>聞ちゆが

りち、歌書<sup>うたか</sup>ち、うぬ杖<sup>つえ</sup>んかいうちよーてい、あんし、

うぬ杖<sup>つえ</sup>ぬ上<sup>い</sup>から、まーんかいがめんそーちやらー行方<sup>ゆくい</sup>

なしやたんり。

しいが、その杖に、

赤木赤犬子が 蝶になつて飛ぶと

どのように訪ねて 行方を聞こうか

と、歌を書いて、その杖をおいて、杖の上からどこへ

行つたのか行方が分からないそうだ。

採集S52・2・20 読谷村民話調査団第十三班（伊波百合子）

注① クラガー 旧楚辺部落にあり、鐘乳洞を流れる地下水源で、戦前は飲料水用とし

て利用されていた。洞穴で暗いので、クラガー（暗井戸）の名前がついている。現

在は米軍基地になつている。

② ガンシナ 頭の上の荷物が固定するように作られたもので、ワラを丸めて一見ド

ナツ風に作られている。



赤犬子宮

それから、楚辺の部落お、こつちにみんな生活お安定しえーうしが、半分のー、米から食糧や、また自給自足して、うんぐとうしそーし、水ぬ不自由なてい、天水たみてい暮らちよーてーるふーじやしが、水ぬか

それから、楚辺部落は、こつちでみんな安定した生活をしているが、半分ほどは、米や食糧は自給自足だが、水が不自由で、天水を貯めて使っていたが、水もかかれてしまった。

あんさぐとう、くまうてー生活おならんりち、ある人ぬ話ぬ、旧部落うてい、こつちから旧部落お東の方やしが、部隊なとーん。あまぬ部落お大山なやーなかい。山ぬ大さぬ。かーま、うわーびから来る、今ぬアカヌクーまんぐらから来るサンぬ水てー。うまうてー育からん、くんどー旧部落んじ、くぬ山ぬサンぬたむとうんかい穴ふやーなかい、うぬサンぬ水たみてい、うり飲でい暮らすんりち、くぬ楚辺部落おむるあまんとくまんかい移動そーるばー。雨ぬ降らん、くまー降らんどうあぐとう 水ぬねーらん水ぬかりていさぐとう あんしあまんじよ、生活おそーてーるふーじや。

それで、ある人の話で、ここでは生活ができないと、旧部落で、旧部落はここから東の方だが米軍基地になっている。あそこの部落は大山になっていて、ずっと上から、現在の赤犬子宮あたりから来る湧水があった。ここでは生活できないと、今度は旧部落へ行って、山のふもとに穴を掘って、水を貯めてそれを飲むということ、楚辺部落はあちらこちらに移動した。ここは雨が降らず、水がかれてなくなったので、旧部落で生活していたようだ。

あんし、くぬ生活おしちするうちねー、うぬカーや  
ニーブガーなどーんばーてー。うれーたみているあ  
ぐとう、うれーイーガーりちよーるばーてー。うまか  
ら夜中やわかち、わちちよーる水、ニーブしくり。家庭  
数や、何軒あたんりち分からんしが生活おそーたんり  
や。

するうちに、また、男ぬちやーが水くまーやぐとう、  
うぬウフヤぬカマーりし、またヌンドウヌチぐわーカ  
マーりし、二人若者んちやーがうたんりよ。男ぬうてー  
るふーじやし、また屋嘉ぬチラーでいし、チラーでい  
しえー女やるばーてー。うとういつちよーる美らカー  
ギー。うぬチラーりし、このウフヤぬカマーぬナーラ  
ビそーてーるふーじや。かなさぐわーそーし。あんさ  
ぐとう、ウフヤぬカマーとうぐーやんりるくとう、ヌ  
ンドウヌチぐわーカマーが分かていよ。「くりがうるえー  
かあ、私あ自由ならん」りち、ヌンドウヌチカマーが  
またじこーぬじゆるーるばー。くぬチラーやぬじゆり  
そーたんりーやー。「くぬウフヤカマーがうるえーかー  
私ー自由やならん。たたち殺ちとうらしわるやつぎー」  
りち、やな考持っち。

生活するうちに、そのカーはニーブガーになつてい  
た。水を貯めてあるだけで、それはイーガーとよんで  
いたわけだ。そこから湧いてくる水を柄杓でくんでい  
た。何世帯あつたということは分からないがね、その  
ようにして生活していた。

そして、男たちは水汲みをして、ウフヤカマーと、  
ヌンドウヌチカマーという二人の若者がいた。男の人  
たちがいたが、屋嘉のチラーという名高い美人がいた。  
チラーはウフヤカマーと恋仲にあつた。ウフヤカマー  
と恋仲であることをヌンドウヌチカマーが知つて、「こ  
れがいる間は、私の自由にできない」と、ヌンドウヌ  
チカマーもまた、チラーを望んでいた。「このウフヤカ  
マーがいる間は私の勝手にできない、たたき殺してや  
ろう」と、悪い考えを持っていた。

あんしし、くぬ朝、早く起きやーなかい、うぬイー  
ガーりしえーかちりているうぐとうよ。山あ暗さぬ見  
だんりるぐとうや、うぬウフヤカマーが先なてい、う  
まんじ待ちくりヌンドウヌチカマーりし、先なてい待  
ちるうぐとう。今が来らーし、人ばつペーしえーなら  
んりち、よーい確かみていや、とーとー来るむんりち、  
ウフヤカマーが入つち来ぐとう、なー後じーからばん  
みかちたたき殺ちよ、すぐすりけーらち、なーにーな  
ちやるふーじや。ウフヤカマーりしえー殺ちさぐとう、  
「なーしーあーちゃん。なー今度お屋嘉ぬチラーや私あ  
たまし自由ないん」りち、うつさしそーるふーじ。

なー屋嘉ぬチラーていーがきーさぐとう屋嘉ぬチ  
ラーんお腹んかい、むのー入つちよーしえーうりとー  
ならんばー。お腹んかいウフヤカマーとう、なんか月  
がないらー分からん、むのー入つちよーぐとう、いか  
なしんむぬいしえーうけつけえさん。ヌンドウヌチぐわ  
カマーがむぬ言いしえー受けつけえさん、ちゃーはに  
ほーい。

くんどーなし、ふるふるお腹がまぎーないしんでー  
あわりし、なーうぬ家んかいういねーヌンドウヌチぐわー

そして、朝早く起きて、イーガー付近は木がおい茂つ  
ていて、山は暗くて見えないので、ヌンドウヌチカマー  
は先に行つて、ウフヤカマーを待ち受けていた。今来  
るのか、人まちがいたらいけないと確かめて、いよ  
いよ来るなど、ウフヤカマーが入ってきたので、後か  
らすぐなぐつて、たたき殺してしまった。倒れて、息  
も絶えて、ウフヤカマーを殺したので、「もうやり終え  
た。今度は屋嘉のチラーは私の勝手だ」と喜んでいた  
ようだ。

もう屋嘉のチラーにいいよつたが、お腹の中にはす  
でにウフヤカマーの子が入っていた。何か月になるか  
分からないが、身ごもっていたので、ヌンドウヌチカ  
マーが寄つてきても絶対に受けつけなかった。

今度はもう、お腹もしだいに大きくなって、苦勞し  
て、この家にいるとヌンドウヌチカマーにいじわるさ

カマ―なかいきがてい、心配し。な―夕さんり、太陽ぐわ―ぬ落てい―るじぶん楚辺ぬ前ぬ浜んじ、ま―、ながみていそて―るふ―じや。するうちね―自分一人ぐわ―寂さびとうぐわ― な―くぬ赤犬ぐわ―ん何処からが来ら―よ、ムクムクぐわ―し、赤犬ぬ子ぐわ―ぬ 尾おファイターファイターぐわ―し、ちゅ―ちゃん現りていちよ。犬ぬ、赤犬ぐわ―があんしチラーんかいかかていまちぶいか―ぶいしよ、かわいいね―りち、うぬチラーや抱ちくり、な―自分が子と―同むんそ―て―るふ―じや。

あんしさぐとう、家んかい来んり―し―ね―、ちゃ―追いしよ、あんし、連ていちえ―るふ―じやしが。な―かわいそ―に迷と―さや―犬ぐわ―、親あま―んかいうがや―りち見ち―やんて―まん親ん見らん。家かいは、あげくぬ自分が育ててい、夜ん自分が寝んして、な―大きくなちえ―るば―て―。犬の―犬、丈え育いするすい、自分が腹ん同ぐとう育い―ていんじ。あと―うぬ犬ぐわ―やな―ふるふるなていさぐとう。

するうちね―、うぬ犬ぐわ―ぬひるましむんやつさや―、浴みていちよ―んね―ん水ぶとうぶとうしチラー

れて心配していた。もう夕方、太陽の落ちる頃、楚辺の前の浜で（海を）ながめていた。ひとりで寂しくいと、どこからきたのか、ムクムクした赤犬がしつ尾をふりふり現れた。赤犬がチラーのところへきて、じゃれて、かわいいねと自分の子どものように抱きかかえていた。

そして、家に帰ろうとすると、ずっと追ってきたので連れてきたようだ。もうかわいそうに、迷っているんだね、親はどこにいつているのかと、どこをみても親はいなかった。家へ連れて行って、自分で育てて、夜もチラーが寝かせてあげて、育てたようだ。犬は犬で大きくなつていき、自分のお腹も同じように大きくなつていった。犬ももうだいぶ大きくなった。

そうしているうちに、珍しいことに、犬は浴みたように水に濡れて、チラーのところへきた。潮ではなく

前んかい来てーるぐとーんや。あんさぐとう潮おあらんうれー水やさやーひるましむん、あんし尾おふいたーふいたーぐわーし来んよー。うぬ犬のー。あんし、チラー、「まーんじ浴みたが」りちよ、手よー足よーし言ちさぐとう。チラーやまた うぬ犬ぐわーぬ行くたぐとうちやーうーいし行ぢえーるふーじ。犬ぬ前んかい。

あんさぐとう、うまー大山やるばーてー。クラガーぬうまー大山やてーるふーじ。木ぐわーぬかたはらからのそのそはいし、歩かりーてー。チラーや入つち行ぢそーんりーぐとう。あんし行ぢやぐとうやっぱりやー、奥んかい水ぬあんばー。とーしーあーちゃんりち、なー犬ぐわーなりてい「いやーや、偉い。にへーやんどー」。

また家んかい戻ていちゃーなかい、ウーキぐわー持ちんじてー、ウーキーぐわーんかいうるちやー。くれーふんとー飲まりーる水やがやーりち、自分一人しうれーならんぐとう、皆確かみていんりはい、あんし女ぬ動物んかいわきてい飲まちえーういし。また犬ぬんかいゴクゴク飲むたんりち、とーくれーまちげーねーん喜んで。

て水だったので、珍しいね、しつ尾もふりふりしていた。チラーは、「どこで浴みたか」と、手まね足まねで聞いた。犬が出て行つたので、チラーは犬の後を追つた。

そこは大きな山になっていた。クラガーのあたりは大きな山になっていて、木も側に生えていて歩けたよ。うだ。チラーは入つたそうだからね。行つてみると、やっぱり奥に水があつたようだ。ああよかったと犬をなでてあげて、「おまえは偉い。ありがとう」と。

それから家へ戻つてきて、桶を持っていき水を入れてきた。これはほんとうに飲める水だろうか、自分ひとりでは判断できないので、皆で確かめて下さいと、動物へも分けて飲ましたりしていた。また犬もゴクゴク飲んだので、これは間違いないと喜んだ。

あんしから、かーまにつかぬえーか、なげーあまぬ  
入口ぐわーや使ていよ、人ぬ歩かんぐとう立つち歩か  
らんどー。まがていどう歩ちゆどう。ウーキぐわーひつ  
さぎてい、よーんなーよーんなー歩ちゆん、水んくま  
から飲むるくとうなてい。

するうちねー、うぬチラーでいしえーなし、お腹が  
大きくなたぐとう、男あうらんあい、犬ぬ子るやるり  
ち世間ぬうわさあ他島までいひるがていくぬ屋嘉ぬチ  
ラーや犬ぬ子かさぎとーんどーりち、なーうわさぬん  
じとーるばーてー。あんさぐとう、うまねーうららん、  
くれーなーへーズラーるやる。

あんさぐとう、うまんかいうららてーやー、島ねー、  
くんどー勝連ぬんかい、ぬきていんじよーるばーてー。  
自分一人むのー持つちよーい。あんしなーうぬ世や分  
からんでー。墮るしんががやらー生しんががやらー。  
ただ勝連浜んじ、またむのーいーてい百姓から豆ぐわー  
いーてい、芋いーたい、育わーち、チラーん海んぢや  
い。

うれー楚辺ん人のー分からん、まーんかい行ぢよー  
らー行方不明るやぐとう。なー勝連人ぬ話どう勝連浜

それから長いこと、あそこの水を使った。人は立つ  
て歩けない。腰も曲げて歩くんだよ。桶を持って、ゆつ  
くりゆつくり歩くんだよ。水もここから飲むことになつ  
てね。

そのうちにチラーのお腹は大きくなって、夫はいな  
いのに、犬の子どもだと、世間のうわさが他までひろ  
がって、屋嘉のチラーは犬の子を身ごもっているよと、  
うわさがでたようだ。それで、ここへいることはでき  
ず、チラーはもうへーズラーだと。

それで、ここにすることはできず、勝連にのがれて  
行った。自分のお腹に入っているし、その時代だから  
墮胎なのか、出産だったのか分からなかった。そして  
勝連で子どもは生まれて、百姓から豆や芋をもらった  
り、海へ出たりして、子どもを育てた。

このことは楚辺の人がは、どこに行ったのか分から  
なかった。勝連の人の話で、勝連の浜の洞窟にいと

ぬガマンかいうんりぬ話や聞ち。あんさぐとう、あまうてい、くぬ男ん子うまりていよ。

またうぬ後からまーんかい、行ぢやんきうーんかい行ぢやんりるくとう。ふるふるまた育いーていから、また家んかい戻ていちやんりるくとう、分かつていしそーしが。うぬ後からどう赤犬ぬ子なちえーんどーし、赤犬ぬ子りち、名やちきてい、赤犬ぬ子や家んかいうてい生活するじぶんのー海からくぬあかきしちやい陸上あかきしちやい。

また雨ぬ降いねー、自分ぬ庭マーニぬ木りちあさ。なーうれー七ち八ち子供ぬじぶん、このマーニ木なかい雨ぐわーぬ降たんりや。あんさぐとう、マーニ木りしえー、さちぬ葉つばその音を聞いてね、あまからうていーる雨さーにかい、葉つばうつちゆる音、にーぐい葉つばんかいトーン、また中ぬ葉つばんかいやトーン、先ぬ葉つばんかいやトーンといつて、テーントーン、三つぬ音じこーたしかみていよ。

まだ子供ぬじぶんるやんどー。なー、幾歳がないたらー分からんてー。子供るやぐとう あんしまた趣味あいがすたらー三味線ぐわーふーじー作やーい、チル

聞いた。あそこで、男の子が生まれた。

また、その後はどこへ行つたということは分からない。大きく成長してから家に戻ってきたということは分かつているが、生まれた当時は、赤犬の子を生んであるよと、赤犬の子と名前をつけて、その子が小さい頃は、海の物を取つたり、陸のものを食べたりして生活していた。

それから、雨が降るとき、自分の庭にマーニの木があつたが、七、八歳の子どもの頃、このマーニの木に雨が降つたそうだ。マーニの葉に雨が落ちる音を聞いて、葉に落ちる音、葉の根にトーン、葉の中ごろにトーン、葉先にテーンと、テーントントンと三つの音を聞いた。

まだ子どもで、何歳だつたか分からないが、子どもなので、趣味があつたのか、三味線のようなものを作り、テンテントントンと弦もつけた。この音の始まり

ぐわーんかいちきてい、テンテントントン。あんしし、この音の始まいや赤犬子。この子供が作いんじやち三味線の音、テンテントントンと、作ったという話がある。

うりから、何年あとうがやら一分からんしが、また唐旅りち、昔えすたんよ。唐旅しもーち。長浜んかい、くぬ港がでいきていからる行ぢやらー、一回行ぢえーねー、珍しいむんりちよ、トージンからマージン、粟から麦、ネギまたニール、オーハ、うぬふーじーをあまからユニス持つちちえーる話やん。

二回目行ぢえーねー、二回目えまた、くぬ首里城よ、あまぬ下んかい、いっぺーまぎワクぬ龍樋りちよ。ちよーどう龍ぬ口ぬぐとーるうり、あぬ首里城ぬ下ぬ川ぐわーんかい、寄附さーなかい。くぬアカイヌクーウスメーが持ちちえーしえー。うぬアカイヌクーウスメーやまた唐から、あぬくぬ唐船丸ぬタナジャーりちよ、床、うりタナジャーりちよーるばーてー。二回行ぢえーから、友達なてい唐人人と、これあげるから、いーらすぐとう持ちもーれーりち、うりまた銅としんちゆうと混合し作らつとーる龍ぬ口ぬぐとーしかなねーるが

は赤犬子、この子がテンテントントンと三味線を作つたという話である。

それから、何年後か分からないが、昔は、唐旅というのがあつたよ。唐旅へ行つた。長浜に港ができてから行つたのか、一回目に行つたとき、珍しい物といつて、トージン、マージン、粟、麦、ネギ、ニール、葉っぱとそのような種子を持つてきたそうさ。

二回目行つたときは、首里城の下にたいへん大きな泉の龍樋があつた。ちようど龍の口のような物を、首里城の下の川に寄附した。赤犬子ウスメーが持つてきたのを寄附した。また、赤犬子ウスメーは、唐から、唐船丸のタナジャーといつて、床にタナジャーといつてゐるんだがね。二回行つたときには、唐の人と友達になつて、これあげるから持つていきなさいと、銅と真ちゆうの混合で作られてゐる龍の口のようなものが戦前あつたよ。それを持つてきて王に寄附したそうさ。

あたんよー。戦前のーあたさ。うり持つちち寄附し王んかい。

うりからまた、この王様んアカイヌクウスメーりちとういむつち、なーウスメーんぬ名あいつてい。犬ぬ子あらんしが夫お誰るやらー分からんしえーや。アカイヌクぬウスメーりち、名あちきてい、くんどーまたうれー妻ん分からんしが、女ん子ぬ話すたしが。

くんどー、くぬ王様からぬいいちけーぬあちらこちら、百姓までいん、社会見学りがやー琉球みぐてい、各字部落みぐてい、まじにまじにみぐていなー、くぬ分からんとうくろお、むんなれーしかたしちとうらしんそーりりち。

自分ぬ女ん子ん連やーい、かーま島尻ぬ先から国頭ぬ先までいみぐてい歩ち中頭歩ちし、くんどーなー、乗り物ぬんねーんぐとう、何日がかかたらー分からんあたい。

あんし、くんどー、瀬良垣んかい歩ちちやぐとう、あんし「くぬ子供んかい水飲まさんなー。芋ぐわーぬちりぐわーやていん食まさんなー」ウスメーが言ちやぐとう、瀬良垣うてー「いったーんかいや、飲まする

それから、王様も赤犬子ウスメーをもてなして、ウスメーの名をつけてね。犬の子ではないが、男親は誰か分らないが、赤犬子ウスメーと名前もつけてね。また（赤犬子の）妻は分らないが女の子の話もあつた。

今度は、王様の命令で、あちらこちら百姓のところや、社会見学として琉球の各字部落をまわつて、この分らないところは習つてきなさいと言ひ付けられた。

自分の女の子も連れて、ずっと島尻の先から国頭の先までまわつて歩き、中頭を歩き、乗り物もないので何日かかったか分からなかった。

そして、瀬良垣にやつてきて、「この子どもに水を飲ましてくれないか、芋のくずでもいいので下さいませんか」と、赤犬子ウスメーが言うと、「おまえたちに飲ます水がどこにあるか」と、船を作る人が言つた。「あ

水んまーんかいあが、「船ちゆくやーがうたんりよ。「えー  
あんすみ。ぬーんねーらんな。いったー船作いるふー  
じやんむー、うりが名や私ちきら」りち、「とーなーだ  
決みてーねーんぐとう、とーおねがいします」

「あんし、うぬ船ぬ名やアカイヌクーウスメーが」とー  
いったーむのー水船りち、水ぬ中んかい浮きーぐとう、  
水船りちしーねーいっペーかりーやぐとう水船りち、  
ちきらやー」りち、瀬良垣青年たーや「うーとー水と  
あたいぐとう上等やいびさ」うむつきしよ。「にへーでー  
びる」りち、なーいい名あいいたんりち。あんし水船  
りちうりんかい名あちきていや水船りち。

あんさぐとう、またうまから歩ち行ちーねー瀬良垣  
んかいさがいねー谷茶、谷茶んかいさがたくとう、ま  
た、うまにん浜かいうたんり。うまんまた、青年たー  
が、船作いるばーてー。くまん始まとーるむん。「とー、  
青年たー頼むぐとう、くぬ子供んかい水ぐわーとう、  
芋ぬチリぐわーやていん、食まちとうらさんなー」り  
ちやぐとう、「芋んまんどーびーさい。水んみそーり。  
なーんうさがんそーり」りちよ。あんし水ん飲り、芋  
ん、ちゆふあーら食り。またウスメーん、「なーんうさ

あそうか。何もないのか。おまえたちは船を作るよう  
だが、その名前は私がつけよう」「もう、まだ決めて  
ないのでお願いします」。

そして、船の名は、赤犬子ウスメーが、「おまえた  
の物は水船、水の中に浮けるので、水船としたら、た  
いへん嘉例なので水船とつけようね」と言ったので、  
瀬良垣青年たちは「そうですね、水とあうので上等で  
す。ありがとうございました」と喜んで、もういい名  
前をもらったとね。そして、その名前は水船とね。

それから、瀬良垣から下がって行くと谷茶、谷茶に  
来ると、そこも、浜で青年たちが船を作っていた。こ  
こもやっているねと。「青年たちよ、頼むので、この子  
どもに水と芋のくずでもいいので、食べさせて下さ  
ないか」と言うのと、「芋もたくさんあります。水も飲ん  
で下さい。貴方もどうぞ」と、「ああやさしい人たちよ。  
おまえたちの船も私に（名前を）つけさせてくれ」と  
言った。

がりそーれー」りち「あーいい子ぬちゃー。とーいつたー、船ん私にんかいちきらさんなー」

うぬ谷茶青年たー、「うーなーだちきてーねーん。い  
いばーやいびさ。ぬーんちきたたらーましやいびがやー  
ウスメー」りち言ちやぐとうよ、「いつたー船んなーか  
りゆしやぐとう、谷茶ゆー走りち、ちきらやー」りち  
よ。谷茶ゆー走りち、ゆー走る船りち。「とーあんしえー  
にへーでーびる」りち、谷茶ゆー走。谷茶ぬむのーゆー  
走、瀬良垣船え水船。

あんし家かい来よ。船うるしーりねーよ、浮き  
ちむえーてー。浮きたぐとう、谷茶ぬむのー早く走ち、  
うぬなー谷茶ゆー走や、なーさーらないしはいたんり  
よ。

なー昔えエンジンのーねーらん、帆ぐわーたていー  
くり、またくーじ、イークさーにかいまた、帆ぐわー  
一本さーにかい、まーまでいんとうーいぬあたいやた  
しが。

うぬ瀬良垣青年たー、サクそーてい、「ぬーんち谷茶  
ぬ船え谷茶走りち、かんしはいるむんぬ、いぎたー水  
ぬ上んかい浮きていん、いぎたーむのー、水船るやる

谷茶の青年たちは、「はいまだつけていません。いい  
ことです。何とつけたらいいでしょうか。ウスメー」  
と言うと、「あなたたちの船も嘉例なので、谷茶走とつ  
けようね」と言った。谷茶ゆー走といつて、早く走る  
船という意味でね。「ではありがとうございます」と、  
谷茶ゆー走。谷茶の物はよく走り、瀬良垣の船は水船  
である。

そして、(赤犬子は)家へ帰った。船うるしというと、  
船を浮かべることね。浮かべると、谷茶の船は早く走  
り、谷茶ゆー走はもう速かった。

もう昔はエンジンはなくて、帆をたてて漕いで、帆  
一本でまた櫂で漕いでどこまでも行っていた。

この瀬良垣の青年たちは「どうして谷茶の船はこん  
なに速く走るのに、私たちの物は水の上に浮かべても  
水船になつて水が入るとは」と、怒った。浮かべると

水クワンクワンし、「浮きしーねー水えくんひていしがまた沈くりよ、水船りちやぐとう。「かんえーぬ者のーたつ殺さんとーならん」、なー瀬良垣青年たーさくそーてい、なーくぬ棒むちくりよ、アカヌクウスメー殺しーがりち、すぐなーヒャーナイしちえーるふーじや。うまにかいウスメー殺しーが。

あんさぐとうな、うわさーなウスメーやでーじりちくんどー逃ぎーる支度しよ。デアクりちあんよー、まったくダキぬぐとーん。あり杖よ、杖ぐわーちち、あぬアカヌクーまでーなー家んかいういねー殺さりーぐとうりち、なまぬアカイヌクー神社ぬあるとうくる。あまんじくぬおじいや避難すんりち避難しーが行ぢよーるちむえーやしが。

あんし、くぬふんとーや根ぐいや下、またさきしーわるふんとーやしが、みーちきやつさしがよ。なーくぬデアクぬ生ぢきねーや、楚辺村栄いんどー。またみじかんあれー楚辺村あかりてい行くんどーりち。あんさーに自分がちちんじえーる杖のー逆立しよ、なまぬアカイヌクぬ前んかい立ていていよ。あんしうりまたみぢちよ、うぬ杖のー緑ぐわーんじーくり、みぢち

水が入って、水を出してもまた沈んでしまった。水船と言われて、「こんな奴はたたき殺してやろう」と、もう瀬良垣の青年たちは怒って、棒を持って、赤犬子ウスメーを殺してこようと、おし寄せて行った。ウスメーを殺しにね。

そうすると、赤犬子ウスメーはうわさを聞いて、大変なことだと逃げる支度をした。デアクといって竹のようなものがあるが、それを杖にして、杖をついて、家にいると殺されるので、現在の赤犬子神社があるところまでやつてきた。そこに避難するつもりで行ったんでしよう。

そして、ほんとうは根は下にしてさすのが根づきやすいけどね。このデアクが根づいたら楚辺村は栄える。また根づかなければ滅びていくよといわれた。自分がついていった杖を逆にして、現在の赤犬子宮に立てた。その杖は根づいて、緑の芽が出たという話である。

んそーちやる話やさ。

うんぐとうしち、うぬアカイヌクウスメーやまーんかいがはちやらーわからん。ただ一言葉どとう、「くぬ杖ぬ生ねー、くぬ楚辺村あ栄いる。また、杖ぬみじかんあれー楚辺村んねーらんないん」。あんさーなかい行方不明。

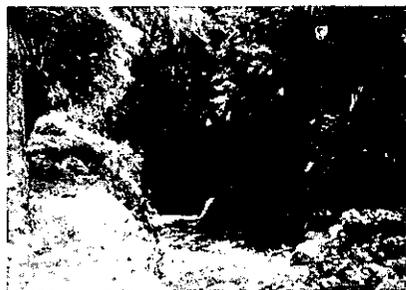
くまからちやー追いし行ぢよーしがよー、アカイヌクーまでい。瀬良垣青年たー浜からあがやーにかい、まーんかいが行ぢやらー分からんよー。探めーうーさん。行方不明、天ぬんかいあがたんぐとうんかいなとーんばーてー。

そうして、赤犬子ウスメーはどこへ行つたか分からない。ただひと言、「この杖が生えてくると、楚辺村は栄えて、杖が根づかなければなくなる」と。それから行方不明になった。

瀬良垣の青年たちは浜からあがって、赤犬子宮までずっと追って行つたが、どこへ行つたか探すことはできなかつた。行方不明になって、天に上がったということになっている。

注 ニーブガー ニーブとはひしゃくのこと、ニーブで汲めるくらい深さの井戸のこと。

採集S 63・12・20 読谷ゆうがおの会〈知花春美〉



クラガー

## 赤犬子(冬青草夏立枯)

話者 上地 松 徳(明治四十三年七月二十日生)

翻字 知 花 春 美

三味線ぬんひちんせーぐとう、北谷ぬんかいめんそーち、北谷長老さん家んかい行ぢさぐとう、「いつたー親んちやーまーかいが」りちやぐとう、「冬青草、夏立枯草刈いがやいびん」り。

あんし、「くぬ子供え、草あ冬ねー枯りーるすんむー、冬青草夏枯りりしえー、くれー何やがやー」りちあんさーに、「くれー、とーじひ親んかい聞ちんりわるやつさー」りちしーねー夫婦、麦え刈てい、夫婦、家んかい持ちちえーるばー。「なるほど、麦え冬お青さい夏にる枯りーぐとうや、じこー、うりしみりよー」親んかい、いい付きてい。北谷長老りち、でいきやーなてい。

そして、その墓が、今ぬ北谷ぬんかい、墓あまーがやらー、北谷ぬんかいあんりしが、部隊ぬうぬ墓ん壊さんそのまま、神う拝、許可ねーらんぐーとうー、うまんかい、う拝がん許すんり、うぬ部隊んかい。

(赤犬子は)三味線も弾かれるので、北谷にいらして、北谷長老さんの家へ行つた。「おまえの親はどこにか」と聞くと、「冬青草、夏立枯草刈りにです」と答えた。

「この子供は、草は冬には枯れるんだのに、冬青草、夏枯れるというのは何だろうか」と考えて、「これはぜひ親に聞かないといけない」と思った。そのうちに、夫婦とも麦を刈りて、家へ持ってきたようだ。「なるほど、麦は冬は青くて、夏には枯れるので(この子はすばらしいね。がんばらせてね)」と親に言った。そしてのちに北谷長老といつて、優秀な人になった。

そして、その墓が北谷のどこか分からないが、北谷にあるというが、基地の中に壊さずにあるらしいが、神お拝でも、許可なしで入れるそうである。

三味線ぬん、三味線始みたしん、雨降てい、雨降い  
なかいよ、クバぬ葉から落ていーぬ雨ぬ、じゃつぴん  
降いねー音ん大さい、うれーうりやつさーりち、始  
てい。クバぬ葉から落ていーる雨聞ちゃーなかい三味  
線作てい、歌ひちゃんり。

そして、うぬ人お、あまくまむる歩ちみそーち、三  
味線教ちやんり。

121 稲作の始まり

沖繩ですすね、受水走水りちあしえー。あまんかい  
鳥ぬてー、稲ぬ穂てー、種うるちるちえーさに。そし  
て、私らは毎年ですな、アガリウマーイりちあしえー。  
うぬばーねー受水走水、拌みが行ちゆしがよー。くま  
から米え始またんりさ、言わつとーしが。

受水走水ぬ鳥ぬかんし、くまなかい、いい事さぬた

三味線を作ったのも、雨降りのときに、クバの葉か  
ら落ちる雨、大雨の音は大きいので、これを聞いて作っ  
た。クバの葉から落ちる雨の音を聞いて、三味線を作  
り、歌をうたつた。

そして、赤犬子はあちらこちら歩いて、三味線を教  
えたそうである。

採集 S 52・2・20 読谷村民話調査団第一班（渡慶次勲・塩浜由紀子）

話者 比嘉次郎（明治三十七年十一月二十八日生）

翻字 知花春美

沖繩に受水走水といってあるでしょう。あそこに、  
鳥が、稲の種をまいたのでしょうか。そして、私たちは  
毎年、アガリウマーイのときに、受水走水を拌みに行  
くがね。ここから米は始まったと言われている。

受水走水で、鳥がこのようにいい事をしたために、

みながい、こんなよい植物を持つてきて、種まぢやがやーり思れー何とも言えない。沖繩県中といつてもいいです。烏ぬ種持つちちやる恩義としてです、非常に挿んですね。米が始まいや、玉城村の受水走水というところが稲がまいつて、豊作になったという話です。

注 受水走水 アガリウマ一の挿所の一つで、玉城村百名の水田地帯にあり、御穂田と称する神田に注ぐ水源地。岩間から泉が湧き出ている。

122 読谷山種の話

話者 照屋 牛五郎(明治三十一年十二月四日)

翻字 知花 春美

ウージえ試験場に見ちやるばーぬあしが、グシチとー同ぬむん、じこー少てんぐわーやあたんよー。うり改良しちやしえー楚辺ぬ蔵角ぬ親祖先ぬしちやんりぬ話。

こんないい植物を持つてきて、種をまいたかと思うと何とも言えない。沖繩県中で、烏が種を持つてきた恩義として挿んでいます。米の始まりは、玉城村の受水走水から始まって、稲も豊作になったということです。

さとうきびは試験場で見たことがあるが、グシチと同じもの、ほんの少しはあったよ。これを改良したのは楚辺の蔵角の親祖先だったという話である。

うれーちやーししちやがんれー、ウージえ切つちち、  
あくたぬ中んかい、うぬウージぬ節うつちやんぎてい、  
あくたさーにうしちきてい、ふみちやぐとう、うりが  
芽ぬちやっぴんなー出じたるばーてー。

あんさぐとう、うり持つち行ぢ、畑んじ植いたぐとう  
大くなてい、改良てー、改良品種なとーるばー。あん  
し、だいたい何処歩ちん楚辺ぬぐとうウーギぬ口、き  
れいにふみかち、芽え出じやすんとうくまーなんじゆ  
ねーんよー。

實際、楚辺ぬ蔵角ぬ親祖先から出じたんりー。あれー  
うりなかい、うぬ例から楚辺とうしえー、ウージ口え、  
他え切つち、束てい、ただ水ぐわーんかい、たまいん  
かい立ていーるすしが、楚辺え葉しーじやーきれいに  
曲ぎてい、あんさーにあじてい積じり、あくたさーに  
うすていふみかしーねー、約一週間ばかーんうてー、  
芽えちやっぴんなー出じーんよー。また水たまいんか  
いちきてーしやれー節ぐわーるかんしうりやぐとう、  
畑んじ分けつお強さるばー。

あんさーに、読谷山種りち名ぬちちやしえー、名ぬ  
ちちやしえー、楚辺ぬ蔵角ぬ親祖先ぬ改良しちやんり

これはどのようにしてやったかというと、さとうき  
びを切つて、あくたの中になさとうきびの節を入れて、  
あくたで被うと、湿気で、その芽がいつばい出てき  
たわけだ。

そして、それを持って行って畑に植えると大きくなつ  
て、改良品種となつたようだ。それに、何処に行つて  
も楚辺のようにさとうきびの口をちゃんとして、芽を  
出す所はあまりない。

實際、楚辺の蔵角の親祖先から出たそうだ。その例  
から、他の所では、切つて、束ねて、ただ水に、水た  
まりに立てるだけだが、楚辺は、(さとうきびの)葉も  
いっしょに曲げて、あぜるように積んで、あくたで被つ  
て湿気を与えると、約一週間では芽が大きく出る。ま  
た水たまりにつつこんであるものは、節が主なので、  
畑での分けつは強いわけだ。

そうして、読谷山種と名がついたのは、楚辺の蔵角  
の親祖先が改良したという話である。

## 123 柴差し由来

話者 比嘉次郎（明治三十七年十一月二十八日生）

翻字 知花春美

人がですな、やなくとうがしちやらー、良いくとうがしちやらー、もうくぬ村中、村ぬいちか焼き払りんどーりぬ話い聞ちえーるふーじ。

そうして、うりがあんし、まーんきーん焼きーねーちやーすがりち、心配しよ。ちやーあれーしむが。あんし、私たーやちやーすがしちやぐとう、「とーあんやいぬんさー私がつたー助きーぐとうあんししーよー。」  
 いえば、精霊やてーんてー。ある人が言ちよーしが、「ことうふうふうに家んかい印しーよー」りち、いえば印、今ぬ柴、これが印があつてすら、うぬ家庭、うまー助かたんないりち。

人がですな、悪いことをしたのか、良いことをしたのか、もうこの村中、村がいつか焼き払われるよという話を聞いたようだ。

そして、どこもかも焼けたらどうするかと心配してね、どうすればいいのか、それからわたしたちはどうするかと心配したので、「それでは、わたしがあなた方を助けるからことうふうふうにしなさい」と。

いわば、精霊だったのでしよう。ある人が言うことには、「ことうふうふうに家に印しなさい」と、いえば印、今の柴、この印があつてこそ、その家庭は助かると。

そうしてまた、柴さすんりしえー、うりから初めや  
るふーじ。

あんさーなかい、また、いぎたー話ぐわーとうしえー  
うりやしえーや。

また生まりてーやたんてーまん、六歳までー幼な子  
やしが、うぬ柴さしんからー、柴とう七歳なとーんり  
ちよ、またふんとーぬう墓んかいうんちけーすたんばー。  
うぬ間あ、うぬ柴ささん間あ六歳、幼い子ども失つて  
もですな、いえばこの小さい實際のお墓ではない、別  
の所に死んだこれは納めたという話もあります。

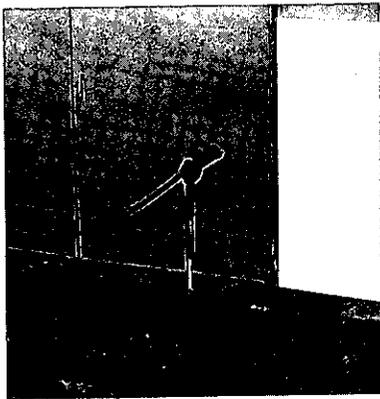
そうして、柴をさすということは、それが最初であ  
るようだ。

それから、またわたしたちの話としてはこうでしよ  
う。

また、生まれて、六歳までは幼な子の扱いだつた。  
柴をさすのは、七歳になると（亡くなつても）本当の  
墓に納めるわけだ。その前までは、柴をささない間六  
歳までは、幼ない子供を失つてもですな。實際のお墓  
ではない別の場所に納めたという話もあります。

注 柴 差 し 旧暦の八月十日をシバサシと称して、ススキの葉を結えて、サン（シ

バ）を作り、門前や、家の角、井戸などに差した。神が降臨し、魔物をよせつけな  
いためである。地域によっては、桑の枝をススキといっしょに結える地方もある。



柴 差 し

採集 S 52・2・20 読谷村民話調査団第十二班（山入端孝子）

翻字 安里和子

位牌<sup>いはい</sup>りーしえーや、ちゃーし作<sup>つく</sup>たがりぬ、うりが私<sup>わ</sup>ねー聞<sup>き</sup>ちゃんよー。うれーある支那<sup>しな</sup>ぬ国<sup>くに</sup>にあつたそう  
ですぬ。

あまうてい、ひとり息子<sup>むすこ</sup>がうたんりや。一人男<sup>ちゆうい</sup>ん子<sup>まが</sup>ぬ。それで、男<sup>い</sup>ぬ親<sup>ま</sup>あ死<sup>し</sup>じ、女<sup>い</sup>ぬ親<sup>ま</sup>あ一人残<sup>いちにん</sup>つていた  
そうです。それで、その女<sup>い</sup>ぬ親<sup>ま</sup>が育<sup>すだ</sup>ていとーしえーやー。  
非常<sup>ひじょう</sup>に、いーぬんしえー不孝<sup>ふこう</sup>な者<sup>もの</sup>やてーんてー。

昼飯<sup>あさばん</sup>すがりわん、遅<sup>に</sup>かないねーよー、すぐ親<sup>うやく</sup>殺<sup>ころ</sup>ちよ。  
むるパンナイ、ちゃーなーうりが昼飯<sup>あさばん</sup>前<sup>め</sup>ないねー、親<sup>うやく</sup>  
ん、ちゃーあわていーかーていーし、親<sup>うやく</sup>あすぐ早<sup>あ</sup>くなー  
すがらんあれー、またくわーさりーるむん、あんさー  
なかい、ちゃーなー恐<sup>おそ</sup>るさしちよーてーるふーじ。

あんさーなかい、「私<sup>わ</sup>ねー薪<sup>たき</sup>取<sup>と</sup>いが行<sup>い</sup>くぐとう、昼飯<sup>あさばん</sup>  
持<sup>も</sup>つち来<sup>き</sup>よー、お母<sup>お</sup>りちえーるはーてー。「いーあん  
しえー持<sup>も</sup>つち来<sup>き</sup>さ」りち。あんさーにするうちねー、  
うぬ子<sup>くわ</sup>あ山<sup>やま</sup>うてい木<sup>き</sup>や切<sup>き</sup>しえーや。あちらん来<sup>き</sup>らんふー

位牌<sup>いはい</sup>というのは、どのようにして作<sup>つく</sup>ったかというこ  
とを私は聞<sup>き</sup>いたよ。これはある支那<sup>しな</sup>の国<sup>くに</sup>にあつたそう  
です。

あそこに、一人息<sup>い</sup>子がいたそうだ。男<sup>お</sup>の子<sup>こ</sup>ひとりね。  
父親<sup>ちち</sup>は死<sup>し</sup>んで、母<sup>はは</sup>親<sup>ま</sup>ひとりいたそうです。母<sup>はは</sup>親<sup>ま</sup>ひとり  
で育<sup>すだ</sup>てていたのだが、とても親<sup>お</sup>不孝<sup>ふこう</sup>者<sup>もの</sup>であつたんでしよ  
うね。

昼飯<sup>あさばん</sup>を作<sup>つく</sup>るときでも、遅<sup>に</sup>くなつたら、親<sup>お</sup>に暴<sup>あ</sup>力をふ  
るつていた。息<sup>い</sup>子の昼飯<sup>あさばん</sup>を作<sup>つく</sup>るのにいつもあわてて、  
早<sup>あ</sup>く作<sup>つく</sup>らなければ、またぶたれると、恐<sup>おそ</sup>れていたよう  
だ。

そこで、(息<sup>い</sup>子が)「私<sup>わ</sup>は薪<sup>たき</sup>を取<sup>と</sup>りに行<sup>い</sup>くので、昼飯<sup>あさばん</sup>  
を持<sup>も</sup>つて来<sup>き</sup>てね、お母<sup>お</sup>さん」と言<sup>い</sup>ったので、「そうだつ  
たら持<sup>も</sup>つて行<sup>い</sup>くさ」と答<sup>こた</sup>えた。そして、息<sup>い</sup>子は山<sup>やま</sup>へ木<sup>き</sup>  
を切<sup>き</sup>りに行<sup>い</sup>つた。しかしいつまでたつてもお母<sup>お</sup>さんは

じーよー、お母や。

ぬが来んどうりーしえー、隣から遊ばーが来やーに  
お母めーんかい、少ぐわーユンタすんり、昼飯のー遅  
りてーるふーじ。

あんさぐとう、しぐうぬ子あ昼飯まちかんでいーそー  
しえーやー。なー怒みちよ。親あ来ぬんさー、またくわー  
しわるやるりち、いっペー怒みち、かんし山うてい寝  
んとーたんり。

あんするうちねー、ガラサーがよー、ガラサーが他  
所から虫ぐわーんぬーん喰てい来やーに、親あなー毛  
はぎてい飛びうさんぐとう、ガラサーぬ親やー、あん  
さーにかい、うりんかい虫ぐわーきうてーういすたん  
り。うり見じゃーに、うぬ子あ、寝んとーてい見じゃー  
に、鳥ぬたるむん、あんし親んかい、食物喰ていちきう  
てーういすさーりち、うり見ん感心しちよーるばー。  
うれー私ねー親不孝しちえーさー。でーじやつさー。  
私今までいしちえーしえー 悪ささーり、うりなか  
いいつペーそーいっつちよーるばー、うぬ子や。

あんさーにうりから、なーお母んかい、あわていー  
かーていーし、手くわーちやしえーでーじやつさーり

来る様子がなかった。

どうして来ないかといえば、隣からお母さんのとこ  
ろへお客さんが来て、すこしおしゃべりしたので、昼  
飯作るのを遅れたそうさ。

息子は昼飯を待ちかねているのだが、来ないものだ  
から怒っていた。親が来たらぶつてやろうと、とても  
怒って、山で寝ていたそうである。

そうしているうちに、カラスが他所から虫をくわえ  
てきて、親はもう羽がぬけて飛べないので、(子どもが)  
親に虫をあげていた。それを見て、息子は寝ていて見  
て、鳥でさえ、こうして親に食べ物をさがしてあげて  
いると感心したようさ。私はもう親不孝をしてきた。  
たいへんなことだ。私が今までやってきたことは悪かつ  
たと、それを見て反省したようさ。

もうお母さんをあわてさせたり、暴力をふるったり  
したのはいけなかったと、反省して休んでいた。そこ

ち考てい、休とーるばーてー。お母やすぐあふあていー  
かーていーし来んりよー、「なーちゆるん遅かなとーる  
むん、じゆるんじゆるくくわーさりーさやー」りち。

かんし山あいへー坂やぐとう、なーあわていーかー  
ていーし、女ぬ昼飯持つち、恐るさぐとう。途中うてい  
よー、なーだ登てー来んまーる迎が行ぢよーるばー子あ。  
「あーめーぎさるむんなー」迎がするうちねー、女ぬ  
親あふあていといしえー、なーくわーさりーさやー  
りち、あふあていとい、けいれんうくち、下んかい流  
りてい、うまんかい池ぬあたんりよ、水溜ぬ深いぐわー  
やてーんてー。うまんかい落ていいてい親あ。

なー探めーていん探めーらん。なー夜ぬ日暮つてい  
ん探めーらんよ。翌日、探めーいが行ぢよーるばー、  
朝。あんしん探めーらんよー、うまんかい、ちやー  
そーがやーりち心配し来たんよー。うまんかい板切り  
ぐわーぬ落ていーたんり。なー私たーアンマーや探  
めーらん、めんそーらん、なーうぬままうまんかい  
死じえーさやーりち。板ぐわーんちよー持つち行ぢ家  
んじ飾りわるやるりち、家んじ飾てーるふーじ。

うりから一ちなー一ちなー改正さーに。くぬ板ぐわー、

へ、お母さんはあわてて「もうきょうも遅くなつてい  
るし、またひどく怒られるね」と来たようだ。

山はすこし坂になつていたので、もう母親は昼飯を  
持つてあわてていた。息子は「もう来るだろうね」と  
登つてこない途中で迎えに行ったようだ。そうするう  
ちに、母親はもうあわてて、またぶたれるねと急いで  
いると、けいれんをおこして、下に流れていき、そこ  
の深い池に落ちてしまった。

もう探しても探すこともできない。もう日が暮れて  
夜になつても探せなかつたので翌朝探しに行った。ど  
うしているかと心配して来たが、それでも見つからな  
かつた。そこに板切れが落ちていたそうだ。もう私の  
お母さんは見つからないので、もうそのままそこで死  
んだのだろう。板切れでも持つて行って、家で飾るこ  
とにしよう、家で飾つたそうだ。

それから一つ一つ改めていった。持つてきた板は古

やな板ぐわーるやるまた取いけーてい、りつぱぐわー  
作りわるやるりち、位牌作てーん。あんさーにうり、  
ちゃー飾らつてい、私あ親あうりるやる、ちゃー拝り。  
うりから替い、替いし、やなくないねー作てい、あん  
さーにかい位牌りしえー出じとーん。うぬ話私ねー聞  
ちやぐとうよ。

かつたので、きれいな板と取り替えて、位牌を作った。  
そして、いつもそれを飾って、私の親はこれなんだと  
拜んでいた。古くなったらまた取り替えたりして、位  
牌というのはこういうことから出た。その話を私は聞  
いた。

採集S52・2・20 読谷村民話調査団第六班 へ上原利津子

125 位牌由来

話者 松田平信(明治二十六年十二月一日生)

翻字 棚原めぐみ

昔ですな、非常に親不孝の者がいたそうですがな。して、いつもお母さんをいじめて、お母さんは非常に苦労な  
されて。

そうしてある日、「私は山に薪取りに行くから、遅くまでおるからお屋は山に持って来なさい」と言うて、山に行つ  
たそうですね。そこでお母さんはいつもこれに叱りとおしだから、お昼になって、もうお母さんは非常に早く行こ  
うというておるが、遅くなつて。

そしてこの子供は腹が減つておるんだから、木の下にちよつと横たわつて、そして考えておつたそうですが。そ  
の子供が横たわつておると、上に鳥がいたそうです。で、鳥が見てそこに、鳥が子供を産んでいて。

鳥だけはすぐ子供を産むと、親は毛は全部抜けてしまつて飛べないそうです。だからまた、子供は非常にすぐ毛は生えて飛ぶが、親は飛びきれんから、親が毛が生える間は子供達がエサを拾つてきて、その親にあげよつたそうです。

そこで、あんまりたくさん来てこんなにするが、どうしたもんかなというて木に登つて巢を見たところ、やつぱり鳥が子供を産んでやつて、子供達が親にエサを与えたから、「ああそうかなー、親に元氣のない時はやはり子供が、世話するのはあたりまえだなー。ああこれは今まで私がやったことは間違つておつた」と言うて。

それから、お母さんは時間遅かなくて、またこれに怒られると思つて、夜も山に駆け足なつてこられたそうです。そこへその子供はまた早く行つて、お母さんこんな遠い所まで来られるのはいかんと思つて、駆け足になつてお母さんを迎へに行くから、そのお母さんはまた遅くなつておるから、駆け足になつて私をいじめに来ると思うてすなあ、すぐ側にすな大きな池があつたそうです。そうしてその池に、お母さんは飛び込んでしまつて、またそれから分からなくなつたもんだから。

一週間の間帰つても、どこにもお母さんは見つからないが、お母さんが溺れた付近にすな、一週間見て、木の板切れがすな、こんなこんなして浮いておつたそうです。まー一週間の間やつても見られない。この板切れを持つて家帰つて、そして仏壇にあげて、お母さんの冥福を祈ろうというて、これから位牌というのが始まつて。始まりがない日は、葬式する場合は簡単でしょ、ちようどあのようにあんな板切れだつたそうです。

あれ死ぬ時のあの位牌は、今はどの家でも位牌というのは立派でしょう。あれはこんなにして子孫の魂、位牌ですから言うて、生きておる人間があれを改良して立派に作つたもんであつて、初めはその板切れであつたそうです。そこで死ぬ時には、あの板切れを簡単でやつておつたという、これが位牌の始まりと言つてですね。

翻字 村山友江

あれーよ、くりから出じとーる話。六十余いからーよ、なー六十満ちはからー、六十一からーよ、畑んかい家ぐわー造てい、畑の畦ぐわーんかい座しーたんりよ。家ねーうかん六十余い、六十一からー、畑ぐわーぬ畦ぐわーんかい家ぐわー造てい送たんりよ。あんし物のー持つち行ぢ、煮ちやーなかい賄なてい。仕事おしみらんよーい。

なー年ぬ甲や亀ぬ甲やしえーや。まーその時分なかいやるばーてーや。くぬ虫バレーとー同むんよ。いわばうすましいシエーぐわー、バツタ、ソーマー、ヘンサー、スル虫(カンダ虫)が、相当広がていよ。あれー夏頃やたんりしが、立夏、小満、芒種、夏至というふうに、あーいう場合に虫ぬ発生する時期やぐと、広がとーるばーてー。

あんさぐとくぬ百姓達、カンダ虫ぬういねー、芋おなーぐすぐすし入らんるあぐと。なーやーさするう

それはね、こういう話から出ているんだよ。六十歳を過ぎると、畑の畦に家を造つて、そこに置いたそうだよ。そして、食事は運んで賄っていたようだが、仕事はさせなかった。

もう年の甲は亀の甲というのがあていよう。その時分のことだったんでしようね。ちょうど虫バレーと同じように、夏頃にバツタやソーマー、ヘンサー、スル虫等が異常発生した年があつた。立夏、小満、芒種、夏至という時期に、その色々な虫が広がってしまった。

そうすると、その百姓達はカンダ虫が発生すると、芋はグスグスして実が入らなかつた。だからもう飢え

ちりち。な―くぬ昔ぬウ―ジ今ぬぐとう太さ―ね―ん  
ぐとう、な―くぬ自家用ぐわ―すぬくぬうつぴぐわ―  
あぬ桶ぐわ―、五尺な―るかんし、うり改造する今ぬ  
うつぴなてい太径種りち、種ぬ変わていなと―しが。  
あんしうりん葉んで―、バツターなかい、ソーマーな  
かうちゆ喰り―ね―、実んね―らんないん。六月、  
七月なかいカンダぬ葉喰たいや、またウ―ジぬ葉喰た  
いし―ね―、な―な―何んならんしえ―。

今度おくれ―ちや―すしえ―ましがや―りち、取てい  
ん取ていんふしがらんよ、バツタ駆除。カンダ虫、カ  
ンダぬ虫、スルル虫駆除しち。な―青年出じてい駆除  
さんて―ん、な―駆除しちやんで―んまたん出じて―  
し―し―よ。な―楚辺はか―じえ―あらんしえ―や、  
大湾辺からん渡てい来い、またありから―都屋まんぐ  
らからん渡てい来いすぐとう。くれ―ふしがらんむ―、  
ちや―しちやら―ましやがや―りち。今度およ、な―  
いくま―るん揃ていよ、村長会議、な―取いん摺みん  
ならんなや―に。

あんし後ぬぬずみなかい、「うぬふ―じ―昔話や、  
私達あ親あて―げ―聞ちよ―るむん。私達あ親んかい

る以外にはないという立場にあつた。また昔のキビは  
今のよように太くもなかつた。色々改造して、今のよう  
な太径種に種も変わつてきた。葉っぱでもバツタやソー  
マーに喰われようものなら、実も入らなかつた。六月  
や七月頃にカズラの葉でも喰われたり、キビの葉を喰  
われたりしたら、もう何にもならなかつた。

もう今度は取つても取つてもどうしようもなかつた  
ので、これはどうすればいいんだろうと、困つてしまつ  
た。それで青年等が出て、バツタ駆除、カンダ虫駆除  
というふうにやつたんだが、やつてもやつてもまた出  
てきて駆除することができなかつた。もう楚辺だけで  
はなく、大湾辺からも渡つてくるし、また都屋辺りか  
らも渡つてきたんだからね。そうこうして対策をたて  
ながら、何度もみんな揃つて会議も開いたんだが、ど  
うすることもできなかつた。

終いには、「そういうふうな昔の話だつたら、私の親  
はだいたい聞いていると思うよ。私の親に聞いてこよ

まじ聞ちちやーびら」りち、一人ぬ者ぬ申し出じとーん。「とーあんしえー聞ちくわー」りち。

うぬ親あまた睦ぐわーんかい、かんし六十余ているうぐとう、置ちえーるばーてー、家ぐわー造てい。あんさぐとう、「何」がりち、「いえーおじい、なースル虫ぬかんし出じやーい、なー幾まーるん取ていん取ていんふしがらん。またくぬマージエーぬ出じ始まやーい、ウージぬ葉んむる枯りていなー、カندگان枯りていなー、くれー芋ん入らんあい、サーターんでいきらん、なーなー餓死え迫とーびんでー、ウンメー。ちやーされーしまびーがやー、ウンメー」り言ちやぐとう。うぬウンメーやまた「あーあんそーんなー、とーいー考ぬあさ。実い物揃らさーに、鉦、太鼓りちあぐとう、実い物のー苜蒲鉦りちあぐとう。うぬふーじー揃ち、あんさーなかい綱ぐわー、綱綯てい、綱綯やーなかい綱うつち、西東綱引けー。綱引かーま御願しえーわ」りちよ。西、東、綱引きーねー、呼びやーすしえーや、ヒーヤーヒーヤーし。うんぐとうしヒーヤーヒーヤーしち、なー呼びたぐとう、ポンポンクワン、ポンポンクワン、クワンクワンクワンし、うまんじ。

うね」と、一人の人が申し出たようだ。「じゃあ、聞いてこい」と。

その親はもう、六十余るんだから、畑の畦に家を造つて、置いてあつたようだ。そして行つてみると、「何か」と聞かれたので、「はいおじい、もうスルル虫が異常発生して、何回駆除してもどうにもならない。またマージエーが発生し始め、キビの葉も全部枯れて、カズラの葉も枯れて、芋も出来ず、砂糖もできない、これではもう餓死が迫るばかりである。ウンメーよ、どうしたらいいんですか」と聞いた。するとそのおじいさんはまた、「ああ、そんなにしているのか。いい考えがあるよ。そういうのには苜蒲鉦というのがあるから、実り物も揃えて、鉦、太鼓を打ち鳴らし、西と東に分かれて綱を引きなさい。綱を引いて御願をしなさい」と言った。西と東に分かれて綱を引くと、ヒーヤーヒーヤーと威勢良く叫ぶでしょう。そのようにもうポンポンクワンポンクワンクワン、クワンクワンクワンクワンと、綱を引いた。私達のシマでは中央で綱を引くんだが、綱を担ぎながら回り綱を合わせた。これはスネーということだね。

な〜くまうている綱あ引くしが、真ん中うている、か  
んし巡ていちゅーんよ、私達あシマあ綱担みてい。私  
達あシマんでー、上うてい綱あ引くなよー、巡ていち  
よ、うまんかい合すんとうくまんかい綱あ持ちちちゅー  
さ、スネーるやんりち、言たんりよ。

あんしうんぐとうしちやんりよ、うんぐとうしちや  
ぐとうしぐうぬ夜うてい全部上がてい、死じよーたん  
り。バツタから、スルル虫、カンダ虫ぬ上んかい死じ  
よ。うりる神様ぬしちあわしるやがやーりぬあたい、  
やんてーりちそーんてー。

死じやぐとう、「とーくれー年寄や宝でーむん、畑ん  
かうちえーならん。早く連ていくー」りち。うんか  
ら年寄や家かい連ていち、綱んうんからかんし、綱引  
ちりち、西、東りち。綱引きえ私達あシマー、旧ぬ六  
月二十四日。

そしてそのようにしたら、その日の夜で、虫は全部  
上がって、死んでいた。バツタやスルル虫、カンダ虫  
等、全部上がって死んでいたそう。これこそ神様の  
引き合わせなのかと思うほど、全ての虫は全滅したつ  
て。

死んだから、「年寄りは宝だ、畑には置かずに早く家  
に連れ帰りなさい」ということになった。その時から  
年寄りは家に連れて来て、西と東に分かれて綱引きも  
するようになったとのこと。私達のシマでは、旧曆の  
六月二十四日に綱引きを行った。

翻字 村山友江

ナーチャミーりしえよー、侍ぬじこーぬ金持ちちゆ  
 やたり。金持ちちゆぬ、着物ん、七衣装替わい替わ  
 いじこー上等から着して、うまぬ女ん子ぬ亡しちや  
 ぐとう。じこー上等着物てー、七くびぬ衣装ん着しら  
 りていりぬ歌てー。ありとー同むん七衣装しこー上等  
 から着しらりやーい、墓んかい送てーんてー。

しちやぐとう夢ぬ、夜中ぬ夢ぬよ、「アンマーよー、  
 私ねー寒さんどー」さぎたんり。うぬ子ぬ。「ぬぐわやー  
 ターりー寒はんどーさぎーしが、いがたー子やちやー  
 かとーがやー」りち、松明ちきていよ。あぬ昔え、ラ  
 ンプぐわーやぐとう、なーちきてい、うまー門番ぬん  
 うらんでーんてー。美ら着物ぬん着して、なー亡し  
 ちやぐとう送てーしが、夜ぬ夜中よ、「アンマーよー、  
 私ねー寒はんどー」すたんり。

行ちやぐとう、「今日やなーあぎたー子ぬ寒はんどー  
 する夢私ねー見ちえーんむー、りーあぎたー墓までー

ナーチャミーというのはね、大変金持ちの侍から(出  
 た話だよ)。その娘が亡くなったので、七衣装も大変  
 上等な着物を着せた。七くびの衣装も着けさせてとい  
 う歌にもあるように、大変上等な着物を着けさせて、  
 墓に送ったようだね。

すると夜中にその子が、夢の中で「お母さんよ、私  
 は寒いよ」と訴えていた。「お父さんよ、私達の子が寒  
 いと訴えているが、いったいどうしたんでしようね」  
 と、松明りを持って(墓に行った)。昔はランプを使っ  
 ていたんだが、その墓には門番もいなかったようだ。  
 娘が亡くなったのできれいな着物を着けさせて墓に送っ  
 たんだが、夜中に夢の中で「お母さんよ、私は寒いよ」  
 と訴えていた。

「今日はもう 私達の子が『寒いよ』と訴えている  
 夢を見たから 墓まで(様子を見に)行ってこよう」

行ぢくー」りちやぐとうよ。盗人ぬよ、うぬ着物むる  
はんでーたんり、はんでいよ。すぐうぬ盗人おなー追  
くみらつていしちやぐとう、なーはんじやぎーるばー  
るやはに。あんさぐとうな、親戚達しーぢやー揃とー  
てい行ぢえーはに、あまんかい逃んぎてい行ぢやーに。  
ナーチャミーまでーさんねーならんりち、侍からる  
ナーチャミーなたんりよ。

あんさーにうぬ夜およ、今いーねーあぎたーがテン  
トぐわー張いんりしとー同むん、何しる張たらーよ、  
なうぬ墓あ番人すたんりぬ話やさ。侍ぬ着物はんじゆ  
し、盗人おうぬ着物はんじやーに売いるばーてー、質屋  
んかいやていん、あんさーなかいナーチャミーりち。  
へーこーミツチャミーまでいすたん。着物、着物よ盗  
まつてい、盗人んかい取ららんたみり。また生きーる  
ばーんあたんり。「ぬぐわうまんかい入つちよーるよー」  
しちよ。

と行つてみると、盗人が着物をはぎ取つていたそうだ。  
もうその盗人は着物をはぎ取つていけるのを、親戚の人  
達に見つかつてしまい、追い詰められて逃げて行つて  
しまった。そういう侍の話から、ナーチャミーを行な  
うようになったそうだよ。

それから後はその夜は何を張つたかははつきりしな  
いが、今でいうテントみたいなのを張つてね、墓に番  
人をおいたという話だよ。盗人は侍から着物をはぎ取つ  
て、質屋みたいなところにも売るわけさ。というこ  
とからナーチャミーをやるようになったが、以前はミツ  
チャミーまでやつたよ。盗人に着物を盗まれないため  
にね。また生き返ることもあつたそうだよ。「どうし  
て（私は墓に）入っているだろう」とね。

採集H1・5・24 読谷ゆうがおの会へ村山友江

注 ナーチャミー 葬式の翌日に親族などが行なう墓参。朝と夕方の二回、花と水等を持って墓参りする。その後、四九日まで墓参り  
する地方がある。死者がもしや蘇生することはないかと翌日見に行った。

かさぎとーしが亡しち、送たぐとう、うぬ子ぬ生まりてい墓んじ。なーくれー神ぬ子るやぐとう、なんくる生まりてーんで。あんさぐとう、腹ぬ上から、親ぬ腹ぬ上から泣ちやぐとう。ナーチャヤミーさーが水撒ちーが行くせーやー泣ちやぐとう、「へー珍しいむん」りち、聞きたぐとう、うぬ子ぬ生まりとーたんり。うりから始まして、ナーチャヤミーからミツチャヤミーまでいすたんり、昔え。

今あ火葬すぐとうて、ナーチャヤミーまでいする。二日までのや。昔え、すぐうぬままりーしえー棺箱んかい、蓋うすてい、ミツチャヤミーまでいすたんよ。三日までい行くたんよ。朝ぬかーじ水撒ちーがひきてい撒ちえーさん、水あげに、お茶も持つて、水も持つてひきーがてー。

妊婦が亡くなったので、墓に送ったが、中で子どもが生まれた。これは神の子だから自然に生まれたんでしようね。そして、親のお腹の上で泣いていたようだ。ナーチャヤミーで水撒きに来た人が、泣き声を聞いて、「珍しいことだ」と開けてみると、子どもが生まれていた。そういうことで、昔は、ナーチャヤミーからミツチャヤミーまであったよ。

今は火葬だから、ナーチャヤミーでするんだがね。昔は(火葬もせずに)そのまま棺箱に入れて蓋をするだけだった。だからミツチャヤミーまでしたよ。朝の度に(三日目まで)お茶と水を持つて供えに行った。

129 サン 結び 由来

話者 比嘉 秀 (大正十五年十二月二十日生)

翻字 玉城和美

うれーあのう重んかいサン入りーしえー、道中うてい  
後生人ぬよー、なー誰ん頼いしえーうらんぐとう、う  
ぬうりんかい手たつくむんりーぬ話があたんり。あん  
さーなかい、むるサン入ってい歩ちゃんり。

重箱になぜサンを入れるかというと、道中で亡くなつ  
た人の霊が、誰も頼る人がいないので、その重箱に手  
をつっこむという話があつたそうだよ。それでサンを  
入れて歩いたということだよ。

採集S 63・12・13 沖繩民話の会〈宮城昭美〉

注 サ ン ススキの葉を結んで作ったもので、魔除けとして用いるものをいう。現在でもサンの信仰は根強く、日常ひんぱんに行  
なわれて、祭日などの御馳走の上にサンを置く。御馳走が腐敗することなく新鮮であると信じられている。

130 お茶 二杯

話者 比嘉 カマド (明治四十五年七月二十日生)

翻字 国吉トミ

むこうから「いやー茶ぐわー一杯飲みなさい」と言  
うたらね、あんさぐとう、「一杯や飲むばーてー。」

相手から「あなた、お茶一杯飲みなさい」と言われ  
て、一杯は飲むでしょう。「ごちそうさま」と言つて帰

ちそうさま」と言つて、行くでしよう。だつたら、「一茶碗茶あ飲むしえーあらんどー。なー「ちえーくべれー」りち、またチューカーからちぢゆたんよーや。なー茶じよーぐーあらんやいねー、ちぎねーびーるすたんよ。

それは何のためかと言うたら、一茶碗茶あ飲みーねー向こう行つても誤りごとがあつて、なー一茶碗飲みーねー、悪者はいちやらんたしがやー、いうわけで、昔のおばあさんたーはそう言うたわけ。

131 ハジチ由來

入墨りちあたしえーや、おばーたーが。支那人ぬまぎーたーが、沖繩ぬ美人しえー、むる自分が勝手にすんりさーなかい。あんさーにかい入墨しーねー。またさんたんりよ、野蛮人がやらーりち。あんさーにかい

ろうとすると、「お茶は一杯飲むものではないよ。もう一杯は飲みなさい」と、またきゆうすからついでいた。お茶を好まない人には、つぐまねをやっていた。

それは、何のことかといえ、一杯だけ飲んで出かけると、難にあうので、もう一杯飲む間には悪者にもあわないですむということで、昔のおばあさんたちはそう言った。

採集 S 63・12・15 読谷ゆうがおの会 へ村山友江

話者 比嘉朝明 (明治三十三年一月八日生)

翻字 安里和子

おばあさんたちが入墨していたでしよう。支那人の偉い人が沖繩の美人は自分勝手にしたそうだ。それで、入墨したら、野蛮人もしれないとやらなかつたそうである。昔、おばあさんたちは、支那人につかまえ

昔ぬおぼしたし、ハジキ、入墨すたん。ありんかいが  
んまりさららん考し。

られないようにと、ハジキ、入墨をしたということである。

採集S52・2・20 読谷村民話調査団第六班 へ上原利津子

注 ハジチ（針突） 明治三十年代頃まで盛んに行なわれていた入墨習俗。年頃十七、

八歳の手甲に、針と墨で施術をした。士族と平民の区別があり、また地域によつても多少異なつていた。宮古、八重山地方では織物の模様もあつたようだが、沖繩本島内は指には弓の矢、手の甲には星形や柘型などの模様がある。これをしてないと後生で困るとか、大和に連れて行かれるとの伝説がある。



ハジチ

132

柴 微 鑿 駕 の 話

話者 比嘉次郎（明治三十七年十一月二十八日生）

翻字 名嘉真 宜勝

くれー、唐からぬ話るやし、沖繩んかいあたる話  
やあらの一あらんしが、どう一な一た一先輩ぬ達から  
聞ちやる話るやし。

これは、中国の唐の話で、沖繩にあつた話ではない  
んだがね。私たちの先輩から聞いた話ですけど。

昔、家造いし一にて一、自分ぬ家造いなか。あん

昔、家を建築中に、自分の家を建築中に、易者であつ

さぐとう、物知りがやらぬーがやら分らんそーらんしが、びちぬ方ぬ、道から通いしえーぬ人達がてー、家造なー、すぐひやーないすぬばーてー「いえー、いったーや今日いい日やあらんしが。今日やティンカビカ、家造いしえー、今日やましやあらんどー」でい言みそーちゃんり。うぬ人んかい道から通いる人ぬ、物知りふーぬ御方ぬてー。

あんさぐとう、「えー、あんやいびんなー、なー、くんどーぬ吉日んちえーねーびらんどー」りちやぐとう。「ぬーがひやー」あんしえーあまから柴微鑿駕どうぬや、御方ぬ通いみしえーびーくとう。

あぬ柴微鑿駕でいしえー、いえば唐てー。すばらしい偉い御方やんしえーんてー「なー、あぬ人ぬう通いみしえーしやれー。うんどーぬ吉日んちえー無びらんさ、いつペー良日やいびーさ」りち。

あんし、物のー言のーしなむんでいち。

たのか、どういう人であったかは知りませんがね。道行く人が、「おい、あなた方は、今日はいいい日ではないよ、今日はティンカビカという日で、建築するには良くない日ですよ」と、おっしゃったそう。道から通る易者風の方が（家を造っている）人に。

そうしたら、「えー、そうですか。もう、これ以上の吉日という日はないですよ」と言った。「どうしてですか」と聞いたなら「向こうから、柴微鑿駕という御方が通りますから」と。

あの、柴微鑿駕という方は、唐の人で、素晴らしい偉い人であった。「もう、あの方がお通りになるんですたら、こんなに吉日はないですよ。今日は良い日ですよ」と。

それで、物事は言い直した方が良いこともあるということだよ。

採集S52・7・3 読谷村民話調査団第四班へ運天悦子・大本敬子

注 柴微鑿駕 これは中国から入ってきたもので、柴微は天帝の住まい、鑿駕は輿のことで、天子の車駕を意味する。棟上げ式の時板

切れの表面に「紫微變駕」の四字を横書きし、その裏に「霜柱永軒雪桁棟露之葺草」の十二文字、または「福如東海広」の五文字を横書きにして棟に釘付けし、昆布、木炭、塩を包んで吊るす。

133 多 幸 山 フ ェ ー レ ー

話者 池 原 昌 徳 (大正五年十月二十一日生)

翻 字 棚 原 めぐみ

あのー、日中でも多幸山は暗かったそうですよ。松が、松の木が生い茂って。多幸山、今みたいなあんな道じゃないから。昔、山道でね、山田行かない手前、シチャマラと言ってね、シチャマラ。

あの国頭街道が通ったのが明治四十三年でね、その以前は馬車が通ったでしょうけどね。まーだいたいあの、馬に乗って通るくらいの道であつたわけでしょうね。で、その多幸山というの、すごくあの付近は土地がよくて、松の木がよく非常に生い茂るところなんです。そのターダ原というのは。すぐそこ昼でもうす暗い物騒と茂った街道。それでももちろん多幸山から国頭に行く人は、だいたい大きな用事もっているわけですから、何か担いでいるわけですよ。

木はそんなに高くないから、松の上に登って鉤して、そして大きな荷物を持っているものを取る。そしてそれに引つけて引き上げる。あの時は鉄砲もないから、引き上げられたらもうどうしようもなかった。うまんかい引つくとどーい、あの腕力でぶつ倒して取るんじやなくて、上から引き上げよつたという話なんだがね。

そうしてフェーレーが人の荷物を引き上げて、まー盗むというか強盗みたいなことしておつたらしいが。くり力んそーとーあてーんてー、力。だからフェーレーと云つて、みんなから恐がられているわけですがね。人を殺害す

るようなことはしなかったかもしれんな。

ある日、喜名のタカハンジャーという若者が、山田に行つての帰り、日が暮れて、帰りなんですが。ここはフェーレーが立つちゅんというのによく知つていゝんで、これは大変だなあと云つていゝるんだが。力はさうとうあつたんでしよう、タカハンジャーという人は。「多幸山ぬ山シシ、驚るちゅな山シシ、喜名ぬタカハンジャ山田戻い」、歌してきたから。これはタカハンジャという、タカハンジャでなかつたかも知れないが、タカハンジャという武士がいたと。それで難なくそこは通り抜けて、無事に帰つたという伝え話があるんですけどね。あれ多幸山の山シシ、フェーレーは有名なんですよ、物語の中で。

採集S 63・12・21 読谷ゆうがおの会へ知花香美

注 多 幸 山 多幸山は恩納村にある山の名で、読谷村との境界にある。旧道が残っており、里塚も存在する。沖縄ではフェーレー(盗賊)の出没する場所としてはあまりにも有名である。

134 久 良 波 ヌ ン 殿 内

話者 池 原 繁 一 (大正五年五月十五日生)

翻字 村 山 友 江

久良波ヌン殿内注りしえー、ある昔えなー民宿ふーじー  
やたらーよー。多幸山通てい。久良波ヌン殿内入やー  
に、一泊さる旅人達が、

久良波ヌン殿内というのは、昔は今でいう民宿みた  
いなものであつたんでしようね。多幸山を通つて、久  
良波ヌン殿内に一泊した旅人達が、

入る人やうしが 出じる人やうらん

りち、久良波ヌン殿内。

むる旅人おなし、てーげー金のーむる持ちよーぐとう、  
たつ殺ちやーなかいむる埋みていよ。子孫ぬくとー分  
からんしがよ、久良波ヌン殿内ぬくとー

入る人やうしが 戻る人やうらん

りち。

入る人はいるが 出て行く人はいない

と、歌った。

ほとんどの旅人達はお金は持っていたので、もう（入つてくる旅人を）殺して埋めていた。子孫のことについては分からないが、久良波ヌン殿内については

入る人はいるが 戻っていく人はいない

と伝えられている。

採集S 63・12・23 読谷ゆうがおの会へ村山友江

注 久良波ヌン殿内 子孫は絶えてその屋敷跡が、元山田ドライブイン敷地内に残っている。そこには、戦前まで久良波部落があった。

135

## 吉屋チル

話者 比嘉 清次郎（明治四十三年三月二十日生）

翻字 村山友江

吉屋チル注①りしえーよ、何年生まれるやらー分から

んしが。とにかく読谷山間切注②という時分なかい、読谷山間切ぬ生しん子やしが。ちようどううん時分ねー、読谷山、なま比謝橋からてー、久良波の（元の温泉の

吉屋チルーは何年生まれであつたかは分からないがね。読谷山間切時代に、読谷山間切で生まれた人であつたらしい。ちようどその時分に、現在の比謝橋から久良波の手前の方までが、読谷山間切であつた。読谷山

ある)手前てまえの方ほうまで、読谷山間切ゆんたんじやまじりりち、うぬ時分じぶんやさ。  
新垣あらがちりち、読谷山間切ゆんたんじやまじりぬ久良波村新垣はむらあらがちりち。山奥やまぬ奥うくぐわー  
んかい家やぐわー、戦後せんごまでいフクギぐわー生みくでい、  
道みちから上うわんかい登ぬいでい行いぢあたんよー。

あぬ時分じぶん親おやあ困難こんなんなやーなかいよ、な一貧乏へんぷうなてい。

女いぬぬ親おやあ、死しぬか生いきるかぬ病やま氣けかかてい。くぬチル  
が六む歳ちぬ年としなかい、銭せんぐわー借かていくーやーに、女じゆり郎り  
売ういしくーやあらんどー、まーいえは女じよーひちやーちけー中ちゆう使しさつとー  
ていや。まーうまから銭せんぐわー借かやーい、「銭せんぬ利り子しぬ  
替かわい、いやーやあまんかい使ちかりりよー」り、親おやからー。  
「あがたーマンマーが病びよ氣まん治のていしーねー、また私わ  
が連そいいが来ちかぐと。仲島なかしまんかい、いやーや銭せんぐわー借か  
ていくーわ」。うりかーんかい借からすしえーうらんよー、  
あんし自分どうが子こるかかいるりち。あんにーねー男いん女め  
ん、うぬ時分じぶん身代しんりち、銭せん借かいねーよ、身代しんりち利り子し  
ぬ代かわい働はたらきたさ。吉屋ゆしやチルーんうぬ時分じぶんなかいうぬ  
ふーじーしち、仲島なかしまんかい連そいでい行いかつていよ、親おやな  
かい。

あんしし行いくる時じゆうなかいてー、比謝橋ひじやばしぬ橋はしえ今いまぬ橋はし  
ぬぐとーねーんさ、石橋いしはしぐわー。

間切久良波村新垣あらがちというのが、山奥やまの方に家やが造つくられ  
てあつた。そこは戦後せんごまでもフクギが生い茂さかつており、  
道みちから上うわの方に家やはあつた。

あの当時たうじ、(吉屋チルーの母親は)大だい変へんな貧乏へんぷう暮くらし  
をし、もう死しぬか生いきるかという大病だいびやうを患わづつていた。  
そしてチルーが六む歳ちか七しち歳さいの年としに、女じよ中ちゆう奉ほう公こうとして仲  
島なかしまに行いかせることにしたようだ。まあ、そこから銭せんを  
借かりて、「銭せんの利り子しの代しろわりに、あんたはあそこに(女  
中じゆうちゆうとして)使しわれなさいよ」と、親おやから(言いわれた)。  
「アンマの病びよ氣まが治のつたら、私わが連そいに来きるからね。  
あんたは仲島なかしまに行いつて、銭せんを借かりてきなさい」とね。  
もう近くには銭せんを借かすところもないものだから、自分  
の子供こどもにしに頼たのむことができなかつた。その時分じぶんは、  
男おとこも女めもドウシル(身代金しんたいきん)というのがあつて、その  
身代金しんたいきんの利り子しの代しろわりに働はたらいていた。そのようにして  
吉屋チルーは、親おやに仲島なかしまに連それて行いかれた。

(仲島へ)行いく時じゆうに、当時たうじの比謝橋ひじやばしの橋はしは今いまみたい  
な橋はしではなくて、石橋いしはしだつた。

恨む比謝橋や 私渡さとうむてい

情きねん人ぬ架きていうちえさ

りち。恨み橋、言葉かきてい渡てい行ぢよーるふーじや。

あんし歩ちんじ、まーうていいるやら分かんしがよ。

ずつとむこうまで並松りち、まー続いていいるから、あつ

ちで座つてよ。うれー食むたんよ。弁当。男ぬ親とう

一緒。あんされー上から松かすーが落ていーたんり。

松かすー、種。あんされーうぬ種え取やーなかい、見

ちよーていよ。

落ちる松かすや 年寄ていいる落てい

私やうぬ若さ 落ていていいちゆさ

り。あの時六つなる時、その子供が歌を詠んだらしい

な。あんさぐとう自分の親が、「六歳ない童あ変わとー

ん、クサムニーし」りち、親あ思てーぬふーじやしが。

仲島んかい着ちあまんじ、「親ぬ困難やぐとう、母親あ、

なーアンマーや寝んてい、なー命えあしが、是非病氣

治しわるやぐとう。二百貫のー借らしんそーり」りち。

「くぬ童あ置ちよーていとうらしんそーり。後おそー

恨めしい比謝橋よ 私を渡そうと思つて架けてお

いたのか

情けのない人が架けておいてあるよ

と(チルーは歌つた)。恨みの橋と、言葉を残して渡つて行つたようだね。

そうこうしながら歩いて行き、どこであつたか分か

らないが、並松がずつと続いているところへさしかかつ

た。そしてそこでチルーは、父親と一緒に座つて弁当

を食べていた。すると上から松ぼっくりが落ちてきた。

種ね。(チルーは)その種を取り、見ながらね。

落ちる松ぼっくりは 年を取つて落ちるよ

私はこの若さで 落ちていくよ

と。六歳になるチルーが、歌を詠んだらしい。すると

親は、「この子はまだ六歳だというのに変わつていいるな、

大きな口をたたいて」と思つていたようだが。

仲島に着くと、「親は貧乏で、母親は命に別状はない

が病氣を患い、是非その病氣を治さないといけない。

ですからどうか二百貫借して下さい」と(頼んだ)。「こ

の子供をそこで預かつて下さい。後はよい子に育つは

いーびるはじ」、うかちえーたんりよ。まー相談半ばや  
るばーてー。アンマーが、童あ六歳るないぐとう、色  
気えねーんしえーや。色気えねーんぐとう、掃除さー  
ん何んありやし、しぶしぶよ。「なーひん使いるとう  
くろーうらんがやー、スー」りち。「なー貴方がるいへー、  
仲島んじえー丈夫さる。使ていきんそーらん、ア  
ンマー」りち。「あんやさやー、二百貫んねー高さん  
あしが、ちやーすがやーなー百貫ししむみ」りち、や  
てーるふーじよ。ちやーすがやーりち、とうるまぬー  
そーによ、親とう、うぬスーとうアンマーとう相談す  
ぬばーに、庭うていいーじぎーたんり。グーシぐわー  
さーにチツクイチツクイぐわーし、いじとてーるふー  
じや、くぬチルーや。

ユルジねん者や あまぬ捨てい骨

ちくかたる頼む ちなじたほり

この言葉を聞いてね、うぬアンマーさんの、「とー  
うれーそーじむ、珍しい童やっさー」。相談ぬちかんぬー  
や、あまに捨てい骨とー同むん、捨ていてーぬ骨とー

ずですから」とお願いした。まー相談の途中だったん  
でしようね。(チルーは)まだ六歳だから、色気も何も  
ないでしょう。掃除ぐらいはどうにかできるにしても、  
アンマーはしぶしぶ顔で「他にどこかで引き取っても  
らうわけにはいかないかね、スー」と言った。する  
とスーは、「はー、もう仲島では貴方の所が大きいです  
よ。どうか使つて下さいよ、アンマー」「そうだね、  
二百貫という高いから、もうどうしようか、百貫で  
いいですか」というふうに相談していたらしい。どう  
しようかと迷い、親とアンマーがあれこれ相談してい  
ると、(チルーは)庭に出て何かいじっていた。竹でつ  
つきながらいじっていた。

相談のつてくれない方は あそこに捨てられて  
いる骨と同じだよ

頼める人を頼むんですから どうか取り合つて下  
さい

この言葉を聞いたアンマーは、「あー、これは本物だ。  
珍しい子供だ」(と感心した)。相談のできない人は、  
あそこに捨てられている骨と同じだよ。私達は仕方な

同むんるやんどー。仕方ならん私達や来るうる、貴方  
る頼むるちなじきみそり、相談のー合ちきみそーりり  
ち。ちやつびん詠びたぐとう、「なー、あとう五十貫  
のー上ぎーびさ」りち、百貫しる相談のーしえーしが、  
「百五十貫やー」りち、三円。あんしうちえーる話  
やるはーてー。

うりからふるふる育いーてい、うまうてい。なー仲  
島ぬ吉屋チルーぐわーや、なー相当秀りてい、まーか  
らんうり頼てい。歌ん上手、仲島節から何から上手な  
やーい、昔歌んむるうり一人。流りゆる水りしん、う  
りがちきてい。

流りゆる水に桜花浮きてい

色美らさあているすくてい見ちやる

うぬふーじーぐわーんぬーんちゆくてい、「中島ぬでい  
さやーどー」りち、うまうてい育ち。

後お仲里御殿ぬスーよ、仲里御殿ぬ男ぬちとうみてい  
よ。うれーなーじこー貴たーさぬ男とうちとうみてい。  
あんまり美人やあらんしが脳ぬ秀りてい。

仲里御殿ぬ長男とう恋愛そーぬ時分のー、名護ぬ親  
方という、書ち物そーねー誰が何りちん聞かん、絶対。

くここに来ているんだから、貴方にしか頼めないんだ  
から、どうか相談にのって下さいと、大声で詠んだ。  
するとアンマーは、「もう、あと五十貫は上げますよ」  
と、百貫で相談してあるんだが、「百五十貫ね」と、三  
円で相談がついたという話だよ。

そういうふうにして、(チルーは)そこで成長していっ  
た。もう仲島の吉屋チルーは相当な秀れた人に成長し、  
歌やら何やら上手で、あちこちから吉屋チルーを頼つ  
て来るまでになった。流りゆる水に……というのも、  
チルーがつくった歌だよ。

流れゆく水に 桜花うけて

あまりの美しさに すくつてみたよ

そういうふうにご歌を詠むのが上手で、「中島ぬ秀れ者だ  
よ」というまでに育っていった。

後は、仲里御殿という大変美男子がいたが、その人  
と親しくなるようになった。(吉屋チルーは)あんまり  
美人ではないが、頭が秀れていた。

(吉屋チルーが)仲里御殿と恋愛している時分に、  
名護の親方という方がいらっしやった。その方は、机

ありがめーなちよーるえーかやな、絶対人ぬ言しえー  
聞かんさーりち。

吉屋チルーやまた、「うれーあん言ちんあいびんなー  
さい、だー私向けーらちんだ」りち、「とーいやーが、  
とーないだーちばていんり」りち。今度お吉屋チルー  
がよ、「でいーあんしえー、賭ていさびらやー」りち、  
賭し。いんねーすんねー名護ぬ親方やばまていそーた  
んりよ、机んかい前なち。

大学ぬむんぬひまさあていん

花ぬ仲島までいいもり 語ていうさぎら

りち、一言葉ちやつびん呼びてい。吉屋チルーが話す  
し聞ちやぐとう、すぐ「勝つちやしえー」りちよ、う  
ぬ女お勝ち。ありが前なちよーるえーが、机んかい、  
全然側ぬ言ちやんでーまんとうん返いぬ人おあらんり  
るあたぬ熱心家。名護ぬ親方りしえー、「沙汰んねん  
むぬ、ぬ役立つちゆが」りぬ格言ぬ出しとーぬ人やしえー  
や。うぬ人おうりがとうん返らちやんりぬ話。

うりから客おうきやーるやぐとう、アンマーが、ジュ

に向かつている間は、誰が何と声をかけても絶対に聞  
かなかつたそうだ。

すると吉屋チルーはまた、「そういうこともあるんで  
すか、じゃあ私がふり向かせてあげましょう」と、「そ  
うか、おまえにできるんだつたらまずやつてみてくれ」  
ということになった。吉屋チルーは、「じゃあ、賭てみ  
ましようね」ということで賭けをしたようだ。（吉屋チ  
ルーが）行つてみると、案の定名護の親方は机を前に  
して、一生懸命だった。

大学の勉強が いくら忙しくても

花の仲島まで いらつしやつて下さい

語つて さしあげましょう

と、一言大声で詠んでみた。（すると名護の親方はふり  
返つたんでしようね）、吉屋チルーは「勝つたよ」と。  
名護の親方が机に向かうと、側からどんなに物を言っ  
ても、ふり返るような人ではなかつた。それほど熱  
心家で、「音沙汰もないのに、何の役に立つか」という  
格言まで出た人だった。そのような人をふり返らせた  
という話だよ。

それからチルーは女郎だから、アンマーが勝手に客

りるやぐとう、アンマー勝手るやぐとうよ。アンマーがたつくわーちやるばーや、仲里さんがなーだくまにかい来ん日やてーんて。なーうれーふどうふどうなていからるやぐとう、かーま歌ぬあとう相当ぬ年のーんじから、今度お物乞やー、いえばシールて。今度お外んかいナカメーから出じていはいし、すり切りかー切りそーる着物ぐわーかんし見じやーいよ、「あいえーな、くれークンチャーるやてーさやー、物乞やーるやてーさやー」りやーに、やけくそなやーによ。

今度おうんから病氣ちゆくやーに、心の痛み。うれー自分がー望でーうらん、アンマーが相談さーなかいチルーが呼ばつてーんばーてー。あんしなていさぐとう、なー明けつき家から出じーし見ち、うにーからやけくそなてい。

あんしうにーねー十九ぬ年り。なーま身代りる金ん返さんまーる。容姿えあんまれーねーんしが、秀らーぐわーやぐとう、音いっち。世間噂秀りてい音いっちやぐとう。皆、一度なーやあり呼でいんでーやーりち、世間ぬ噂ああてーるぐとーんや。うりから物乞やーまでいかんししちやぐとう、「私ねー物乞やーんかいさつ

をうけていたようだね。その日は仲里御殿が、まだいらつしやらない日であつたらしい。今度は乞食が客として来たんだが、(チルーはそうとは知らずに)、その客が外に出て行く時に、すり切れた着物を見て気づいてしまい、「ああ！この客は乞食だつたんだね」とやけをおこしてしまった。

今度はそのことから悲観して、心の病氣をつくつてしまった。それは自分で望んだことではなくて、アンマーが相談して、客をうけたことだった。そして明の方出ていくのを見て気づき、その時からやけをおこしてしまったのである。

その時に十九の年であり、まだ身代金も返済してなかった。あんまり美人ではなかったが、秀れていたの で評判になり、皆一度は呼んでみたいものだと思われ るようにまでになった。そしてこのようにして乞食にまで呼ばれたことから、「私はとうとう乞食にまで呼ば れてしまった。落ちたもんだね」と、悲観して自分で

たさやー、落<sup>う</sup>ていたさやー」りち。あんし自分<sup>じぶん</sup>死<sup>じ</sup>に。  
まー病<sup>びょう</sup>氣<sup>き</sup>んねーん心<sup>こころ</sup>ぬ痛<sup>いた</sup>み。

あんしさぐとうアンマーや心<sup>しん</sup>配<sup>はい</sup>し、なーうれーバク  
チャ屋<sup>や</sup>りち墓<sup>はか</sup>やるばーてー、吉屋<sup>よしや</sup>チルー埋<sup>う</sup>みてーる墓<sup>はか</sup>。  
墓<sup>はか</sup>参<sup>ま</sup>りんかい行<sup>い</sup>ぢやーに、また墓<sup>はか</sup>ぬ庭<sup>な</sup>うてい呼<sup>あ</sup>びーた  
んり。

生<sup>い</sup>きちうるえだ 私<sup>わん</sup>すそんし

死<sup>し</sup>にから バクチャ屋<sup>や</sup>に通<sup>か</sup>ていぢやすが

りち、ちやつびんなー呼<sup>あ</sup>びーたぐとう、なーアンマー  
やがつかりし。

命<sup>いのち</sup>を絶<sup>た</sup>つてしまった。病<sup>びょう</sup>氣<sup>き</sup>はないんだが心の痛<sup>いた</sup>みでね。

(吉屋チルーが亡<sup>な</sup>くなつてから) アンマーは氣<sup>き</sup>にな  
り、墓<sup>はか</sup>参<sup>ま</sup>りに出<sup>で</sup>かけた。すると墓<sup>はか</sup>で、(チルーは歌<sup>うた</sup>を)  
詠<sup>えい</sup>んだそうだ。

生<sup>い</sup>きているあいだは 私<sup>わん</sup>を粗<sup>そ</sup>末<sup>まつ</sup>にして

死<sup>し</sup>んで バクチャ屋<sup>や</sup>に通<sup>か</sup>つてどうするか

と、大<sup>おほ</sup>声<sup>こゑ</sup>で(歌<sup>うた</sup>を)詠<sup>えい</sup>んだので、もうアンマーはがっ  
かりしてしまつたということ。

採集S 63・12・20 読谷ゆうがおの会へ知花春美

注① 吉屋チルー(一六五〇?一一六八?)恩納ナベと並び称される女流詩人。十三歳(または八歳)のとき、仲島遊郭へ売られ、ある

男と恋仲になるが、抱え主に人の嫌う病人の相手をさせられたためそれを苦に自殺したと伝えられる。

② 読谷山間切 王府時代く明治四十一年の間の間切名。明治四十一年の島嶼町村別制により自治体の読谷山村となり、昭和二十一年  
読谷村と改称する。

## 吉屋チル

話者 比嘉 カマド (明治四十五年七月二十日生)

翻字 村山友江

吉屋「しえー、あんしえーかーぎえうかはぐとう。  
うれー親ぬ「ちやつさかーぎ買んそーり」りねー、言  
ちやぐとう、吉屋「しえーかーぎえ美かーぎーあらん  
たんり。あんさぐとう、「くれーかーげー美らはーねー  
んぐとう、うつさなーやさんれー」り言ちやぐとう。  
うりからちゆーちゃんジュリアンマー前うてい、歌る  
あびてーたんりんれー。

金々ぬ糸ぬ なまくつんやりば

花ぬやしらみん 朽ちるさびる

り言ちやぐとう、ジュリアンマーやうりやか多くたつ  
くわーち買たんりぬ話やさ。金々ぬ糸りねーなかなか  
朽たんりよー。

あんさーにしちやぐとう、うぬジュリアンマーぬ「カ  
ギぐわーや悪さぐとう、多くしえー買らん。ちやつび  
しる私ぬー買いる」りちやぐとう、男ぬ親ぬ売んがちよ  
たぐとう、あんさぐとううぬ吉屋が、すぐ歌るあびー

吉屋チルは美人ではなかつたようだね。親が「い  
くらで買って下さい」と言つたんだが、美人ではなかつ  
た。それで「美人ではないからこんな高くはないよ」  
と答えた。するとすぐさまそのジュリアンマーの前で、  
歌を詠んだようだね。

金色の糸が 朽ちるんだつたら

花のようにきれいな糸も 朽ちるでしょう

と歌を詠んだから、ジュリアンマーはそれ以上の金を  
出して買ったという話だよ。金色の糸というのは、な  
かなか朽ちることはないそうだよ。

ということで父親が娘を売りに来ていたので、その  
ジュリアンマーが、「美人ではないから、多額では買え  
ないよ。いくらだったら私は買うよ」と言つた。する  
と吉屋チルはすぐさま、そのジュリアンマーの前で

たんりー、うぬジュリアンマー前うてい。

「とーとーくぬ子あただぬ子ああらんむー」りやーに、うぬ人ぬお父さんが言ううっさしすぐ買たんりぬ話や私ねー聞ちやん。

吉屋がよ、仲里大主とうな、金持んちゆとうなーいつべー務み客やてーんてー。

うぬうれー自分ぬ使とーぬ下男子とう、「今日や私とうまじよーんちージかい行かやー」りち、下男子んかい言ちやぐとう、「私ねー人んかい使とーる、私がーちージかい行くぬ金のーねーびらんむー。私ねーなー断わいびんどー」りち断わたぐとう、「とーとー今日ぬ金のーや私が出じやすぐとう。いやー私とうまじよーんちーくーよー、行けーわ」りち行ぢやぐとう。

んちやうぬ話や、「今日ぬなーうれー、私あ歌返すしんかいある、私ねー呼ばりーびんどーやー」りち、主前んかい言ちえーんてー。毎日えなー自分ぬ客やしが、二人ちやぐとうな、「今日やなー私あ歌返すしんかいある私ねー呼ばりーびんどー」り言ちやぐとう。

一番のーちやーぬ務み、客からしみてーぬふーじ。「下句おうんじゆ言みそーりよーや、上句や私が言ゆ

歌を詠んだようだね。

「あーこの子はただの子ではないよ」と、父親の要求通りの額で買ったという話を聞いた。

吉屋は仲里大主という大変な金持ちの人と、よい仲であつたそうだ。

その話は、自分の使用人である下男と一緒にのことだがね。主人が、「今日は私と一緒に辻に行こうね」と、下男を誘つた。すると「私は人に使われている身分なので、私などが辻に遊びに行くお金はないですよ。お断りします」と断つたようだね、しかし主人は、「あーあー今日の金は私が出すから、おまえも私と一緒にこうね」と（二人で）出かけて行つた。

するとそこに着くと、「今日はもう、私の歌を返せる人に私は呼ばれますよ」と、主人に言つた。いつもは自分の客であるのだが、二人一緒に来たので「今日はもう、私の歌を返せる人に呼ばれますよ」と言つたからね。

最初はいつもの常連の客から歌をかけてみた。「上句は私が詠みますから、下句はあなたが詠んで下さいね」

ぐとう」りやーに。

流りゆる水に 桜花浮きてい

りち、くぬ吉屋やうつび言ちえーんてー。「下句返し  
そーれー」りち言ちえーるふーじ。あんさぐとう、

うぬ花 かかるところくまんかいかかていいちゆさ  
りたんり。あんさぐとううりねー呼ばらん、うんぐとー  
ぬ人ねー。

あんさぐとう、ちよーどううぬう供んかい、下男子  
んかい」とーあんしえー、またいやーかいやー」りちや  
ぐとう。

流りゆる水に 桜花浮きてい

りちやぐとう。うぬ下男ぬる

色美らさあてている すくていんちやる

りち、かんさぎーたんりよー。あんさぐとう、「今日ぬ  
客おくりるやいびんどー」りやーに呼ばったんりぬ話  
やさ。「私ねー、うりんかい呼ばりんどー」りちやぐとう  
よ。

またうれー年えじこーわらびやてーるふーじ。じこー  
わらびなたぐとう、なー座んかい、寝し座んかい連てい  
行かんりーによ。うぬ下男子んかい。

と。

流れてゆく水に 桜の花が浮いているよ

と吉屋チルーはそれだけを詠ったようだ。「下句はあな  
たで返して下さい」と言つてね。すると

その花は かかるところでひっかかるよ  
り言つたつて。そしたらもう、そのような人には呼ば  
れなかつた。

そして次はまた、お供として来ている下男に、「はい  
次はあなただよ」と言つてね。

流れゆく水に 桜の花が浮いているよ

と詠んだ。するとその下男は

あまりの美しさに すくつてみたよ

と、手真似したようだね。そうしたら吉屋チルーは、  
「今日のお客はこの人だよ」、「私はこの人に呼ばれる  
んだよ」と、下男に呼ばれたという話だよ。

またその下男は、かなり年下であつたらしい。それ  
で部屋に連れて行く時に、その下男にね。

赤木また枝に 登ていんちわらび

りち言やぎたんり、吉屋が。

吉屋ウミチルや 年しじやややていん

夜や下ないる 女わらび

りちやぐとう、すぐうりんかいまんぶりそーたんり。

あんいる話やさ。

吉屋ウミチルやしーじややてーるばーてー年え、な

うぬ下男子るやぐとう、十七、十八ぬわらびぐわーる

やてーさに。

あんすぐとううりんかい夢中なてい、なーうりんか

い客おなとーたんりぬ話。

あんさぐとう、んちやな下男子んかいる、うれー

なー呼ばつていひちえーしえーや。金のージュリア

ンマーや入つちえーくーらんなたぐとう。金持ちんか

いや呼ばらん下男子とう呼だぐとう、くーてんぐわー

なー金のーあしえーや。くれーなーむぬ考さーに、

金取らんあれーならんむりやーに。

クンチャーシールぬ主ありさーに。今日ぬ客おあぬー

トウールぐわー、昔えランプぐわーるやしえーや、「今日

ぬ客お、ランプんちきらんよーい呼ばりりよー、チルー」

赤木の枝にでも 登ったことがあるかこどもよ

と吉屋チルーが言った。すると

吉屋チルーは 年上ではあるんだが

夜になると下になる 女こどもだよ

と返答したので、すぐその下男に惚れてしまったとい

う話だよ。

吉屋チルーは年上であつたようだね、その下男はま

だ十七、十八歳の子供であつたらしい。

そうしたからすぐその下男に夢中になつて、その人

を客として取つたという話。

そのようにして、もう下男に呼ばれたんだからね。

ジュリアンマーには金が入つてこなかつた。金持ちに

呼ばれたんではなくて、下男に呼ばれたのでお金は少

ししくないからね。これはもう考え直して、お金をた

くさんもうけないといけないと思つた。

そしてジュリアンマーは、癩病にかかつている人を

客に取つたようだ。昔はランプであつたからね。「今日

のお客には、ランプはつけないで呼ばれなさいよ、チ

りちゃんり、ジュリアンマーが。あんさぐとうジュリアンマーんなー、なーチルーん買らつたる、売っているうしえーや、あんさぐとうクンチャーシールぬ主人かい呼ばりやーに、くれーひーじーぬ客おあらん、暗しんうてい呼ばつてーるばーてー。

うれーひーじー来る客おあらんしが、珍しいむんりやーに、うまんかいウーバーラぬみつちやかーあたんりよ。なー昔え芭蕉ん何ん、チージン紡るすてーさに、織ていすたんり。あんさーにうぬチルーやなー、じこー知恵強はてーんてー。ウーバラぬ中んかい針ぐわー通さーによ、針ぐわー通さーに、家かい帰てい行ちーねーよー着物ぬ裾んかい止みやーに客お帰たんり。ジュリアンマーが金のー多く取いしえー。

今日ぬ客おしーよーぬ変わとーる、うれーなー後目見りわるないりやーによ。ウーバーラすぐ針ぐわーんかい抜かーに、昔え着物ぐわーるうりすぐとう、抜かーにさとうてい行ぢやんり。チルーんまじょーん後じーからなー、ゆっかい離りていてー。

あんさぐとうクンチャーシールんかい入つちはいぎーたんり。あんさぐとう帰ていくーやーに、

ルー」と、ジュリアンマーは言った。もうチルーは癩病患者に呼ばれているんだからね。暗闇の中で呼ばれたもんだから、これは普通の客とは少し違うなと(思っていた)。

これはもう平生行き来している客ではないが、珍しいことだと(チルーは思っていた)。そして昔は芭蕉を紡いで織っていたので、辻にもそれはあつたんでしょうね。そのウーバーラの中には、たくさんの芭蕉が入っていた。そのチルーは大変頭が良かったので、その芭蕉を針に通して、客が帰る時に着物の裾に止めて帰した。ジュリアンマーが(客から)お金はたくさん取つてあるんだからね。

今日のお客は態度がおかしいけど、これはもう後をつけてみないといけな思つた。それでウーバーラの芭蕉を針にさして、昔は着物をつけていたのでその裾に抜いて、だいぶ距離をおいて後からついて行つた。

そうしたらクンチャーシールに入つていったようだね。(それを見たチルーは悲観してしまい) 家に戻り、

一万銭欲しり 二万銭捨てていてい

新しが命 捨てていいいちゆさ

りやーに、波之上ぬんかいありしちやんりぬ話。

あんさーにかい吉屋や亡しちやんりよ。あんさーに亡しちやぐとう、追ていいかんあたれーありるやたらー、追ていいかーにうぬ力さーにポンみかち。一万銭欲しり二万銭、二万さーに買らりーるさーらー、二万銭捨てていり言やぎーぐとうよ、新しが命捨てていりちやさりち、しちやんりる話やぐとうてー。

あんさーに亡しちやぐとう、なー連ていチージンかい連てい行ぢえーたしが、イキーぬ達あ連りりち、連いが来ぐとう。那覇から山原までい、うぬ近山原るやたんりぬ話てーや。あがとうー遠山原やあらんよー、恩納、りる言ていー、近さやたんりぬ話。

湾ぬアシビナーやアシビさぎたんり。仲里節ぬアシビしちえーんてー。あんさーにうぬイキーん達がカーミえ下さーに、カーミや担みとーしえー、いったー芝居見らんていー。りーうまんかいとうさりち、アシビさぎーるむん、くまんじアシビぐわーんでー見ち行かりち。すぐ人おいつばいしちやぐとう、見らんてー

一万の銭欲しさに 二万の銭を捨てて、

新しい命までも 捨てていくよ

と、波之上から身投げをしたという話。

そのようにして吉屋チルーは、亡くなったそうだと、そのクンチャーの後を追っていかなければそうすることもなかつただろうに、追つていったばかりに悲観して、その力で身投げをしてしまった。一万の銭欲しさに二万の銭を捨てて、新しい命までも捨てていくよと、吉屋チルーは亡くなつてしまったそうだと。

それで亡くなつてしまったので、辻に連れ帰つたんだが、兄弟に迎えに来てもらつた。実家は山原であつたそうだが、そう遠くではなくて近くの山原であつたという話だよ。あまり遠くではなくて、恩納辺りだつたんでしようね。

途中、大湾のアシビナーにさしかかつた時、そこではアシビを行なつていた。仲里節のアシビであつたよいうだが、それで兄弟は担いでいる壺を下におろしたよいうだ。せっかくアシビをやつていゝんだから、アシビでも見ていこうと腰を下した。人がいつばいしていたので、その壺を担いでいる人は、見えなかつた。それ

んてー、うぬカーミ担たみとーしえー。あんし足ひまだかー  
し見んち、後あとじーぬ人ぬカーミぬ上いんかい登ぬやーにしちや  
ぐとう。うまー仲里なかざと節ふしさぎーたんり。うぬカーミとー  
てい、いつペー仲里なかざと節ふしぬ歌うたるあびーぎーたんり、うぬ  
骨こぬ。あんさぐとううれー吉屋ゆしややさやー、吉屋声ゆしやこゑやし  
がりやーにしちやぐとう、イキーぬ達ちやがくれーはいゆ  
るちやーにしちやんりぬ話はなしるやたんり。

で前の人は、背のびをして見ていたんだが、後の人は  
カーミの上に登って見物していた。そこでは仲里節の  
芝居をやっていたんだが、その壺の中から仲里節の歌  
が、さかんに聞こえてきたそうさ。中に入っている骨  
が(歌っていたようだね)。ああ！これは吉屋チルーが  
歌っているんだねと、その兄弟は芝居を見るのを止め  
て、(急いで家路についた)という話だよ。

採集H1・5・24 読谷ゆうがおの会へ村山友江へ

注① ジュリアンマー 女郎の抱え親。抱え主はすべて女で、娼妓はこれと母子まがいの関係をむすび、それぞれアンマー、ジュリングワ  
と呼ばれる。

② アシビ 歌・三味線・踊りなどを楽しむこと。また村芝居、祭りなど、仕事を休んで行なう演芸・娯楽。

137 吉屋チルーへ牛うしどろぼう

話者 比嘉 カマド (明治四十五年七月二十日生)

翻字 大浜 洋子

吉屋チルーや、吉屋ゆしやりしえー、売ういが行いきにん  
比謝ひじや橋はしぬ橋はしや 誰たが架かきてが

吉屋チルーは、売られに行く時に  
比謝橋の橋は 誰が架けてくれたのか

情無ん人ぬ 架きていきでさ

りち。

尾類売いしんが行くとうくまんじ、松かすぐわー  
がポンみかち落ていてーるふーじ。

あきよ松かすや 枯木なてい落てい

我にん枯木なてい 花に行ちゆさ

んち、うぬ話。

あんさーに、家んかい居るばーに、なーだ売らりー  
が行かんばーにるやてーさに。うまー牛ぬうてーんてー。  
牛盗人ぬ入つちちえーるふーじ。あんさぐとう、うぬ  
吉屋やなーいっペーぬなるい者やてーんて。木ぬ上ん  
かい登とーてい、牛盗人ぬ入つち来ーに

風んそよそよとう 波んふりどうりとう

繫じある牛ぬ 鳴ちがやしが

りちやんり。

あんしうぬ牛えー「モー」みかさーに鳴かーに、あ  
い、うまぬ主え「牛盗人ぬ来しが、り出していんーだ  
らー」りちやぐとう、牛盗人お逃んぎたんりる話。

情無い人が 架けてあるよ

と歌った。

また、尾類売りされに行つた場所で、松ぼつくりが  
ポンと落ちたらしい。

あわれ松ぼつくりは 枯木になつて落ちる

私も枯木になつて 花の島に行くのよ

という話。

そして、家に居る頃、まだ売られに行かない頃だつ  
たんでしようね。牛盗人がね、そこは牛がいてね、牛  
盗人が入つたらしい。そしたら、この吉屋はとても名  
高い人だった。木の上に登つて、牛盗人が入つて来た  
時に、

風もそよそよと 波もふりふりと

繫いである牛が 鳴いているよ

と歌った。

それでその牛は、「モー」と鳴いたので、その主は  
「牛盗人が来ているようだ、どれ出てみよう」といつ  
たので、牛盗人は逃げて行つたという話。

翻字 大浜洋子

茶ぬなー白ねーすか、なー茶請え出じらんでーんて。

サンピンぬう茶ぬ 白茶なるまでいん

なまでいう茶請きぬ あていやねらん

んち。あんいち客ぬ言ちやぐとう、うまぬ尾類子ぬ使  
りー者が、使り者やかんし茶ん茶請きん出じやすせー  
やー。

くたちちるちちえる ぬか味噲るやしが

大和味噲とう思てい 嘗みていたほり

んちやぐとう。うりがじこう繁盛しちやんりる話や聞  
ちやさ。

「くたちき」りねー、「くぬ前るちちやる」、「ぬか味

噲」りねー、昔えぬかん何ん混んきている作てーはに。

「大和味噲とう思てい嘗みていたほり」んちやんり。

うりがまたいつペー儲きやー尾類なたんでい話る聞ちや  
んで。

うりん吉屋るやてーるよ。初え小てー尾類ぐわーる

お茶が白くなるまで、お茶請けが出てこなかった。

サンピンのお茶の 白茶になるまでも

今だに茶請けの 出るようすがない

と。お客が言つたようだね、そこの尾類の小間使いが、  
お茶や、茶請けを出すでしよう。

この前つけたばかりの ぬか味噲ですが

大和味噲と思つて 嘗めて下さい

と詠んだので、この子がとても繁盛したという話を聞  
いた。

「くたちき」と言うのは、「この前つけた」の意味、

「ぬか味噲」と言うのは、昔はぬかも混ぜて作つたん

でしようね。「大和味噲と思つて嘗めて下さい」と言っ

たつて。この子がまた、とつても儲け者の尾類になつ

たという話を聞いた。

これも吉屋チルーだつたんでしよう。何歳だつたか

やしえーや、うりん吉屋るやるばーて。うりんいくちりがらーにる童やいにる連らつていはちゃんりぐとう。

139 名護親方と具志頭親方

名護ぬ親方とう具志頭親方とー、まじよーん、位やまじよーんやみしえーん。

名護ぬ親方あ私が考てー、教育家、具志頭親方あ政治家。今、自分ぬ考るやしが、實際やあんやてーさにり思いん。何んりがりれー、名護ぬ親方あ誉みらりーしん好かん、すしらりーしん好かん、うち世なだやしく渡いぶさぬ。具志頭親方あ、誉みていすしらりや世ぬ中ぬ手本、うり知らんむんぬ何役立ちゆが。あんすぐとう名護親方あ教育家、おとなしい教育家てー。また具志頭親方あ政治家、り思とーるばー。

知らないが最初は小さかったというからね。子供の頃に連れていかれたというからね。

採集S 63・12・15 読谷ゆうがおの会〈村山友江〉

話者 照屋 牛五郎（明治三十一年十二月四日生）

翻字 村山友江

名護の親方と具志頭親方は、位は同じであった。

私の考えでは、名護の親方は教育家、具志頭親方は政治家。今の自分の考えだが、多分そうだったと思う。なぜかと言うと、名護の親方は誉められるのもいや、悪口をたたかれるのもいやで、世の中を難なくたやすく渡りたい（と思っていた）。また具志頭親方は、誉められて悪口を言われるのは世の中の手本、それを知らないで何の役に立つか（と思っていた）。だから、名護の親方は教育家、おとなしい教育家だったと思うわけさー。また具志頭親方は政治家だったと思うよ。

またうりから、いへー名護お強さみしえーてーるふー  
じ。具志頭親方あ、また才能お強さみしえーてーるふー  
じよ。あんし昔ぬ並松、県道ぬなぎ通とーぬ並松え、  
考や名護ぬ親方ぬ考やみしえーたんりー。あんしが具  
志頭親方あ、手際よくうり仕事しちやしえー具志頭親  
方なやーに。名誉お具志頭親方ぬ手本なたんりぬ話。  
昔ぬ年寄ぬ話てー。

あんやしが名護ぬ親方あ、豆腐おうさがらんたんり。  
何がんれー、名護ぬ親方あ豆腐お欲ぬ強さん。豆一升  
から豆腐うっさ出じーん、豆腐ぬかしーがうっさ出じー  
ぐとう、くれー欲ぬ強はんりやーに、豆腐おうさがら  
ん。

また豚肉お、人間ぬ聖人り言みしえーたんり。何が  
りちやぐとう、豚肉食りおとなしくならん人りちえー  
うらんり。ちようどう、今、試験ぬぬーきーに油豚食  
てい、試験のー零点りしとー同むん。人間のー、豚肉  
食みーねーおとなしくないんり、自然。うっぴる覚とー  
さー。

また名護の親方は、少しは強い方だったようだね。  
それから具志頭親方は、才能のあるお方だったようだ  
よ。そして昔の並松よ、県道沿いの並松は、名護の考  
えだったそうだよ。しかし（並松を植える時に）手際  
よく仕事をしたのは具志頭親方だった。具志頭親方の  
手柄になったという話。昔の年寄の話だよ。

しかし、名護の親方は、豆腐は召しあがらなかった  
そう。どうしてかというのと、名護の親方が言うには  
豆腐は欲が強いということだった。豆一升から豆腐も  
たくさんできるし、おからもたくさんでるから豆腐は  
欲が強いということ、豆腐は召し上がらなかった。

また豚肉は、人間の聖人とおっしゃっていた。なぜ  
かというのと、豚肉を食べておとなしくならない人はい  
なかつた。ちようど現在の試験などの時に、油豚  
を食べて試験は零点だったというのと同じだよ。人間  
は豚肉を食べると、自然におとなしくなるそうだよ。  
それだけしか覚えていないさー。

注① 名護親方 名護龍文、程順則のこと。一六六三—一七三四。久米村出身。一六八三年中国に渡り四年間陳元師の門で学んだ。帰

国して久米村の講解師となる。一七〇六年再三中国へ行き、一七〇八年に六諭衍義(清大帝諭解説)を刊行して帰る。一七二八年、琉球における学校の始めである明倫堂を順則の建議によって建立。一七二八年名護間切総地頭職となる。徳教道徳の鼓吹につとめ、実践道徳として人々の尊敬を受け、名護聖人と呼ばれた。

② 具志堅親方 具志頭文若、唐名。蔡温(一六八二—一七六一)佐留通事として中国へ行き、帰国後世子尚敏の師伝となる。四七歳—七二歳、三司官を務める。御教条を編んで国民読本となる。『中山世譜』(父蔡鐔編)を訂正増補した。

## 140 名護親方

話者 松田芳子(明治四十四年二月十日生)

翻字 知花春美

名護ぬ親方ぬ子ぬてー、子ぬ生まりとーしが、名護親方が、うれーなー自分ぬ腹どう貸らちえーる。うれー私たー子ああらん。なー考てい。

幾歳ぬ年なかいりがらー、亡しちやぐと、なー妻のー、「りか、洗骨しちくー、洗骨しちくー」りち、なー言ちやんり。しちやぐと、「洗骨さんていんしむさ。大丈夫、洗骨えさんていんしむんどー」りち、夫のー言ちやぐと、「私ねーなー、洗骨、うんなげーない

名護親方に子どもが生まれたが、名護親方は、自分の腹を貸しただけで、この子は私たちの子どもではないと言っていた。

その子は何歳の年にか亡くなったので、もう妻が、「洗骨してこよう、洗骨してこよう」と、言ったそうさ。洗骨はしなくてもいい。大丈夫、洗骨はしなくてもいいよ」と夫は言った。「もうこんなに長らくなるのに、七年もなるのに、洗骨もして、きれいにしないと

むん、あぬだー今なまとうんないるすんむー、七年しちにんぬんな  
いるすんむー、なー、うりりつば美ちからくなさんあれー、  
私わん、心ちんふがんでー」りち、言いちやぐとう。

名護親方なぐせいかたのー「自分じぶんぬ子こや精靈しんれいるやる。うり精靈しんれい  
やる私わつたー子こやあらん。私わつたー腹はらどう借かやーに生うまり  
とーる」なーうぬ人ぢぬがー墓はかあ開あきーぶこーねーらん」あ  
ぬー大だい丈夫じやうぶやき。ちやーんねーらん」りちるやし、  
なーうれー妻とらじなかい、あぎまさつたぐとう、墓はか開あきてい、  
美ちからくなすんり。墓はかあ開あきたぐとう、何なんねーんた  
り。

「しつたい、何なんねーんよー。だーやー大だい丈夫じやうぶ。いやー  
腹はらどう借かやーに、うぬ子こあ生うまりとーぐとう、ぬーん  
死した体たいんねーん」しちよーるふーじやし。

うぬ名護親方なぐせいかたのー、なー墓はかんでー開あきーにからー、  
自分じぶんぬ祖そ先せんのー栄さけらんち、開あきらん開あきらんりちるや  
んりしが、なー妻とらじなかいあぎまーさつてい開あきていひ  
ちやぐとう、栄さけてーうらんりる話はなしやさ。

私は気がすまない」と、(妻は)言った。

名護親方は、「自分の子は精霊である。私たちの子ど  
もではない。私たちの腹を借りて生まれている」と、  
その人は、墓を開けたくないと思っていた。「(洗骨は)  
しなくても大丈夫。どうもない」と言っているんだが、  
妻にせかされて、きれいにしてあげようと、墓を開け  
ると、何もなかったそうさ。

「ねえ、何もありません。大丈夫、おまえの腹を  
借りて、その子は生まれたので、何も死体もないよ」  
と、言ったようだ。

その名護親方は、墓を開けてしまうと、自分の祖先  
は栄えないということ、開けないつもりであったが、  
妻にせかされて開けてしまったので、栄えてないとい  
う話である。

注 洗 骨 南島では死後三年目頃に、墓に安置された遺骸を再び取り出して洗い

清める儀礼がある。これをシンクチ（洗骨）とかチュラクナスン（美しくする）等と称している。洗骨した骨は厨子甕に納めて、再び墓堂奥に安置する。



洗骨の様子

141 チョーフグン親方

話者 比嘉清次郎（明治四十三年三月二十日生）

翻字 知花春美

あぬ人お生きち千人、死ぢ千人殺ちやん人やしがよ。

薩摩人なかいてーな。薩摩人ぬ殺ちやんりし。

うりちやーしがんれー チョーフグンは生まりーに

からやしがよ、むる鉄、うまうつさる肉体やる。あれー

散髪屋が殺ちやぬ話やしがよ。散髪屋に頼まってい

あの人は生きて千人、死んで千人殺したんだけどね。薩摩の人にね、薩摩の人が殺した。

それはどういうことかという、チョーフグンは生まれるときから、ぜんぶ鉄、ここだけが肉体であった。あれは散髪屋の人が殺したという話だけだね。散髪屋

殺ちやぬばー大和なかい。

チヨーフグンさんは、あれー田舎生まれやしが、田舎うていうぬたきだーさぬ女やし、なー結婚しぬ子ああらんどー、やぐさみむんかいかさぎてい。あぬじぶんのー、あんさぐとう、じひうるしわるやるりち、困ったくとうなたんでーりち、うるしわるやるりちよ、よーや、鉄しじてい飲り。あんしーねーりち。鉄んち、うぬじぶんあてーんてー。まじ話やあぐとう。

あんしん飲むしんでーりちやさん、身体むとーむる鉄なてい、口びかーんどう、中身むるうりてー、皮やむる鉄よー。鉄しはつぱとーたんりー。チヨーフグンさんのー。

あんしし、まー月えたつちやぐとう生まれてーんてー。生まれたくとう、話えちがらんしが、墓うてい生まれてい。墓んかい。女ぬ親あ亡しえーんてー。生まれーうさん、肉体的にむる鉄るやぐとう、子どもや、なーちやつさがやたらー分からんしが、あんし、うり産しうさん、あたためぬ所から生まれーうさん、親ぬ命えうすくなてい、子供なかい命えとうらつてい、墓んかい連てい行ぢ、あんさぐとう生まれてい。

は大和の人に頼まれてね。

チヨーフグンさんは、田舎生まれだが、(母親は)身分もある女だが、もう結婚しての子どもではなかった。あの頃は、もうそうになると、(子どもを)おろさないといけない、困ったことになったといつて、鉄を煎じて飲んだ。そうしたらおけるといつてね。鉄といつて、その時分はあつたんでしよう。話はあるのでね。

それでも、飲んでもおりはしないで、身体中、ぜんぶ鉄になって口だけは肉であったが、中身もみんな、表面は、ぜんぶ鉄であった。鉄でおおわれていた。チヨーフグンさんは。

そうして、月が経つたので生まれたようだ。生まれたので、話は違つてないが、墓で生まれた。墓でね。母親は亡くなったようだ。肉体はぜんぶ鉄なので、生むことはできず、子どもは幾月だったか分らないが、生むことはできず、親の命はうすくなつて、子供に命をとられて、墓に連れて行つて、それから生まれた。

女ぬ親あな一マブイや現りてい、店んかいき一ね一  
人間ないんば一て。誰がやら一分からんしがよ、  
顔かたちえ。店ぐわ一んじ買ていよ、子供んかいぬ、  
きう一しんぬ一ん買てい、子供育てい一んり一。

あんさぐとう、持ちちえ一しえ一紙銭やしえ一や、  
打紙よ、見ちやぐとう、むるうりやたんりよ。打紙が  
ちよ一たんり。珍しむんやつさ一りち、取いね一紙る  
やんで一本当ぬ銭るやし、それをかんしぬしき一ね一  
主ぬ取いね一ありやし、見じ一ね一またむる紙なてい  
や、これおかしいな一りち。

あんさ一にかい、うぬ女ん、店ぬ女ん、「これまずみ  
てみないとならんりち、後う一いし行ぢえ一るぐと一  
んや、墓んかい。うりから、その墓に、子供声ぬ聞か  
り一ん。子供声ぬ聞かり一たぐとう、これ一なんかあ  
んで一りち、うくさ一なかい、墓開きていうりがチョ一  
フグンさんの一出じやさ一にかい育ていてい。

それからもう、首びか一じえ一肉、あんしし、あれ一  
また、がんにゆ一さぬよ一、薩摩とういくさし一ね一  
薩摩藩とう戦し一ね一、うり一人し、むるひじみ一た  
んりよ。がんにゆ一さぬ、あんさぐとう、薩摩藩の一

女の親の霊が現れて、店に買いに来る時は人間にな  
るそうだ。顔は誰か分からんが、子供にあげるのを店  
で買つてね、子どもを育てた。

そして、持ってきたのは紙銭でしょう。打紙よ、見  
るとみなそれになっていた。打紙だったそうだ。取  
るときは本当の銭だが、主が取る時はそうだが、よく  
見るとみんな紙になって、これはおかしいなあと思つ  
た。

それで、店の女主人は「これはまず確かめてみよう」  
と後を追つて行ったようだ。墓にね。すると、墓の中  
から子供の声が聞こえたようだ。これは何かあるなど、  
墓を開けた。その人が、チョ一フグンさんを出して育  
てた。

それからもう、首だけは肉。また強くてね、薩摩藩  
と戦さをする、強いものだからその人ひとり、戦つ  
たそうだ。薩摩藩はもう、チョ一フグン親方がいる間  
は、どんなにしても沖繩を占領することはできないと

チヨーフグン親方がうるえーがー、いかなしん沖縄ん  
かい占領ならんぐとうりやーなかい、薩摩からありつ  
し謀反企し。

散髪屋んかい、くまびかーじどう肉体やしが、散髪  
屋んかい何しがるちやらー、髪ちんがるちやらー、髭  
ん剃いしがあるすたら、散髪屋うている、首ちきらつ  
たん。うまー肉やしえーや、カンスイやたつちゆしえー。  
さつたんりぬ話。

宝ぬ人やぐとうりちよ、墓んかい入つちよーしがよー。  
散髪屋うてい殺ちやんてーりち話聞ちやぐとう、く  
りうてーしーあーちやんりち行ぢえーるふーじや。沖  
縄んかい薩摩藩のー、また攻みーがちやぐとう、また  
攻みらつてーならんりち、墓んかい埋みてーしが、う  
ぬ人おまたすんち出ぢやさーなかい、あまんかい、那  
覇ぬ通堂ぬ前んかい立ていていよー。

あつたーまたとーめーし見ちやぐとう、薩摩藩のー  
見じやーなかい、「今ん生きちめーるむん」りち、うま  
んかいウジ虫ぬ出じーしえー、ハチャグミるうさがてい  
めーるりち、ハチャグミる今うさがていめーるむんり  
ち、なーいちえーならん。

薩摩は謀反を企んだ。

首だけが肉体だけど、散髪屋に何をしにきたのか、  
散髪にきたのか、髭も剃るのがあつたのか、散髪屋で  
首を切られたそうだ。そこは肉でしょう。カミソリで  
切れるのでやられたという話である。

それでも、宝の人だといって墓に入っていたわけだ  
が、散髪屋で殺したと話を聞いて、今回は退治するこ  
とができたとまた行つたようだ。薩摩藩が、沖縄にま  
た攻めにきたので、攻められたらまずいといって、墓  
に埋めてあるのを、その人をまた出して、那覇通堂の  
前に立てた。

すると、薩摩藩は、望遠鏡で見て、「今も生きていらつ  
しゃる」と、口からウジ虫が出ているのは、ハチャグ  
ミを食べておられる。ハチャグミを今、食べておられ  
ると思つて、もう行つてはいけなないと。

あんさーなかい、薩摩ぬあまから殺ちくりちやし  
がなー切腹し、なーわじやあたつしーうさんりち、なー  
おーいやさん自分たーおーいやさんなかいむる殺しは  
じみていよ。

生きち千人、死んでからも千人、たいらぎたんりぬ  
話、チヨーフグン。

薩摩から殺してこいということだったが、もう任務  
を果たすことができなかつたので、切腹した。戦いも  
せずに殺しあつたということである。

チヨーフグンは、生きて千人、死んでからも千人退  
治したという話である。

採集S 63・12・15 読谷ゆうがおの会〈知花春美〉

注 チヨーフグン親方 尚真王代の人で虞建極（京阿波根家基）ではないかとおもわれる。「球陽」に「虞建極、二次京に赴き、以て劍  
を磨き並びに討還を為す」とある。チヨーフグン親方の母親は彼を宿しているときに、鉄を煎じて飲んだため鉄人として生まれ武勇  
に秀れていた。

142 読谷の神の話

話者 比嘉永純（明治二十六年八月二十日生）

翻字 知花春美

私たーやよー、比屋久世りちよ。昔から、いへー初  
まいからぬしんかやたらり思いびーん。人、兄弟や、  
比屋久ぬ孫、子やるばー。うぬカンジャーぬーん、い

私たちはね、比屋久の世といつてね。昔から、最初  
の頃からの子孫なんだよ。鍛冶屋でも、私たちの読谷  
にいらしてね、何処からきたのか、大和からきたのか、

ぎたー読谷ぬんかいもーちや、何処からがもーちやらー、大和からるもーちやらー、カンジャー王ぬ、長浜んかいよー、長浜なかにカンジャーするとうくま、ターブツクワぬ上やしがよー、うまとーていカンジャーしんそーちやんりちよ。うぬ人からぬ、クエー、ヒーラ作たい、ぬーしちやい、うぬ人お比屋久ぬ孫、子ぬ内やてーさり思いる人ぬめーたんりよ。

あんさーに、うぬ人お長浜んじ、年え寄んそーちよ、ちやーしん比屋久ぬ孫、子やてーらり思しいしが、私たーがいいさく成長いていからよ、骨しんまでいん、うぬ人うんちけーしちよ、しちやるくとうんあんどーやー。

あんさーに、うぬ人お私たーがあていあていから、長浜なかい、天久与久田りちよやたしが、あまんかいわんだーりていよ。あまからうんちけーしちやしが、私たーが十七、八なかい 私ねーすぐビンス担みやーんぬーしウグワンいっペー供ぎていよ。

ひちやる人んでー、世ぬ初まいぬ人、カンジャー、いぎたー読谷しんそーちやる人ぬめーんどーり。うぬふーじー語い話、私たーや聞ちよーさ。うぬ人およー、比屋久んかいわんだつていめーさ。サーク墓りちよ、

カンジャー王が、長浜にね、長浜に鍛冶をする所、田んほの上だが、そこで鍛冶屋をなさつた。その人が、歟、ヘラを作つたりして、その人は比屋久の孫、子になつていと思う人がおられたようだ。

そうして、その人は長浜で、年を取られ、きつと比屋久の孫、子だつたと思うが、私たちがほどほど成長してから、その人の遺骨をお連れしたこともあつたよ。

それに、その人が私たちが物心つくころ、長浜の天久与久田というところに世話になつていた。私たちが十七、八の時に、私はビンスを担いで、御願もたくさん供えたよ。

その人が、世の初めの人、私たちの読谷で鍛冶屋をした人がおられた。そのような言い伝えを私たちは聞いたよ。その人はね、比屋久に祭られている。比屋久墓といつて、長浜に、畑のまん中にお墓はあつたが、

長浜なかい、畑まん中かい、お墓ぬあたしがよ。うま  
からうんちけーしちよ、しちよーる人んぬーんどーや。

うぬふーじさーに、昔え唐からもーちよーるはじどー  
り思とーん。昔え唐世り言らつとーしえーや。また、  
比屋久お唐からもーちよーる親祖先ぬ鉢までいん、唐  
世からぬ御拝領りちよーあい、絹んぬーん、糸絹よ、  
天だきある糸絹までいよあたんどーや。うんぐとー  
る人ぬあぎたー沖繩よ、沖繩読谷ぬ人やぐとう、カン  
ジャーしんそーち、世うひるぎていしちえーる形んでー  
あさやーり、私あ思とーるばー。

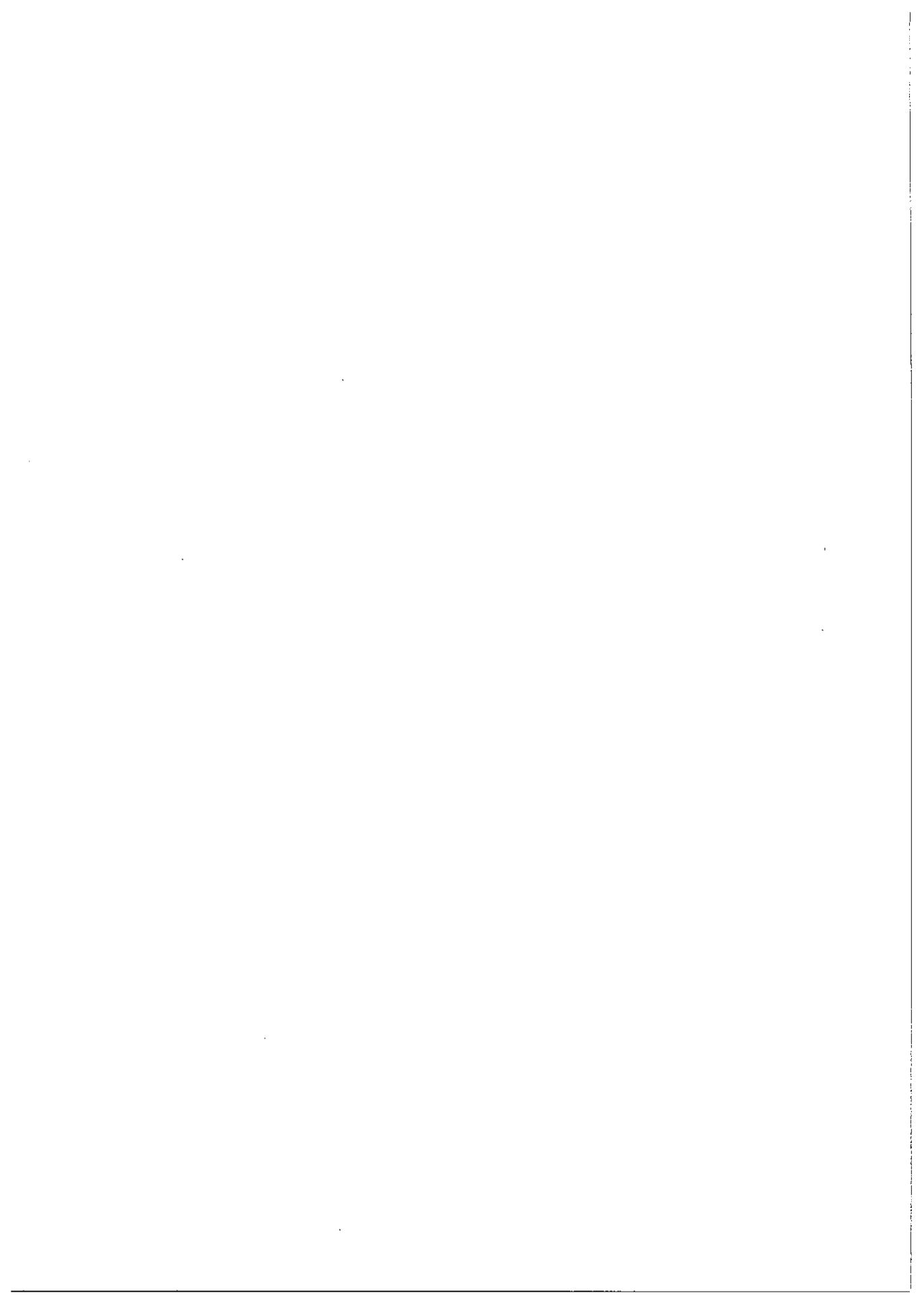
そこからお連れした。

そのようにして、昔、唐から来られたと思っっている。  
昔は唐の世と言われているでしょう。また比屋久には  
唐から来られた親祖先の鉢も、唐世からの御拝領といっ  
てあるし、絹にしても天までの長さの糸絹があったよ。  
そのような人が、私たちの沖繩、沖繩読谷の人なので、  
鍛冶屋をして世を広げたのではないかと、私は思っ  
ているわけだ。

## ◆ 参考文献

- 1 『日本昔話名彙』柳田国男監修 日本放送協会編 日本放送出版協会 昭和四九年二月二版
- 2 『日本昔話集成』関敬吾著 角川書店 昭和二五年—三三年
- 3 『沖繩語辞典』国立国語研究所編 大蔵印刷局 昭和五十年三月 四版
- 4 『琉球史辞典』中山盛茂編著 文教図書 昭和五十年
- 5 『沖繩大百科事典』沖繩タイムス社編 一九八三年五月
- 6 『沖繩ことわざ事典』仲井真元楷著 月刊沖繩社 一九八二年五月
- 7 『沖繩の伝説2』大城立裕・星雅彦・茨木憲著 角川書店 昭和五一年二月
- 8 『琉歌大観』島袋盛敏著 沖繩タイムス社 昭和五三年七月
- 9 『読谷の文化財第一集』読谷村教育委員会 昭和五三年三月
- 10 『伊良皆の民話』読谷村立歴史民俗資料館編 昭和五四年三月
- 11 『喜名の民話』読谷村立歴史民俗資料館編 昭和五五年三月
- 12 『長浜の民話』読谷村立歴史民俗資料館編 昭和五六年三月
- 13 『瀬名波の民話』読谷村立歴史民俗資料館編 昭和五七年三月
- 14 『儀間の民話』読谷村立歴史民俗資料館編 昭和五八年三月
- 15 『宇座の民話』読谷村立歴史民俗資料館編 昭和五九年三月
- 16 『渡慶次の民話』読谷村立歴史民俗資料館編 昭和六十年三月
- 17 『高志保の民話』読谷村立歴史民俗資料館編 昭和六十一年三月
- 18 『波平の民話』読谷村立歴史民俗資料館編 平成元年三月
- 19 『座喜味の民話』読谷村立歴史民俗資料館編 平成二年三月

第二編 資料



## 話者別一覧表

凡例 一、話者番号は話者の数を表わす番号である。話者の配列は調査班の若い順に並べたが割り付上前後したものもある。

二、話者欄には、話者の氏名を示し、できるだけ写真を載せた。

三、住所欄については、話者のすべてが読谷村に住所を有するので、字名と番地を記入した。生年月日は、便宜上M(明治)、T(大正)、S(昭和)の略号を用いた。

四、話者番号に○を付したのは、翻字資料が掲載されていることを示す。

五、話者名欄のへはモチーフ名を表わす。話は調査年月日の古い順に、テープ収録順に並べた。また、同話者による同じ話の再録分については調査の古い順に並記した。

六、語りの欄の○印は方言、×印は共通語、△印は方言共通混じりの語りを表わす。

七、テープ欄には字ごとに編集したテープ番号を示した。

八、調査欄には調査年月日を示した。

話者番号	話者名	住所 生年月日	話者番号	話者名	翻字 番号	掲載頁	語り	テープ 番号	調査
1	比嘉 清太郎	楚辺二〇八五  一 T12・3・5	1	世間話へキジムナーに襲われる話			×	1A1	S52・2・20
			2	キジムナーへ喰			×	1A2	”
			3	キジムナー			×	1A3	”
			4	赤犬子へクラガー発見+唐旅+ニール 由来+水船速船+昇天				1A4	”
2	上地 松徳	楚辺二二七四  二 M43・7・20	1	赤犬子へニール由来			○	1A5	S52・2・20
			2	赤犬子へ水船速船			○	1A6	”
			3	赤犬子へ冬青草夏立枯			○	1A7	”
			4	赤犬子へ三味線由来			○	1A8	”
			5	世間話へクミンドー御嶽	120	234	○	1A9	”

7	6	5	4	3
伊波カマ	松田芳子 	比嘉マツ	松田ウシ	松田カマ
M 26・6・15 一 二 楚辺一九九八	M 44・2・10 一 三 楚辺二二〇三	M 35・7・13 一 一 楚辺一九一五	M 27・6・26 楚辺二〇二二	M 26・12・20 楚辺一九〇七
⑥ ⑤ 4 ③ 2 1	10 ⑨ ⑧ 7 6 5 4 ③ ② ①	1	⑥ 5 4 3 2 1	2 1
雀孝行 十二支由来 世の始まりの話 猿長者 犬と女 美女に化した豚	産神問答 ドゥーヌヒヤ 侍と小僧 台所のヤナムン 塩吹き臼 便所の神 赤犬子へ暗川発見 名護親方 雀酒屋 普天間権現由来へ刀	継子話へ麦と涙	赤マタ掬入へ芋環型 民俗へ浜イリキ 民俗へ鳥の悪縁起 世間話へしょう油の作り方 ハシカの神様 継親念仏	鬼餅由来 多幸山フェーレーへ荷釣り
27 33 105	3 140 84 88 42	54		
42 52 186	4 277 155 161 73	97		
○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○
2 2 2 2 2 2 A A A A A A 6 5 4 3 2 1	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 B B B B B B B B 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1	1 A 19	1 1 1 1 1 1 A A A A A A 18 17 16 14 13 12	1 1 A A 15 11
” ” ” ” ” S ” ” ” ” ” 52 ” ” ” ” ” 2 ” ” ” ” ” 20	” ” ” ” ” ” ” ” ” S ” ” ” ” ” ” ” ” ” 52 ” ” ” ” ” ” ” ” ” 2 ” ” ” ” ” ” ” ” ” 20	S 52 2 20	” ” ” ” ” S ” ” ” ” ” 52 ” ” ” ” ” 2 ” ” ” ” ” 20	” ” ” ” ” S ” ” ” ” ” 52 ” ” ” ” ” 2 ” ” ” ” ” 20

9												8															
比嘉ウト												比嘉カマド															
																											
M 37・10・15 一三 楚辺二〇三二												M 44・4・15 一 楚辺一九九七															
12	11	⑩	⑨	8	⑦	6	5	4	3	2	①	③	2	①	19	18	17	16	15	14	⑬	12	⑪	10	9	⑧	7
喜屋武ミーぐわー	山原と団亀	尻ひり嫁	盗人の尻	浜下り由来	モイ親方	久良波ヌン殿内	多幸山フェーレ	物言う牛	ハジチ由来	仲順流り	雀孝行	はしかの神様	話千両へ白銀堂由来	赤マタ響入へ浜下り由来	赤犬子	子供の肝	兄弟の仲直り	城間仲	瀬良垣水船と谷茶速船	産神問答	大みそかの棺	出産時のヤク払い	クスケー由来	お茶二杯	蛇響入へ芋環型	猫化け女房	打紙由来
		100	96		83						5	67	29								63	15			32		
		181	178		154						7	123	47								113	22			50		
○	○	○	○	△	△	△	△	△	△	△	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
11	11	11	11	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	
A	A	A	A	B	B	B	B	B	B	B	B	B	A	A	B	B	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
22	21	20	19	15	12	10	9	7	6	5	4	2	11	10	3	1	19	18	17	16	15	14	13	12	9	8	7
			S								S			S													
			63								52			52													
			・								・			・													
			12								・			・													
			・								20			20													
			13																								

													10														
													松田ウシ														
																											
													楚辺二〇二八														
													—三														
													M 24・10・10														
20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	20	19	18	17	16	15	14	13
鳩料理	ハジチ由来	子供の肝へ仲順流れ	継子の機織り	雀孝行	渡嘉敷ペークー	吉屋チルーへ死人の歌	夫振岩	空き腹食いどき	嫁と姑へうどんはミミズ	兄弟の仲直り	お茶二杯	継子話へ機織り	食わず女房	普天間権現の由来	子育て幽霊	鍋蓋アカマター	若水由来	モーイ親方へ殿様の難題	キジムナーの話	つんぼの話	つんぼとめくらの話	ヒーダマの話	意地試し	モーイ親方	モーイ親方へ難題	嫁と姑へ辛	継子話
			50				114	91	57	59			17	116							97	98		83		58	
			89				203	171	101	103			26	207							179	179		154		102	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
9	9	9	9	9	9	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	11	11	11	11	11	11	11	11
A	A	A	A	A	A	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	A	A	A	A	A	A	A	A
11	10	9	8	7	6	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	14	13	11	8	34	33	31	30	28	27	25	23
					S																						
					52																						
					7																						
					3																						





	23	22	21	20	19	18
	池原カマ	松田ウト	上地ナビ	比嘉ウト	宮城ウト	池原ナベ
	M 36・7・10   楚辺二一〇一	M 35・3・15   楚辺二一二二	 楚辺二〇八	楚辺	M 40・7・25   楚辺二一六	M 36・12・10 楚辺二六七二
	9 ⑧ 7 6 5 4 ③ 2 1	1	6 5 4 3 2 1	①	3 2 1	2 1
	火正月 親捨山〈難題〉 教訓話 大年の茶椀 鬼餅由来 民俗 継子と杓子 浜下り お茶二杯	お茶二杯	猿長者 赤マタ掣入〈浜下り由来〉 赤犬子 ハジチ 鬼餅の名称 阿麻和利の墓	婿選び〈茶腹飯腹〉	鬼餅由来 お茶二杯 クスケー由来	赤マタ掣入〈浜下り由来〉 キジムナーの話〈生熊〉
	87	49		45		
	159	88		82		
	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○	× × ×	○ ○
	4 B 14 4 B 12 4 B 10 4 B 9 4 B 8 4 B 7 4 B 6 4 B 3 4 B 1	4 A 18	4 A 20 4 A 19 4 A 17 4 A 16 4 A 15 4 A 14	4 A 7	4 A 12 4 A 6 4 A 5	4 A 10 4 A 4
	” ” ” ” ” ” ” ” ” ”	S 52・2・20	” ” ” ” ” ”	S 52・2・20	” ” ” ”	S 52・2・20





34	33	32																			
比嘉ミツ	比嘉ヨシ	山内マツ	比嘉次郎																		
																					
M 39 ・ 2 ・ 6	M 37 ・ 3 ・ 10	M 38 ・ 7 ・ 1	M 37 ・ 11 ・ 28																		
2 1	1	② 1	21	⑳	19	18	17	16	15	⑭	13	12	11	⑩	9	⑧	7	⑥	5		
ウナイ神と白鳥 話千両へ白銀堂由来	継子話へ機織り	大年の客 継子と二十日月	柴徴鑿駕の話	雨蛙不孝	蔵端の屋号由来	力石	モーイ親方へ勉強+嫁釣り+難題	赤犬子へ井戸発見+水船速船+昇天	鍋蓋赤マタ+浜下り	嫁と姑	千年蛇	子育て幽霊へ打ち紙由来	線香をたくわけ	嫁えらび	雀酒屋	柴徴鑿駕の話	塩が一番	チーグー王	大年の客		
		51	11						55			43	132	109							
		90	13						98			81	254	197							
○ ○	○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○		
5 A 23	5 A 22	5 A 15	5 A 16	5 A 10	8 B 7	8 B 6	14 A 12	14 A 11	9 A 5	9 A 4	9 A 3	9 A 2	9 A 1	5 A 27	5 A 26	5 A 25	5 A 24	5 A 21	5 A 20	5 A 19	5 A 9
S 52 ・ 2 ・ 20	S 52 ・ 2 ・ 20	S 52 ・ 2 ・ 20	S 52 ・ 7 ・ 3	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”













<p style="text-align: right;">49</p>  <p style="text-align: right;">比嘉恒健</p>	<p style="text-align: right;">48</p>  <p style="text-align: right;">山内昌永</p>	<p style="text-align: right;">47</p>  <p style="text-align: right;">松田ヨシ</p>	
<p style="text-align: right;">楚辺二〇八五 一 二 T 12・1・12</p>	<p style="text-align: right;">楚辺一九九九 一 三 T 3・10・15</p>	<p style="text-align: right;">楚辺二一〇八 一 三 T 11・12・15</p>	
<p style="text-align: right;">① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧</p>	<p style="text-align: right;">1 2 ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧</p>	<p style="text-align: right;">1 2</p>	<p style="text-align: right;">15 16 17 18 19</p>
<p style="text-align: right;">ジョーヌタルガニー 阿麻和利 勝連バーマー△二十日月▽ 渡嘉敷ペークー△低頭門▽ つんぼの話 意地試し 聞き違いへヒル△ 山原と団亀</p>	<p style="text-align: right;">キジムナー 臆病者の話 喜屋武ミークわー モーイ親方 肉売りの話 坊主の話 意地試し キジムナー</p>	<p style="text-align: right;">幽霊の話 幽霊の話</p>	<p style="text-align: right;">キジムナー 四疊半由来 カマンタアカマタ テーラシカマクチ 真玉橋由来</p>
<p style="text-align: right;">65 69 71</p>	<p style="text-align: right;">103 104 92 72</p>		
<p style="text-align: right;">118 127 129</p>	<p style="text-align: right;">183 184 172 129</p>		
<p style="text-align: right;">○ ○ ○ ○ ○ × × ○</p>	<p style="text-align: right;">○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○</p>	<p style="text-align: right;">○ ○</p>	<p style="text-align: right;">○ ○ ○ ○ ○</p>
<p style="text-align: right;">13 B 8 13 B 7 13 B 6 13 B 5 13 B 4 13 B 3 13 B 2 13 B 1</p>	<p style="text-align: right;">13 A 18 13 A 17 13 A 16 13 A 14 13 A 13 13 A 12 13 A 10 13 A 8</p>	<p style="text-align: right;">13 A 7 13 A 6</p>	<p style="text-align: right;">13 A 5 13 A 4 13 A 3 13 A 2 13 A 1</p>
<p style="text-align: right;">S 63・12・22 ” ” ” ” ” ” ” ”</p>	<p style="text-align: right;">S 63・12・22 ” ” ” ” ” ” ” ”</p>	<p style="text-align: right;">S 63・12・21 ” ” ” ” ” ” ” ”</p>	<p style="text-align: right;">” ” ” ” ” ” ” ”</p>



56	55	54	
宮城千代 	池原昌繁 	比嘉ミツ子 	
楚辺二〇一三   二 M 37・11・23	楚辺二〇八九   一 S 2・4・5	楚辺二〇〇八   二 M 45・5・12	M 45・6・13
4 3 2 1	④ 3 2 ①	5 4 3 2 ①	11 10 9 8 7 6 5 ④ 3
鬼餅由来 お茶二杯 モイ親方 真玉橋の人柱	聞き違いへヒル 話千両 渡嘉敷ペークーへ低頭 渡嘉敷ペークーへ二十日月	鬼餅由来 継子の麦つき カマンタアカマタ 猫を木に吊るすわけ モイ親方	お茶二杯 ナーチャミー由来 キジムナー ヒーダマの話 浜下り由来 シーシミチ カマンタアカマタ 古しやもじと山羊マジムン ものにもたれた話
	99 70	12	128
	180 128	16	251
○ ○ ○ ○	○ ○ △ ○	○ × ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
16 A 6 16 A 5 16 A 4 16 A 3	15 B 8 15 B 6 15 B 3 15 B 2	14 B 2 14 B 7 14 B 5 14 A 20 14 A 18	14 B 8 14 B 6 14 B 4 14 B 3 14 B 1 14 A 19 14 A 17 14 A 16 14 A 15
” ” ” S 63・12・13	” ” ” H 1・5・24	” ” ” ” S 63・12・15	” ” ” ” ” ” ” ” ” ”

60	59	58	57
比嘉静子	池原清	池原昌徳	松田トシ
			
楚辺一九二四 一 二 T 2・1・25	楚辺二〇一八 一 三 T 11・8・1	楚辺二二一七 一 一 T 5・10・21	楚辺二二〇四 一 三 T 10・1・5
4 3 2 1	1	8 7 6 5 4 3 ② ①	⑨ 8 7 6 5 4 3 ② 1
トウンジーの話 キジムナー 継子話へ麦つき 尻ひり嫁	お茶二杯	白銀堂由来 多幸山フェーレー 夫振岩 お茶二杯 継子の麦つき 継親念仏 キジムナー ハジチ由来	お茶二杯 茶腹飯腹 ハジキ由来 赤マタ簪入り 十二支由来 継子話へ二十日月 継子の麦搗き 城間仲 どろぼうの話
		133 77	95 44
		256 138	177 82
○ ○ ○ ○	○	× × △ ○ ○ × × ×	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ △
19 B 5 19 B 4 19 B 2 19 A 14	19 A 13	19 A 12 19 A 11 19 A 10 19 A 9 19 A 8 19 A 7 19 A 6 19 A 5	19 A 4 19 A 3 19 A 2 19 A 1 18 B 7 18 B 6 18 B 5 18 B 4 18 B 3
S 63・12・21 " " "	S 63・12・21	S 63・12・21 " " " " " " "	S 63・12・21 " " " " " " "

63	比嘉次郎		楚辺二一〇三   一 M 44 · 12 · 25	② ① アカマタ響入 天人女房	35 30	54 48	○ ○	7 B 2 7 A 1	S 52 · 2 · 20 ”
62	比嘉秋子		楚辺二〇六一   二 T 5 · 7 · 28	1 継子話〈二十日月〉			○	8 A 3	S 52 · 7 · 3
61	上地秋子		楚辺二〇八九   四 T 11 · 10 · 15	2 1 キジムナー 子のうばいあい			○ ○	19 B 3 19 B 1	S 63 · 12 · 21 ”

## 調 査 者 名 簿

沖縄国際大学口承文芸研究会

読谷ゆうがおの会

遠藤庄治(顧問教授)・渡慶次勲・塩浜由起子・富村朝夫・宮里洋子・阿波根初美・村山義隆・金城清美・大本敬子・◎山入端孝子・鈴木信一・大宜味光一・辺土名朝三・新垣修子・当真典子・仲村渾清美・佐和田茂美・上原利津子・上間京美・伊波百合子・運天悦子・知花利江子・渡久地初枝

上原ヨシ・神谷初子・比嘉澄子・山内源徳  
読谷村立歴史民俗資料館  
◎名嘉真宜勝・◎知花春美・◎村山友江  
注 ◎印はゆうがおの会会員

沖縄民話の会

宮城昭美・伊芸弘子



21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1			51	50	49	48	47	
山原と団亀	意地試し	話千両	忘れんぼう息子	親捨山	親捨山〈柴折り〉	親捨山〈難題〉	モイ親方〈複数モチーフ〉	モイ親方〈タバコ〉	モイ親方〈勉強〉	モイ親方〈小便〉	モイ親方〈かせかけ着物〉	モイ親方〈嫁とり〉	モイ親方〈殿様の難題〉	侍と小僧	床柱の逆立て	ドゥーヌヒヤ	佐久川三郎	喜屋武ミークわー	勝連パーマ	渡嘉敷ペークー		笑話		ウナイ神と白鳥	城間仲	ものいう牛	後生での借金問答	殺雨
5	6	7	1	2	2	3	3	1	3	1	1	4	10	1	1	1	3	5	1	3			1	5	1	2	1	

14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1				33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22
赤犬子	赤犬子	屋良ムルチ	普天間権現の由来	楚辺の村建て	阿麻和利	夫振岩	ユーパンタの地名由来	蔵端の屋号由来	大木部落の由来	楚辺の地名由来	親見原由来	人間の始まり	世の始まり		伝説		空き腹食いどき	ジュリの話	肉売りの話	坊主の話	臆病者の話	かけ事の話	鳩料理	どろぼうの話	つんぼとめくらの話	つんぼの話	聞き違い〈ヒル〉	屁ひり娘
8	7	2	7	2	5	3	1	1	1	1	2	1	1				1	1	1	1	1	1	2	1	1	2	2	3

				1				35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15
総話数	歌	民俗	世間話	読谷の神の話	その他		吉屋チル	チョーフグン親方	名護親方	チーグー王	久良波ヌン殿内	多幸山フェーレー	ハジチ由来	お茶二杯	線香をたくわけ	煙草の起源	柴微鑿駕の話	サン結び由来	ナーチャミー由来	綱引き由来	位牌由来	キビ読谷山種の話	稲作の始まり	赤犬子〈ニーピラ由来〉	赤犬子〈冬青草夏立枯〉	赤犬子〈三味線由来〉	赤犬子〈水船速船〉	
478	4	40	35	1			10	2	2	1	3	4	7	14	1	1	2	2	2	2	1	2	1	1	1	2	2	6



119	118	116	110	101	89	87	81	80	79	78	76	75	74	73	68	64	55	54	52	51	49	47	43	41	38	36	23	21	10	9	7
赤犬子	赤犬子	普天間権現の由来	楚辺部落の繁栄	山原と団亀	意地試し	親捨山(難題)	モイ親方へかせかけ着物	モイ親方	モイ親方	モイ親方(殿様の難題)	話千両	床柱の逆立て	佐久川三郎	喜屋武ミークわい	穀雨	後生での借金問答	嫁と姑	継親念仏	継子話(お茶と馳走)	継子と杓子	継子と杓子	継子の誓払い	嫁えらび	火の玉の話	塩吹白	子育て幽霊	猫化けの話	キジムナー	犬の足	雀とうぐいす	カラスは親孝行
比嘉清次郎	松田平信	松田ウシ	比嘉清次郎	比嘉カマド	比嘉清次郎	池原カマ	比嘉清次郎	比嘉清次郎	比嘉清次郎	比嘉清次郎	松田平信	松田平信	比嘉清次郎	比嘉清次郎	比嘉清次郎	比嘉清次郎	比嘉清次郎	比嘉清次郎	比嘉清次郎	比嘉清次郎	比嘉清次郎	比嘉清次郎	比嘉清次郎	比嘉清次郎	比嘉清次郎	比嘉清次郎	比嘉清次郎	比嘉清次郎	比嘉清次郎	比嘉清次郎	比嘉清次郎
221	211	207	198	181	169	159	151	148	144	140	135	133	132	131	125	115	98	97	90	90	88	84	81	69	63	56	36	34	12	10	8

44	40	35	34	30	28	27	25	24	22	20	19	16	14	12	7	5	132	113	82	11	63	29	15	142	141	140	123	122	121	120
茶腹飯腹	ヒイダマの話	天人女房	千年蛇	アカマタ掬入	アカマタ掬入	美女に化けた豚	古ミシゲトと山羊マジムン	山羊マジムン	キジムナー	キジムナー	キジムナー	葛蒲由来	クスケー由来	鬼餅由来	こもりりの双心	雀孝行	柴徴鑿駕の話	大木部落の由来	モイ親方(嫁取り)	雨蛙不孝	大みそかの棺	アカマタ掬入	クスケー由来	読谷の神の話	チョーフグン親方	名護親方	柴差し由来	読谷山種の話	稲作の始まり	赤犬子(冬青草夏立枯)
松田トシ	比嘉カマド	比嘉次郎	比嘉源助	上地次郎	比嘉カマド	比嘉カマ	伊波カマ	上地カマド	長嶺ウシ	比嘉清次郎	照屋牛五郎	上地カマド	比嘉カマド	比嘉ミツ子	上地源助	比嘉ウト	比嘉次郎	照屋牛五郎	照屋牛五郎	比嘉次郎	伊波カマ	比嘉カマド	伊波カマ	比嘉永純	比嘉清次郎	松田芳子	比嘉次郎	照屋牛五郎	比嘉次郎	上地松徳
82	68	54	53	48	44	42	40	39	35	32	29	24	20	16	9	7	254	202	153	13	113	47	22	283	279	277	238	236	235	234



## 編 集 後 記

このたび、読谷村民話資料集十一の「楚辺の民話」が発行されました。

楚辺における民話調査は、沖縄国際大学遠藤庄治先生ゼミ、同大学口承文芸研究会、読谷ゆうがおの会、読谷村立歴史民俗資料館等によって共同で行われました。その後、昭和六十三年十二月に補足調査が資料館、ゆうがおの会、楚辺誌編集委員会によって行われ採集総話数が四七八話（九十分録音テープ十九本）のほりました。その中から語りの良い一四二話を選定しゆうがおの会々員一人当たり三〜五話の翻字作業を依頼しました。

翻字原稿の点検作業は資料館に於て行われ、会員から提出された原稿を再度テープを回し、話者の語りに忠実に翻字されているかどうかとびとつびとつを点検していきました。段落や対訳についても検討し原稿の空白部分は直接話者のところへ出向いて確認しました。

部立ては前編に翻字資料、後編に資料編を持つてきており、話者別一覧では話者の顔写真もできるだけ掲載するようにしました。校正作業は名嘉真・知花・村山・玉城が担当し五校正行いました。

写真撮影は名嘉真・知花・村山・比嘉豊光氏（楚辺誌編集委員会）によるものです。

このようにして「楚辺の民話」の発行までには、楚辺区老人会（話者総数六十三人）、公民館長さんをはじめ楚辺誌編集委員会、その他多くの方々の多大な御協力があり、紙面をかりて心よりお礼申し上げます。

現在、第十二集「都屋・上地・親志の民話」刊行のための翻字作業を進めております。今後も、なお一層の御協力をよろしくお願い申し上げます。

平成四年二月一日



## 編 集 者

館 長 名嘉真 宜 勝  
主 事 知 花 春 美  
非 常 勤 村 山 友 江  
〃 玉 城 和 美

---

### 楚辺の民話 読谷村民話資料集 11

印刷年月日 平成4年2月20日  
発行年月日 平成4年3月31日  
編集・発行 読谷村教育委員会  
歴史民俗資料館  
〒904-03 沖縄県読谷村字座喜味708-6  
電 話 098-958-3141

印 刷 文 進 印 刷 株 式 会 社  
沖縄県那覇市上間567番地  
電 話 098-855-2323(代)

---